

笛吹き少年は少女と共に運命に抗う

ジャムカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺はここで目的を果たせるのだろうか？

関西から単身東京にやってきた少年は

とある目的の為に

ここに 東京の羽丘学園に入学する事になった。

果たして少年はどんな高校生活となるのか？

今、ここに始まる！

今まで読み専門でしたが書いてみたい衝動になってしまいました。
拙い文章かと思いますが、読んでくれますと嬉しいです。

目次

笛吹き少年は東京に立つ	1
笛吹き少年は本職を知る	11
笛吹き少年はいつも通りの少女達と出会う (前編)	21
笛吹き少年はいつも通りの少女達と出会う (中編)	28
笛吹き少年はいつも通りの少女達と出会う (後編)	38
笛吹き少年は転校した少女と再会する	47
笛吹き少年は羽丘学園に入学した理由を知る	57
笛吹き少年は笛持ちを咎められない	67
笛吹き少年はガールズバンドを知る (前編)	78
笛吹き少年はガールズバンドを知る (後編)	89
笛吹き少年は羽丘の先輩達と出会う (前編)	99
笛吹き少年は羽丘の先輩達と出会う (後編)	110
笛吹き少年は自宅に来訪者が来る	118
笛吹き少年は我が道を行く幼馴染が来る (前編)	128
笛吹き少年は我が道を行く幼馴染が来る (後編)	137
笛吹き少年はチョココロネ同盟を再結成する	147
笛吹き少年は幼馴染との関係を知らない	154
笛吹き少年は両親の想いを夢で知る	163
笛吹き少年は天才の悩みを聞く	172
笛吹き少年は同じ悩みの人を見つける？	184
笛吹き少年はGWに入った	191
笛吹き少年はGW二日目に入った (前編)	201
笛吹き少年はGW二日目に入った (後編)	215
笛吹き少年は仲直りを羨ましがった	230

笛吹き少年は青薔薇の棘に刺さった	243
笛吹き少年は修羅場とは無縁ではなかった	258
笛吹き少年は罪を償わせた	275
笛吹き少年は説得をした	293
笛吹き少年は昔話をした	305
笛吹き少年はライブ成功を祝った	319
笛吹き少年はドラムを始めようとした	334
笛吹き少年は明るくなりたかった（前編）	352
笛吹き少年は明るくなりたかった（後編）	375
笛吹き少年はドラムを披露した	397
笛吹き少年は双子との仲を取り持った	422
笛吹き少年は勉強を見てやった	450
笛吹き少年は頼み事をした	468
笛吹き少年は臨海学校へ行った（一日目）	488

笛吹き少年は東京に立つ

3月下旬 関西の中学を卒業し叔父から半ば追放される形で慣れ親しんだ関西から関東、東京の高校にいかされる羽目になった。

俺、神子志吹（かみこ しぶき）はその高校からは少し離れた一軒家に住む事になり、わざわざ用意されたのかと思うと

随分前からこうするつもりだったらしい。

勿論一人暮らしだ、両親は数年前に他界して

叔父のところで暮らしていたがその叔父とは仲が悪く、いや、親族全員と悪いと言うかある事件のせいでこうなってしまったのだ。

そして今、その自宅に俺はいる。

「そうだ！これから通うんだから高校周辺の下見もしていこう 通学路とか覚えていかないといけないしな」

初めての通学路は覚えなとな、まずこれから通う羽丘学園は元々女子高だったらしいのだが少子化に伴い今年から共学となったらしい。

そのついでに関西からも数人男子特待生としても欲しいと理事長から希望があったそうなんだ。

都合がよかったのか、叔父は俺に何の相談もなく勝手に受けていたんだとき 酷い話だが今の俺のこの状態では仕方ない事なのかもしれない。

そう…今は”まだ”大丈夫だからいい。

俺が今日から住む一軒家には一通りの家具やらが揃っているそこまでしてくれるのはせめてもの手向けなんだろうか？

着替えとかは向こうから持ってきているし。

「よし、行くか！」

こうして俺、神子志吹はまず羽丘学園に向かうことにした。

————羽丘学園前————

「ここが羽丘学園か……」

自宅から歩いて30分で着いた、勿論スマホでの地図アプリを使つてな、帰りは使う気はないゾ！体で覚えるものだからな……！

「少し、周辺を歩いて行こう」

羽丘学園から10分くらい適当に歩いていたら商店街が見えてきた。

そこには精肉屋、団子屋、パン屋、珈琲店、八百屋、なんでもござれか……飯に困ることなさそうだな。

時刻はもう夕方を過ぎ夜に差し掛かる時間であるから腹も減ってきたしどこかに寄るかな？

「よし、ラーメンにするか」

そう言つて向かいにあつたラーメン店に入つていった。

引き戸を開けて中に入るともういい時間であるからかテーブル席は埋まつており、カウンター席が一人分しか空いていなかったので、まず食券を買おうと回りを見たけど、どうやらここは食券販売機はないらしい。

まあ しかし販売機は物凄く高いつてラーメン大好き女子高生も言つてたし俺は実家のほうでもよくあつたし気にしたらオシマイだな。

とりあえず一人分しか空いてない席に座つてカウンターから水を貰つてから店の壁に書いてあるメニューを見てどれにしようかと思つてたら、隣の長い赤い髪をした女の子が豚骨ラーメンを食べようとした瞬間だつたらしくいい豚骨スープの匂いがしたので同じものを頼むことにした。

……やたら「うめー！」とか言つてるからそんなに旨いものかと期待に膨らんだ…が数分たつてこちらにも豚骨ラーメンが来たので食べることにした。

見た目はありふれた豚骨スープにチャーシュー、玉子、シナチク（メンマ）そして細かく切つたネギか……よし！まずはスープから！

こうして東京に来て初のラーメンは豚骨となつたが…この濃い味付けは俺にはちよつとキツいかな。

関東の人と関西の人での概ねの味覚の好みつて大きく隔てりがあるんだなーって迷信じゃないつて思つてしまったよ。

俺がラーメン食い終わった頃には、隣にいた女の子はもういなくなっていた……あんなにラーメン好きそうに食べてるからここらへんのラーメン店巡りすればまた会えるかな？

……ってなに考えてるんだ俺は……。

さ、腹もふくれたしさつき来た道に戻って帰るか！

忘れていたのだ。

夜は随分景色が変わる事を。

ましてや今日初めて来たばかりでは。

それに気づくのは商店街を後にして10分くらいしてからだった。

「なぜ河川敷に出るんだよ……」

そう 道に迷ってしまったのだ！

「ここ、どこだよ……初めての地だから右も左もわかんねーんだった。仕方ないスマホ使うか！」

そう言っつて志吹はスマホを取り出した、そしてスリープ状態を解除したら残りの充電が2%しかなかった……!!

「やばい！充電無くなっちまうー！どどどどどどうしよう！」

よしー！

「残り2%だけでも地図を見るしかねえ！」

そう決めたが無情にも充電はすぐ1%……そしてついに充電切れになってしまった。

「終わった……道……もうわかんねえや……」

その場でガツクリと項垂れる。

「情けねえ……東京に来て一日目でもう迷子を経験するのかよ……とにかく一度商店街に戻るかな……」

さつきまでいた河川敷を後にした。

時刻は夜八時前(時計を見て)まだ商店街全体が閉まっていない、がところどころ店がシャッターを閉めようとしてしている。

すぐに目が付いたのは「羽沢珈琲店」の看板が見えたからまだ閉店時間ではないから。
少し休憩がてら寄っていくかと思いい向かっていった。

(カランカラン)

ドアベルがついていたので扉を開けると同時に鐘の音がした。
「いらっしやいませ〜」

茶髪のショートの子が出てきてカウンター席に案内された。

「メニューはこちらになります、どうぞ」

「では、ブレンドコーヒーとショートケーキをお願いします」

「かしこまりました、少しお待ちください」

注文を受け取った女の子はそそくさと奥へ行つた
見た感じ、同じ年くらいにかなーと思つたが
そんな事より今この状況下をなんとかしないと！

「はあ~~~~どうしょ……」

ごくありふれた喫茶店であり珈琲店だつたし
閉店まで一時間もなかったせいお客は俺以外いなかった。



「ねえ、お父さんあのお客さんここに来るのは初めてだよね？それに
私とそう年は変わらなさそうだし」

羽沢珈琲店の娘、つぐみはそう言った。

「それに何か疲れたように下向いてため息までしてるから、どうしたのかなって」

そこで羽沢珈琲店のマスターは。

「ああ、しかもこの時間帯で注文もケーキとコーヒーだけだなんてね、ちよつと訳有りかもしれないね」

「わたし、ちよつと聞いてくるね！

……頑張る！」

つぐつてる瞬間だった。



「はあ~~~~~……これからどうしよ」

取りあえずコーヒー飲んで落ち着かせてから

これからの事考えよう。

「あの……どうかなされたのですか？」

「えっー！」

突然、先程のショートの子から声をかけられた。

「席に座ってた時から、ずっと項垂れておりましたので

「ご迷惑でなければですけど……」

「えっとですね……実はこの商店街に来るのは今日が初めてでしてちよっと回りを歩いていましたら……情けない話なんですけど迷ってしまいました、スマホの充電まで無くなってしまいました道がわからなくなってしまったのです……」

「(うう……恥ずかしい初対面の人しかも店員さんだぞ)」

少し顔を赤くしてそれまでの経緯を話した。

「えっ、そうだったのですか!!それでしたら

充電機貸してあげますのでここで充電して下さい」

なんと、渡りに船だ。

「いいのですか!?!ありがとうございます!!」

そう言って女の子の手を無意識に握ってしまった。

「えっと……その……」

みるみるうちに女の子の顔が赤くなっていた。

「あっ……」

慌てて握った手を離した。

「じゅ、充電機持ってきてきますので待っていてくださいね……!」

そう言うと女の子は大慌てで奥の方へ走っていった。

入れ違いにこの店のマスター(?)らしき人がやってきて

注文したブレンドコーヒーとショートケーキを持ってきてくれていた。

暫くして、女の子は充電機を持ってきてくれてスマホを充電させてくれた。

「あの、本当にありがとうございます！ごごいいます！見ず知らずの人に充電機を貸してくださって…」

こればかりは本当に感謝の言葉しか出ないや。

「いえ、気にしないでください、お客さんがお困りでしたので…それに……」

「それに？」

「いつ、いえ……何でもないです／＼／＼」

女の子はまた顔を赤くなってしまうていた。

「あつ、すみません…自己紹介がまだでしたね

わたしは羽沢つぐみと言います！

もし宜しければですけど…連絡先、交換しませんか？」

突然自己紹介し始めたのは驚きだけど

取りあえずこちらも自己紹介しますかな。

「あー、俺は神子志吹 この春から羽丘学園に入学します

関西から来た特待生…です」

特待生と聞いていい感じは本当にしないな…でも嘘は言えないし

「あつ、じゃあ同じ学校なんですわね！わたしも羽丘学園に入学するの…だからお互いに敬語とかいらないよね？」

同い年だと知ると言葉を崩してきたがまあ、こっちもいいか。

「うん、よろしくね羽沢さん！」

「つぐみでいいよ、志吹くん！」

「わかったよ、つぐみ！」

こうして俺のの高校生活は始まりを迎えるのだった。

だけど…本来の目的を忘れるなよ？

笛吹き少年は本職を知る

「へえ、志吹くんって関西から来たんだあ……それに特待生？」

羽沢珈琲店の娘、つぐみは俺が関西の人間だって伝えたら少し物珍しそうにそう答えてきた。

やっぱり特待生っていい響きじゃないもんね。

「うん、羽丘学園は今年から男女共学って話は知ってるよね？それと同時に関西からも特待生を取るって形で俺が選ばれたらしいんだよね……やっぱり変だよな？」

ホント……特待生だなんて嫌になるよ……これもあの叔父の嫌がらせに違いないのはわかってるんだけど、そこまでして俺を関西から出したかったのか……!!

「ううん、変だなんて全然思っただけよ」

つぐみは首を横に振ってそう答えた。

「変わってるねつぐみは」

「そ、そうかな？」

なんか少し気が楽になったよ、つぐみは優しいな。

こんな事、口に出したらいけない。

「そ、それよりも志吹くん、コーヒー冷めちゃうよ？」

つぐみに言われてまだ一口もつけてないコーヒーをみてすっかり

湯気が出なくなっていたブレンドコーヒーを手にして飲んでみた。

「(冷めてるわ)」

しょうがないから冷めたコーヒーを一気飲みしてそれを見ていたつぐみは苦笑いしていた。

お代わりを頼んで改めてケーキと一緒にコーヒーを飲んだのであった。

「（このコーヒーは何だろう、クセになりそう）」

ふとスマホを見るともう50%も充電されていたので

コーヒー飲み終わって店を出る事にした。

「つぐみ、本当に充電機ありがとうね、このお礼はいつかさせるからさ」

レジにいるつぐみにそう言った。

「お礼なんていいよ、あつ、だったらまた来てれると嬉しいかな……？」

そんなんでいいのかと思ったけど。

「勿論、これからは常連になるよ！高校に入ったら結構な頻度で通うからさ」

「うん！待ってるね！」

そう言って羽沢珈琲店を後にした。

「今日は悪いこともあったけど良いことのほうが多いな！さて、スマ

ホで自分の住所を見て地図アプリを見て……と」

時計を見たらもう9時前になっていた。



———羽沢珈琲店内———

閉店時間になったから店の掃除中につぐみはポツリと。

「志吹くん……何か不思議な人だったなあ……」

「……………ふむふむ」

マスターはつぐみを見て何か頷いていた。



「よし！無事に着いた！地図アプリ使っても少し迷ったけどそこはこ

愛嬌でさ」

地図アプリあるある 意外と地図アプリはアバウトに表示されるから細かい道とかわからない可能性もあるのだ怖い怖い。

住宅街にある俺の自宅、なんと二階建てなんだけど地下室もあるんだなあ、これが。

一階はリビング、キッチン、バスルーム、トイレ、そして部屋が二つもあるんだよねえ……一人暮らしなのになあ。

んで二階はこれも部屋二つ 二階の家具は全くないけどね！
リビングにはしっかりとソファもあるわテレビもあるわパソコンまであるよ……キッチンも一通りの調理器具や冷蔵庫の中身は……空だった。

そして地下室、何があるかと思ったら何も無い只の広い一室だけだった……防音仕様にしてるからなアレをやるのにはおあつらえ向きってのね。

そう……俺の首にネックレスみたいにかけてるこの横笛（正式名称は龍笛という）をここで吹けという事なんだろうな……つたく、日付変わったらやるしかねえか。

取りあえず着替えを出してまずは風呂だな。

日付が変わる前に一階の部屋の一室を自分の部屋として着替えを
ダンスしまいベットまであるもんときた。

そして今、俺は地下室にいる。

日付も変わり午前0時2分になっていた。

「よし、やるか……」

龍笛を口にあてて演奏を始めた。

そう、神子志吹は宮司（ぐうじ）である、それも格式の高い
龍笛を使っているので関西では名の知れた宮司なのだ。

♪♪

大人達と交じって祭りやらの行事にも参加していて
間違いない将来有望と期待されていた。

なのになぜ突然東京にまで特待生という形で行かされてしまった
のか？

♪~~~~♪~~~~

10分後。

「よし……今日の分は終わり……と、さてと……もう寝るかな」

慣れないベット、枕も変わってるし寝れるか不安だ。

「Z z z……」

そう言つて5分もしない内に寝息が聞こえてきた。

「……前……だ……つぎ……だ！」

何だよ……誰だよ……？

「……親……め……つ……息……は……」

よく聞こえないよ！

「……め……い……あ……！」

「ハッ……はあ……はあ……夢……だったのか？」

勢いよくベットから飛び起きるように目が覚めてしまった
……まだ冷える季節の三月末なのに凄い寝汗だった。

「寝間着がグショグショだ……新しいの買うかな、今日」
時計を見るともう10時になろうかという時間だ。

「なんとなく嫌な夢だったな……着替えて服とか昼飯とか行こうかな」

確か駅の近くにショッピングモールがあったなそこ行くか！今度はスマホの充電はバッチリだからな。

駅近くのショッピングモールまで10分もかからずにいけたからここ自宅って凄え一等地じゃね？って思ってしまうがそこは知らん、考えたら負けだ。

ひとまず昼飯からかな……マクドでもいいがわざわざ行く程でもないし、行った事ないCC参にしとくか。

それからちゃんと寝間着用も買いに行きシーツやらがベットにはなかったのでニト〇で購入したよ。

服やらシーツやら自宅まで運ぶのメツチャキツかった!!

ベットのシーツはOK、寝間着も二着買ったし問題なし。

スマホの時計を見たらもう夕方四時になろうとしていた。

四月の羽丘学園の始業式まであと一週間あるしまだまだ生活用品が全然足りないね、あとは冷蔵庫の中のか……まあ一度商店街に行くか……今度は迷わないようにしないと！

ピコーン！

家を出ようとしたらLIEの通知音になった、誰からだろうと思っただが一人しかいなかったな……向こうでの友達と呼んでいた奴等は皆ブロックしちゃったしな。

つぐみからだ。

「こんにちは、志吹くん、どう？この街は少しは慣れたかな？」

まだここにきて二日目だぞ、そんなすぐに慣れるかっての。

「まだこの街に来て二日目だぞー、すぐに慣れる訳ないだろうが」

ついでにやれやれとスタンプも追加でやってやった。

「そ、そっか……ご、ごめんね……まだ慣れないよね？えっとね……志吹くんがよければさ明日街の案内とかしてあげたいな〜って思ってるね…明日さ私、店の手伝いがない日だから」

つぐみの提案に俺は……二つ返事で了承した。

「いいのか!?助かるよ！あつ、今から商店街に行くからつぐみの所に寄るね、てか夜メシもそこにするわ」

「うん！待ってるね！」

明日からちゃんと自炊せねばな……。

「そうして俺は商店街に向かうのであった。」

笛吹き少年はいつも通りの少女達と出会う（前編）

ショッピングモールから家具を買い揃えて自宅に戻ってきたら、つぐみから明日街の案内してくれるって連絡来たので感謝も込めて夜飯を羽沢珈琲店にしようかと決めて今から向かっていった。

「こうも外食ばかりだと問題あるよなあ……明日、つぐみに案内して貰うからいい所を教えて貰おう」

一応俺は料理出来るゾ？向こうではよく大人達に料理を振る舞っていたからな、和洋中華なんでもござれだ。

「……………羽沢珈琲店前……………」

などと考えていたらもう着いてしまったよ、体感5分も経ってないんだがなあ……まあいいや、入ろう。

俺は羽沢珈琲店のドアノブに手をかけた。

（カランカラン）

ドアベルの音がして店のドアが開いて中に入っていくとそこにはこの珈琲店の制服だろうか白いワイシャツっぽいのをエプロンをしていたつぐみの姿があった。

「いらっしやいませーあつ、志吹くん早かったね！」

そういえば昨日来た時はスマホの充電切れててショックで店員の姿はよく見ていなかったよな……。

「うん、自分でもちよつと驚いてるよ走ってきた訳じゃないのにね」

「あはは…取りあえず昨日と同じカウンター席でいい？」

そう言つて昨日と同じカウンター席てか同じ席に案内された。

昨日と違うのはまだ夕方も終わりがけて夜に差し掛かる時間だからか少しお客さんがいたからつぐみはそちらの応対にすぐに行つてしまった。

「昨日はコーヒーとケーキだけだったしな！今日は夕飯にするつもりで来たんだからじっくりとメニュー見ないとな」

その結果、ナポリタンスパゲティとフライドポテト（大）とブレンドコーヒーにしようとして決めてつぐみではない女の人の店員に注文をした。

すぐに来たブレンドコーヒーをじっくりと飲みつつ他の注文が来るのを待っていた。

20分ほど待つてつぐみが注文した品を持ってきてくれた。

「こちら、ナポリタンスパゲティとフライドポテトになりますご注文は以上だよね？」

「うん、ありがとうね」

目の前にナポリタンスパゲティとピッツアに乗せるような容器に溢れんばかりのフライドポテトがあった。

「ポテトは少しサービスしちゃったからね、ゆっくりしていつてね」
大サイズにサービスするとこんなおぞましい量になるんかい……
食えるけどさ、俺はポルポのピッツアぐらいならいけるから問題ないんだよ。

もう二度とあんな黒板並みにデカイピッツア食いたくないけどな

！

ナポリタンスパゲティをクルクル巻いて食べては箸使ってフライドポテトをケチャップで食ってはよく味わって食ったかわからなくなってきたよ。

「ふい〜〜〜〜〜……」

30分後、全てを平らげてコーヒー（3杯目）を飲んでつぐみが食器を片付けにやってきていた。

「ご馳走さま……つぐみ、ポテトの大量サービスはもう勘弁してね……かなりキツかったから」

味わう余裕なかったわ！

「ご、ごめんね……常連になってくれる私からのサービスだったから……なんじゃそりや。」

回り見てみるとお客さんが少なくなってきたのかつぐみは俺と話をしに来てくれた。

「それでね、明日の事なんだけど……」

そうだった、明日つぐみに街の案内してくれるのだった。

「えっとね、明日どこで何時に待ち合わせしよっか？」

「つぐみの都合のいい時間で構わないよ？」

その結果

待ち合わせ場所は羽沢珈琲前10時と決まった。



夜10時、つぐみは部屋のベッドで幼馴染み4人とのL I O Eでグループチャットで話をしていた。

「ねえみんな、隣の駅近くに美味しいスイーツ店がオープンしたから明日暇だったら皆で行かない?」

そう言ってきたのはひまりちゃんだった。

「おつ、いいね!アタシは明日暇だからいいぞ」

すぐに答えてきたのは巴ちゃん、早いなあ。

「モカちゃんもおっけーなのだ」

モカちゃんも早いよ、そんな語尾わざわざつけなくてもいいと毎回思うんだけどな。

「あたしも別にいいよ」

蘭ちゃんまで賛成かあ……どうしよう?

「あれー?つぐみだけ返事ないよー?」

「ほんとだ、つぐみどうしたの?」

「もう寝ちゃったかもしれないな、結構話込んだじゃったし」

「ごめんねつぐみ、眠かったんだよね」

みんなから心配されちゃった、急いで返信しないとね。

「えっとね」

「おー起きてたーつぐーがんばー」

「無理して返事しなくてもいいからな、つぐ。どうせひまりの思い付きだから別に明日じゃなくてもいいんだぞ」

「もおー!ひどいよ巴!……確かに思い付きだったけど」

「もう寝たほうがいいよ、つぐみ」

「違うの、眠い事は確かなんだけどね。明日はちよつと朝から用事があるから行けないの。ごめんねひまりちゃん」

「ひまりの思い付きだから気にする必要ないよ」

「ひーちゃんの思い付きは上手くいった試しがないね」

「いつも突然だもんな、ひまりの思い付きはさ」

「いいよいよ気にしないで！てか蘭とモカと巴どーゆー事!?!」

「でも明日つぐが行けないから改めて別の日にするね！」

「うん、本当にごめんねひまりちゃん。もう寝るね！みんなお休み」

「ああ、お休み！」

「うん、お休み。つぐ」

「おやすミント〜」

「お休み、つぐみ」

そう言って私はLIEのアプリを閉じアラームをセットして眠りにつきました。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

自宅に戻った俺は風呂に入ってテレビを見ながら日付が変わるのを待っていた。

午前0時ジャスト

—————自宅地下室—————

「さて、始めるか……」

今日初めの笛の演奏をし始めた。

♪~~~~~

いつまでこんな事すればいいんだ……早くこの苦しみから解放されたいんだ……!!

毎日毎日一日のどこかで演奏しなければ俺は……!!

演奏が終わって、すぐにベットに入り眠りについた。

夢は見たくないな。

翌朝

アラームをセットし忘れた俺は起きた時、時計を観て驚愕した……
9時50分!?

「やっべええ!!寝坊したああああ!!急いで着替えないと間に合わねええええええ!!」

急いで着替えてすぐに家を出た、鍵を閉めるのを忘れずに！

走って羽沢珈琲店まで向かっていった。

笛吹き少年はいつも通りの少女達と出会う（中編）

俺は走っていた……かのサ○ーブラ○アンの如く速く。

寝坊したせいで、待ち合わせの10時まであと10分しかないという事を。

着替えと家の鍵閉めで貴重な時間を3分も使ってしまった。

「急げ……急がないと！」

つぐみが街案内してくれるって誘ってくれたんだから、遅れたら申し訳がない!!

「間に合って……くれ！」

俺は羽沢珈琲店まで昨日通っていった最短ルートで向かっていった。



「それじゃお父さん、行ってくるね！」

今日は家の手伝いがない日なので一昨日この街に来たばかりで、来週から同じ学校に通う男の子を街案内しようと私は誘いました

……そしたら彼は喜んで承諾してくれました。
待ち合わせの時間まであと10分……志吹君はまだ来てないかな？

お父さんはどういう訳か上機嫌で手を振っていたけど、なんでそんなにニコニコしていたのかわからないなあ……

でも私も何だかフワフワしている気分になってるからこれってなんだろうか……？

そんな事思ってたら約束の時間になっちゃってました、だけど志吹くんはまだ来ません。

「何かあったのかな？」

そう思い、ポーチからスマホを取り出して連絡が来てないか見てみたが……何も来ていませんでした。

スマホをポーチに入れた時、商店街の奥のほうから走っている人が見えました。

その人は凄い勢いで走って来て私の目の前で止まってくれました。

「志吹くん？」

「ぜえ……はあ……ご、ごめん……つぐみ……遅れ、て……ゴメン……よ」

寒さが残る春なのに汗だくになってその場で倒れこむ志吹くん、どれだけ走ったのでしょうか。

「ううん、大丈夫だよ……それよりもどうしてそんなになるまで走って来たの？」

何となく想像付くけど敢えて聞いてみません。

「実はスマホの、アラーム……をね……」

志吹くんは息を整えないままこれまでのいきさつを
途切れ途切れで話してくれました。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

「と、言う訳なんだ…」

ようやく息が整え始めた頃に俺はつぐみに頭を下げ遅れた事を
謝った。

「さっきも言ったけど大丈夫だって…私も考え事しててぼーつとして
だから」

「だったらいいんだけど…」

そう言えば今日のつぐみの格好は青色のチュニックに
黄色のデニムスカートという、なんか店での制服でしかつぐみの姿
は見た事ないからなんか新鮮でいいな。

「志吹くん、もう大丈夫？」

つぐみがそう聞いてきた、時刻を見ればもう10時10分だ（5分
は俺が遅れたけど）

「あ、うん…じゃあ街案内お願いして貰おうかな」

そう言うつつぐみは上機嫌で。

「任せて！まずはこの商店街から案内するね！」

つぐみは両手を自分の前に出してガッツポーズをした
所謂ぞいポーズってやつ？

「じゃあまずは向かいにある北沢精肉店から……」

こうして、俺とつぐみの街案内が始まった。

今日も一日がんばるぞい！

「で……ここがやまぶきベーカリー、ここのパン全部おいしいってモカちゃんと言ってたの」

「モカちゃん？」

つぐみの友達だろうか？

「うん！モカちゃんとは幼馴染なんだよ……あつ！志吹くんの事みんなに紹介するけど、いい？」

「みんな？」

モカちゃんって人以外にも幼馴染がいるのかな？

「そう。私達は小さい頃から五人ずっと一緒だったの」

五人、か……羨ましいな、そんな関係は俺も一人だけいたけど東京に行かされるって伝えなかったしLIEもブロックしちゃったからね……。

そういえば中学2年の時に東京の学校に転校したちよつと仲がよかった友達がいたな……まあ、会う訳ないか。

「紹介してもいいかな？志吹くんのこと、みんなに」

つぐみが心配そうに俺に訪ねてきた。

「つぐみがいいなら俺が嫌な理由はないよ……というか、みんな同じ学年で同じ学校に入学するんだよね？」

「そうだよ、みんな同じ一年で同じ学校だよ！」

「もう入学式まで一週間もないけど、いつ紹介してくれるか楽しみだよ」

その話をしていたらお昼の時刻を知らせる放送が鳴り響いた。もう正午になろうとしていたんだ。

「あはは……志吹くんまだ商店街だけの案内だけでお昼になっちゃったね」

そうつぐみは言ったが案内するのは商店街だけではないのだ。

「商店街だけでこんなに広いとは思わなかったよ」

マジやべえ、観光地としてもいけるんじゃない？

「とりあえず、お昼にしようか！すぐそのファミレスでいい？」

「いいよ、行こっか」

そう言っただけとつぐみはファミレスに入っただけ。

――

ファミレスでの食事を終えた俺とつぐみは
今度は商店街から羽丘学園に向かっていった。

おっと、ファミレスでのつぐみが頼んだハンバーグセット（サラダ付き）は俺が払ってあげた、街案内して貰ってるのだからこれくらいはしないとね。

……つぐみは悪いよと言っただけどころにも誠意ってのを感じ取ってくれたのかすぐに引き下がってくれた。

「羽丘学園は……知ってると思うけど回り周辺はまだ知らないでしょう？だからまずはそこに向かうね」

確かにつぐみの言う通り羽丘周辺も知らない。

………何か後ろから数人の気配を感じるけど放っておいておこう。



「ありがとうございますー」

やまぶきベーカリーで昼用のパンを買って店を出た

あたし、モカちゃんはそこで意外な人がファミレスに入るのを見た。
けた。

「おや、あれはつぐではありませんか？でもあの隣にいた男の人は誰なんだろうね？」

青葉モカことモカちゃんはすぐにスマホを取り出し

LINEグループチャットじゃなく、蘭、ひーちゃん、もちろん

三人別々にメッセージを送っていった。

「大変たいへん、つぐが知らない男の人とデートしてる」

三人に一語一句同じ文章を送った。

「嘘っ!?つぐがデートお!!」

ひーちゃんが一番早く返ってきた。

「嘘じゃないよ、今商店街の離れのファミレスでお昼食べにいつてるし、ちなみにあたしは店の外でパン食べてる」

「つぐの予定ってデートだったんだね……面白そうだからわたしもファミレスまですぐ来るね!まだ出てきてないよね?」

入ったばかりだから出てくるわけないよ。

「わかった、ひーちゃんも一緒にいこ」

ひーちゃんノリノリだったね

蘭とともちん返事遅いなどと思ってたら。

「何だっ!つぐが男とデートだっ!」

「つぐみが知らない人と、何?」

うわっ、二人同時に来ちゃったよ……めんどいな

「えくとね、商店街の離れにあるファミレスでつぐが男の人と一緒に入って行くのを見たんだよね」

めんどいから二人には同じメッセージでいいや。

「モカ、アタシはつぐが心配だからそのファミレスまで来るよまだ出てきてないよな？」

「つぐみが心配だからさ、あたし今からファミレスに向かうよモカ、しっかり見張つといてね！」

二人ともつぐが心配なのかファミレスに向かうと言い出したよくやることみんな同じだねく。

「りよくかいくモカちゃんファミレスの前でパン食べてるからねく」

そう言って会話が途切れた、みんな向かい始めてるねく



羽丘学園に向かう途中でライブハウスがあった。

「あつ、ここはC I R C I Eっていうライブハウスなんだよ」

ライブハウスか……ふーん。

「えつとね…私バンドやっててこのライブハウスで練習してるんだ」

「へえーつぐみはバンドやるんだ？何て言うバンド？楽器とかは？」
つぐみがバンドやってる事に驚いたから色々聞いてみようとした。

「バンド名は『Afterglow』って言うの、メンバーはさつき

言った幼馴染の五人、私達みんなで作ってるの。私はキーボード担当だよ」

「聞いた事あるゾ……今、流行りのガールズバンドってヤツなんだね
結成してどれくらい経つの？」

「実は……その……まだ結成したばかりなんだよね、でもね凄く楽しいんだよ！」

そう言うつつぐみはとてもいい笑顔になっていた。

「………つつぐ(み)」

その時、四人の声が、聞こえたのを俺は聞き逃さなかった!!

「つつぐみ、悪いんだけどさ……後ろにいる四人さ……知ってる人かな？」

「えっ!？」

そう言う俺とつつぐみは後ろを振り向いたら

物陰に隠れそうにしたけど間に合わなかった四人の姿があった。

「ら、蘭ちゃん!モカちゃん!ひまりちゃん!巴ちゃん!いつからそこに!？」

つつぐみの問いかけに観念したのか四人は俺とつつぐみの前に姿を現した……。

黒のボブカットに赤いメッシュを入れた女の子に。

銀色のショートでパーカーを着ている女の子に。

ピンク色なおさげの髪型をした女の子に。

ロングの赤い髪をした俺と同じ位な身長の子が。

俺とつぐみの前に立っていた。

これが、俺とAfterglow全員との初顔合わせであった。

笛吹き少年はいつも通りの少女達と出会う（後編）

「……ライブハウスから少し離れた道端……」

「み、みんな、いつからいたの!?!」

つぐみが四人の女の子達にそう聞いていた、すると銀色のショートの人先が先に口を開いた。

「ファミレスに二人が入っていくのをあたしが見たから」

「うんうん、つぐが知らない男の人と一緒にファミレスに入ったってモカからLIEきたんだもん」

「だからアタシ達はファミレス出た時に二人の後をつけてみようってなったんだよ」

「あたしは別に……ただつぐみが男といるのが心配だったから」

「みんな……」

つぐみの幼馴染の四人は後をつけていた理由を言ってくれた。

そりやそうか、知らない人と一緒にいたら不信に思うか……ましてや男だったら、ね。

「で、つぐ、その人は誰なんだ?」

「わたしも知りたい!」

「お、モカちゃんも気になる」

「……別に」

みんなの視線が俺に向けてきた。

「えつと……俺は神子 志吹と言います、関西から来ましたのでこの街のことはよく知らなくて、つぐみさんに街案内をしてもらっているところでした。ついでに言いますと来週、羽丘に入学しますので皆さん宜しくお願いします」

そう自己紹介を済ませ、軽くお辞儀をすると。

「し、志吹くん…そんなかしこまらなくても……」

「そうだぞ、同学年だから敬語はいらぬいな」

おっと、アタシは宇田川巴だ！巴って呼んでくれよな、志吹！」

「わたしは上原ひまり、気軽にひまりって呼んでね、志吹くん！」

「青葉モカちゃんです、モカちゃんと呼んでくれたまえ〜しーくん〜」

「美竹、蘭……好きに呼んでくれても構わないよ……志吹」

俺の自己紹介するとみんなも自己紹介を始めた……

しーくんって何だ？

「んと、巴、ひまり、モカ、蘭…よろしくな！」

「「「こちらこそよろしく(な)！」「」」

息ピッタリだなあ……流石幼馴染なんだな。

「で、飯食った後どこに行くつもりだったんだ？」

巴がそう聞いてきた。

「これから羽丘学園の周辺にいくところだったの、まだその辺りは知らないから」

「じゃあさ、わたし達も付いて行っていい？」

「俺はいいけど……」

「うん、みんなで志吹くんを街案内しよう！」

つぐみもみんなと行きかけたのか笑顔になって

そう答えた。

「じゃ、行くっか」

蘭はそう言つて先に進んでいった、モカは何故かパンを食べていた……。

ちなみに俺とつぐみがどうやって知り合つたのか案内までの経緯を全て話して羽丘まで歩いていった……道に迷つた事まで言うのは恥ずかしかつたがな。

――羽丘学園前――

一通りの羽丘周辺の案内が終わつて、一度羽丘学園前に戻つてきた。

案内の最中にバンドのAfterglowの事を聞いてみたら。

蘭はギターとボーカル

モカはギター

ひまりはベース

巴はドラム

つぐみはさつき言つたけどキーボード

だそうだ、バンド名の由来は神社から見た夕焼けから蘭が命名したんだつたとみんなが説明してくれた、でも何でバンドをやろうと思つたんだらうか？

「羽丘まで来たのはいいけどさ、あところら辺で案内する所あるかな？」

蘭が言った、周辺とはいえ結構な距離を歩いたし時計を見たらもう四時になっていた。

「あ、だったらさ…私達がバンド結成したあの神社に行ってみようよ」
「ああ、羽丘神社か、まだそこは行ってなかったけど…つぐは大丈夫か？」

「うん…あの神社は階段が多すぎて登るの大変なんだよね…でも行くよー！」

「おおうつぐがつぐっておりますな〜」

「……（またあの長い階段登るの嫌だなあ…でもつぐみも登るんだし、あたしも志吹の為にね。）」

「蘭くどうかした〜？」

「モカ、何が？」

「蘭が登るの嫌そうな顔していたから〜」

「べ、別に登るのが嫌とかじゃないから…ただつぐみや志吹が大丈夫かなと思ってただけなんだから！」

「蘭ちゃん……」

「どれくらいの段があるかは知らないけど俺は関西にいた時は200段くらいの山寺とかよく行ってたけど苦じゃなかったぞ」

「……………」

俺がそう言ったら巴とモカ以外みんな目を丸くしていた。

「おー言うねえ志吹、ならアタシと競争しようか」

「上等だぜ巴…俺に勝てるかなあ？」

「あたしはやらないよ、ゆっくり登るね」

「わたしも遠慮しとくね…」

「モカちゃんもやるのだよ」

「私は危ないからやめておくね」

巴とモカがやる気なのか。

そうこう言っていたら目的地の羽丘神社の階段までやってきた、上を見上げて見たら階段はざっと100段ってところかな？

「じゃあひまり、アタシとモカと志吹が同時にスタートするから合図頼むよ」

「わかったよ」

巴とモカと俺は階段前に横に並んでいた。

「位置について…：よーい、ドン！」

ひまりのスタートの合図で俺、巴、モカの三人は一斉に階段を走って登り始めた。

最初はモカと巴と俺は横並びでスタートしたが30段辺りからモカが突然失速した…：バテたか。

「モカちゃんギブアップよ」

「早っ!?!」

俺と巴はハモっていた。

50 段目：半分過ぎても巴と俺のペースは変わらない
普通に走るよりも大分辛い筈なんだがなあ……巴は運動部か何か
やってたのだろうか？

70 段目、まだ俺と巴は横並びだ。

80：90 段目、あと少しだが巴との差が全くない！そして……
お互いに階段を登りきった！どっちが先かわからないな。

「やるじゃん志吹！アタシの走りについてこれたのは志吹が初めてだよ」

「巴こそ、凄いな……何か運動でもやっていたのか？」
お互いに息すら切れてないまだまだ余裕がある状態であった。

「ん？アタシはダンス部だったからな、体力には自信があるんだよ寧ろ志吹こそ体力あるじゃん山寺の賜物ってすげーな！よく見たら男には見えなさそうな顔立ちなのにな」

「うっせ、少し気にしてるんだよ」

「悪い悪い、あっはははー！」

巴は俺の顔を見て笑い始めた、くっそお……お前が言うなど言い返してやりてえ……。

「ところでなんでモカは何で俺達と競争したんだろう？すぐにバテたのにな」

「ははっ！そりゃあれだろ、面白そうだからじゃないかな？モカはそうゆう子だからさ」

「見た感じおっとりとしてそーだけど」

「でもモカは本気出すとアタシより速いんだ、去年のマラソンだってアタシより順位上だったし」

「へえーじゃあ何で今回本気出さなかったんだらう？」

「それはモカちゃんは腹が減ったからなんだよ」

モカが登りきったようだ、続いてひまりと蘭もやってきた。

「きゆるるゝモカちゃんもう動けない」

「つーかーれーたー!!」

「はあ……はあ……」

三人とも座り込んでしまった、ひまりなんか仰向けして倒れこんでしまった、大丈夫か？

「ひまりー！そこで寝るなー！」

巴がひまりに叱咤していた、そしてつぐみも登りきったようだった、ゆっくりと歩きながら登ったのか少しだけ息を切らしていただけであった。

「つぐみ、大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ、だけどひまりちゃんが大丈夫そうには見えないけど」

つぐみはひまりの方を見てそう言った、まだ起き上がれそうにはないな、だから俺は神社に目を向けてみた。

「ここが羽丘神社か」

ここなら……いや、みんながいるからまた日を改めてここに一人で来

よう。

約10分くらい休憩したのかひまりと蘭が復活して（モカはフラフラだったけどね）蘭達のバンドの由来の地へ案内してくれた、少し境内から外れた所に絶好の夕焼け景色がそこにはあった。

「なるほど…みんなが苦勞してまでここに來たのがよくわかったよ」

そう言うとみんなは満面の笑みで。

「これがあたし達の」

「いつも通りなんだよ」

「この夕焼けの景色が」

「変わらないのと」

「同じ様にね」

A f t e r g l o w の結成はこうしてなったのね。

ちなみにバンドをやろうと言い出したのは意外にもつぐみからだっただけらしい。

高校生になったら何かやろうって、つぐみが言い出したと、バンド名は蘭がこの神社にみんなで行って夕焼けを見て決めたとひまりが言ってた。

その後はもういい時間なので神社の階段降りてから解散となった、俺とひまりが同じ道だったので途中まで話をしていたらひまりがリーダーだつて知った。

ひまりは途中でコンビニに寄っていったので俺も夜飯を買う為についていった。

…明日から自炊、自炊。

コンビニのあと俺とひまりは道が違うのでそこで別れた、ひまりは

「また学校でね」と言っていた、学校生活が少しは楽しみになってきたな、と思った俺であった。

こうして俺とAfterglowとの出会いの日が終わろうとしていた。

笛吹き少年は転校した少女と再会する

つぐみ達 Afterglowとの出会いから数日が過ぎ、いよいよ明日は羽丘学園の入学式だ、既に制服も鞆も準備してあるからね。ん？その間に何やってたかって？

まずあの日の夜に蘭、モカ、ひまり、巴からLIOEの登録を済ませられ（グループチャットにも招待された）そして翌日にいつもの笛の演奏をしてから寝て

その日の朝に家の整理とかまだ自分の部屋とかしか手を付けてないから、まずはリビングとキッチン用具の購入と冷蔵庫に色々な食材……調味料は塩と砂糖しかなかった。

醤油とかマヨネーズとかは勿論購入した。

そしてパソコンにネットを繋げ……既にやってあったよ。

ネット回線の契約とか大丈夫か？いつ切れるか不安だわ……。

二階は掃除してあったのか綺麗だったが家具とかは何もないし、ここは使わないままでもいいかな？

「一人で暮らすにはホント広すぎるなあ……」

そう思ったのだった。

どうでもよかった
回想終了

朝食を済ませ朝9時、外に出て郵便受けに何か入ってたので見てみると羽丘学園からの書類だった。

取りあえず中に戻って書類の中身を見てみることにした。

「なになに……う？」

中身を見てみたら、どうやら明日の入学式をやる前に理事長に会うとの事だった。

特待生だからか俺の他にも特待生はいるんだし

皆集めて何か話す事でもあるのだろうか？

……俺の理由は何だろうな。

他の書類のは普通に学園案内書やら説明とかだった。

書類を一通り見てから俺は家を出ていた、今から

昼飯を買う為にやまぶきベーカリーがある商店街に向かっていた。

なぜ昼にパンだった？それは昨日モカがLIEで

『やまぶきベーカリーのパンは最高だよ！しくんも一度でもあのパンを食べたら病みつきになるから、是非いつてくれたまえ！』つてきた、まあ俺はメロンパンとチョココロンネが好きだからな。ここはモカのいうやまぶきベーカリーに向かう事とした。

たしかつぐみと案内した日に行ったファミレスの近くだったな、そう言えばそこでモカの話もあったな。

——やまぶきベーカリー前——

「……か」

家から歩いて数十分の距離であったが、迷う事なくやまぶきベーカリーの前に着くことが出来た。

「つぐみに感謝だな、街案内してくれなきやまた迷うところだったからな」

外から見える大きな窓にパンがすらりと並んでいる

何種類あるかはわからないが、店の奥にまであるとするとかなりの数があるのだろう……これは期待が持てるな！

「入るか、俺の昼飯がパンに決まって嬉しいな♪」

(カラリン)

店の扉を開けるとドアベルの音が鳴る、つぐみの店とはまた違うタイプのようだ、若干音が低い。

「いらっしやいませー」

声のした人はレジにいた、茶色の髪でその髪をリボンで結んだポニーテールをした女の人、見た感じ俺とそう変わらない年齢に見える。

っと、それよりもパン何があるか見なければ。

そう思いトレイを持って店の中を歩き始めた……

クリームパン：メロンパン：カレーパン：フランスパン：チョコ
コロネ：クロワッサン：ジャムパン：あんパン：コッペパン：オニ
オンブレット：揚げパン：コロツケパン：あとラスクまであるのか
!?!こりや本当に種類が多いなあ。

「ま、選ぶのはこれしかないのだがな」

まずメロンパンを二つとラスクを一つをトレイに乗せてあとは

チョココロネ取りに向かつていった。

そしてトングでチョココロネを取ろうとした時、別の方向からトングが出てきてトング同士が当たってしまった。

その方向を見た先にはー！。

「えっ、君は…？」



私は今、やまぶきベーカリーに向かっています、だって大好きなチョココロネがそこにあるから。

そこで作るチョココロネは他のところよりも美味しくてもう完全にやみつきになっておるんよ…あっ！いけない、いけない、関西弁が思わず出ちゃうのを早く治さないといけないね。

「うう…高校生になったら今の私を変わらなきゃいけないのだから、頑張らないとね」

明日は入学式だから今日はチョココロネ買ってお姉ちゃんとお昼を一緒に食べよう。

やまぶきベーカリーに着いた私はドアを開けて「いらっしやいませー」って山吹さんの声が聞こえた。

チョココロネ、チョココロネ！

トレイを持って早足でチョココロネまで真っ直ぐ向かう、急いでた

ので先に店にいた人がチョココロネを取るのを気付かないでトングを伸ばしてしまった。

(ガチン！)

トングが当たってしまった。

「ごめんなさい！わ、私慌てていて…」

「えっ、君は…？」

恐る恐るその人を見る…黒髪をオールバックにして後ろの髪を結ってる男の人、あれ？この中性的な顔って……。

「志吹君…？」

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

「志吹君…？」

黒い髪をしたショートの子は俺の名前を言った…。

「りみ、なのか？」

その子は驚いた顔からパアツと笑顔になって。

「そうだよ、久しぶりだよ志吹君！」

「ああ！久しぶりだな、2年振りかな？」

「うん！中学二年になった時にこっちに来たからね」

まさか再会するだなんてな！ついこの前、会うわけないって思ってたのに、これがフラグつてののか？

「志吹君もこっちに引越して来たの？いつから？」

「そうだよ、こっちに引越したんだよ先週からな」

「凄い偶然だよね！お互いに引越してもまた会えるだなんて！」

りみは本当に嬉しそうに話していたが、お客さんも来はじめてきたしそろそろチョココロネ取らないとな。

「それでりみ、このチョココロネどうする？あと二つしかないからさ」

そう、チョココロネが一番人気あるのかあと二つしかなかった、レジにいる店員さんに補充をお願いしたけど今から作るらしく、今すぐには出来ないって言われた。

「じゃあさ、りみが二つ取っていいよ」

「えっ、でも志吹君ってチョココロネ好物だったよね？」

「中学1年の時によくお昼に食べてたし」

同じクラスだったからな、けどよく見てるな。

「俺は別にメロンパンがあるからいいよ、これも大好きだしな！ついでに後はクリームパンにするかな」

「ありがとう、志吹君……」

りみは少し顔を赤くしていた、なんだろうか？

「ありがとうございましたー」

――
俺とりみはやまぶきベーカリーを出るとりみはお姉ちゃんと昼を一緒に食べるらしくそこで別れた。

勿論連絡先も交換したさ、どうやらりみは中高一貫の花咲川女子学園だったみたいだ、中学二年時に転校先はそこだったからだとき。

そーいや羽丘も中高一貫だったよな、でも共学はこっちだけか。

疑問に思いながら自宅へと帰っていった。



「(志吹君、やっぱりカツコよかったなあ……それに相変わらず優しいし)」

「りみ、顔を赤くしてどうしたの？」

「な、何でもないよ、お姉ちゃん！」

りみはチョココロネを手を持ったまま顔を赤くしていた。

「(学校違うのは残念だけど、また会えるよね?)」

「どうしたのかしら、りみは……」

牛込ゆりは首を傾げていた。

▽▽▽▽▽▽▽▽

モカにはパン旨かったって送っておいた、すぐに返信がきて「ふっふっ、しーくんもやまぶきベーカリーの虜になる日は近いかもね」なんて言いやがった。

怖い事言うなよ、てかモカはお金とか大丈夫なのか？

俺は向こうでの宮司の仕事と、かつてY〇〇T〇beでの曲作りでの動画配信してたらスゴい再生回数で広告収入もあったしな。

一年は困らないぐらいもっているよ。

……実家からの仕送りなんかあるわけないしな！

でもいつかはバイトするか、曲作りを再開するかだな。

蘭達Afterglowの連中は今日はバンドの練習とか言ってたけどモカがすぐに返信来たって事はもう終わってるのかな？

あれから羽丘神社には行ってない……両親からこの俺の体に降りかかった呪いは、多分そこでも駄目だろう。

京都、奈良、和歌山とほぼ全ての神社に行っても効果なかったからな。

この苦しみの呪いを抑えるのがこの笛だからな……。

なんの装飾もないこの龍笛が俺の全てともいえる。

「まだ時間あるけど練習でもしているか、気を紛らしたいしな……」

日付が変わるまで練習をして、また一日の演奏をして眠りについた。

朝6時半、アラームが鳴り起きる。

「ふああ…最近の夢は見ないな」

最初の1日目以外は夢は見えていない、あれは悪夢だが。

「さて、朝食の準備をして着替えて入学式の準備をしますか」

朝7時10分

朝食を済ませ、制服に着替え、緑のネクタイをして

鞆を持って羽丘学園まで歩いていった。

蘭達みんなには俺は理事長に話があるって伝えた、ひまりは皆一緒に行こうって言ってたけどこればかりは仕方ないよな。

20分程歩いて羽丘学園が見えてきた、途中俺と同じ制服を着た人がいたが全員女子だった。つまり上級生達だ。

しかも皆揃って、俺に視線を向けてくる。

「上級生はみんなこっち見てるけど、やっぱり男子生徒は一年しかないから珍しいように見てくるんだな」

物珍しそうに見てくるのはなんか嫌だな…蘭や巴とかは気にしなさそうだけど。

こうして、俺は羽丘学園に入り書類に書いてあった理事長室までの案内図があったから、それを鞆から取り出して理事長に向かった。た。

笛吹き少年は羽丘学園に入学した理由を知る

入学式前に特待生だけは理事長に話がある為、俺は今から羽丘学園の理事長室に向かっていた。

羽丘学園の見取り図を見ながら行ったが、一階のしかも職員室の一つ奥に理事長があつたからすぐに着いた。

で、俺は今理事長室前にいる。

「入ってもいいのだろうか？」

などと独り言を言っていたら、理事長室のドアが開いた。

「あら、あなたが特待生の神子君？」

随分若そうな女性が出てきて、そう尋ねてきた。

「はい、そうですが…理事長に話があると書類に書いてありましたので」

この人はここの教師だろうか、話を通してくれるといいのだけだな。

「そうね、説明するから中に入ってそこに座ってくれる？」

そう言つて、その人は部屋に俺を招き入れた、ん？

まさかこの人が理事長!?

俺は応接椅子に座り、理事長机の椅子にその人は座った。

「まずは私の自己紹介からね」

そう言つて、自己紹介を始めた。

叢園寺雅 そうえんじみやび 20歳 独身

なんでも俺の親とは親交があつたらしい。
そんなでもって本物の巫女だということだ。

どうやら羽丘の特待生というのは俺をこつちにやる為にでつちあげた嘘だという事がわかつた。

「つまり、俺は完全に厄介払いされた、と言う訳ですのぞ?」

「まあ、そう捉えても仕方がないわ…全く、あの人の考える事よね」

叔父とも知り合いだったのか、しかもよく知ってるんだな。

「でも表向きは特待生つて事になつてるからね、そんな訳で特待生はあなた一人よ」

そうなるよな、裏では裏口入学みたいなもんだな、誰がうまいこと言えと。

「関西からはあなた一人だけど男子生徒はちゃんといふから安心して、でもあなたを入れて10人しかいないけどね」

「少なすぎやしませんか、そんなに男子の募集がなかつたのですか?」

もつともな質問を試してみた。

「共学にするつて決めたのが遅かつたからなのよ、それにここは中高一貫だから外部の、それも男子となるとここに来る物好きはそういな

かったみたいなの」

「……………」

「それでも10人は上出来と思ってるわ、来年はどうなるかはまだわからないのだけど」

「もうすぐ時間になりそうね、肝心な話はまた後でね」

そう言つて、雅さんは講堂へ向かい、俺も急いで自分のクラスへと向かった。

話には触れなかったが俺は一年A組だった、でも自分しか見てなかったから蘭達はどうなったか後で聞いてみよう。

—————

入学式も終わり、HRで自己紹介もやったが男は俺入れて三人しかない……これは肩身が狭いな。

ちなみに顔見知りには蘭しかいなかった、蘭以外みんな違うクラスとなつてしまったよ、なんてこつたい。

~~~~~商店街離れのファミレス~~~~~

今日は午前中だけだったのでひまりの提案でファミレスにてお昼にする事になった。

窓から巴、ひまり、俺、向かいにはつぐみ、モカ、蘭が座っている。注文を済ませて待っているとモカがいきなり嘆いた。

「つくかくれくたくよくモカちゃんはお腹が空いたよ」

「こーら、モカ、授業は明日からなのに半ドンでそんな調子だと先が思いやられるぞ」

「わたしも疲れたよー、自己紹介して終わった後に男子達がこつちずっと見てくるんだもん！」

「あはは、私は少し嘔んじやったけどね……」

モカと巴とひまりとつぐみはB組か、見事に俺と蘭だけ別れちまっ  
たな。

「あたしも疲れた」

「俺も疲れた、この肩書きのせいで特にな」

つぐみは知ってたが他のみんなには、俺が特待生って事を知らなかったんだよなあ。入学式で暴露されたけど、雅さんには後で文句言ってやる！

「特待生って言っても何も変わらないよな？」

「そうだよ、気にする事ないよ！」

「特待生くなにそれくおいしいの〜？」

「志吹は志吹なんだから、それでいいじゃん」



「みんな……ほ、ほらね志吹くん！私だけじゃないでしょ？変わってるのはさ」

そういや忘れていたけど、つぐみに特待生って言った後俺は変わってるのか言っちゃった。

「つぐみ、それはどういう意味？」

「つぐ、ひどーい！」

「アタシらは変わってるとは説明して貰おうか？」

「……うきゆるるる」

「ぐ、誤解だよお！」

モカは腹減ってて何も言っこないが、蘭や巴がつぐみをいじり始めた、巴は反対側だぞ、身を乗り出すんじゃない、でもな……。

「ありがとう、みんな優しいな」

みんなには聞こえないように俺は言った。

フアミレスで昼飯にした後、蘭たちは夕方にバンドの練習があるからそこで解散になった、なので俺も自宅に帰った。

夕方四時になろうかと時間にインターホンが鳴った。

「誰だろう？蘭達は練習だし」

玄関を開けてみると。

「神子君、話の続きをしに来たわよ」

羽丘学園の理事長こと雅さんがいた。

「そうですね、立ち話はなんですから中にどうぞ」

~~~~~自宅リビング~~~~~

俺と雅さんはリビングのソファアに座り、雅さんは話をし始めた。

「どこから話そうかしらね、まずはウチに来た理由から話すべきね」

雅さんは話し始めた。

「この近くに神社があるでしょう？そこには他にはない神道の力があるらしいの」

そんなのどこだってよくある話だ、和歌山の熊○神社だってそうだったけどね。実際はそうでもなかったがな。

「よくある話って思ってるでしょうけど、紀州の総本山が○野神社でしようが、東京だと羽丘神社なの」

胡散臭いな、だけどあそこは本堂には入れないんだよなあ。こつちじゃ俺の事情も知ってる訳ないから、おいそれと話すわけにもいかないし。

「だからこの神主さんに紹介状を書いたから渡しておくわね」

そう言っつて、ケースの中から紹介状を出して俺に渡してきた。

「ありがとうございます、でも本当に大丈夫なんですか？俺の呪いの事、向こうは何も知らないのでしょうに」

「それについてもその文に書いてあるわよ、大分はしよつてであるけどね」

「不安ですが、まあ明日にでも行ってみますよ」

不安と緊張しかないわ！

「頑張ってきてね、今私が協力出来るのはここまでだから。でも相談とか悩み事とかならいつでも大丈夫よ」

「まあ、なんと言いますか…色々ありがとうございます」

「あと、これは私個人じゃないのだけど…美作舞衣と連絡とかはしているの？」

「いえ、でもどうして雅さんが彼奴の事知ってるのですか？」

「私の姪だもの、お昼に連絡来たわ」志吹はお姉ちゃんの高校に入学したんでしょ？」つてね」

「ど、どう答えたんですか？」

「入学したって答えたわよ、嘘つくのも面倒くさいから」

「マジですか、面倒な事にならないといいんですが……」

彼奴の行動力は凄いな、一度決めたら我が道を行くタイプだからな……舞衣ともL I O Eをブロックしたのは失敗だったかな。

「話す事も伝えだし、私はもう帰るわね」

そうやって雅さんは帰っていった。

「舞衣……ブロックはあいっただけ解除するか」

L I O Eの友だちリストに舞衣のブロックを解除した。

「へえ、花咲川も同じ日に入学式だったんだ」

夜飯食べて夜九時頃、りみからL I O Eが来たので雑談していた。
ちなみに今は無料通話中だ。

「うん！自己紹介で変わった人がいたの、戸山さんって人がね、外部入
学だったから友達いなかったんだけど、すぐにクラスのみんなど打ち
解けて友達になっちゃったんだ」

「あと私達が会ったお店の店員さん、山吹沙綾ちゃんっていうんだけ
ど、その人も同じクラスだったんよ」

「えっ、あの店員さん同じ年だったんだな」

てか、りみと同じ花咲川だったんか。

「わたしは自己紹介上手く出来なかったから、わたしも高校で変わら
ないといけないのに……」

りみの声のトーンが低くなってきた。

「焦る必要はないよ、つてのは月並みな言葉だけどさ、そのさ……戸山さ
んだっけ？その人とお昼一緒に食べるとかさ、行動すればりみも変わ
れるんじゃないかな？」

「志吹君……うん、わかった……うち、やったるで！」

あ、関西弁出てる……。

「あ……関西弁……出ちゃってる……」

関西弁でいけば大丈夫そうなんだがな、まあ俺も人の事言えない
か。

「ともかくさ、明日から戸山さんと一緒についていけば何か変わるか
もね、頑張れよーりみー！」

「おおきに、志吹君…あつ！~~~~つ、も、もう寝るね！おやすみ、志吹君」

「あ、ああ……おやすみ、りみ」

りみは恥ずかしそうな声で俺との通話を切った。



志吹君との通話が終わった後、りみは枕に顔を埋めていた。

「うう~~~~関西弁がつい出ちゃって……しかも志吹君に、恥ずかしいよ~~~~」

「りみ、昨日の昼といい、今といいどうしたの？」

「お、お姉ちゃん!!何でもないよお……」

「本当にどうしたのかしら？」

今日も首を傾げるゆりであった。

こうして、また長い一日が終わりましたとさ。

笛吹き少年は笛持ちを咎められない

入学式から一週間が過ぎた。

その間に起こった事をまとめてみよう。

まず、羽丘神社の神主さんに会いにいったが
奥州神職サミットとやらで今はいないらしい、と神社の関係者さん
から聞いた。

次に学校生活だ、クラスの大半が女子の為に嫌でも注目の的にされてしまう、ましてや俺は表向きは特待生だからな。

前回で言わなかったが自己紹介してHRやった後に沢山の質問攻めにあつたよ、どこから来たとか、本当に男とか（半ギレ）

ん、他にも男子がいたって？

それはだな、二人いた男子はなんか冴えないとかで、俺は中性的でカワイイとかでき。

男がカワイイとか言われて嬉しい奴がいるか！

ちなみに蘭は少し膨れた顔をしてクラスを出てったが俺も質問攻めをしてくる女子達からうまく抜け出して、蘭に何とか追いつくことが出来たよ。少し拗ねてるところが可愛かったが口には出さないでおいた。

次の日からは通常授業も始まり、女子達の騒ぎもなくなった。

昼休みになり俺は蘭と昼を一緒に食べようとしたら、蘭は教室から出て行って屋上に向かっていったので、俺も一緒についていった。

蘭は少し困ったような、照れたような表情だったが拒んではなかったから一緒に屋上でお昼にした。

屋上は誰もいないし、天気もいいから絶好のお昼ご飯日和だな！

「これからは屋上で蘭と一緒に昼にするか、蘭はそれでいいか？」

「志吹はいいの？クラスの女子達がいるのに」

蘭は少しだが声を落としてそう言ってきた。

「昨日今日会ったクラスメイトより、蘭と一緒にお昼食べるほうがいいよ」

これは本音だ、まだ蘭と会ってまだ一週間位しかたってないけどな。

「ばか……でもありがとう」

「ん？何か言ったか、蘭？」

「なんでもない！」

聞こえたがな。

「どういたしまして」

「なっ！~~~~~／／／／」

蘭の顔がみるみる赤くなってきていた。

「ど、どうしたんだよ蘭！そんなに顔赤くしてさ」

「う、うるさいーうるさいーうるさいーいー」

おいやめろ、その台詞はもっとうごう…。

「ほらほら、落ち着けよ…それに昼休みもそんなにないしメシ食おうぜ」

「……………」

蘭はまだ顔が赤かったが、一緒にお昼を食べた。

その日の放課後、蘭との昼休みの事をモカ達に言ったらモカはニヤリと笑い、巴は呆れて、ひまりは俺に向かって目を細めて見ていて、つぐみはむくれていた。そして明日ならみんなで屋上でお昼食べようという話になった。

元々、今日蘭と俺をB組でお昼にしようとしたらしいが、クラスに居なかったからそのまま四人で食べていたとか。連絡とかしてくれればよかったのに。

その後は大した事もなく、一週間が過ぎていったとき。

—————

放課後、羽沢珈琲店にて俺はコーヒーを飲みながら考え事をしていった。

「……………むう」

それは向こうにいる俺の幼馴染と呼べるかどうかだが。一応小さい頃から一緒にいるしな。

美作舞衣みまさかまい、LIEのブロックを解除して数日たったらメッセージがわんさかと送ってきた。

全部既読スルーしたがな、だが最後に気になる一文を送ってきてやった。

『あたしもそつちの高校に転校してくるからね！今はまだ無理だけどいつか来るから、待ってなさいよ！あと既読スルーすんな！』

マジか、あの暴走機関車が来るとかやめてくれよ……
はああ〜〜

「志吹くん、ため息なんかしてどうしたの。まさかまた道に迷ったりしたの？」

つぐみが聞いてきた。

「違うわい、でも今は言えないよ、不確定だからさ」

嘘は言っていない、舞衣の事はいつかは言うけど今はまだ話す必要はないな。

「そう、でも無理はしないでね、志吹くんが悩みとかあると私はとっても心配だから」

「えっ……………つぐみ、それって？」

「あつ、ちちちち違うの!!そういう意味とかじゃなくて」

あたふたと慌てて顔真っ赤にしているつぐみにもう一人の店員さんがこちらに近づいてきた。

「ツグミさん！ダイジョウブですか!？」

白髪のおさげをし若干カタコトな日本語？を喋っていた店員がつぐみに話しかけていた。

「う、うん大丈夫だよ！イヴちゃんごめんね」

彼女は若宮イヴさん、三日前に新しく入ったバイトだそうだ。

「アナタがシブキさんですね、ツグミさんがよく言ってオリマシタ、ボーイフレンドだそうですね！」

はい？

「ツグミさんがサカンに話してイマシタ。シブキくんはとってもヤサ…ムグツ！」

「イ、イヴちゃん、それ以上は駄目ええええ!!」

つぐみが若宮イヴさんの口を塞いでいた。

名前呼びで構わないと言ってたのでイヴは花咲川の一年生でりみと同じクラスだった、後でりみに伝えとくか。

イヴと会った翌日の放課後、Afterglowのバンド練習があるから先に俺は帰ったが、その途中に羽丘神社に足を運んだ。

まだサミットから帰っていないと神社の巫女さんこと遥さんはるかが伝えてくれた。一応連絡先を遥さんに教えて帰ってきたら伝えてほしいと言っておいた。

「折角だから、ここで演奏でもするか…人もいないし」

そう言っただけ俺は首に掛けていた笛を取り出し演奏をし始めた。
勿論、遥さんには許可は取らせていたから安心だ。

~~~~~♪

~~~~~♪



~~~~~ライブハウスCIRCLE前~~~~~

「んお〜何か神社の方角から音楽が聞こえない〜？」  
バンド練習が終わってAfterglowがライブハウスから出てきた時、モカが何か音が聞こえると言いついてきた。

「アタシは何も聞こえないけどな」

「わたしも聞こえないよ」

「私は、少しだけど聞こえるよ」

「あたしも聞こえる、これは笛？」

モカ、蘭、つぐみが聞こえるらしい。

「ちよつと行ってみるか？」

巴の提案に皆、賛同した。

~~~~羽丘神社手前~~~~

「やっぱりこの上から聞こえるよー」

「モカ凄いね、わたしはここまで来ないとわからなかったよ」

「でもまた階段上るの？」

「アタシは大丈夫だけど、ゆつくりみんなで一緒に上ろうよ」

「巴ちゃん、ありがとう」

「何いつてんだつぐ、これがアタシたちの”いつも通り”だろ？」

「そうだよつぐ！よーし、みんなでこの階段を一緒に上がるから掛け声いくよー！えいえいおー！」

ひまりが右手を挙げて号令を始めた。

「」「……………」

しかし、その号令も虚しく。

「誰も乗ってくれないの!!」

これが後の『不発の大号令』と呼ばれるのである。

~~~~~♪

数分後に階段を登りきったみんなは、神社の境内でポツンと笛を吹いている少年の後ろ姿があった。

「なあ、あれって……」

「しーくん？」

「やっぱり志吹くんだよね」

「志吹って笛吹けたんだ」

「……………」

「ん？どうしたんだ、つぐ…!?!」

つぐみは目を瞑って志吹の演奏を聞いていたようだ。

「あたし達も聞いてようか」

みんなはつぐみに倣って志吹の演奏を聞いていた。

▽▽▽▽▽▽▽▽

~~~~~♪

もうあれこれ二時間はぶっ通しで笛を吹いていた、疲れは見えないがもうそろそろ六時になりそうなのでここで終わりにしようと演奏をやめた。

「ふう」

……パチパチパチ!!

ようやく、笛の演奏を止めてその笛を再び首に掛けようとしたら後ろから拍手が聞こえたので後ろを振り向いてみると。

「!?みんな……いつからそこに?」

「ついさっきだよ、でも意外だったな……志吹が笛の演奏出来るなんてな」

「わたしも驚いたよ、しかも凄く上手いし!」

「しいくんすごい」

「上手いじゃん、志吹」

「うんうん!志吹くん、カッコいいなあ」

つぐみは顔を赤くしていた。

「ごめんね、隠していた訳じゃ……ないか、隠していたよ」

俺は首に掛けていた龍笛をみんなに見せた。

「なあ、志吹って中学の時に吹奏楽部入ってたのか？」

巴がそう聞いてきた。

「違うよ、俺はな……」

俺は関西で宮司をやっている事をみんなに話した。巴とひまりは凄く驚いた顔をしていた、蘭とモカはあまり驚かなかったが少し顔がヒクヒクさせていた。

つぐみはなんか目をキラキラさせていた。

「まさか志吹も音楽をやっていたとはなー」

「吹奏楽とバンドはベクトルが違うがな」

「だったらさ、わたし達の演奏も聞かせてあげようよ！」

「そうだね、あたし達のも是非聞いて感想とか貰いたいね」

「私、上手く出来るかわからないけど志吹くんに私達の演奏を聞かせたい！」

「んっふっふーモカちゃん達の演奏をしーくんに聞かせたいよー」

「そうだな、アタシ達の音を志吹に聞かせてやるさー！」

なんだこの反応は、これがバンドガールの反応とはな。

やべえ、感動して涙出そうだぜ。

向こうとは反応が全然違うよ。

こんなにも暖かい人達ならばいつかあの事も話せる日が来るかも
しれないな。

俺のこの体についてもな。

今日はよく眠れそうだよ。

笛吹き少年はガールズバンドを知る（前編）

蘭達 Afterglow に俺が宮司つてのを話した日の夜にスマホから通知が来た、もう11時になろうとしているのに誰だろうか？

スマホを触る前にさっきまでの事を思い出していた。

俺はあの後は蘭達とは別れて自宅に帰って行こうとしたのだが、つぐみが顔を赤くしていて熱でも

ありそうだったから羽沢珈琲店まで送っていく事にした。

なぜかモカと巴はニヤニヤしていたが、何だったんだろうか？全くもってわからなかった。

つぐみの家まで10分くらいの距離だけど、心配だな。

蘭とひまりは不満そうな顔していた、どうしてだ。

そして俺とつぐみ、二人で羽沢珈琲店に向かっているのだが、どうもつぐみの様子がおかしい。

「つぐみ、バンド練習終わった後に神社に来たのか？」

「う、うん……そうだ、よ」

やはりおかしい、言葉に詰まってるしきつと疲れているんだな。

「大丈夫か？疲れているのだったら……」

おんぶでもしてあげようと考えたがつぐみ達とは、まだそんな仲ではないよな…馴れ馴れしい真似はよそう。いくらさっきの話で俺は感動したからって、みんなはそうは思ってはないだらうから。

「つ、疲れてはいるけど大丈夫だよ！それに、さっきの志吹くんの笛の音色で少し疲れが取れた気がするよ」

「ははっ、それはどういたしまして」

あるけどね、疲労回復する音楽はねでもそれは代償もとい対価が必要になるのだけだな。

「神社には結局何の用で来たの？まさかまた夕焼けでも見に来た…：訳じゃなさそうだな。時間はもう6時になってたし」

「えっと、ね…CIRCLEから神社の方角に笛の音が聞こえたの。それで皆で行こうって話になって、階段を上ったら志吹くんがいたから。でもね演奏してる志吹くんを邪魔しちゃう悪いと思つて終わるまでみんなで聞いていたの」

「よく聞こえたなあ、結構距離あるよ？」

「実は、モカちゃんが最初なんだけどね、聞こえたのは。私と蘭ちゃんはずかしく聞こえなかつたよ」

モカは凄いなあ、あいつは鼻もよかつたりしてな？

「あつ…」

つぐみと話をしていたら羽沢珈琲店に着いてしまった。

「志吹くん、送ってくれてありがとうね」

「何言ってるんだ？つぐみが体調悪そうだったし心配だったからな」

「くくっ！本当にごめんね。でも今はもう大丈夫だから、ね？」

さつきまで大丈夫そうだったけど、今はまた顔が赤くなってきている。

「つぐみ、今日は早く寝たほうがいいよ。風邪引いたんじゃないの？」

「う、うん！今日は早く寝るね。それじゃ志吹くん、おやすみなさい。また明日学校でね」

「ああ、また明日学校でな」

俺は羽沢珈琲店を後にして自宅へと帰っていった。



「志吹くん、笛吹いている時の姿はカッコよすぎるよ」

つぐみは自分の部屋のベッドの上で足をバタバタしながら枕に顔を埋めていた。

「また見れないかなあ？笛吹いて欲しいって言ったら迷惑だよね？でもあの姿はあの時すごく目に焼き付いてたし音も凄く透き通る感じ、

まるで私の心も……」

何言ってるの私！でも、あの音色はまるで……。

志吹くんの事を考えていましたら寝てしまいました、まだ8時ですのに。

▽▽▽▽▽▽▽▽

そして11時、回想終了。

『時は動き出す』

スマホを見るとLINEからの通知だった、相手は…

舞衣からだった。

『来月GWにはそちらに向かうから、待つてなさいよ！』

と送ってきた、マジかよ。

こりやあ俺の来月のGWはひと波乱ありそうだな。

—————

翌日、昼休みに屋上でみんなと昼を食べている時にひまりが授業が難しいとぼやいていたが。

「ひーちゃん、せんせーの話はちゃんと聞いているのー?」

「モカには言われたくないよ!いつも寝てる癖に」

「あはは、ひまりちゃんもモカちゃんも授業中はぼーつとしたり寝ないほうがいい、かな」

「巴はちゃんと聞いているのか?」

「アタシは真面目にやってるぞ?まさか志吹、アタシもあの二人と同じだと思ってたのか、このー!」

隣にいた巴が俺にヘッドロックをかけてきやがった!おい、やめろ!顔近い!顔近い!巴から女の子特有の匂いが……。

「巴、俺弁当持ったままだから!落としそうだから離してくれ!」

「あっははは!志吹、顔赤いぞくく?」

「ったく、人が食事中なのに技かけやがって」

離してはくれたけど巴め。いつか仕返しをしてやる!

「巴!何してるの!」

「巴ちゃん!だ、だ、だ駄目だよお!」

蘭とつぐみは顔を赤くして抗議していた、なんで抗議?

「で、蘭と志吹くんは授業どうなの?」

ひまりが自分がこんなだから俺と蘭も同じムジナにでも思ってるのか、そう聞いてきた。

「あたしは…な、何とか大丈夫」

「蘭、見栄を張るなよ。休み時間、俺にノートを貸しているから蘭もひまりと同じようなもんだろ？」

「志吹！その事は言わないでって言ったじゃん！！」

「あれ？そうだったけ？」

蘭は向かいにいたからすぐにパンチが飛んできた！
だがそれを俺は割り箸で受け止める！

「おっと危ない！」

「ぐっ…！」

「しいくん、宮本武蔵みたい」

あの人はハエを掴んでいたっけ。

「俺は授業は問題ないかな、って箸にヒビ入ってるじゃねーか！まだ割ってもないのに」

蘭はどや顔になっていた、いばるな。

学力やばそうなのは蘭とひまりか、来月末の中間テスト大丈夫なのか、不安だな。

授業も終わり、今は放課後だ。

「志吹、帰ろ」

蘭と二人で帰る事となったけどB組の四人はどうしたかというところ。巴はダンス部

ひまりはテニス部

つぐみは生徒会

モカはパンが呼んでるよとか言って超速攻で帰ったと連絡が来た。

仕方ないので俺は蘭の家まで一緒に帰る事にした。

「蘭、次のバンド練習っていつなんだ？一応念のために今週の予定は空けておくけど」

「明後日土曜の午後1時から。その時にあたし達の音楽を聞かせてあげるよ。あと意見とかも言ってほしいし」

「土曜か、うん大丈夫。でも俺はバンドの事に関しては全くの素人だから的はずれな事言っちゃうかもしれないけどそれでもいいのか？」

「それでも構わない、ただ練習してるだけだと上手くはならないから。それにあたし達Afterglowの初ライブもいつかはやりたいからね」

「そっか」

「志吹こそ、その、笛の練習はさ、毎日やってるの？」

「ああ、毎日やってるよ。自宅に防音施設の場所があるからね」

毎日やらなきや俺は地獄の苦しみを味わうのだからな。

「ふーん、防音施設ねえ……」

蘭は何か考え込んでいた。

「おいコラ赤メツシユ、何を考えてる？」

自宅に来る気じゃないだろうな？

「なんでもない」

怪しいな、でもまあいいか…あとで来客用の菓子とか買ってこよう。

蘭を家まで送ったあと俺はスーパーに向かい

お菓子とか買っていった。

—————

そして明後日の12時55分にはライブハウスCIRCLEの前に着いたがみんなはもう中に入ってた。

『話は通してあるから、まりなさんに言ってね』

と連絡が来たが、まりなさんって誰だよ。あそこにいる受付の人か？

「すみません、Afterglowの知り合いの神子と申しますが」

受付の人にそう言った。

「ああ、君がひまりちゃん達が言ってた神子…志吹君で合ってるのよね？」

「ええ、そうですよ」

受付の女の人はニッコリとした顔をして。

「そっかそっか…あつ、ごめんね。私は月島まりな、ここCIRCLEのオーナーやってるの。まりなって気軽に呼んでね」

まりなさんか、オーナーやってるには随分若そうだな、雅さんよりも幾分年下なのは確かか。

「それとひまりちゃん達Afterglowは2番スタジオよ、その奥がそうだから」

まりなさんに礼を言い、俺は2番スタジオの中に入っていった。

—————

~~~~~2番スタジオ内~~~~~

「志吹！遅いよ、何をやっていたの？」

入ってすぐに蘭からのお叱りの声。

「ごめんごめん、ひまりのせいだな」

「ちよつとお！なんでわたしのせいなの!？」

「だってさあ、まりなさんって言われても誰だかわかるかよ、おかげでこっちは少し躊躇ったんだからな」

全く、説明不足もいいとこだな。

「まーまー、ひーちゃんやー、今はそんなやりとりしてる場合じゃないっしょ」

「そうだぞひまり、志吹にアタシ達の音楽を聞かせにきたんだからな」

「あはは、私は少し緊張しちゃったけど、ひまりちゃんのおかげで楽になったよ」

「つぐみ、緊張してたの？」

「う、うん！だって今回は志吹くんに聞かせるから、緊張しやっつて」

「そ、そっか」

「あれれー？もしかして蘭も緊張してるのー？」

「し、してないから！ほら、さっさと準備するよー！」

そう言っつて蘭、モカ、ひまり、モカ、つぐみはスタジオのステージに移動して楽器の最終チェックをしていた。

「志吹はそこに座って、あたし達『いつも通り』の演奏を聞かせてあげるから」

蘭はマイクでそう言い、俺は椅子に座った。

「聞いてください！ 『That is How I Ro  
II!』」

蘭の号令と共に演奏が始まった……!!

## 笛吹き少年はガールズバンドを知る（後編）

「聞いてください！ 『That Is How I Roll  
1』」

蘭の号令で演奏が始まった。

♪♪

「……………（これがガールズバンドの演奏、なのか？）」

蘭の歌は、俺の心を明るく照らしてくれて！

モカのギターで熱くヒートアップさせて！

ひまりのベースは低音で熱くなった俺の心をブレーキかけて！

巴のドラムが皆のリズムをとりながらまた俺を熱くさせる！

つぐみのキーボードが一定のリズムで皆のリズムや俺の熱くなつた心を元に戻す！

なんだろうな、この気持ちは。そう、これは両親の舞を初めて見た時と同じ感じだ。

あの時も感動で胸が一杯だったな、

すげえな、バンドってのは……舞とは全然違うのに  
どうしてここまで俺を引き込ませるのか。

もしかしたら俺の運命も変えてくれるのはガールズバンドなのか

もしれないな。

そう考えていたら、演奏は終了していた。

「ふう、どうだった、って志吹!？」

「えええっ!?!?どうしたの志吹くん!」

「し、志吹、お前…何で」

「な、泣いて…いるの?志吹くん?」

「モカちゃん達の演奏に感動しちやったのかな?」

皆、何言ってるんだ、俺が泣いているだつて?

俺は目元に手をやった、そこには涙が目から頬まで流れていた。

「えっ?…何で、何で俺、どうして、こんな!」

俺は涙を手で拭った、だけど知らずに涙を流していたのはきつとモカの言う通りだ、感動したのは間違いないしな。

「悪い、カツコ悪いところを見せちゃったよ」

「志吹い、そんなにアタシ達の演奏がよかったのか?」

「ああ、よかったよ、とても」

「「やったあ!」」

蘭は小さくガッツポーズし、ひまりは巴とハイタッチしてモカとつぐみもハイタッチしていた。

「なんと言ったらいいか、とてもアツくなったよ。凄いんだなバンドってのは」

「そうだよ、凄いんだから！」

「錯覚なのかわかんないけど一瞬だったからさ、なんか夕焼けの景色が見えたような気がしてな」

「何それ？でもそれがあたし達にとっての『いつも通り』になってたのかもね」

バンド名の由来だしな。

「そ、それで志吹くん。他にはあるかな？感想とか」

つぐみが聞いてきた。けどこれハッキリ言っているのかどうか？

「んー、俺はバンドの事はよく知らないから、これは役に立つかわからないけどそれでも構わないか？」

「だから前に言ったでしょ、それでも構わないって」

言ってたな、そんなこと。

「じゃあまず蘭から、ボーカルは凄いな、歌手顔負けだったよ、とても俺の心を照らしてくれたから」

「ふふん、当然だね」

蘭は完全にどや顔になっている、もう誉めないゾ。

「けどギターとのテンポに結構ズレがあったな、わかるぞ。まだ歌とギターでの練習が足りないんだな」

「……………っ！」

どや顔が一瞬にして消えた、これが見たかったよ。

「次にモカは、うくん…なんと言うかなあ、サビの初めの部分でいいのかな？そこだけ少し音に変に聞こえたような気がしてな、てかそこで一瞬舌出してただろ」

「あちやくバレちゃったー、しーくんの言う通りそこだけミスっちゃったんだよね、およろ」

モカは頭を掻きながらそう答えてきた。

「次にひまりと巴、二人ともリズムが少し走りすぎてる感じがしたよ」

「ひまりは最初からで巴は途中からだけどな」

「うっ、わたしは最初からなんだ……」

「アタシは途中からか、自分じゃわからなかったよ。よく気づいたな  
志吹」

「ひまりはともかく巴のはわかりやすかったよ、ドラムだからかな」



ひまりも巴も照れ笑いしていた、あとはつぐみか。

「つぐみは…特にないかな。なんと言うか、走り過ぎるこいつらの中和剤となってるとしたか」

「どういうこと?」

ひまりが聞いてきた。

「分かりやすく言うと、我が強い四人に一人だけ気持ちを前に出さないとやったほうがいいかな?」

「お、おい志吹…つぐみをそんな風に言うのはあんまりじゃないか!」

「いいの巴ちゃん、私でもわかってるから」

「二人共、最後まで聞いてくれるかな。俺が言いたいのはつぐみがいなかったら曲としては成り立たなくなりそうなんだ、ストッパー不在というか、ブレーキのない乗り物とか」

例えが極端だな、まあいいか。

「つまりーあたし達を支えているのつぐって事だよー?」

「そゆこと、音は出すだけが全てじゃない、抑える事も重要なんだよ。これは音楽共通の理ことわりだと俺は思ってるから」

「…そっか、私はみんなの支えになってるんだね。うん、ありがとう志吹くん」

「どういたしまして。で、気になったのはこれで全部だけこれだよ

「かったのか?」

「充分すぎる程、あんたどんな耳してんの」

「しいくん絶対音感あるっしょ?」

「わからん、でもまあ小さい頃から笛と鼓の音は聞いてきたからな」

「志吹、アタシは素直に凄いヤツだと思ったよ」

「そうそう、わたし達の音をちゃんと聞き分けられてるんだもん。しかも的確に」

「……………」

「どうしたんだ、つぐみ?」

つぐみが黙っていたから何かと聞いてみたが。

「ううん!何でもないよ!(言える訳ないよ、小さい頃の志吹がどんなだったのを想像しちやっってるなんて)」

「それで蘭、持ち曲は1曲だけ?」

「うん、オリジナルは今ほそれしかないね、あとはカバー曲だけど」

「じゃ、それも聞かせてくれるかな?」

それからカバー曲も演奏してくれた、幸いにも知ってる曲ばかりだったのでこれは意見とかは簡単に出来た。

でもバンドって楽しそうだな、吹奏とはまた違う感じで。

練習時間も終わり、夕方にみんなでつぐみの家こと羽沢珈琲店にて談笑と次の課題について話していたが。

「ねえしーくん、ひとつ聞きたいことがあるけどいいかな？」

モカがいきなり俺に質問してきた、今コーヒー飲んでる最中なんだけどな。

「あの時泣いてたのはモカちゃん達の演奏に感動したってのはさく本当なんだろうけどさく、何かをさ、思いだしたかのようにあたし的には見えたんだよね」

「……………」

俺は飲んでいたコーヒーを勢いよく飲み干してカップを置いた。

「モカ、いや、皆…少し長くなるけどいいか？」

「あたしは構わない」

「んー」

「うん、大丈夫だよ」

「アタシも気になるしな」

「今私達以外お客さんいないし平気だよ。イヴちゃんもいるから」

みんな了承してくれた、あとモカは自分から振ってきた癖に眠そうな顔するな。

「ありがとう、これは俺の昔話になるんだが…」

俺は皆に小さい頃に初めて両親の舞を見た時の事を話していた、そしてそれと蘭達のバンドの演奏と同じ感動をしたのもね。

だけど全て話す訳にはいかない、まだ、ね。

「と、まあこんなところだな」

「……………」

みんな黙って俺の話を聞いてくれていたが。

「長くないじゃん!」

蘭と巴とひまりにつっこまれた、モカとつぐみは真面目に聞いていたのか何も言わなかった。

「でもしーくん、その口ぶりだと両親って」

「ああ、去年事故でな…………」

本当に事故でいなくなったんだよな。

「ごめん、しーくん…あたし余計な事言っちゃったよね」

モカがしょんぼりと暗くなっていた。もういいよ、ちゃんと割り切っているからさ。

「いいいいいよ、いつかは話そうと思っていたしな。気にするなよモカ」

俺はテーブル席の左隣に座っていたモカの頭をポンポンと叩いていた。

「う、うん…ありがとしーくん」

ん？モカが照れてるのか？

「……っ！」

テーブルの向かいにいた蘭が俺に足蹴りをしてきていて、右隣にいたつぐみは何故か頬を膨らませてむくれていた。

「痛っ、何だよ蘭、それにつぐみもその顔はなんだよ」

「知らない！」

つぐみと蘭は同時にそっぽ向いていた、二人とも息ピッタリすぎだろ。

「ねえ巴、この空気は何なの」

「アタシ、コーヒー頼むか。ひまりもどうだ？」

「そうする」

二人はイヴを呼び、コーヒーを注文していた。

「……」

モカはまだ照れてるし、何だっただ？

結局この後は何も話すことなくお流れとなったとき。

## 笛吹き少年は羽丘の先輩達と出会う（前編）

A f t e r g l o wの演奏を聞いた翌日の日曜日、朝9時に俺は目を覚ます。

ここずつと悪夢は見ない、本当に初日だけだったんだな、などと思っていた。

「ここに来てからずつと楽しい事ばかりだったからかな、蘭、モカ、ひまり、巴、つぐみ達に出会って、それとりみとも再会したしな」

本当に毎日が充実してるよ。俺の呪いの事を忘れる程に楽しい事ばかりだ。

だけど終わりはいつか来る。

俺は充電バツチリのスマホに電源を入れる、通知は何も来ていない。

「遥さんもあれから連絡来ないな、まだ奥州サミット長引いてるのかな?」

今から羽丘神社に行こうと決めた。

—————

家を出て真っ直ぐ羽丘神社には向かわず、商店街のやまぶきベーカリーに向かっていった。昼飯を買っていくからね、今日は神社でまた練習かな。

（カラン！）

「いらっしやませー」

店に入ると前にりみと再会した時と同じ店員さんがレジにいた。

そういえばりみと同じ花咲川でクラスメイトとか言ってたな。

「さて、朝も食べてないし少し多めに買うかな。大好きなメロンパンとチョココロネをそれぞれ3つ取ってトレイの上に、あとクリームパンを二つ…これモカいたら奪われそうだな」

トレイに一杯のパンを乗せてレジへ。

「すごい、こんなに沢山…あっ！失礼しました、880円になりますね」

安っ！パン8つもあって千円しないとかどんだけ。

「あの…あなたは前に牛込さんと店で話してた人でしたよね？」

パンを袋に詰め終わって俺に渡して来たあと茶色のポニーテールさんこと山吹沙綾さんが話しかけてきた。

「そうですけど、君はりみのクラスメイトの…」

確か前にりみが言ってたな、確か名前は…

「うん、私は山吹沙綾って言うの。キミは神子志吹君でいいんだよね？」

「そうだけど、何で俺の名前を知ってるの？」

「うーんとね、牛込さんとはお昼一緒に食べたたりしてるし、このパンもほぼ毎日買ってくれるから学校ではよくお喋りとかしてるんだ」

「それで、話してる内に神子君と話していたあの日の事を牛込さんに聞いてみたの。それで名前を知ったんだよね」

そっか、りみは花咲川でもう上手くやれてるみたいだな。だけど関西弁はうっかり出すなよ、からかわれるからな。俺もやらかしそうだけど。

「山吹さん」

「沙綾でいいよ、それで何かな？」

「ん…じゃあ沙綾、これからもりみとは仲良くしてくれるかな？」



「勿論、牛込さんはもうウチの常連さんだしクラスメイトだからね。神子君も常連になってくれたら：嬉しい、かな？」

沙綾は少し照れくさそうに言った。

「常連になれるか保証は出来ないけど、なるべく来るようにはするよ、それじゃまたな沙綾」

俺はやまぶきベーカリーを後にして羽丘神社に向かっていった。



「いらつしやいませー……つて牛込さん？」

彼が店を出て数分後に牛込さんがやってきた。

あちやータイミング悪いなあ。

「?……どうしたの、山吹さん？」

「さつきまで：彼、神子君が来てたよ。パン買いに」

「えっ、そうだったの!？」

牛込さんは少し驚いた顔をしていたけど、そのあといつものチョココロネを4つトレイに乗せて持ってきていた。

「神子くんもチョココロネ好きなんだね、沢山買っていたからさ」

他にも買っていたけど真っ先にチョココロネから取っていたのを私は見たからね。

「そっかあ、まだ好きでいてくれたんだね……」

牛込さんはチョココロネを見ながら、どういう訳か遠い目をしていった。

彼と牛込さん、二人に何があったのだろうか？



「そうなんですか、遥さんも東北へ行ってしまったのですか……」

「ええ、昨日出発したそうです。何でも連絡がこないの心配になっ

て、あとついでにわんこそば食べるとか」

羽丘神社に着くなり近くにいた神職さんに遙さんの事を訪ねてみたら、神主からサミットの連絡もないからと心配になって、いてもたってもいられなかったらしい。

……てか遙さんってそんなに偉い人だったのかな。実はわんこそばが食べただけで心配とかは口実じゃないの？

「居ないなら仕方がないか、まずはパン食べるか」

ついでにパンの袋の中身をスマホで撮ってモカにLINEで送り付けてやった。そしたらモカからすぐに返信きた。

「しーくん……そこは羽丘神社だね？今からしーくんのパンを食べに向かいたいけどモカちゃん、今からバイトだからいけないのだ」  
「俺からの奪うの前提で話すのやめてくれますかな」

モカさんよ!？」

「昨日あたし達の演奏代をまだ払ってないからなのだ」

「パン（金）とんのかい！」

モカ……がめつい奴め!?!印のスタンプやってパンを食べ始めた。

やまぶきベーカリーで買ったパンを半分食べ終わり、ふとスマホの時計を見てみたらまだ11時だ。

「んじゃ、笛の練習するかな」

首に掛けていた笛を取りだして。

「まずはあいつらのカバー曲からやっていくか！」

昨日聞いたAffterglowのカバー曲は、どういう訳か笛一つ

でも出来るんだよな。

「~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪」

あつ、遙さんいなかっただけど笛吹く許可はさっきの人にちゃんと貰ってるからね。

#### 数時間後

「ふう……少し水分採らないとな。流石にキツくなってきたし」

近くにあった自動販売機で桃の○然水を買うと、半分くらい一気に飲み干してしまった。

(そういえば桃の天○水ってここずっと見ないような気がするけど気のせいかな?)

「休憩がてら残ったパンを食べるかな」

袋からチョココロネを取り出して、ふと思った。

「りみにも送ってやるか」

チョココロネを食べる寸前のをカメラで撮り、それをりみに送った。

残ったパンを全て食べてまた再開した。

「次は…アレやるか、猫がそこら辺にいるしな」

俺は猫を呼び寄せる超音波に近い音を出してみた。

猫笛の要領でな、本来なら人が出せない音を俺が出せるのはこの呪いのおかげなんだよな。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

近くにいた猫が俺の回りに集まってきた。そして階段のほうからも猫が列を作っているかの様に並び、こちらに向かっていた。

俺は気にせず猫笛を続けていた。

数十分後

俺の回りには猫が50匹はいるのではないかと、わんさかと猫が集まっていた。だがその中で……

「……っ！」

俺は思わず演奏を止めてしまった。

何故ならそこには……ロングの銀髪をした人が猫と一緒に混じっていたからだ。

「あっ……」

その人と目が合ってしまった。



―数十分前―

「友希那く、今日の練習キツくなかったー?」

「そうかしら?でも私達 Roselia に甘えは…!」

「アタシはもうヘトヘト…って友希那、どうしたの?」

「リサ、この音…聞こえるかしら?」

リサは耳を澄ましてみたが。

「んー?何も聞こえないけど、友希那は聞こえるの?」

「ちよつと行ってみるわ、神社のほうから流れてるみたいね」

「アタシには全然聞こえないけど、友希那が聞こえるなら一緒に行くよ」

二人は羽丘神社に向かって行き、神社の前に着いた時に信じられないのを目にした。

「何これ?猫の行列ができてる…友希那?」

「にゃーんちゃんパラダイスの行列…ここは天国なのかしら?」

「友希那!しつかりしてよ、友希那!」

「ハッ…!ごめんなさいリサ。でもこのにゃ…猫の行列の先が気になるわね」

「うん、行ってみよう」

猫と一緒に階段を上り始めた二人は、そのまま神社の境内まで辿り着くとそこには猫の密集が出来ていて、その中心に人がいた。

「あの人猫を集めているのかな?でも何も音とか聞こえないけど」

？」

「何言ってるのリサ、私には聞こえるわよ。あの笛から音出してるもの、大分低い音だけど…」

「友希那？」

「……………」

友希那はフラフラと猫の集団に混ざっていった。

「にゃんちゃんに囲まれて、幸せ…………」

「(うーくん…まつ、いつか。友希那があんな幸せそうな顔するのは久しぶりに見たから、暫く見守っとくかな?)」

リサは猫の集団から少し離れていった。

「(あの人、どこかで見た気がするんだよね。アタシのクラスでも話題になってた可愛い新入生がいるって、中性的な顔立ちで髪も長いって聞いたけど、まさかね?)」

「にゃーんちゃん…………(撫でたいけど触れたら逃げちゃうかもしれないよね、残念だわ)」

突然音が止まったので顔を上げて、演奏をしている彼の顔を見た  
ら。

「あつ…………」

彼と目が合ってしまった。



俺は目の前にいる銀髪の人と目が合ってしまった、ただ呆然としていた。

「あっ……」

猫の集団が一斉に逃げ出してしまった！演奏をやめたからだ。散り散りに猫が走り出して、もう境内には一匹も猫がいなくなった。

「あ……あ……にゃーんちゃん達が……」

猫に混じっていた人は泣きそうな顔をしていた。

「……………」

どう反応すればいいのだろうかと思っていたが、ウェーブがかかった茶髪の人が心配そうにやってきた。てかもう一人いたのかい!?

「ゆ、友希那……すっかりして!」

「リサ……私は……………」

倒れそうな所をリサと呼ばれた人が支えている、何だこの人達は？

「あ、あの……?」

「ごめんネ、この子が迷惑かけちゃって」

「そ、それはいいんですけど……あの!まさかとは思いますがその人は猫が逃げたから、大変落ち込んでおりますのですか?」

「その通りよ」

わっ!復活したよ。

「にゃ……コホン、猫を呼んでいたのはその笛の音色からなのよね?」

「そうですね、まさか聞こえておりましたので?」

「聞こえていたわ、かなりの低周波音だったけどね」

マジっすか、この人の耳は猫に近いんじゃないの？

「あの音はかなりの低音で演奏次第では猫とか呼べるのですよ、所謂猫笛ってやつですね」

「すごいね君…」

「ありがとうございます、俺の特技ですので」

本当は嘘だけだな。

「ところで君って羽丘学園の一年生だよな？」

「そうですけど、どうしてそれがわかったのです？」

突然の質問に真面目に答えてしまった。何この人、何でわかるの!?

「あははは、それはねえ、男子生徒の新生で一人だけ可愛いのがいるってアタシ達の学年では有名なんだ。容姿も髪型も当てはまるからまさかと思っただけど」

「私は知らなかったのだけど」

「友希那は音楽以外は無頓着だしね。あつ、ゴメンね、自己紹介がまだだったね。アタシは今井リサ、羽丘学園二年A組、気軽にリサって呼んでいいよ☆」

「湊友希那、クラスは二年B組よ。好きに呼んでくれても構わないわ」

二人は自己紹介を終えると今度は俺が自己紹介をし始めた。

「えっと、一年A組の神子志吹です、友希那先輩、リサ先輩、よろしくお願いしますー!」

何をよろしくかは置いといて。

「(こちら)そ宜しく〜志吹」



「よろしく、志吹」

猫が切っ掛けで知り合った羽丘の先輩方でしたこの日、そしてりみからの返信があったのを、完全に忘れたいたのを後で後悔する事になろうとは…この時の志吹君にはまだ知る由もなかった。

## 笛吹き少年は羽丘の先輩達と出会う（後編）

「志吹、もう一度あの猫達を集める事は出来…

いいえ、やって貰えるかしら」

日曜日の夕方、羽丘神社で自己紹介を終えた三人であったが、この先輩は何だ!?猫の事になると暴走すんのかな？

「あー…友希那先輩…猫笛つてのはですね、この音色…もとい旋律を聞いちやいますとですね、今日一日は警戒してしまつて猫は近寄つてはこないのですよ。」

さつき演奏止めた時に人間が近くにいましたら逃げていきましたし」

それにこの旋律は難しくて異様に神経使うから、もう無理。

「そう…残念ね。では日を改めてお願いするわね。リサ、帰るわよ、また会いましょう志吹」

「えつ、ちょっと待つてよ友希那…それじゃ志吹またね☆」

リサ先輩はウインクしながら手を振つて、階段降りていった。またね、か…もう一度やるの前提ですかい。

「はあ、俺も帰るかな…今何時だろう？」

とスマホに電源入れてみたら、りみからの返信が沢山あった。全部チョココロネ関連だったけどね。でもその中でひとつだけじつと見てしまった。

『私達のチョココロネ同盟は継続中だね』

「りみ……」

その一文が少し心に刺さった。

-----

翌日の月曜日の朝、今日からまた学校なので

弁当と教科書を鞆の中に入れて、そして笛は首に掛けて登校する準備も済まして朝食を食べていたが、ふとスマホを見ると。

「通知が来てる、誰からだろう?」

左手でスマホを操作し、メールを見てみたら。

『東北サミット中に事件があったみたい。色々調べてくるから暫くは帰ってこれないかも。それとごめんね、急に出掛けちゃって』

事件があったのか、だから神主さんは帰ってこれないのね。しかし遥さんもいい人やな、あの人こそ

巫女の鏡なのかもしれない。

朝食も食べて、食器も洗い終わったので

少し早めに登校しようと玄関を出たら……。

「あら、志吹じゃない、おはよう」

「おっはよー志吹」

「……おはようございます、友希那先輩、リサ先輩」

通学途中の友希那先輩とリサ先輩が、家の目の前を通った時に俺が出てきたようだった。

「へー、志吹の家って学校から近いんだね」

俺は友希那先輩とリサ先輩、一緒に学校まで行く事になった。リサ先輩の提案だそうだ。

「偶然っすよ、元々は親戚が住んでたのですけどね。亡くなって誰もいなくなったので、俺がこっちに

住む事になっただけですのぞ」

「へえ、じゃあ今は一人暮らしなんだ?」

「そうつすよ?」

リサ先輩は何か考えた顔をしていた、一体何なんだろうか。前にも同じような顔をしていたが……

「志吹、あなた今日もあの神社に行くのかしら?」

「今日は行かないですね、まだ猫は警戒してると思いますので」

多分警戒はしてない、だけど俺の神経が持たん。

「わかったわ、でもにや…猫さんと呼ぶ時は絶対に連絡を頂戴ね?」

「わかりましたよ…」

何でそんなに必死な声色で。

「あはは……友希那ったら、猫の事になると豹変するんだもの、志吹もわかってあげてね☆」

「違うわよりサ、志吹」

「友希那先輩……はあ、」

「先輩つてのはいららないわよ。それと敬語も」

「えー……上級生ですからそれは」

「もう!志吹は少し固いよ。アタシ達だけの時でもいいからさ、ね?」

友希那先輩も頷く。

「はあくく…、わかりま……わかったよ、友希那、リサ」

「うん、よく出来ました♪」

リサも友希那も満足そうな笑みをしていた

……上級生をタメ口だなんて抵抗は少しある、かな?

ちなみに二人に連絡先を交換された。

—————

「えっ!?!」

三人で登校してる所をAfterglow全員に見られた上に、他

の生徒からも注目を浴びてしまった。ひまりと巴は高笑いしていたが、モカとつくみは驚いた顔をされ、そして蘭の反応は……。

ガン無視して昇降口に向かっていた。

「こりや後で根掘り葉掘りされそうだな……」

昇降口で友希那とリサとは別れたので、さっさと一年の教室に向かうとしたら。

「あの噂の新入生君、二人とどんな関係なのかしら？」

「もしかして……」

上級生（ネクタイの色からして二年生）の女子生徒がヒソヒソと話しているのが聞こえた。俺は耳がいいから聞こえるんだよね。もしかして、って何だろ？

教室に着くなり先に着いていた蘭から聞かれた。

「ねえ志吹はなんで Roselia の二人と一緒に登校してたの？」

「ロゼ：リ、ア？何それ、ポ○モンか？」

「違うーバンド名の事！あたし達と同じガールズバンドだよ。知名度も学園内で高いんだってさ」

えっ、あの二人ってそうだったの!?

「蘭は知ってたんだ」

「まあね、同じ CIRCLE で練習してるし、先輩だったからね。あたし達にとってはあの人はライバルだから」

ライバル…いい響きじゃん！

「で、何で志吹はあの二人と知り合いだったの？」  
「それはだな……」

俺は蘭に昨日の出来事を話した。猫の事は言わなかったがな。勿論さつきまで一緒にいたのもね。

「何である時ガン無視したんだ？」

「後で聞こうと思ったから」

「そうすか……」

お昼に屋上でモカとつぐみに散々質問攻めにあつた、主に今朝の事でな、ひまりと巴は笑ってないで助けるよ！

そして放課後、俺は今屋上にいる。

皆、ひまり、巴、つぐみは部活やら何やらで蘭とモカは二人で先に帰ってしまったので残された俺は、屋上で笛の練習をしようと思った訳だった。

「理事長の雅さんには許可貰つたし、さて始めるかな」

♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~

演奏する事、数分……

「どーーーーん！」

「うわあ!?! な、な、な、な、な、な、何!?!」

突然後ろからどつかれて俺は笛を落としてしまった！頑丈な紐で括つてあるから地面には落ちなかつたが。

「あっはははー！」

後ろを見てみたら、青緑色のショートの女の人がお腹をかかえて笑っていた。ネクタイの色で二年生つてのはわかったけど。

「……！」

俺は先輩を睨み付けた！

「あははっー！ごめんねえー、なんか笛の音が屋上から聞こえてきたから、とてもるんっ！として見に行ったら、キミがいたから」

「……………」

何だ、るんっ、てのは？

「それで、あたしが近づいても全然気づかないからさ驚かせようとした、の……」

「……………」

「えっと、その……もしかして怒ってる？」

「当たり前です！人が演奏しておりますのにそれを邪魔されましたら誰だって怒るでしょう？」

「もう、冗談が通じないなあブツキーは」

「時と場合を考えてください、あとブツキーって何ですか？」

「キミの名前、神子志吹君でしょ？さっきリサちーに聞いたんだ」

「リサちー？、ああリサね……。で、先輩は誰なんです？」

「あつ、ゴメンね。あたしは氷川日菜<sup>ひかわひな</sup>、日菜って呼んでね。あたしもブツキーって呼ぶから」

「はあ……日菜先輩は「先輩はいらないよー」……日菜は俺を驚かせようとしに来たんですか？」

「最初はそうだったけどね、ねえブツキーその笛よく見せてくれる？」

俺は紐を首にかけていた笛を日菜に渡した。

「ふう〜ん、変わった形してるね、これって横笛なんだよね？」

「そうですけど、フルートみたいに……っ!!」

「♪♪♪♪♪♪」

日菜はさつきまで俺が吹いていた笛を演奏し始めた。

(間接キスしちゃってるよこの人は……)

などと思っていたが、この音色は……さつきまで俺がやってたのと同じ……まさかもう吹けるのか!?

そんな馬鹿な!俺はこれの音を出すのに丸一ヶ月はかかったんだゾ……!!

それなのに今日初めて笛をも触る人にいきなりこの音を出されるとは。

♪♪♪♪♪……

「ふう、ブツキーこれってとても吹きやすいね、るるるんっ!ってなっちゃった!」

日菜は笛を俺に返してきた。

「日菜って以前に笛を触った事はあるの?」

「ないよ、リコーダーならあるけど」

笛とリコーダーはベクトルが違いすぎる!なのにこの人は……。

「驚いたよ、この笛はまともな音を出すのは凄く難しいんだけどね」

「そうなの?結構簡単だったけど」

これが天才肌ってヤツか、まさか本当に実在するとはね。舞衣が聞



いたら発狂するんじゃないか？

「ねえ、連絡先交換しない？ブツキー、なんかるんっ！つてくるから」

「だからその、るんっ！つてなんなのよ…？」

「えー、るんっ！つてのはさあ、るんっ！だよ」

「意味わからん、まあ…はい、これ」

俺は自分のLIEのQRコードを見せた。

この日も大慌てでハチャメチャな日だったとき。

## 笛吹き少年は自宅に来訪者が来る

午後六時前になろうかという時間にて俺は考え事をしていた。日菜に少し複雑な思いを抱きながら帰路についた、が。

「はあ……」

初めて笛（しかも普通の一般人にはまずお目にかかれない龍笛）を俺と遜色ない音色を聞かされて、複雑な気持ちだ。

（もしあの時に日菜が居たら俺のこの呪いも簡単に解決してくれそうな気がするよ、でも日菜の事はまだ何も知らないから話すわけにもいかない）

「考えても仕方ないな……よし、今日は羽沢珈琲店に行くかな。ここ数日コーヒーも飲んでないから、どうも変な気分になってたんだな！」

俺は帰路の途中で引き返し、羽沢珈琲店に向かっていった。



〜少し前〜



「笛の音？…これって志吹くんだよね。でもどこから？」

生徒会の仕事を終えて帰ろうとしましたら、どこからか笛の音が聞こえました。

羽丘学園に吹奏楽部はありますし、今も練習の音が聞こえます。

ですけど、志吹くんのは吹奏楽部の人達とは違う音色を出しています、私もバンドやっていますからそれくらいの音の聞き分けは出来ま

す。蘭ちゃんや

モカちゃん程ではありませんが。

一度目を瞑って集中します、うん、屋上から聞こえるね。

私は屋上へ行くことにしました。近くで志吹くんの音を聞きたいから、あの音色は私の心も……

って何を思ってるの私は!?

校舎の三階の階段を登り、屋上へ続く階段を上がろうとした時に音が少し変わった様な気がしました。

そして屋上のドアが少し開いてたので、そこから顔を覗き込むと……

「(氷川、先輩?どうして志吹くんと一緒に……?それに何で志吹くんの笛を吹いているの!?)」

なんと二年生の氷川先輩が志吹くんの笛を持っていまして、演奏していたのです。

私はその光景をスマホのカメラに納めました。後で志吹くんに問いただしますから……

複雑な思いのまま私は急いでその場を後にして帰りました。

――

「オカエリナサイマセ、ツグミさん!」

「ただいま、イヴちゃん」

家に帰ったらイヴちゃんが出迎えてくれました。

「お父さん、今日は私も入るね」

「ん?あ、ああ……頼むよ」

今日はシフトは入ってませんが、さっきの事での気を紛らそうと思いました。

「マスター、今日のツグミさん変じゃナイデスカ?」

「そうだね…若宮君、後で聞いてきてくれるかい？」

「合点承知！」

つぐみは店の制服に着替えて出てきた、けど表情は少し暗めだ。

「はあ……」

やっぱりとても気になりますから、後で志吹くんに電話しようと思  
います。

志吹くん、今日ここで食べに来てくれるといいんですけど、そんな  
都合のいい事は起こりませんよね。

(カランコロン)

あつ、お客さんが来ました。

「いらっしや……」

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

「いらっしや……」

羽沢珈琲店のドアを開けたら目の前につぐみがいた。

「し、し、し…志吹くん!？」

「夜はここにしようと思…って、どうしたつぐみ?そんなに驚いて」  
「う、ううん!何でもないよ!せ、席に案内しゆるね!」

おいおい、声が裏返ってるし吃(ども)ってるぞ?

「どうやら彼が原因のようだね」

「そうみたいデスネ、ココハワタシに任せてクダサイ!」

「やはりつぐみは彼の事を…」

奥でマスターとイヴが何か話していたけど、小声過ぎて聞こえない

や。

「そ、それでは、ご注文が決まりでしたりや！  
お呼びください……うう」

どうしたんだらう、つぐみの様子が変わだ。俺もさつき日菜のせいで  
内心は穏やかではないのだけどね。

とりあえず、ブレンドとミートドリアを頼もうとしたらイヴがこっ  
ちに来た。

「シブキさん、チョツとよろしいデスカ？」

「いや、こっちも注文したいけど……で、何？」

ここはレディーファーストだな、蘭や巴が聞いたらキモいって言っ  
てくるのが容易に想像付くが。

「シブキさん、ツグミさんと何かアリマシタか？」

「……？・特に何も」

一体何の話だろうか？そもそも今日、つぐみとは話してない気がす  
る。さつきつぐみが俺を見て大慌てしたからそう感じたんかな？

「マジリアリーデスカ？」

「本当に本当だよ、つぐみに何かあったのか？」

「ノー、ワカリマセン！」

俺は盛大にずっこけた！イヴに注文を頼み、俺はコーヒーが来るま  
で考え事をしていた。

日菜の事、そしてあと一週間後には五月に入るから舞衣がこっちに  
やってくるという事だ。

「お………志………ん」

舞衣が来たら彼奴らを紹介するか？いや、でも…

「志吹くん！」

「うわっ!! つ、つぐみ!？」

すぐ後ろにつぐみが立っていた。やべえ、考え事してたせいで全く気がつかなかった。

「コーヒー、持ってきたんだけど……」

「あ、ああ……ありがとう、つぐみ」

つぐみからコーヒーを受けとると、勢いよく飲んだ。

「あ” つづー！」

舌を火傷した、慌てすぎだろ！

「だ、大丈夫？ 志吹くん……」

「大丈夫……ちよつと考え事してたから、さ」

「……………つー！」

何故かつぐみの表情が強張った、そして。

「考え事って、この事で？」

つぐみはスマホを俺に見せてきた、そこには……

日菜が俺の笛での吹いてる姿だった！

「つ、つぐみ!?!……そっか、見たんだな」

出来れば見て欲しくなかったな、俺の情けない姿をな。

「ううん、いいの。氷川先輩って一年生でも憧れてる人は多いし、そん

な先輩と志吹くんが一緒にいても私は気にしないよ」

「そっか、ありがとうつぐみ。あとこの事は誰にも言わないで欲しいんだけど」

「わかってるよ、氷川先輩との仲はまだ言えないんだよね？」

「えっ？」

「だってほら、今朝はRoseliaの二人と一緒に登校して色々学園中に噂になっちゃってるから、ね？」

「あのおつぐみさん？なんか勘違いしてませんか？俺が言いたいのは……」

俺はつぐみをなだめながら、屋上で日菜と会った時の事を話した。そしてその後で俺がどんな気持ちだったかのもの。

「と、言うわけなんだが……」

つぐみに情けない所見せちゃったな…恥ずかしい。

「そ、そうだったんだあ…」

「納得してくれたか？納得してくれたらコーヒーのおかわり頼みたいんだけど？」

「うん！待ってね、すぐ持ってくるから♪」

なんかやたら上機嫌になったつぐみだった。その後つぐみは頼んだドリアとコーヒーを一緒に持ってきてくれた。

「つぐみ、この事はみんなにはご内密にね？」

「わかったよ志吹くん、えへへ…」

「ツグミさん、すっかりゴキゲンになりましたね」

「……そうだね」

結局、つぐみに話しただけでいい考えが纏まらなかったな。まあ少

し気分が晴れただけでいいか。

—————

翌日の放課後、俺は蘭には先帰ると伝えて自宅へと走っていった。明日には舞衣がこっちに来て一緒に住むとか言い出しやがるから、準備とかしなくちゃいけないからな。

「つたく、あいつは自分が女の子つてのを忘れてないか？一人暮らしの男の家に一緒に住むとか神経イカれてるんかな？」

まあ昔からそんな男女な関係でもないし、お互いに意識もしてないからな。昔はな……！

だが今はお互いに高校生なんだからもつとこう、慎みを持ってな……。

家に着いたが使ってない二階でいいか、まずは掃除からだな。

(ピンポーン！)

二階の部屋の掃除が終わった頃、家のインターホンが鳴った。まさかもう来たのか？一日フライングしやがって！

俺は勢いよく玄関の扉を開けた！

「やつほく、しーくん」

「……ん、志吹」

そこにいたのは制服姿のモカと蘭、二人だった。



「何だ、モカと蘭か…てか何で俺の家知ってる？教えてはない筈だがな？」

「リサさんに教えて貰ったくバイト仲間のよしみで今日の昼にねく」

リサあ!!あとで怨みのLIE送ってやる、リサとの初LIEがそれとはな……

「で、お二人さんは何の用ですか？こっちは同居人が来るから部屋の掃除してたんですが」

「同居人!?!」

「その話、詳しく」

「話、聞かせて？」

「わかったから、二人とも落ち着けて…取りあえず上がってくれさ」

「はい、お邪魔しまーす」

「お邪魔します／＼」

二人にはリビングに案内し、来客用の茶菓子と麦茶を出したが。

「で、同居人ってどんな人なの？」

「ああ、関西にいた時にいた時の幼馴染だよ」

「その幼馴染って、女の人だよね？」

「まあ。そうだが」

「ちよ、幼馴染って言ったってさ、年頃の男女が一つ屋根の下で暮らすだなんて…」

「これはく由々しき事態だねえく蘭？」

まあ蘭の反応は当然だよな、俺だってそう思う。

「その、な…あいつは一度決めたら止まらない猪みたいな奴でな。多分一緒に住むとか考えてないんだろうと思う、だから数日したら出ていくよ、多分」

そんな事思っていないのは確実なんだが、男女ってのも考えてない

から出てはいかないだろうーな。

「……………で、志吹はその人の事、どう思ってるの？」

「別に？ただの幼馴染み、それ以上でもそれ以下でもないが？」

「そつかくよかったねー蘭ー」

「べつ、別に嬉しくはないよ…！それにモカだって…」

「……………、！」

「で、もうこの話はいいかな？二人共結局何しにウチに？」

「あー」

「何だったっけ？」

「おいコラ」

忘れるなや。

「思い出した、志吹の家に防音施設あるって前に言ってたじゃん？」

「ああ、あるけど」

「ちよつと見に行きたいんだけど、いいかな？」

「わかった、案内するけど驚くなよ？」

「??:」

俺は地下室に続く階段を開けて俺の後ろに蘭とモカも続いていった。

「足元気を付けてな、滑ったら一貫の終わりだからな」

くく自宅地下室くく

「ここがそうだが、どうだ感想は？」

「うん、広さも申し分ないし防音も大丈夫そう…うん、ここなら。ありがとう志吹、それで頼みがあるのだけど」

「大体想像つくが、言ってみ？」

「あたし達、CIRCLEの予約取れなかった時とかにさ、ここを練習場所として出来ないかな、って思ってたさ」

「随分と厚かましい頼みだな、ええ？蘭さんよ」

「このやろ、俺の地下施設を私物化する気か？」

「駄目、かな？」

「いいよ、但し！使用料は蘭の赤メツシユでどうだ？」

「はあっ!?志吹、アンタ何言ってるの！馬鹿なの!？」

「しーくん……鬼？」

「別に嫌ならいいぞ？その場合は諦める事になるがな」

我ながら悪魔だな、蘭にこーゆー事するのはとってもスッキリするんだよな！

「くっ……わかったよ志吹。この髪が使用料でいいんでしょ？」

そう言っつて蘭は赤メツシユを掴んだ。

「……待て待て待て、冗談だよ！タダでいいよ、貸してやるからさ、早まった真似するなよ全く……」

本気でその赤メツシユ抜くつもりだったのか？

「じゃあ明日から早速来るね。放課後、あたしはギターと音響持ってくるから」

「モカちゃんもギター持ってくるね」

「はあ、俺の家はスタジオ代わりとはな……」

とんだ来訪者だ。

## 笛吹き少年は我が道を行く幼馴染が来る（前編）

蘭とモカを地下室の使用を許可したところで……

「なあ二人ともメシまだだろ？ウチで食っていくか？」

せつかく来たんだ、俺の料理の腕を見せてやるか！

「……志吹って、料理できたの？」

「あれ、言ってなかったっけ？俺は和洋中なんでも作れるぞ……レシピさえあればな」

「じゃ〜モカちゃん、しーくん特製パンを食べたいです〜」

「モカ……パンが出来るまで何時間掛かると思ってるんだ？三時間くらいかかるんだゾ!?無理に決まってるだろーが！」

こいつはそうだった、パン馬鹿だったな。

「なんでもって言ったのに……しーくんの嘘つき〜」

モカが頬を膨れて抗議していた。だから無理なんだよ、時間が足りないから。

「時間が足りんわ、そーゆーのは前もって頼む…… ってかさ、やまぶきベーカリーより遥かに味が劣るんだがな。それでもいいのか？モカさんよ……」

手間もかかるし、あの味に到達するには何年もやらなきや無理だな、何か秘密なやり方があるんだろーしな。

「しーくんの作ったパンならモカちゃんはいいよ〜」

「わかったよ、取りあえず仕込みとかあるからまた今度な、んで蘭は何がリクエストあるか？」

「ん……何でもいいよ」

それが一番困るんだがな。

「わかったよ、俺のお任せコースでいいよな？」

二人には炒飯、ハンバーグと味噌汁を振る舞ったんだが、蘭のヤツがグリーンピースを俺に横流ししやがった！そんなに嫌いだったら最初から言えっつーのにな。

でも俺の料理は二人は好評だった、グリーンピースを除いてな。今度は皆にもごちそうしてくれと頼まれたから仕方ない、モ力を唸らせる美味しいパンを作ってやらなきゃな。

明日にひまり達の好物でも聞いておくか。

夜八時、二人が帰ったあと俺は舞衣の部屋（の予定）の掃除を再開していた。ああ、勿論使つてない二階だよ？

「布団とか余計に買ってきたのを置いておくか、あとは……明日舞衣が来てからでいいか」

まだ一部屋残ってるけど、そこは手を付けなくてもいいかな？これ以上の同居人が増える訳じゃなさそうだな。

「さて、風呂入って時間まで曲作りも再開するか！」

最近復帰したんだよな、蘭達 After glow の演奏を聞いてから俺のやる気が再燃したというか、彼奴らの曲とか作ってあげようとかは思つてはないけどな。

そういえば曲とか歌詞は誰が作ってるんだろうな？ 妥当な線でいえば蘭っばいが、明日昼休みとかに聞いてみるか。

「あたしだけど？」

翌日の昼休みに屋上で皆と飯食べてる時に聞いたら、まあ予想通りの結果だったな。

「蘭はね、自分の気持ちを歌詞にしてるからね。最初は皆で作ってたんだけど、蘭のが一番しっくりと来るといっつか、わたし達のいつも通りになったんだよね」

ひまりがそう言ったが、歌詞作りはそうなのか？俺は曲だけだからよくわからん。

「まだ一曲しか作ってないけどね。でももう二曲目の目処はついてるから、それが完成したらまた聞いてくれる？」

「それは勿論いいけど、CIRCLEでか？」

「うんにゃ、しーくんの家で御披露目だ〜」

やっぱりね。

「まあ確かにCIRCLEのスタジオ位は広いからなんとかかなりそうだがな」

「今日ギターと音響持ってくるから、よろしくね」

「はいよ」

「なあ蘭、モカ…ちよつといいか？二人はさ、志吹の家に行った事があるような口ぶりに聞こえるんだが？」

「昨日お邪魔したのだけ」

「防音設備の部屋があるって志吹が言ってたから」

「ふー…じゃあアタシもお邪魔するかな今日、ひまりとつぐはどうなんだ？」

「勿論わたしも行くよ！志吹くんの家ってどんなのか気になってたし！」

「わ、私も行く！し、志吹くんのお邪魔……」

「皆来るのね、わかった。放課後先に帰って準備しとくな、モカにパンを作らなきゃいかなからな……」

「おお〜！〜！しくん特製パン楽しみだ〜」

モカの目がキラキラしてるし、期待されても困るんだけどな。

「そーいや皆の好物って何だ？夜飯、俺がご馳走しようと思ってるな」

「お、いいのか志吹。じゃあアタシはラーメンで頼む」

「……巴さん、あんたもモカと同じような事言うんだな。今からじゃ麵くらいしか出来んよ？」

スープなんか一日じゃ無理だしな、作るのはな。

「そんな本格的なの作るつもりなのかよ志吹は」

「だからスープは市販のでもいいか？」

「それでいいよ、ごちそうになるぜ！」

うおっ、巴の顔がすげえ楽しみにしてそーな笑顔に。麵作りとパン作り、平行してやるのはキツイがなんとかやってみるか。

「で、ひまりとつぐみは何が好物が知りたいんだけど？」

「わたしは、甘いもの全般が好きなんですけど……ケーキとか」

「お、同じく……うちで作るケーキかなあ」

「要するに二人ともケーキね、わかったわかった。やってやろうじやねえかよ！〜三つ同時に作ってやんよ」

「志吹、まだあたしの言ってないんだけど？」

「もうなんですか蘭さん……これ以上の調理は無理すぎるんですけど、ごその鉄人料理人でも不可能な事だから」

「アレ抜きだったら炒飯でもいいから」

「蘭様の仰せのままに」

炒飯だったら比較的楽だ、時間もそんなにかからないしな。しかしグリーンピースそんなに嫌いなのか。

「パンに手打ち麵にケーキか……時間的に3・4時間ってどこか。ダツシュで材料買いにいったって、調理しないと遅くなりそうだな」

「がんばれ〜モカちゃんを唸らせる美味しいパンを期待してるよ〜」

「はいはい……期待されるとプレッシャーなんだけどなあ。前にも言っ

だが、やまぶきベーカリー並には無理だからな？過度な期待はしないでください」

全く：昼休みも終わり午後の授業中はずっと調理手順しか考えなくて、今日はなんの日か完全に忘れていた。

—————

放課後になり、蘭には材料買いにスーパーに行くと言えて先に帰った。蘭達も一度帰ってから来るそうだしな。

「さて、と」

スーパーからケーキの材料、麺に必要な物、パン作るのに必要な物を買って込んだのはよかったんだが。

「三つ作るスペースが足りんわ、ケーキは後回しでいいか」  
狭すぎてキッチンのスペースが足りなさすぎていた。

「まずは麺からだな。中力粉をフルイにかけて、と…」  
こうして俺の麺作りが始まった。

麺作りを始めて30分は過ぎただろうか、なんとか形になってきたので今度はパンの作成にかかった。

「まずは強力粉を…まずは生地作成から、何のパン作るか決めてないな、無難なあんパンとかクリームパンとかにするかな？」

(ピンポン)

パンの生地が形になってきたところで家のチャイムが鳴った。一



且中断して玄関に向かった。

「いらっしやーい……巴、それは何だ？」

「電子ドラムだけど、ドラムセットは流石に持てないからこれにした」

Afterglowのみんなが来たが、まさかの機材全員持ち込み。  
み。

「つぐみまで……」

「あはは……」

「まあともかく上がって上がって、今調理中だから手があまり離せないんだ」

「『お邪魔します！』」

「しまゝす」

「お、お、お……お邪魔します!!」

「つぐみ緊張しすぎ」

みんなをリビングまでこきせて、俺は調理を再開した。

「おお、しくん本格的にやってる〜」

「まだ全然出来てないけどな、てか二つの生地だけでわかるのか？どっちが麺でどっちがパンか」

「そりゃあアタシは楽勝だな、こんなのは」

「おー言ったな巴、じゃあ当ててみ？」

「モカちゃんもやる〜」

「こつちが麺だろ？」

「こつちがパンだね〜」

モカと巴、共に正解の生地を指差した。

「ふたりとも正解、流石やな」

「正解して当たり前だよなあ、モカ」

「だね〜もちろん」

「あれ？ケーキはどこにあるの？」

ひまりが訝しげに言ってきたが。

「スペースが足りないからケーキは後回し、時間もパンや麺に比べてかからないからな」

「ぶーぶー」

「はいはい、ぶーたれてないで練習場所に案内するから、ちよつと待ってろ」

俺はリビングの脇にある地下室の階段を開けて、みんなを地下室まで案内した。

「わあ……ここがそうなんだね！」

「確かに……ここなら騒音の心配もないな！練習にはもってこいだな」

「そうだね、広いし前に誰かが使った人もある感じに見えるよ」

「つぐみ、それってどういう事だ？」

「志吹くんがここに住む前の人が、ここで何かやっていたのかなって」

「……前に住んでた人は何やってたかは知らないから、もう聞きようがないけどね」

「志吹、あんたは早く戻ったほうがいいんじゃないの？」

「あ、やべー！じゃあ後は好きに使っていいからな！」

俺は地下室の階段を上がっていった。調理再開だ！

暫くして地下から僅かに音が聞こえる、耳がいい人じゃないと聞こえないだろうな。

麺もパンも生地はほぼ完成だ。あとは寝かせて熟成させてから麺とパンは手を加えていけばいい。

「遅れたけどあとはケーキだな」

さて、ケーキに使う薄力粉と……ってか全種類使うんだな！今気づいたわ。

ケーキは比較的簡単だから早く出来そうだ。

(ピンポーン)

ん？またチャイムが鳴ったが誰だろうか。今の時刻は6時丁度だし理事長の雅さんかな。そう思い玄関の扉を開けたら……

「しいくぶうきい……久しぶりね！」

そこにはトランクを持ったポニーテールの少女、美作舞衣みまぎかまがいた。

やばい……完全に忘れていた。蘭達と鉢合わせたら面倒な事になりそうだし、なんとかせねば。

「舞衣、数ヶ月振りか？」

「そうよ、それで志吹、わたしは新幹線とか乗って疲れたから上がらせて貰うわね」

「あ、ちよ……」

俺の了承も得ずに勝手に上がっていった舞衣、全く…相変わらず人の話も聞かないヤツめ！

「靴が5つあるけど、誰か来ているの？」

「友達が来ているんだがな」

「ふーん……」

「取りあえず今俺は友達に飯を作ってる途中なんだから、邪魔はするなよっ。」

「わかったわよ。で、わたしの部屋ってどこ？」

「階段上がって二つの空き部屋があるから、どっちか使って。掃除はしてあるから」

「わかったわ」

「志吹、お手洗いつてどこ？」

舞衣がリビングから出ようとした時、地下室から出てきた蘭とバツタリと会ってしまった！

「志吹、この人誰？」

また一混乱ありそうな日になりそうだ。

## 笛吹き少年は我が道を行く幼馴染が来る（後編）

俺は今日、この失態をどう切り抜けるか考えていた。猪のような性格をした幼馴染の舞衣とツンデレ赤メツシユの蘭。

今、リビングでその二人が立っている。そして二人して同じ事を言う。

「志吹、この人誰？」と。

この状況って何て言うんだろうか？

修羅場？いいや、違うかこの場合は。

「ねえ志吹、この人って前に言ってた幼馴染？」

蘭がそう言ってきたが、少し声が裏返ってるぞ？

「そっだよ」

一方、舞衣は。

「友達と言ってたのに女子だったんだ……！」

「別に言い方は間違ってると思うが？」

「なっ…!？」

舞衣はどういう訳か顔を赤くしていたが、無視して。

「後で説明してね志吹、お手洗いはどこ？」

「ああ忘れてた、そこを出て左の廊下の突き当たり」

「ありがとう」

蘭は舞衣に一礼してからリビングを出ていった。

「舞衣、取りあえず後でみんなを紹介するから荷物を二階に置いてきたらどうだ？」

「そうするわ、色々聞きたい事あるけどそれは後でたっぷり聞かせてもらおうからね？」

「ああ」

ヤバイな、こいつの説教じみたのはマジで聞きたくないんだが。で

もこつちも舞衣に言いたい事はあるけどな。

ケーキ作り途中なの忘れていたわ、クリーム作りを急がないとな！  
……これ、間に合うのか？まあいいか。

少しして蘭が戻ってきていたので、舞衣の事を紹介するから皆リビングに来てほしいと蘭に伝えた。

少し蘭の表情が険しかったが、気にしないでおこう。

――

「……………」

「……………」

リビングに皆を集めたのはいいが、この気まずい空気は何なんだ？  
俺のせいなのか？

「あく…舞衣から自己紹介したらどうだ？」

俺は舞衣に先にするように促した。

「そうね…んっ！」

一度咳払いをする舞衣。

「初めまして、皆さん。わたしは美作舞衣みまさかまいと申します。五月からこちらの高校に通う事になりますので、宜しく願いますね」

自己紹介をした舞衣だったが、こいつめ…猫かぶりだな？こんな畏まった挨拶は、あいつの本性を知ってたら鳥肌ものだな。

…ん？てか今こちらの高校に通うって言ったか？

「あたしは美竹蘭…こちらこそよろしく美作さん」

「舞衣でいいわよ、漢字的にも似てて間際らしいし。わたしも蘭って呼ぶから」

「う、うん」

おー蘭がたじろいでいるよ。

「青葉モカだよ、是非モカちゃんと呼びたまへ、まーちゃん」

「ま、まーちゃん!?!…わかったわよモカ」

やはりモカのあだ名のセンスはわからんよな。

「わたしは上原ひまり!よろしくね舞衣ちゃん」

「っ!宜しく、ひまり…。くっ!何なの大きさは…あんなの勝てる訳ないじゃない!」

舞衣も大概なんだがなあ、そのブラウスの上からでも目立つがひまりはそれ以上なんだよ。あと小声過ぎて聞こえてないのが幸いしたか、ひまりが聞こえたら泣くんじゃないか?

「次はアタシだな、宇田川巴だ。よろしくな舞衣」

「!!こちらこそよろしく、巴」

おや、何かシンパシーでも感じたのか?

「最後は私だね、初めまして羽沢つぐみといいます。舞衣ちゃん、よろしくね」

「つぐみ、ね…うん!こちらこそよろしく」

ん?つぐみはまた違う反応、いったいなんぞ?

ちなみに俺は今、パンの型を作っている。そしてケーキもラーメンもこれから大詰めにかかる所だしな。

「なあ、舞衣って志吹とはどんな関係なんだ?」

「うんうん、わたしもそれ聞きたかった!」

巴とひまり…何を期待してるか知らんが俺と舞衣はそういう関係とかはないからな?ただの幼馴染なだけだぞ。

「わたしと志吹は小学生からの幼馴染よ、でも今は……」

舞衣は調理してる俺のほうに向かつてきた。

「(志吹、あの事は話したの？呪いとか、職業とか)」

舞衣は俺にだけ聞こえるように話した。

「(呪いは話してないが、宮司やつてるのは話した。そこだけは話しても構わないが)」

「(わかったわ)」

「わたしと志吹は昔から神職としていたから、もう長い付き合いになるわね。あれこれももう10年くらい経ったかしら」

「まあ、大体そうだな」

そんなに経ったつけ？舞衣とは。

「神職って事は舞衣ちゃんは巫女さんだったの？」

「そうよ、志吹とは同じ神職の家系だったからね。わたしと志吹の二人で大人達に交じって祭りの行事とか神社とかの……」

おやおや舞衣さんよ、随分と大人しいではないですか。今日初日でのワガママ…もとい我が道を行くのは流石にしないか。

けどこちらの高校ってどこだろう？まさか雅さんが手を回す気じゃないだろうな。

そうこう考えてる内にパンはもう焼くだけ、電子オーブンでいいかな。あとはラーメンの生地を両手で伸ばして…叩いて、ねじって二つに折り…それを8回繰り返す!!

「すげえよ志吹、まさに職人芸じゃん！」

巴がべた褒めしてる、まあこれは正直本職の人でも結構出来る人は限られてるらしいな。

「ふう……」

あとはハサミで麺を切って長さを調節しつつ、と。これでラーメンはあとは茹でるだけだ…具は既に用意してあるし。

最後にケーキはスポンジの所にクリームを塗って、デコレーションして完成だ！

「くんくん…ケーキの甘い匂いと、これはパンの匂いだ〜。し〜く



ん、もうすぐ出来る〜?」

「ああ、もうすぐパンが出来上がるぞ、待つてろモカ」

「は〜い」

「あれってわたしの歓迎会じゃなかったのね、皆の歓迎会とはね。あーあ…わたしのはないのかなあ?」

舞衣がこれ見よがしに訴えてきた、わりい…忘れていたんだよ。

「明日やってやるよ、うどんでいいんだろ?」

「本当!?なら今日は我慢するね」

「舞衣はうどんが好きなのか?」

「当然よ、志吹の作るうどんは大変絶品なんだから!あの味は忘れられないわ!巴も明日食べに来たらどう?」

「いいのか!?!じゃあ行くぜ!」

まてまてまて、俺の許可は?

「ならあたしも行く。練習もあるから」

「蘭に同じく〜」

「わたし(私)も行く!!」

「志吹、いいでしょ?」

蘭と舞衣がハモって言いやがった。

「わかったよ…はあ」

また明日材料買いに行くか…疲れるなあ。てかこいつら息ピツタリすぎんじゃないね?

そう思いつつラーメン、パン、ケーキが完成した。パンは数個ずつしか出来ないが。

それぞれをテーブルの上に人数分置くと、なんともまあアンバランスな事。特にケーキがな…

「わあ…」

ひまりとつぐみは驚きをみせて。

「おおー!」

モカと巴は歓喜して。

「……」

蘭と舞衣は何も言わなかった。

「さ、食べようか。パンはまだ来るけどな」

俺がそう言うのと。

「」「」「いただきます！」「」「」「」

俺含め七人同時に手を合わせて言った。

俺の三点セットを食べ終わった後、もう夜八時を回っていたので帰らせた。蘭達を途中まで送っていったが舞衣も一緒に付いてきていた。

「志吹、また明日来るからね」

ギターケースを背負ってる蘭はなんか凜々しかったな。



「舞衣ちゃんかあ…あれが志吹くんの幼馴染、凄く綺麗な人だったなあ」

志吹くんの回りにはとても魅力的な人達でいっぱいだよ。私みたいな普通じゃ目立たないよね……。

「ケーキ、美味しかったし志吹くんって何であんなに違う種類のを同時に作れるとか凄いよ、私もやってみようかな？ 今日これからお父さ

んに聞いてみよう」

はあ…

ため息しか出ないよ…

どうしよう…

――

「ラーメン旨かったなースープは市販なのは勿体無かったけどな、今度は志吹にスープ作りも頼んでみるか!」

「何か舞衣とはいい友達になれそうだよ、志吹もあんな幼馴染がいてアタシ達と似てる、かもな」

それはそうと舞衣は志吹の事どう思ってるのかな? 明日にでも聞いておくか。

「あつ、お姉ちゃんお帰りー!」

「おー、あこただいま」

「ねえお姉ちゃん、電子ドラム知らない?」

「あつ、志吹の家に忘れてきちゃったよ…ごめんあこ」

「志吹って、高等部新入生の噂になってる人だよね?」

「おーよく知ってるな、あこ」

「だって、中等部でも噂になってるんだもん。なんというか、瀬田薫先輩の弟子とかって」

「何だよそれ、でも確かにな。アタシも前に女っぽい顔立ちって言うってたし」

「あこも少し気になってるよ、一度会ってみたいな…」

「そうなのか、じゃあ近々会わせてあげるよ」

「うん! お願いねお姉ちゃん」

あここと志吹って絶対に気が合いそうだな。

――

「……ん」

「蘭、どうしたの？」

今、蘭とモカはそれぞれの家で通話中だ。

「モカ、あのさ…舞衣の事、どう思う？」

「ん…しーくん的にはただの幼馴染なだけだと思うけど」

「けど？」

「何かさ…あの二人ってさ、二人だけの秘密かなんかありそうなんだよね」

二人だけで話してた時にあたし達に聞こえないように話してたのが気になったんだよね。声は聞こえなかったし、口の動きで何となくね。でも確信がないんだよね。

呪い、だなんて。

「やっぱりよくわからないよ、あの人は」

「ん…モカちゃん的にはまーちゃんはいいい人だと思うよ」

「うん、そうだ…よね」

「そくだよ」

蘭の人見知りにも困ったもだね。

「そういえばあたしの頼んでおいた炒飯忘れてるじゃん！明日学校で注文してやる」

あたしはベットのの上からずっこけるように盛大に落ちた。

「だ、大丈夫モカ？」

誰のせいだと？でもあたしもパンをまた頼もうつと。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

「で、志吹…説明して貰おうかしら？」

俺は今リビングで舞衣と二人の説明会が始まった。

「落ち着けて舞衣、これはだな…」

バン!!

「これが落ち着いていられるって？無理よそんなの！何なのあの子達は！」

うわ…舞衣の本性が出始めたよ。やっぱりな…このまま終わる筈がないとは思ったよ。

「知り合ってまだ一ヶ月も立ってないのに女子を家に上げるだなんて、何考えてるの!?!」

「志吹！聞いているの？」

「聞いているけどさ、元々向こうから来たんだゾ？蘭とモカがな」

「やっぱりあの二人…：…だったら地下室で何やってたの？まさか志吹…！」

「違うからな？バンドの練習だったさ、地下室は防音にもなってるからな、彼奴らバンドやってるんだよ。Afterglowってバンド名で」

「アフター、グロウ？聞いた事ないわね。Roseliaなら知っているけど」

うわ、これ蘭が聞いたら激怒しそうだな。

「それは兎も角、神職って話しちやってもいいの？まさか笛の事も言っちゃたの？」

「笛は言ったけど、どの道これはバレるって。俺学校でも練習してらからさ」

「でもな、神職の事や笛の事言っても特に何も無かったんだぞ？向こうじゃ考えられないだろう？」

「本当につ!?凄いわね…関東の人達は…」

「でも、流石に今俺の呪いの事は今話せないな、これはな」

「そうね…これは話したら駄目ね、向こうでもタブーだったしね」

「神職関連の大人達はみんな知ってるけどな、同世代では舞衣だけだな」

「うん…」

「まさかとは思うけど、俺を心配してこっちに来てくれたのか？」

「……っ!!」

「どうした、まさか……?」

「違うわよ!」

夜九時に近所迷惑を考えずに大きな声で舞衣は叫んだ。

耳を押さえながら思った、俺はこの暴走幼馴染と一緒に住むのか？  
てか無理やろこれ。

## 笛吹き少年はチョココロネ同盟を再結成する

蘭達が帰った後に舞衣からキツイ咎めを受けてしまった。だが俺は知っている、あいつは俺の監視役として送り込んだんだと。あの忌々しい叔父の差し金だと俺は見ているがな。

自分の娘ではなくわざわざ不適格な舞衣を送る必要があったのか？そこがわからん。そのうちどこことなく理由を聞き出してやるかな、話術はあまり得意ではないが舞衣なら問題ないだろう。

「どちらにせよ、俺にとってはマイナスか……はあく」  
リビングで後片付け中に考え事のため息が出てしまった。ちなみに舞衣は今風呂に入っている。

あいつに羞恥心はあるのか知らんが、覗かないで！とか一切無かったな、しかも寝間着と下着を持ちながら堂々と俺の前を通っていったしな。

本当に舞衣と暮らすとなあ、苦労しかねえわな。



「……………」

舞衣はその長い髪をシャワーに浴びせながら思っていた。

(志吹ってば寝間着と下着をさりげなく見せたのにどうして無反応なのよ！わたしってそんなに魅力がないの!?)

シャワーを止め、舞衣はそのまま湯船に浸かった。

(やっぱりあの五人、ひまりだったわね。あれに勝てる気がしないわ) 舞衣は自分の胸に手をやって思った、ひまり以外は勝ってるけど。早くなんとかしなきゃいけない。それにしても志吹は五人の事どう思ってるんだろうか？後で聞いてみようとしたけれど、明日によっと。

それにわたしは志吹の叔父様から監視を任されたのだから、決して志吹にはバレないようにと。

でも状況報告は私の娘に頼むって、あの娘は少し苦手なのよね…メールだけにすればいいわね。

長湯するとのぼせちゃうし、もう出よう。

▽▽▽▽▽▽▽▽

「おう、舞衣やっと出たか。随分と長かったから心配したぞ。やっぱり疲れていたのか？」

体力とかは普通の女の子と変わらないからな、性格だけがぶっ飛んでるだけで。

「そうみたいね、もう少ししたらわたしは寝るわね。明日は転校先の書類に目を通しておく必要があるから」

まだ九時なのに、よっぼどなんだな。

「そうしとけ、枕が変わっても寝られるか？」

「その点は大丈夫よ、ちゃんと枕は持ってきてあるから、ベッドが違うのが問題だふあけど」

大あくびする舞衣、端から見たら超はしたねえ。

「もう寝ろ。湯冷めは問題なさそうだしな」

「そうする、お休み志吹…」

「おやすみ」

舞衣は二階に上がっていった。

「さて、明日用のうどんつゆの下味が終わったら曲作り再開するか！」

……それにしても舞衣は一つ屋根の下で、俺と暮らす事には何も意識していないのか？



翌朝 六時に俺は起きて朝食と弁当（舞衣の分も）作りながら俺は考えていた。

「まだ遥さんから連絡こないし、凄く心配なんだけどな。いつになったら羽丘神社の本堂に入れるんやら」

そう思っていたら、リビングに舞衣がやってきた。

「おはよう志吹」

「ああ、おはよう舞衣。朝食はいるか？」

「いる」

「じゃ、少し待ってろ」

本来俺の分の舞衣にあげて、俺のはまた作るか。

「ねえ志吹、わたし来月にこっちの学校に転入するって言ってたよね」

「蘭たちに自己紹介する時に言ってたな、それがどうしたんだ？」

「お姉ちゃんが理事長やってるのって羽丘学園だよね？」

「誰だよお姉ちゃんって…ああ！雅さんの事か。そうだけど？」

グシャ！

舞衣は持っていた書類を握りしめた。

「嵌められた…!!」

「一体どうしたんだよ」

「これ見てよ！」

クシャクシャになった書類を俺に見せてきた。

「見辛…：…なにになに？花咲川女子学園だっけ!？」

え、まさか学校を間違えたのかよ？

「……………」

こりや傑作だ！こいつと同じ学校だなんて絶対に嫌だからな。中学の時はもう相当酷かったし。

「なあ舞衣、そもそもどうして」

「聞かないで！何も言わないで！お願いだから……………」

涙目になってるよそんなに悔しかったのか？いや、違うか。

「わかったよ、何も聞かないから。じゃあ俺はもう学校に行く準備するが舞衣はどうするんだ？」

「そこから辺をブラブラしてる。花咲川までの道のりも覚えておく必要があるから。……………だけど納得いかない。」

「出掛けるなら家の鍵のスペア渡すから失くすなよ。それとちゃんと戸締まりもしろよな？あと道に迷ったら……………」

俺と同じ轍を踏ませたくないしな。こいつに戸締まりとか出来るか不安だけど、ここに泥棒なんか入られても…巴の電子ドラムくらいしかないな。

「わかってるわよ！もう時間ないんじゃないの？」

「おつとやべえな、さっさと着替えていかなきゃな。これは少し走らなきゃ遅刻しそうだ」

俺は家を出て走りながら学校へ向かった。

「なあ志吹、舞衣とはどんな関係なんだ？」

昼休み屋上でいつものように皆と昼飯を食っている時に巴が俺に聞いてきた。

「特にないが、只の幼馴染なだけ。特別な感情など一切ない。舞衣も同じだろうと思う」

「そ、そっか」

巴の奴、何が言いたかったんだ？それと蘭とつぐみは俺に向かってジト目しない。

「モカ、あの二人を何とかしてくれ」

「鈍感すぎるしーくんがいけないと思いますよ」

助けてくれなかった。あと鈍感ってどうゆう事だ？

あと会話に一切参加してなかったひまりは何故か缶コーヒーを飲んでいた、しかもブラックで。

放課後、今日もバンド練しに家に来るから蘭に家の鍵を渡して俺は舞衣を探しにいった。

一応説明もしたらつぐみは苦笑いしてたな、やっぱり俺を重ねたか。

「舞衣、どこら辺にいる？」

「街外れの所よ、やまぶきベーカリーって店がある…」

LINE通話してたら突然切れた、まさか充電切れか!?全く、俺とどこまで同じなんだよ！

「やまぶきベーカリーか、ついでに買うかな」

そろそろやまぶきベーカリーが見えてくる頃だが。

「志吹っ！」

店の近くで見覚えのあるツインテ姿が見えた。

「ふう…舞衣か、全く」

羽丘からずつと走ったから少し疲れた。それにしても本当にこの商店街は広すぎるな。迷うのもわかる気がするよ。

「本当にこの街は広すぎよ！花咲川の道のりはわかったけど」

だよなあ、わかるぜ。俺もつぐみに街案内してもらっても全部は無理だったしな。

「まあお疲れさん、そのやまぶきベーカリーでパン買って帰ろうぜ」「うん」

俺と舞衣はやまぶきベーカリーに入っっていた。

「いらっしやいませー、って神子君?」

「えっ!?!」

店に入ったらそこには見覚えのある顔が二人。

「沙綾とりみか。りみは学校帰りか?」

二人とも制服姿だ。

「神子君だっ学校帰りでしょ?それと後ろの人は?」

「ああ、こいつは……」

「りみじゃない、久し振りね!」

「舞衣ちゃんこそ、久し振りだよ!」

「と、まあ向こうに住んでた時の幼馴染だ。……てか、りみとは知り合  
いだったのかよ!?!」

マジかよ、俺は知らなかったゾ?

「あら、だってわたし達は」

「チョココロネ同盟のメンバーなんだから」

小規模のな、あと俺はりみに謝らなきゃな。

「……………りみ!俺、チョココロネ同盟の事を忘れていて本当にゴメ  
ン!」

本当に忘れていたよ、こつちでは色々あったからな。両親とか俺自  
身とかな。

「いいよ志吹君、舞衣ちゃんもいるから。また前みたいになろうよ」

「そうよ志吹、チョココロネ同盟を再結成するわよ!」

「はあ!?!ここでか?店に迷惑だろうが」

「私は別に構わないけど、チョココロネ同盟って何よ……！」

沙綾が口にして手をやって笑いやがった。

「馬鹿にされたものだな、りみ、舞衣」

「ふん！わからない者には一生わからないわ！」

「沙綾ちゃん、ひどいよ」

「取り合えず、チョココロネ買おうな」

「あっ……」

俺、舞衣、りみの三人でチョココロネ一つずつ買って、店の広いスペースでそのチョココロネを手に持ち、それを上空で。

「俺たち三人は」

「チョココロネ同盟を」

「ここに結成します」

チョココロネを三人交差させた。それは騎士がやる誓いさながらのアレな？

こうして舞衣とりみの再開とチョココロネ同盟の再結成となったわけだった。

## 笛吹き少年は幼馴染との関係を知らない

りみとチョココロネ同盟を再結成した後、りみと別れ俺と舞衣はやまぶきベーカリーを後にした。

「それにしても、りみって中学の頃と殆ど変わってないわね」

「そうか？てか来月から同じ学校なんだしき、もう少し話していてもよかつたんじゃないか？」

「そうしたいのは山々だけど、今この状況だとそうもいかないから無理よ」

ああそうだったな、こいつは今絶賛迷子中だったな。おまけに充電切れまで起こしてな。（盛大なブーメラン）

「んじや、ここから真つ直ぐ家まで帰るぞ。蘭達に鍵渡しであるから玄関は開いてるだろうけど」

蘭とモカはそのまま来るって言ってたな、学校にギターケースあったし。

おっと、うどんの粉を買わないとな。忘れるところだったがこっちにあつたかな…うどん用のヤツ。

近くのスーパーにいったらあつたわ  
すげえな東京！

—————

家につくなり俺は地下に蘭達がいるのを確認してから、うどん作りに入った。蘭には昨日出さなかつた炒飯を頼まれたし。（勿論グリーンピース抜きで）

モカはパンと言ってきたが、時間がねえよ！全く、学習能力がないのかよ。

巴もひまりもいたが、つぐみは店があるから今日はいないらしい。舞衣が俺と入れ替わるように地下に入っていた。あいつらに用

でもあるのだろうか？

そんな事考えながら俺はうどんの粉を捏ねていた。

一時間後

少し過程をすつとばしたが、俺特製手打ちうどんの完成だ。うん、うどんつゆの味も問題ないな。

炒飯も出来たし、夜7時だから飯時だな。

俺は地下に降りていった。

「お、まだやってるのか」

「ん、志吹？」

地下室のドア開けたら蘭が手前にいたからかすぐに反応した。だけれど奥にいたモカと巴とひまりは全く気づいてない。

「おーい、うどん出来たから飯にしようぜー」

「うどんかー、アタシはラーメンがよかったんだけどなー」

「うっせ巴よ、たまにはうどんでも食ってろ。うどん好きに心変わりさせてやんよ」

「それは未来永劫ないなー」

まあそうだな、普通はないな。

「モカちゃんはパンが〜」

「……」

学習能力0のモカはシカトしてと。

「あれ？ひまりと舞衣はどこにいった？」

「ひまりと舞衣ならさつき二階に上がってたよ？なんかひまりに個人的な話があるとかで」

「いつの間？」

全く気がつかなかった、まあうどん作りに集中すればな。

「まあともかく一旦休憩にして飯にしようぜ、俺はひまりと舞衣を呼んでくるから」

「あつ、志吹ちよつと待…」

「そう言い、俺は地下室を出て舞衣の部屋に行こうとしたが巴が止めに入った。」

「何だよ巴」

「いや、そのさ…今は行ってはいけないと思うんだ」

「どうしてだ？」

「…あのな志吹、ひまりと舞衣が二人で部屋に入ったって事はな、つまりさ」

「つまり、何だ？」

巴は何が言いたいのかさっぱりわからん、顔も赤くなってるし。

「うううう…モカ、バトンタッチ!!」

「ともちん、それはないよ」

「志吹、あんたデリカシーってのあるの？」

「わからないから聞いているんだがな。デリカシーもクソもないだろう」

「……はあ」

「もういいよ。しーくんちよつと耳貸して」

「?、わかったよ」

俺はモカに近づいて耳だけモカに向けた。

「えつとね、ひーちゃんとかまーちゃんは胸のサイズとか服とかをね、お互いに聞いているんだと思うよ?」

モカが俺の耳元に小声で言った。

「それだけ?」

「それだけって、もー!しーくんはデリカシーが無さすぎるよ」

「そう言われてもなあ」

「サイテー」

蘭と巴からも罵倒されるし、結局電話で呼び出した。



――  
蘭達にうどんをご馳走した後に、結構な時間になってたのでそのまま帰らせた。しかし巴はやっぱりラーメンが一番と揺るぎないモカはパンが食べたいだの散々だった。ひまりは何かフツ―に食ってたな、少し顔が赤かったが。

蘭は悪くないと言われる始末。少しは舞衣を見習えよ、すげー旨そうに食べてたのにさ。

ああ、蘭は炒飯も食べてたよ。旨そうに食べてたから蘭にはうどんは合わなかったか。

地下室を少し掃除していた。巴は今度はちゃんと忘れずに帰って帰ったんだな電子ドラム。忘れたら俺がちよつとやろうと思ったがな。

ガチャ

俺がドラムを叩く真似をしていたら地下の扉が開いた。

「舞衣、どうした?」

「志吹に大事な話があるの」

いつにもなく舞衣が真剣な表情だ、俺はそのまま舞衣の言葉を待った。

「Afterglowの五人、志吹が好きなのは誰なのか答えてくれる?」

「は?」

何言ってるんのコイツは？

「は？じゃない！（誰かが）好きなんでしょ？」

「あのなあ、舞衣。俺にそんな感情はない、第一まだ知り合って1ヶ月なんだぞ？」

「それに俺の身体はどうなってるか舞衣は知ってるだろ？だから今は必要ない感情だよ」

本当に、この呪いさえなければ今頃は…！

「っ！そうね志吹。今のは忘れてね」

「ああ、もう変な事は聞くなよな」

「ええ、わたしはお風呂入ってくるね」

そう言い舞衣は地下室から出ていった。

「この呪いは、何も悪いことだけではないんだけどな。この不思議な旋律も呪いのおかげで出来るのだから、決してな。だけど俺の両親は自分達の身体を顧みずに色々…」

俺も同じ轍を踏むのだろうか？



く舞衣の部屋での出来事く

「舞衣ちゃん、わたしと同じ悩みを抱えていたんだあ」

「そうなのよひまり！」

二人は悩みがあつた。胸の急成長と体重の増加。

「わたしは体重はまだなんとかなるけどね、一応巫女だから舞をやる上で体は動かすしダイエットにも最適なのよ」

「わたしもテニスやるんだけど、それ以上に…」

「食べっちゃうのよね!!」

ひまりと舞衣はガッツリと握手した。

「わたしとひまりって本当によく似てるわね、胸は勝てないけど」

舞衣は自分の胸を見ながら、ひまりの胸を掴んで揉んでいた。

「やっ、ちよ…舞衣ちゃん、やめ…」

「本当に大きいわね、羨ましいような羨ましくないような。でも舞の振り付けに邪魔にさえならない程度でもいいのかも。ひまりは大変ね」

わたしはひまりの胸を揉むのをやめた。

「だったら揉まないでよ！、っもう！」

その後志吹から電話があつて二人とも部屋から出た。

くひまりの部屋く

志吹くんの家で晩御飯を食べて、いい時間になったからその後解散して家に帰っていた。

「もう舞衣ちゃんは！モカと同類なのかしら！」

モカも偶にわたしの胸を揉んだりするしセクハラ仲間で気が合うんじゃないの？

「でも…わたしの悩みもわかってるし、悪い人じゃないんだけどね」

ふと携帯に通知が来た。

「舞衣ちゃんから？」

『志吹は好きな人はいないよ、好きな人いるって話したら機嫌悪くなったから。今はやめたほうがいいわ』

『そうなんだ、この事は蘭やモカ、つぐに話したほうがいいかな？』

悩みの前に志吹くんが好きな人いないか聞いてくれると頼んどいたけど、よく舞衣ちゃん了承したよね。

「舞衣ちゃんは志吹くんの事、なんとも思っていないのかなあ…？」

三人…蘭、モカ、つぐは明らかに志吹くんが好きがあるよね。蘭とつぐはわかりやすいよ、モカは勘だけだ。

「とりあえず三人に伝えなきゃね、送信つと」

その後お風呂入ってる間に返信がスパムメール並に来ていたのは内緒。

—————

翌日の放課後、俺は練習がてらまた屋上で笛を吹いていた。  
「あの人が来ませんように…」

♪—————

「あら、志吹じゃないの」  
「うお!？」

屋上の物陰に人がいたよ!全く気がつかなかった。

「友希那だったのか、よかった…」

日菜だったら逃げようかと思ったし。

「何がよかったのか知らないけど、私の邪魔はしないでくれるかしら?」

「邪魔?」

友希那の手にノートがあった。ここで勉強するつもりなのかな?

「新しい曲の作詞を考えているの、だからここでは…」

「曲、作詞…?友希那はRoseliaの作詞作曲担当なの?」

「そうよ、言わなかったかしら?」

「言っていないし聞いてもないよ、まあ俺もRoseliaつての自体も知らなかったし。Afterglowしか知らなかったからね」

Afterglowって名前出したら友希那の顔が険しくなった。

「志吹、貴方美竹さん達とは知り合いなの?」

「まあね、演奏も聞いたし」

あの時は泣いたなあ、感動したし。そういえばあれ舞衣にも聞かせ

たら泣くんじやないか？

「志吹」

そんな事考えていたら友希那が俺のほぼゼロ距離まで近づいてきた。近い近い：吐息がかかっているし端からみたらこれはヤバいんじゃないか？

「その内に私達 R o s e l i a の演奏を聞かせてあげるわ、美竹さんとどれ程の違いがあるか判らせてあげるわ」

何この人、なんでそんなに蘭と対抗意識あるの？そう言えば蘭もライバルとか言ってたような気が…。

「何でそんなに蘭と張り合うのか知らないが、聞かせてもらえるのなら」

蘭達とはまた違う音楽スタイルなんだろうな、楽しみだ。

「その代わり、にゃん：猫をまた呼び集めてもいいかしら、もうあれから日が経ったでしょ？」

取引を持ちかけるとはな、なんて先輩だ。

「わかったよ、場所はまた羽丘神社で。それとも今から行きますか？」

あ、作詞するとか言ってたっけ。

「ええ！今から行きましょう！」

おい！作詞はどうした！

その後、羽丘神社に友希那と俺、二人で行って猫笛の旋律で猫を呼び出していた。

猫が集まった時の友希那の顔は、とてもじゃないが表現出来ないくらい崩れていた。まあ本人が幸せそうならいいかと思った。

夜六時前にリサがやってきて、大きな声を出してしまったせいで猫がまた逃げてしまった訳で。

「ゴメン友希那ー！！」

「あ、あ、あ……」

涙目になってしまった友希那であった。

笛吹き少年は両親の想いを夢で知る

「あ、あ、あ……」

「友希那あ、本当にゴメンよ」

友希那の頼みで羽丘神社にて猫を呼び出していたら、リサの呼ぶ声（大音量で）で猫達は一斉に逃げ出してしまった。今の友希那は放心した顔で更に涙目になっている。

しゃーない、心を落ち着かせるアレやりますかね。俺はもう一度笛を吹き始めた。

♪ー♪♪ー

「っ!?!」

よし、二人にちゃんと効果あったみたいだな。

「……ふう」

「志吹、今何か花畑みたいのが見えたのだけど?」

「友希那も? 実はアタシもそうなんだ」

うん、成功だ。今の旋律は心を落ち着かせる為にそう見えるからな。

「落ち着いた? 今のはね、野の春と言ってリラックスに最適な曲なんだ。気分はどうだ友希那?」

「そうね、もう大丈夫よ。ありがとう志吹」

友希那はさつきまでの放心した顔ではなく、スッキリとした顔で俺の方に向いていた。リサはキョトンとしてるけどな。

「そういえばリサはどうしてここがわかったの?」

「志吹と一緒に学校を出たのを日菜が教えてくれたから、てつきりCIRCLEに行くのかなと思っただけど、友希那の事だからまた猫と戯れるじゃないかなって」

大正解、流石リサは友希那の行動原理をわかってらっしゃる。

「それで友希那、作詞のほうはもう大丈夫なの？」

「……家でやるわ、帰るわよりサ」

誤魔化しやがったな。

「約束通り私達Roseliaの演奏を聞かせてあげるから、練習の時にいつでもいらつしやい」

「え、どゆこと？…志吹と何か約束したの？友希那く〜！」

リサは友希那を追っていった。そして俺はしばらくの間、座り込んでいた。

「くつ、キチイな」

やっぱり猫笛ともう一つのをやるのはとても神経使うな。疲労感が凄く感じる。この旋律とか出来る様になったのは呪いのおかげだ。

体全身に神経を尖らせるしな、何とも不思議な感覚だよ。何て言うかな、ゲームに例えるとMPとか気力とか使ってる感じなんだろうな。

俺にどれだけその数値があるのかわからないが、たった二回笛の旋律やっただけでこんなに疲れるからまだまだだろう。修行が足りないのかもしれない。

……もし、この力を日菜に与えたらと思うとな。いやこんな事考えるのは止そう。

でもあの人なら……

「疲れた体で帰るよりは一度つぐみの店に行こう」

日菜の事で悩むと羽沢珈琲店に行くのはどうしてだろう？前とは状況が全然違うが。

……実は羽丘神社にもう一人いたのを俺は気づいていなかった。

「志吹、あんた分かってるの？そんな事を続けてたらその体はもう



……」

黒髪ツインテールの影も神社を後にした。



「……………」

「どうしたの友希那？」

神社を後にした友希那とリサ。だけど友希那の様子がおかしい。リサは聞いてみた。

「志吹って本当に変わってるわ。どうして笛であんな事が出来るのかしらね」

「うん、アタシもそれは思ってたよ。猫笛だってそうだし、さっきの花畑とか完全にトリツクの域を超えてるよね？」

そう、不思議と思っただけで本人に訪ねる気はしなかった。まさかこれもその、志吹の笛のせいなのかしら。

「そうね、今度彼に聞いてみようかしら。でもその前に私達 Rose lia の演奏を見せないとね」

「アタシは別にいいけど紗夜と隣子が許してくれるかなあ？絶対に反対されそうだけど」

「説得してみせるわ、リサも手伝って頂戴」

「はい」

全く、どうして友希那はそこまで志吹に聞かせたいんかな？大方モカ達 Afterglow 絡みだと思っけど。

――

(カララン)

「いらつしやいませー、つて志吹くん？」

店に入るなりつぐみが目の前にいた。

「おおつぐみか、今日はコーヒーを飲みたくなつたから来たよ」

「う、うんーじゃ、またいつものカウンター席でいいね」

「ありがと、何だか指定席になつてきたなここ」

店の手前で厨房入り口前のカウンター席、俺が初めてここに来た時に座つた所だ。思えばあの時つぐみが充電器を貸してくれなければどうなつてたのやら。

ブレンドコーヒーとサンドイッチを頼むと、すぐにやつてきた。お客さんはいるが大体注文が来てるようだった。

年配の夫婦とかあのブロンドヘアと水色の髪をした二人組はしみと同じ花咲川女子学園の人達かな？

「志吹くんがこんな時間に来るなんて、何かあつたの？」

つぐみが俺の側に寄つてきていた。確かにもう放課後から数時間は経つてはいたがな。

「つぐみの家のコーヒー飲みたくなつただけだよ」

日菜の事で悩んでるとは言えんよな。

「そうなの？だつたら嬉しいな…えへへ」

トレイで口元を隠す仕草がまた似合っている、やっぱり来てよかった。

「つぐみ、二番卓の会計を頼むよ」

「はい。志吹くん、また後でね」

つぐみはレジへと向かつて行つた。

「……………ふう」

俺はブレンドコーヒーを飲みながらサンドイッチを頬張り、瞬く間に食べ終わってしまった。

俺はどうしたらいいんだろうか？羽丘神社の神主さんは一向に戻

る気配もないし、遙さんからの連絡もない。

やっぱり俺も奥州サミットと…やらに行くべき、だったのかなと思っ………て。

………

………

ここは、どこなんだ？

霧がかかって殆ど見えない

俺は回りを見渡してみたが、辺り一面全て霧に覆われている。つまり今の俺は霧に包まれている状態だ。

そんな中、何か話し声が聞こえてきた。

『お前まで巻き込んですまない。私一人で済む問題では無くなつてしまった上に、こんな呪いなどここで終わりにしたかったのだが…』

えっ!?この声は父さん、なのか？

『いいのよあなた。心配なのは志吹よ。あの子はこれから一人になつてしまうのよ。それだけが心残りで』

母さんもそこにいるのか!?これは夢、なのか？

くっ…体が動かせない!!

『そうだな、私達夫婦での最後の抵抗で志吹に降りかかる呪いは出来る限り軽くしないと。その事を志吹に聞かせてやりたかったが、それも叶わぬようだ』

今聞けたよ！

そっか…そうだったんだね。父さん母さんのお陰で俺は今の生活が出来てるのか。軽くならなければどうなっていたのかは今に気にする暇はない。

『もう時間がない、行こうか』

『ええ、あなた』

……ありがとう父さん、母さん。俺は絶対に負けない！例え呪いを解く方法が見つからなくても俺は諦めたりはしないから！

だから見えて!!俺は、俺は…

「……吹……！」

ん……？

「志吹くん、起きてよ!!」

「うわっ!？」

どうやらいつの間にか俺は寝ていたらしい。

夢だったにしては両親が俺に伝える為の夢だったんじゃないかと思ってしまう。それに……

「志吹くん、疲れてたんだね。って!その顔はどうしたの?」

うん、わかってるよ。また俺は泣いてるんだよね。駄目だなあ両親の事となるとどうも俺は涙もろくなってしまうって。

「悪い、また情けない所を見せちゃったな……」

「わ、私は気にしてないから大丈夫だよ。はい、ハンカチ」

つぐみは花柄のハンカチを俺に渡してきた。優しいなやっぱりつぐみは。

「ありがとうつぐみ。これは洗って返すよ」

「ううん、それは志吹くんにあげるよ」

花柄のハンカチを男が使ってもな、でもつぐみの為に大切に使いま  
すかな。

「わかった、大事に使うよ」

スマホの時計を見たらもう八時を過ぎていた。つぐみは閉店時間  
だったけど気を使ってくれたらしい。流石にこれ以上は延ばせな  
かったのかわからないけど、起こしてくれた事には本当に感謝しな  
きやな。

「色々お世話になっちゃったな、また来るね」

会計を済ませ、俺は自宅へと向かっていった。  
その足取りは軽やかだったのはなんとも不思議な感覚だ。やっぱり羽沢珈琲店は癒しの場だな。



「つぐみ、ちよつといいかい？」

志吹君が店を出てから店の清掃をしている時にお父さんに話しかけられました。

「どうしたのお父さん？」

「あの少年、神子君だったかな？彼、随分魘うなされていたから大丈夫なのか？」

「魘うなされていた？」

「父さん、母さんって言っていたんだ。後はハッキリとは聞き取れなかったが」

「お父さん、志吹くんは両親がもう…」

そう、志吹くんの両親は事故で失くなってるとるんだよ。だから両親の夢を見て泣いちゃったのかな？

「そっか、悪い事を聞いちゃったね」

「（実はまだあるけどともつぐみには話せないな。今度彼が店に来た時に聞いてみよう。呪いだなんて聞き間違いたどいいんだけど）」



自宅に帰るなり舞衣に遅いなら連絡しなさい！と怒られたのは秘密だ。だったら舞衣からも連絡しろやとは口に出さなかつたがな。

夏休みになったら一度実家に帰るかな。

## 笛吹き少年は天才の悩みを聞く

五月に入った

今日から舞衣は花咲川女子学園に編入するんだが。

「なあ舞衣」

「何よ」

俺と舞衣は朝食を食べていたが、気になる事があったので聞いてみた。

「花咲川までの道は覚えたのか？」

前に一度下見に行ったらが迷ったらしいな。まあ俺も人の事言えないがな。

「……地図アプリを使うわ、駅までは問題ないし」

「おいおい大丈夫なのかよ？すつげえ不安になってきたわ」

「仕方ないでしょう！まだここに来て日が浅いんだから。それに志吹も案内してくれなかったし」

「俺も花咲川までの道は知らん。最悪りみか沙綾と一緒に登校したらどうだ？」

「沙綾って誰よ？」

「そつか舞衣は知らなかったか。やまぶきベーカリーの娘さんで、チヨココロネの誓いの時にレジやってた人だよ」

「あー、あの笑ってた人ね」

「もしかしたら同じクラスになるかもしれないな」

「そうね。色々聞きたい事もあるから、りみにもその人にもね」

結局俺の提案はスルーされるし、一体何を聞くのやら。

俺と舞衣、お互いに制服に着替えて家を出ていた。そして羽丘と花咲川はここからは反対だし。



「じゃあ舞衣、俺はこっちだからな。遅刻するんじゃないぞ？」  
「っ！わかつてるわよ！……少し不安だけど」

本当に心配だ。俺もついていったほうがよかったが、それだと俺が確実に遅刻するからな。地図アプリもあるしなんとかなるだろう。

「それじゃ志吹、また夕方ね」

「ああ」

俺と舞衣は互いに反対方向へと歩いていった。

「制服について何か言いなさいよ！この鈍感男……」

俺が羽丘の教室に着くなり舞衣からL I O Eが来ていた。

『同じ制服の人に付いていけば大丈夫みたい、わたしって天才ね！』

何が天才だよ!?!お前は天災だろーがよ！天才ってのは日菜みたいなのを言うんだよ。

「おはよう志吹。何朝からしかめっ面してるの？」

「蘭か、おはよ…舞衣からだよ今日から花咲川に編入するからな。全く面倒な奴め」

「ふうん」

そう言っつて蘭は自分の席に座っていった。隣だけだな。

「なあ蘭、一つ聞きたいんだけど」

「なに？」

「Roseliaの湊友希那先輩と何か因縁でもあんの？」

昨日友希那がやけに蘭を意識していたからな。もしかしたら蘭も

そうなんじゃないかなって。

「……………あたしが一方的にライバル視してるだけだよ」

「そうなんだ」

「うん。あの人には負けたくないから」

何だよ二人ともライバル同士になってるやんけ。一方的じゃないよ蘭。そんな事言ったら否定しそうだからやめとく。Roseliaの演奏を聞くのが本当に楽しみになってきたよ。

――

「つぐみ、昨日はお世話になったね」

いつもの昼休みの屋上で、俺は昨日つぐみのお礼も兼ねてな。

「私は大した事はしてないよ、志吹くん」

つぐみは回りを見ていた。俺たち六人しかいないのを確認すると。

「昨日お父さんが言ってたけど、両親の夢を見てたの？寝言で言ってたから」

「「!？」」

俺と蘭、そしてモカが驚いた。巴とひまりは二人で話しているせいか驚いていなかったけど、会話が止まって俺のほうを向いてきた。

「しーくん……………」

「志吹……………」

蘭とモカは悲しそうな顔で俺を見てるし。

「……………」

ひまりも巴も同じ顔して俺を見るなよ。

「……………つぐみの言う通り両親の夢を見たよ。かなりリアルにな。夢で俺に伝える最後のメッセージだったよ」

流石に内容までは教える気はない。まだ、な。

「店の中で寝ちやって悪いなつぐみ。…つぐみっ!？」

「ご、ごめんね志吹ぐん”っ!うっ、ひっぐ…」

つぐみが泣いていた。

「どうしたんだよつぐみ。ほら、これで涙を拭いて」

俺は昨日つぐみに貰った花柄のハンカチをつぐみに渡した。

「う”、ん、ぐすん…」

「いや志吹、何でハンカチ持つてるの。しかも明らかに女物だし」

「蘭く、つぐが昨日しーくんにあげたんじゃないかなく?」

「そうなるよなあ。ってどうしたんだひまり?」

「つぐがツグってるね」

ツグってるってなんぞや?てかお前らつぐみが泣いてるのに冷たすぎやしないか!?

「泣き止んだかつぐみ？」

あれから数分経った。つぐみは何とか泣き止んだようだけど目がまだまだ赤いな。昼休み終わるまで大丈夫かな。

「うう…本当に迷惑かけてごめんね志吹くん。それと無神経に両親の事も言っちゃって」

ああ、泣いてた理由はそれか。

「迷惑なんて思っていないし、両親の事はもう大丈夫だよ。ははっ！つぐみは本当に優しいな」

俺は思わずつぐみの頭を撫でた。

「~~~~!!」

「!?!」

あれ？目だけじゃなく顔まで赤くなっているんだが、一体どうしたんだろうか？

「ふんっ！」「え~~~~い！」

「あだっ!!」

頭を蘭に叩かれ、背中をモカに叩かれた。しかも同時に。

「何するんだよお前ら、いてて…」

「志吹の馬鹿」

「しーくんのバカ~~~~」

何だつてんだよ？

「巴、この空気どうしよっか？」

「アタシは少し離れて食べるよ、ひまりも来るか？」

「そうする」

ひまりと巴は弁当持つて離れていくし、何だよもう。  
てか前にもこんな事あったよな!?

――

放課後、あいつらはバンドの練習があるからと先に帰ったから俺は学校の屋上でまた笛の練習をするかな。

「友希那がいませんように……」

俺は屋上に向かっていったが途中、天文部の扉が開いた。

「あ、ブッキー発見！」

「げっ……」

そこから出てきたのは日菜だった！ある意味友希那より会いたくない人だった。

「むく！あたしに向かってその態度は酷くない？」

日菜は頬を膨らませてむくれている。だつて苦手なんだもんこの人は……だけど色々聞きたいこともあるから。

「うくと日菜、この後時間ありますか？」

とりあえず話してみよう。呪いとかはまだ伏せるけどね、これを言つて日菜に押し付けたら俺は最低な屑野郎と親族……いや人類全員から蔑まれるな。そうなら多分俺は生きてはいないだろう。

「あるけど、なにになに!?ブッキーって意外と積極的ー？」

「どう積極的かは知りませんが、俺は日菜と話がしたいだけですよ」

「うーくん、いいね！るんってきたよ！」

だからそのるんつとは何なんだよ!？」

「じゃブツキー、話するならあそこに行こつ！」

「どこですか?…はあ、全くもうこの人は人の気も知らないで」

俺の手を掴んで引つ張らないでくれますかな?結構恥ずかしいんだけど。ほら、回りの生徒達が俺と日菜を見ているから。

「あの人は一年生?氷川さんとはどんな関係なのかしら?」

「大変な目に合わないといいわね、学校を辞めたりしそう」

「そうそう、去年は随分とね……」

「氷川さんはわからないね?本当にいつもいつも突拍子な事ばかりして」

………気持ちにはわからなくもないが、少し辛辣じゃないのか?日菜だつてき……

俺の手を掴んでいた日菜は少し力が弱くなった。そして表情も暗く…はなつてかった。

「日菜……」

「あはは、ごめんねブツキー」

日菜は完全に俺の手を離れた。少しモヤモヤした気持ちで学校を出て日菜に付いていった。

「ついたよ」

「ここって、ファーストフード店じゃん！話するのに向いてるかなあ？」

「まあまあ気にしない！入ろ入ろ」

日菜に押し出されるように店の中に入った。そして注文して二人掛けのテーブルに座ると日菜が口を開いた。

「で、ブツキー。話ってなあに？」

日菜のトレイには大量のポテトがあったが食べながら聞いてきた。

「んつとね……まずはどこから話そうかな？」

夕方とはいっても不思議と人はそんなにいなかった。ある意味絶好な環境だ、席も奥のほうだし。

「まず最初なんだけど、日菜は自分が天才と思ってる？」

最初だけど核心を突く。俺が一番聞きたかったからな。

「わかんない」

「……そうだろうね」

意外ではない、両親を亡くしてから叔父の家で暮らしていた時に従姉妹にあたる子がいてな。

何でも出来て俺よりも笛の技術、演奏もな！だから俺はあいつの事は嫌いだつた。日菜を見ると思い出してしまっただよ……！

俺はあの時も日菜と同じ質問したら同じ答えが返ってきたからな、想定内だよ。

「あたしは簡単に出来てどうしてみんなは簡単に出来ないっていつも思うの。ブツキーもそう思うでしょ？」

「日菜、俺は日菜みたいに天才じゃない。それ故に凡人の、考え、苦勞がわからないんじゃないのか？」

あいつも同じだったから、きつと日菜もそうだろうと思う。だからそれを理解してくれる人がいれば…。

「……やっぱりブツキーもみんなと同じ事を言うんだ？」

「まあね、だけど俺が凡人だろうと努力は怠る気はしないし、ましては挫けたりもしない！絶対にだ」

実はあの時挫けかけたのは内緒だ、とても日菜には言えないな。

「少し昔話をするけど、いいかな？」

「うん、いいよ」

「中学の時に日菜と同じような感覚で天才肌の奴がいたよ。俺よりも笛の技術も全て上で恵まれた環境でな」

そう、あいつだ！舞衣も嫌っていたのかは知らないが。

「ねえブツキーはその人の事は嫌いなのか？」

「嫌いですよ。あいつから逃げるようにこっちの学校に来たのも理由のひとつですから」

向こうはどう思ってるかは知らないが。

「そっかあ…あたしと同じ悩みを持つてる人はいたんだね」

「日菜も大切な人との確執でもあったような口ぶりですね。まあ俺もそいつとは昔は仲良かったですよ」

「やっぱりそうなんだよね。ブツキーとあたし、どこまで同じなんだかなあ」

日菜は少し涙目になりながらもポテトを食べている。俺はセットメニュー頼んだのにまだ一口もつけていないから、俺もさっさと食べよう。

「ごめん日菜、凄く傷つける事を聞いちゃって」



悪いとは思ってるよ。でも俺はそんなつもりで聞いた訳じゃない。いつかは帰ってあいつと歩み寄ろうと思ってるから。

熊野にいた木こりのおじさんも言っていた。

『逃げずに立ち向かえ』と。あのおじさん元気にしてるかなあ？

「違うの、ブツキーは悪くないよ。悪いのは無神経なあたしだから」

「ねえブツキー、聞いてくれる？あたしの悩み」

「こちらの話を聞いてくれましたから、それは当然聞きますよ」

本当はこつちが色々話すんだったけど、日菜にもあるんだな。

「あたしね、おねーちゃんがいるんだ。双子だから学年は同じだけど学校は違うんだ」

双子でも学校が違うとは珍しいな。

「おねーちゃんとあたしもね昔は仲がよかったの」

「まるで今は、あつ…」

「うん、ブツキーが思った通りだよ。今は悪いって訳じゃないんだけど、何かね…お互いによそよそしい感じなんだ」

「……………」

俺とは少し違うな、こつちは本格的に嫌ってるから。

「あたし、ギターやってるんだ。Pastel\*Palettesってアイドルバンドは知ってる？」

「すみません、全く知りませんです」

「ブツキーは関西だから知らないかー。それでね、おねーちゃんはギターやってるからあたしも真似をして初めてみてね。すぐに弾けるようになっておねーちゃんに見せたら凄く驚いて、怖い顔してね。そこからおねーちゃんとギクシャクし始めたの」

「……………」

やべえ、俺、日菜のお姉さんの気持ちがすっげえわかるわ。

「日菜、俺と初めてあった時の事は覚えてますか？」

「んー？屋上でブツキーを驚かせた時の事だよね？」  
「そうです、その時に日菜は俺の笛を吹きましたよね」

間接キスは黙っておくか。

「あー、あの笛って持ち方がるんっ！ってきたの。ブツキーの見よう見まねで」

「実はあの音色を出すように出来ますのは、最初は無理ですから。ましてや初めて笛をやる人なら尚更不可能です」

「んー？でも、適当にやったら出来たけど」

適当だったのかよ!!

「俺は1ヶ月はかかりました。それでも早すぎるくらいなんですけどね。ですが日菜はすぐに出来ました、これは何を意味するかわかりますか？」

「……………わかんない」

「お姉さんは沢山練習してギターを弾けるようになりました。日菜はどれだけやったかは分かりませんが、少なくともお姉さんよりは遥かに短いでしょう？」

「それを目の前で見せられましたらどんな気持ちになりますか想像してみてください」

長い時間をかけて積み上げてきたものを、妹が少しやっただけで追いつかれてしまう気持ちは、ね。天才と凡人…努力だけでは到底天才に敵わないって思ってしまう。

「俺もあの時はそんな気持ちになりましたよ。一日で立ち直りましたがね」

そんな訳ない、今でもまだ引きずってるさ。

「おねーちゃんの気持ち、あたしは全然わかってなかったんだ……今

まであたしは酷い事をおねーちゃんにしてたんだ」

「ひ、日菜!?!」

なんと、日菜の目から涙が出てきていた! 今日二人目だよ!! つぐみ  
といい、日菜まで!?

「ブツキーごめんね……!?!」

「日菜……」

俺はこの時どうすればよかったのだろうか? しかしそう考える間  
もなく。

「ちよつと貴方!! 日菜に何をしたの!?!」

「えっ?」

後ろから声が聞こえていたから向いてみると、日菜と同じ髪色で口  
ングヘアーの人がいた。

あの制服は花咲川女子学園だ。どことなく日菜と顔が似てるな…  
でも今、日菜って言ったよな?!

「お、おねーちゃん?」

少し目を赤くしていた日菜がそう言った。

笛吹き少年は同じ悩みの人を見つける？

さて、今この状況を説明しよう。

放課後、日菜に連れられてファーストフード店にいる訳だが、そこで俺は日菜に天才は凡人の気持ちかわかるのか？と質問したら、わからないと答えた。

そこから話はお互いの悩みを聞き、そして日菜はお姉さんに酷い事をしたという自覚をしたらしいのだがなんと！日菜は泣き出してしまったのだった。

そして俺にとっても日菜にとっても、多分一番最悪なタイミングで会いたくなさそうな人に会ってしまった。

「貴方…!!」一体日菜に何をしたのですか!？」

日菜に似た顔立ちの人が俺と日菜の席にやってきていた。そのトレイには山盛りポテトが積まれていたが、それを脇の席に置いて、俺に向かって叫んでいた。

「お、おねーちゃん？」

「やっぱりか……」

噂というか、話題にしたら影は指すって本当だな。てかなんで俺に對して怒ってるの!？」

「ごめんブッキー、おねーちゃん。あたし帰る!!」

「えっ?」

日菜は席を立つとダッシュして、お姉さんが止める間もなく店から出ていった。

「速……」

呆気に取られていたけど、目の前にいた人は外から俺の方に向き直

り。

「日菜に何をしたのか説明して貰いますね？」

大量のポテトが乗ってるトレイをさつきまで日菜が置いてあった所に置いた。

おっと日菜の食べたのはトレイごとお姉さんが片付けたのは言うまでもない。そして俺は姉妹入れ替わりで対面にいる訳だが…

「その前に自己紹介しませんか？お互いに名前が知らないと話しづらいでしょうから」

「……確かにそうですね」

さつきまでの憎悪の目はないが、まだ警戒してる感じだ。

「初めまして、私は日菜の双子の姉で氷川紗夜ひかわさよといいます。花咲川女子学園の二年生です」

なんだろう、なんか日菜とは正反対つてのはわかるな。優等生で規律とか厳しくしてそうな感じだ。絶対に風紀委員やつてるだろ？

「どうかしましたか？次は貴方が自己紹介する番ですよ」

「これは失礼しました」

俺は一度咳払いをして。

「こちらこそ初めまして、俺は神子志吹かみこしぶきです。日菜、さんと同じ羽丘学園の一年生です。ですので先輩後輩になりますね」

一応お姉さんの手前、さん付けしないとイケないな。

「お互い自己紹介も終わった事ですし、今日これまでのいきさつを説明しますね。少し長いですが、氷川先輩は構いませんか？」

「ええ、構いません。話してください」

「わかりました。まずは日菜さんとは先月の中旬くらいに……」

俺は日菜と初めて会った屋上から、全てのいきさつを話した。勿論俺の笛の事をもね、簡単に吹けたと話したら氷川先輩は俺と同じ反応をしたよ。この人はやっぱり、俺と同じコンプレックスを抱いている

！間違いない。そしてそれを本人に自覚ないからと伝えたら日菜は泣き出したと。

「そして、今に至るわけです」

「そうだったのですか…」

日菜の事については全て話したけど氷川先輩はひどく落ち込んだ表情だった。

「あの！先程は申し訳ありませんでした！私はてっきり神子さんが日菜を泣かせてるとばかり。早とちりしてしまつて本当にごめんなさい！」

氷川先輩は席を立つて俺に頭を下げてきた。

「そ、そんな頭を上げてください氷川先輩。誰からも見てもあれは俺が日菜を泣かせてると思えますから！それに…」

「そ、それに何でしょう？」

「まだ話していない事があるんです。これは日菜に話したのですけど」

俺は日菜に似た天才肌の人がいる事を話した。そして逃げてきた事も。

「それを日菜に言ったのですか。でも日菜は理解はしなかったのですよね？」

「ええ、最初は理解してませんでした。ですから分かりやすく日菜と氷川先輩を例えてやってみました。そして俺の心情も、そしたら日菜は少し考え込みまして泣き出してしまいましたという話です」

話終わって俺は無性にやるせない気分になった。

なんだよ！なんだよ！この姉妹になんで俺は心の内を話してるのだろうか？

この人に俺はシンパシーを感じたからか？だったら何で日菜に話したんだ!?舞衣にだって話してもないのに！

「……………!!」

何か俺の中から崩れ落ちた。それは何だろうか？

「か、神子さん!?!泣いているのですか?」

氷川先輩がまた何を言っているのかわからない。

俺は今日初めて会った人の前で涙なんて流す筈が…

「あ……」

流していた。

「す、すみません氷川先輩!これは、その……」

「日菜の事でしょう?わかります。私も悔しくて神子さんと同じ気持ちになりましたから。日菜に敵わない、努力では絶対に天才には勝てない、と何度も何度も思いました。私はギターを始めましたのは日菜への対抗心でした」

今度は氷川先輩が自分の事を話し始めた。何故だろうか?

「それなのに私を真似するように日菜もギターを始めたんです。そして私がRoseliaに入ると日菜もPastel\*Palettesに入ったのです」

「ああ、すみません。私はバンドやっています。Roseliaはご存じですか?」

知ってるも何も友希那とリサがいるバンドやろ?

「ええ、知っています。さつき日菜にもPastel\*Palettesの事を聞かれましたから」

何か俺の知り合いバンド入ってるの多くない!?

そしてもう涙出る気持ちも無くなったよ。

「日菜だけにはギターで負けたくないと思っておりまして……!ですが、先程神子さんが言った通りでしたら日菜は私と」

「仲を戻したいと、思ってるかもしれないですけどそれは今はまだ難しいと思います。日菜の気持ち、氷川先輩の気持ちはまだ整理もついてはいないのでしょう?」

「俺はもう向こうとは修復不可能まで来てしまいました。氷川先輩は

俺と同じ道を歩みたいですか？」

「いいえ、日菜とこれから話してみようと思います。ですから神子さんも…」

「さっき言ったのをお忘れですか？俺と詩音はもう完全に修復不可能って言いましたよね？」

詩音はどう思ってるかは知らないが俺は絶対に許す気はしない。彼奴ら父娘は一生な。

「私には諦めるなど言いたいのですか？」

「ええ、少なくとも氷川先輩が仲直りをしたいのでありましたらきつと大丈夫だと思います」

俺は笑顔で言った。どうしてだろう、氷川先輩を見ると俺は……

「それでは話も済んだ事ですし、俺は失礼しますね氷川先輩」

トレイの上に乗ってるセットメニューは結局手付かずだった。勿体ないなあと思いつながらトレイを持って席を立った。

「あのっ！」

「はい？」

帰ろうとする俺を氷川先輩が呼び止める。

「その…連絡先、交換しませんか？神子さんと私はなんか、境遇が似てまして、お互いに情報交換といえますか、近況報告といえますか…」  
「わかりました、氷川先輩」

氷川先輩とLIEを交換した。

「あと私の事、名前で呼んでいただけませんか？さっきから日菜って呼んでましたので」

「えっと、紗夜先輩でいいですか？」

「先輩もいららないです」

「ん、じゃあ紗夜さん。今日はありがとうございました。俺も少し



スッキリしましたから！」

「いえ、こちらこそ日菜の事を聞けましてありがとうございます。これからもよろしくお願いします」

ん？これからも？

俺はファーストフード店を後にして自宅へと帰っていった。少しどころじゃない気分は、俺も逃げずに立ち向かわなければな！

日菜からゴメンねのスタンプが来たので、こっちはありがたいのスタンプを送った。勿論<sup>””</sup>？って返ってきたけど、その答えはすぐわかると思うよ。

それと自宅に帰ると、舞衣から花咲川の愚痴やらを聞かされたがその内容はまたの機会にな。

—————

翌日になり、羽丘学園で昼休みが終わる前に教室で蘭と話をしていたら。

「志吹、GWの予定ってあるの？」

「ないよ？舞衣は一度実家に帰るらしいが」

明日からGWで五連休だ。といっても俺は実家には帰る気はしないし、音楽作りに精を出すかな？

「ふーん、じゃあまた地下で練習してもいい？CIRCLEはGW

中は全部埋まっちゃってたから」

「毎日来るつもりなのか？」

「こいつら凶々しくないかな。」

「流石に毎日は無理だよ、あたしも家の事情があるしみんなもそうでしょう」

「じゃあいつ来るか決めてくれ、じゃないと飯とか用意できんぞ？」

「別にいらないけど、志吹がいいなら」

「何だよそれ、俺が頼み込んでるみたいに聞こえるが？」

蘭が一番凶々しいか？モカだと思ってたが。

「冗談だよ、あたしはね志吹の作るご飯は美味しいから好きだよ」

「えっ？」

「あ…ち、違うから!!志吹じゃなくて、ご飯のほうだからね!!!全然そんなんじゃないからね!」

蘭の奴一体何だ？すごい慌てっぷりだが。

「よくわからないが俺の作った飯が美味しいのは嬉しいよ。家で練習する日の予定、早く頼むな。気合い入れて作るから」

「う、うん…わかった。後でみんなに話しておくよ」

何だかんだでこいつらAfterglowという時が一番楽しいな。俺の悩み、使命も忘れていくくらいな。

俺は心の中で蘭にありがとう、つと言った。

明日からGWかあ、少し楽しみだ。

## 笛吹き少年はGWに入った

時間は少し戻って五月一日の夜。

「志吹聞いてくれる？花咲川での出来事なんだけど」  
いきなりなんだよ舞衣のやつは。

「編入初日にもう問題おこしたか、流石は近畿一の問題児。その内に  
関東一の称号も得られるぞ？」

中学時代にも散々やらかしてるからな。そういえばりみが関東の  
中学に転校してから荒れ始めたんだっけ？

「違うわよ!!……違うないけど」

「ほら、言ったとおりだ。大方……」

「う~~~~!余計な詮索は結構よ!!」

このままじゃ埒が明かないから黙ってることにする。

「実はね。わたしの編入したクラスにりみがいたのはよかったけど、  
あの失礼なパン屋の店員もいたのよ!」

沙綾だな。あ、これは口喧嘩するパターンや。

「あの誓いの事を笑ったと文句いったら、寧ろ羨ましいって言うてく  
れたのよ。どういう訳かクラスの皆と全員友達になったわ。りみと  
同じ中学だったのが大きいわねきつと」

「へえ、りみに感謝しなきゃな」

りみには舞衣の事ありがたうって送っておこう。

「でも随分変わった人もいたわ、戸山さんはわたしの事キラキラとか  
言うてくるし、花園さんは意味不明でとぼけてるし、北沢さんは元気  
いっぱい明るすぎて羨ましいし」

戸山さんは前にりみが言ってたな。あとは知らない人達だが。

「あとハーフの人がいたわね、確か若宮さんといったかしら？」

「ああイヴか、同じクラスだったんだ」

舞衣にはイヴはつぐみの店でバイトしてる人と説明したが、何か言いたそうな顔をしている。

「わたしのクラスの話はこれで全部かしら。志吹の予想は外れたわね！」

「マジか」

こいつが問題を起こさなかった、だと？でもおかしいぞ。

「二ついいか？舞衣のクラスのは問題なかったんだよな？つまり、舞衣クラスの事以外って事は、他のクラスで何かやらかしたな？」

「……………」

「やっぱりか」

違うクラスでやらかしたのか、だろーと思ったよ！

「それで、どうなんだ舞衣さんよ？」

「弦巻……………」

「弦巻？」

んー？どこかで聞いたことあるな。

「弦巻こころは恐ろしいわ。人の話は聞かないし、思った事をすぐに行動するし、護衛の黒服がいるんだもの」

「……………」

おい、お前にも刺さるからな？ブーメランがな。だけど黒服？

「つまり、筋金入りのお嬢様か？」

「それだったらまだマシよ。お嬢様はお嬢様でもあの子は少し…いやかなり思考回路がぶつとんでるから!!」

舞衣の表情が青ざめて心なしか震えている。おいおい舞衣ってもっと、こう胆力があるんじゃないのか？

「何があつたのか話してくれよ」

「嫌、よ。志吹にだけは絶対に話したくない！」

「そこまで言っておいてそれはないだろ!？」

「話したくないから話さないのよ!!志吹にだけは特に。わかつてよ志吹!!」

舞衣は涙まで流して俺に訴えるように叫んだ。マジかよ。あの舞衣がこんなになるなんて…一体何をされたんだろうか？気になるな。

その後は話を強制終了させられ、舞衣は部屋に戻っていった。俺も明日の準備をして日付変わる時まで勉強してるかな。

五月二日の放課後、一度家に帰ってから着替えて俺は駅近くのゲムセンターに一人でいた。

理由はただひとつ。太鼓の○人がやりたくなつたからだ！

「よし…やるか。ってここは2曲200円かあ…向こうじゃ100円3曲があつたのに」

まあいいや、小銭を入れて曲を選んで、と。  
「まずはカンを取り戻すにはこれだな。夏祭り！基本だよなやっぱ。  
難易度は難しいでいこう」

俺は画面に出た譜面をタイミングよくテンポを体に染み込ませる  
ようにバチで太鼓を叩き始めた。

「わざわざ……」

二曲目が終わった時、回りにはギャラリーが出来ていた。目隠しで  
難易度オニをやるとうなるのか？

「すごいなあの人、目隠しでフルコンかよ」

「プロなのかな？」

「きつとゲーセンの達人なんだよ。ほら、格ゲーの縄張り争いが昔東  
京地区でもあったでしょ？それと同じだよ」

なんだか言われもない事が聞こえてくるが無視だ無視。何にせよ  
もう用はない、帰るか。

「あのっ!!」

店を出た時に声をかけられた。振り向いてみるとそこには羽丘の  
中等部の制服を着ていて紫髪のツインテールをしてる女の子がいた。  
「ん、何か用ですか？」

「突然ですみません！先程の太鼓の○人は凄く、凄く………こう、バ  
ビューン!!ってしてましたね！」

「バ、バビューン!？」

何だよこの嬢ちゃんは。まるで日菜みたいに主語がハッキリしないな。

「ごめん、よく意味がわからないんだけど？」

「あつ…その、あこよりも上手すぎますと言いますか、その……」

「ああ、つまりこう言いたいのかな。目隠しパフォーマンスでフルコンしていたからバビューンなのね？」

「そうですそうです！何だかお姉ちゃんみたいでカッコよかったですよ!!」

「ありがとう、カッコいいなんて言われたのは初めてだよ、お嬢ちゃん」

「お嬢ちゃんじゃないですよ、あこです！」

「これは失礼、あこちゃん。で、一ついいかな？」

「何ですか？」

「さつきから隠れて見ている人はどなたかな？」

俺は物陰に隠れている人影を指差した。

「ひっ!？」

悲鳴に近い声だったけど小さかったのか、そのあこちゃんには聞こえてなかったようだ。

「んー？あーりんりんだー!」

「あ、あこちゃん……」

物陰から人が出てきた。黒髪ロングで花咲川の制服を着ていた。

「どうしたのりんりん？」

「あ、あの…あこちゃんが知らない女の人と話してたから気になって思わず隠れちゃったの」

「……あの、俺は男なんですが？」

「えっ!？」

またか、私服は春物とはいえパーカーとシャツだし、ズボンもスキニーみたいだからな、しかも男女兼用のだから間違えられるのも無理はない……のか？

「あこ、てつきり女性かと思ってた。髪も長いし顔も綺麗だったから」「うん……わたしも……そうだとばかり……」

はあくくくまたこの容姿がかあ!こつちでも間違えられるのはもうやだな。着替えたのは失敗だったかな?髪は切るわけにはいかなしいなあ。

「もしかしてギャラリーが多く出来た理由って……」

「きつと……女性だからだと……思います」

「ですよー!」

次から制服でいこう。男物だしな、いつゲーセンにいくかわかんねーけど。

「で、話はもういいのかな?あこちゃん」

「はい!呼び止めてすみませんでした!」

「大丈夫だよ、それじゃあね。あこちゃん、りんりんさん」

俺は二人から反対を向いて歩き始めて帰路についた。





「あ、名前聞きそびれちゃった」

「そう…だね。それにしても…綺麗な人だったね」

「男の人なのにどうして髪が長いのかなあ。結んでないとりんりんと同じくらいだよね？」

「うん…それと、少しだけ…ど関西弁みたいにな訛りがあった…かな？」

「ふーん」

あとあこちゃんには言えなかったけど。首から何か見えたのは何だろう？首飾りみたいにも見えたけど、あれって…笛、かな？

「また会えるといいな。りんりんはどう思う？」

「近くに住んでるなら…羽丘だと、思うよあこちゃん」

「あこちゃんの羽丘学園高等部は…今年共学になったから、もしかしたら…そこの生徒、かも？」

「そうかも！あとでお姉ちゃんに聞いてみよつと！」

---

### 五月三日の朝

「じゃあわたしもう行くね。GW最終日には帰ってくるから。だけど志吹も帰らなくてもいいの？」

舞衣は実家に帰るには殆ど手ぶらだった。それに俺はまだ帰るつもりはない。

「帰る家などない。あんな叔父のところになんな絶対に帰りたくないから。舞衣、詩音には会いに行くのか？」

「……会いたくはないけど、会わなくちゃいけないから」

「そうか……まあ、頑張れ」

「志吹に心配されるまでじゃないから大丈夫よ。でもあの子はね……ううん！何でもないわ、行ってくるね」

舞衣は最後に何か言い掛けたみたいだったが、そのまま家を出て行ってしまった。

「気にしても仕方ないか、んじゃ……音楽作りに精を出しますか！」

前日の夜に一通のメールが届いていた。その内容は……

『貴方様が投稿した音楽サイトにて、弊社が携わっておりますMMOゲーム「Neo Fantasy Online」の新たな街「アマツ」にてその曲の使用許可を求めています。もしこの件を承諾してくださりますでしたら、ご返信をお願い致します』

「一応構わないって返信したけど、何も連絡こないな」

別に俺の作った曲なんて好きに使っても構わないのに。

それにフィッシング詐欺かもしれないからな、一応警戒はしておくか。

「あ、メール来た！何々……マジか。本社で契約書を作るから一度会うのか！場所は、目と鼻の先じゃねーか」

悩むな……これ詐欺だったら俺、やばいぞ？メールだけのやりとりじゃ信用出来んよな。

「騙されたと思って一度行ってみるか」

―東京某区内の喫茶店―

その日の昼、メールの話は本物だった。その会社との専属契約書まで作成し、これからも曲の依頼までする事にまで発展してしまった。その為、あの音楽サイトの俺のアカウントは失くなってしまおうがその補償金も出してくれると。

つまり俺はこの年で作曲家としてデビューしてしまった？

「では神子様、後程音楽データを送ってください。それでは失礼いたします」

「わかりました」

なんだかなあ……俺、色々やることあるのに安請け合いしたと今になって思ってしまった。

「やるしかないか！あの古○祐三さんもビックリするくらいデカイところからのデビューだからな！」

早速家に帰って曲作りに没頭した。一応言っておくが、会社側から依頼してきた曲を一度作り直してから送ると言った。何故ならあの曲とその「アマツ」にこの曲は合わないからだ、だから手直しする必要がある。これは今日一日じゃ終わらないな！

――

『夜遅くにごめんね志吹。明日10時にみんな来て練習するからよろしく』

夜遅く(22時)に蘭からメッセージが来ていた。

「蘭、この時間にやられても明日すぐに用意できねーぞ、バツキヤ

ローー!!」

俺のこの怒号に近い叫びが家中を木霊こだました。

## 笛吹き少年はGW二日目に入った（前編）

五月四日、GW二日目に入った。

「10時には蘭達が来るから、地下室の掃除と昼食も用意しないとな」

今の時刻は7時。これから地下室の掃除、その後に24時間営業のスーパーで買い物してから準備しないと間に合わんな。

「来たら蘭に文句言わないとな、それと…」

合鍵を渡してやるか、いつでも入れるようにな。

「さ、掃除掃除」

俺は地下室の部屋の掃除を始めた。

――

掃除も買い物も済ませ、調理の下ごしらえをしていると。

ピンポン

チャイムが鳴った。時計を見ると10時前だったから蘭達が来たのかな、と思い玄関に向かった。

「しーくん来たよ〜」

モカが来た、後ろに巴、ひまり、つぐみもいた。

「お〜いらっしやい。って蘭はどうした？」

蘭だけいなかった、どうしたんだろう？

「蘭は家の用事があって少し遅れるってき、本人から聞いてないのか？」

「いいや全く」

なんせ昨日夜10時に来るって連絡きたくらいだしな。

「変だね、なんだかいつもの蘭らしくないよ」

「うん：蘭ちゃん何かあったのかな？」

ひまりとつぐみが考え込んだ。

「考えても仕方ないわな、さ上がって上がって」

「」「お邪魔しまーす」「」

「で、どうするんだ？俺は昼飯準備してるところだが、練習するのか？」

リビングに四人いて俺はキッチンにいるのだが。

「蘭来るまで待とうよ」

「そうだな、アタシもそれがいい」

「蘭ちゃんいないと全体で合わせられないから、待ったほうがいいよね」

「Zzz……すぴー」

「結論は出たようだな、てかモカは人の家に来てすぐに寝るなよ……」

モカはソファアーの上で寝てやがる、全く！

「あはは…モカちゃん気持ちよさそう」

「ひまり、これをモカに被せといてくれ」

毛布を持ってきた、風邪引かれても困るからな。

「志吹くんがやったらどうかかな？」

仮にも男なんだがな、こいつらは…

「わかったよ」

俺はそつとモカの上に毛布を掛けた。

「モカちゃんいいなあ……」

「何か言ったかつぐみ？」

「えっ!? な、なんでもないよ!!」

つぐみは顔を赤くして手を振っているが、その横にいるひまりと巴はニヤニヤしていた。

「つぐも寝たらどうだ〜?」

「そうすればつぐも毛布を掛けてもらえるよ?」

「し、しないよお!もお…二人とも何を言ってるの!?!」

そんなやり取りを見ながら俺は調理をしに戻りつつ。

「そーいや志吹、舞衣は居ないのか？」  
「あれ、言わなかったっけ？舞衣は昨日から実家に帰ってるよ」  
「志吹くんも一緒に帰らなかったの？」  
「あー……俺は帰る意味はないからな」

あんなところに二度と帰るかーましてや詩音には会いたくない。

「そうだったな、悪いな志吹」

「気にすんな巴、それよりもまた電子ドラム持ってきたのか」

「まあな、志吹の家にドラムセットあれば最高なんだけどな。志吹もドラムをやったらどうだ？」

「あるわけねーだろ！それにバンドには興味はないし、やりたくもない。俺は笛と太鼓だけでいい」

「太鼓の経験あるのか志吹!？」

「ああ、あるよ。太鼓もお手のものだ」

「だったら志吹、アタシと一緒に祭りの太鼓叩かないか？といつてもまだ先の話だけどな」

「構わないが、いいのか？」

「勿論さ！最近太鼓を叩く若いのがいないって町会長が嘆いていたからっや」

「巴ちゃんは太鼓すごい上手だから」

「そうそう！巴の太鼓を叩く姿はとてもカッコいいからね、志吹くんも一度見たほうがいいよ」

「なんだよつぐ、ひまり……照れるじゃんか」

お、巴が珍しく照れてるな。これはチャンスだ。

「だったら巴の実力を見てみたいから、今度太〇の達人と一緒にやらないか？」

「言うねえ志吹……いいぜ！アタシと勝負だ！」



「おう、負けねえぞ」

巴との太鼓の勝負を取り付けたのはいいが、巴が何かを思い出したかのような表情をして。

「そーいや思い出した、昨日あこが言ってたな。駅近くのゲームセンターでカツコよくて女みたいな男が難度おにの太○の達人をフルコンしたとかでギャラリーが多く出来てたって」

ガラン！

俺は手に持っていたボウルを落としてしまった。中身は入ってないから大事には至ってはないが。

「し、志吹くんどうしたの!？」

「……なんでもないよつぐみ」

「なあ志吹、まさかとは思うけどさ……その女性みたいな男って」

「間違いなく俺だと思う。てかあこちゃんのお姉ちゃんって巴の事だったのか。名前聞かなかったから全然気づかなかった」

「やっぱり志吹の事だったか。あこの言う通り女らしいしな！」

「……巴に言われると凄く傷つくんだが。しかも二度目だろ、これ」

羽丘神社の時もまさしくお前が言うな！と言いたかったな。

「どうかあこ会ったんだな」

「ゲーセン出たら声をかけられてな、女だと思ったから。もう制服で行ってやる。私服だと本気で間違えられる」

「髪切ればいいんじゃないかな？志吹くんってどうして髪伸ばしてるの?..」

「それはだなひまり。神職は男でも長くないといけない決まりがあるんだよ。宗派によって違いがあるが俺のところは髪は最低50センチ

チはないといけないらしい」

「へえ、そうなんだあ」

髪の長さはどうにもならん。きつと切ったら俺は加護を受けられなくて死んでしまうだろう。そんな事言ったらまた心配されるし黙っておくか。

「モカやつぐみが羨ましいよ、短いのは好みだしな」

「え……っ？えええっ!？」

「おやおや志吹くん？それは二人の事をそう思ってるのかな？？」

「志吹、お前はとんでもない女たらしだな」

「あー、俺の髪型の事だから。決して違うからな？」

どう考えたらそう聞こえるのかな？いつらは…

「あう…はう！」

「……」

つぐみは顔真っ赤にしてうずくまってるし、モカはまだ寝て…

「おいモカ、起きてるんだろ？狸寝入りはバレてるからな」

「「えっ？」」

するとモカが起き上がった。

「うにゆ〜、バレてましたか〜」

「モ、モカちゃん!?!いつから起きてたの？」

「まーちゃんが実家に帰った辺りかな〜」

「ほぼ全部じゃねーか！」

こいつ、最初から狸寝入りだろ。

「そうだしーくん、気になってたんだけど」

「何だモカ？」

「まーちゃんって羽丘に来なかったよね？」

「それな！舞衣は羽丘だと思ってたんだが、花咲川のほうだったよ。俺はあの時に思わず笑っちゃったよ」

「そこ笑うところかな？」

「ひまりちゃんの言う通り笑い事じゃないよ。舞衣ちゃん一人できつと不安だと思うよ」

「いやつぐみ、花咲にも知り合いがいるし問題はなかったらしい。あんな性格だけど友達出来まくったのかな」

唯我独尊、暴走特急は鳴りを潜め過ぎだなあ。まさか問題起こしたら連れ戻されるのかな？ま、俺には関係ないわな。

ピンポーン！

チャイムが鳴った。

「ごめんみんな、遅れて」

蘭が30分遅れてやって来た。何か用事でもあったのかな？

「蘭ちゃん大丈夫だよ」

「ああ、問題ないぞ。アタシは志吹と大変有意義な約束を取り付けたしな！」

「…何の約束？気になるんだけど」

「た、太鼓だよ太鼓、志吹も経験あるからさ。深い意味はないからな！だからそう睨むなよ蘭」

「バカ巴……」

ひまりに馬鹿つて言われたぞ巴？

「ふーん？まあいいよ。じゃ、バンド練習しにいくよ」

蘭は上がってすぐさま地下室に降りていった。

「蘭、なんか機嫌悪い？」

「なんかそうみたいだな」

「へえ、わかるんだな。俺にはサツパリわからなかったわ」

「伊達に幼馴染やってないからね。こんな事は何回かあるよ」

「でも、久しぶりだったかな？こんな蘭ちゃんは」

「確かになー、つと：早くアタシ達もいかなきゃな」

「おー」

四人も蘭の後に続いて地下室に降りていった。

「台風なやつらだな。いや、蘭が台風か。……合鍵は後で渡すか」

――

「もうそろそろかな？」

時刻は12時20分、羽丘の四時限目の終了時間だ。  
だから俺もそれに合わせていたけど。

「来ないな。熱中しすぎてるんかな？」

そう思っていたら地下室からみんなやってきた。

「おつ、ナイスタイミング。みんなお疲れ、昼飯できてるぞー」

「志吹くん、もう用意してあるんだね」

「大体四時限目終了辺りに来るだろうと予測してな。見事にドンピシャだ」

「丁度キリのいいタイミングなだけなんだけどなー」

「巴、全然キリがよくないよ。ぶっ通しでやっても意味ないだけだから」

「二時間も休まずに練習してたのか、すげえな」

「それくらいあたし達なら余裕だよ」

「いやいや蘭、余裕じゃないし。モカを見てよ」

モカに視線をやると。

「もうお腹と背中がくっつきそうだよ」

「うお、こりやモカはバテてるな。やはり空腹には勝てんか」

バテ気味のモカをなんとかソファーまで連れていき、みんなで昼食にした。ちなみにメニューはチキンライスと謎肉スープ、そしてプリン。(蘭にはわからないようにグリーンピースを混ぜていた。バレなかったが嫌そうにもしてなかったからこれは効果なかったかな?)

蘭たちは食べ終わるとすぐに練習を再開しにいった。五人分の飲料水を渡していったが大丈夫だろうか?そして俺は夕食も作るから買い物をして家を出ていった。もちろんみんなには言っていない。

「さて、花咲のほうへいくか。時間もあるし」

俺はいつもの道ではない方向へ歩いていった。



「つぐみ、今のところをもう少しテンポあげて」

「う、うん」

「モカとひまりは逆に下げて」

「はい」

「巴は途中からテンポにバラつきが多いよ」

「あーバレてたか…どうも電子ドラムだなあ。やっぱ本物のドラムじゃないといつものテンポにするには難しいんだよ。こればかりはアタシがなんとかするしかないよな」

「バイトして買うしか、ないよね」

「そうだよな、どこかバイトすっかな」

「とモチんがバイトねえ」

モカはパン代の為にコンビニでバイトしてるんだっけな。

「……一度休憩にしよう。あたしは外に行ってくる」

蘭は地下部屋から出ていった。

「何かいつも通りの蘭に戻ってるね」

「だな、朝のは杞憂だったかもな」

「モカちゃんもお外の空気吸ってくる」

モカも出ていった。

「モカまで行っちゃった」

「二人ともお手洗いじゃないかな？」

「二人してか？そりゃ傑作だな」

「あっはははー！」

巴とひまりは大笑いした。

地下室から出たあたしはしーくんの部屋に突撃します。彼の部屋に入るのは初めてだし、今出掛けるからこれはチャンスだと思っただのだ。そして部屋の前に来るとドアが開きっぱなしになってるね、これはしーくん閉め忘れたのかな？

「えっ…？」

開いてる隙間から部屋を覗くと。

「なに、これ…？」

部屋の壁には紋みtainなのが書かれてて、床にも同じような模様が書いてある。天井は全く書かれてないけど、これではまるで…

「精霊ババンボ様…？」

ある部族が風邪とかを悪魔の呪いと考えていて、それを精霊ババンボ様に祈りを捧げて治すらしいよ。

「しーくんはそこ出身だったのかな？後で聞いていこ〜」

モカは見なかった事にして部屋のドアを閉めた。

「さーて、蘭はどこにいるかな？」

—————

橋を渡ってから住宅街を歩いていたら…

― 質屋 流星堂 ―

と書かれた一般的な一軒家とは違う、屋敷みたいな家があった。

「ちよつと入ってみるか、時間はまだ余裕あるし」

時刻はまだ午後1時、寄り道しても全然平気だ。俺はその門を入って正面の建物に向かった。右にも建物があつたが、扉が閉まつたので気にもとめなかつた。

「いらつしやい。おや？若い子が来るとは珍しいね」

正面の建物に入ると、一つの部屋にアンティークと言っているのかわからないが、沢山のショーケースにそれは入っていた。そしてこの主なのかは知らないが白髪のお婆さんが立っていた。

「すみません、ここって何か売っていますのすよね？」

「ええ、ここは色々な場所から取り寄せた珍しい物を集めて売っています。お客さんに何か気に入ったのがありましたらお売りしますよ？」

つまり、アンティークショップみたいなものだな、だったら俺の呪いが解ける物とかなないかな？

そんな都合のいいのは流星にないよなあ。

「……………む、これも違うか」

色々見たが、どれも違うな。こんなのに頼るなって証なんかかな？

「すみません、求めているのはなかつたみたいですよ」



「あら、そうなんですか。しばらくしたらまた商品が変わりますからその時にまたいらしてください」  
「そうしますね、では失礼します」

俺は流星堂を出て門の前まで来ると…

「きゃっ！」

「わっ！」

人とぶつかってしまった。赤いケースを背負っていた人はそのまま倒れそうになったので。

「ほっ、と…大丈夫ですか？」

うまく腰に手を当てて支えたから倒れずにすんだ。

「あ…はい、大丈夫です！」

あ、女の子だったのか。それにしてもその髪型、猫耳？

「おっとすみません、すぐ離しますね」

俺は直ぐ様その人の腰に当てていた手を離す。なんか遠くからみてる抱きついてるみたいに見えてしまう。

「あ、ありがとうございます！助かりました！」

その猫耳少女は俺にお礼を言ってきた、なんか本当に猫みたいだな。

「香澄ちゃん、速いよ〜」

「あつ！りみりんー、ごめん先に着いちやった、えへへ」

この猫耳少女は香澄と言うのか…てかりみりん!?

「りみじゃないか」

「え…志吹君、なの？」

「え？え？りみりん、この人と知り合いなの？」

なんだろう、りみといい香澄って子といい、何かケース持ってるんだけどまさかそれ、ギターケースじゃないだろうな？

「えつとね、香澄ちゃん。この人は私と同じ中学で…」

りみから俺の事を説明してくれた。そして香澄という猫耳少女は戸山香澄。

入学したての頃に出来た友達って言ってたな。

「そっか、りみが言ってた戸山さんはこの人の事だったんだな」

「うん！香澄ちゃんには感謝しかないんよ」

おい関西弁出てるゾ。黙っておくが。

「そ、そうかな？だったら嬉しいな。それと神子くん、私の事は名前でもいいよ」

「だったら俺も名前で呼んでくれるかな、香澄？」

「志吹くん！これからもよろしくね！」

「おう！こちらこそりみの事頼むな！」

俺と香澄、二人は拳を合わせた。まだまだ今日は終わりそうにないな。

## 笛吹き少年はGW二日目に入った（後編）

昼過ぎて1時半頃にさしかかる時、俺は質屋流星堂を出ようとしたら猫耳少女の戸山香澄とぶつかってしまふ。そしてりみもやってきて、自己紹介を終えたのだが。

「で、香澄とりみはここに何の用で来たんだ？まさか骨董品でも買いにきた……わけじゃなさそうだな、ギターケース持ってきてるし」

「えつとね、ここでギターの練習をしにきたんだよ」

「私も香澄ちゃんの付き添いと練習……」

りみよ、それはもう練習でいいやろ。てかりみもバンドやってたの？

「その蔵の中で練習するんだ。でも、まだギター始めたばかりなんだけどね」

「マジか、ちなみにどれくらい前？」

「一週間前……かな？」

「それでいきなり弾けたりしないよな？」

日菜は一日もかからないで弾けたと言ってたな（紗夜さん談）

「全然だよお！りみりんはベース？だったかな、だから勝手が違うし……志吹くんはギター弾けたりしない？」

「出来ないなあ、それに俺はこれから買い物だよ」

「そうなんだ……って香澄ちゃん、もう時間だよ。市ヶ谷さんきつと待ってるよ？」

「あ！そうだった。じゃあまたね志吹くんー」

「ごめんね志吹君、色々話したいけど時間ないから夜LIEで……」

「お、おう。わかったよ、りみ」

「うん、またね」

香澄はそのまま蔵へ走っていった、そしてりみも遅れて。

「そんじゃ寄り道しちまったし、さっさと買い物をしに行きますかな」

俺はそのまま花咲区の住宅街を抜けていった。

――

「じくじく……」

「……………」

買い物を済ませて帰る途中、誰かの視線を感じる…

俺の左手には買い物袋があるので走れないし、逃げられない。もし今何者かが俺を襲ったら為す術もなくやられるだろう。ま、笛で撃退するがな。

俺は首に掛けてた笛を取り出していつでも吹けるようにした。おっと言い忘れてたが俺は笛から出す超音波で相手の視覚、聴覚を狂わす事が出来るんだ。もつとも数十秒しか効果ないし、再び効果あるまで数時間かかるから只の一時しのぎにしかないな。それにまた数回やるとバテるんだよなあ。

「……………!?!」

後ろを向いたらやはり誰かが後を付けてた。隠れられたけど一瞬だけピンクの色がした髪が見えた。

「ひまりかな?」

だけどひまりは俺の地下室で練習してるはずだが? 一度L I O

Eで確認とつてみたらすぐに返信がきた。『わたしと同じ髪色の人はいるでしょ？変な事聞かないでよ、怖いから』とな。だからあれは違う人になる、誰だろうか？

「警戒しつつこつちから近づいてみるか」

「ひゃっ!？」

そう思った矢先に悲鳴が聞こえた、俺は早足で声のした方に向かった。そこには…

ピンク色の髪をした女の人がチャライ男二人に絡まれていた。これはいかにもアレだな、うん。

「ねえお嬢ちゃん、俺らと遊ばねー？」

「い、いえ！結構です！私急いでますからこれで、あつ…！」

「そんな事言わずにさあ〜？遊ぼうよーあん？なんだテメエは？」

見つかった、まあ俺から来たんだしな。しかしまあなんというかテンプレ的な展開が本当にあるんだな。

「別にただの通りすがりの者ですがね、嫌がつてる人を無理矢理に誘ってるのを、こんな人の往来が多い所でするのは随分と度胸がありますと感心してましたのですよ」

ほんとな、ここ商店街ど真ん中だぞ？

「ふざけやがって！痛い目に遭いたいらしいな？」

「俺達を馬鹿にしやがって！おい、こいつシメるぞ」

怒りの沸点低すぎない!?!はあ…仕方ねえなあ。

「あくあくあくあく……」

「あん?」

なるほど、こいつらの波長はわかった。じゃ、アレでいくか!

「死ねや男女!おらあ!!」

プチッ

男が俺に殴りかかるとそれを軽く避けると、もう一人の男がピンクの人から離れて俺に向かってきた。今しかないな。てか気にしてる事言いやがったな?

俺は笛を吹き始めた。

♪————♪————♪————

「なんだ、この…音、は……?」

「……………なんか、ね、眠くな、って……………き…た」

男二人は眠った。これは旋律の子守唄だ。この二人の耳の波長に合わせてやったから他の人には影響はない。

「え、ど、どうなってるの…………?」

ピンクの人はキョトンとしていた、まあ無理もない。

「騒ぎになる前に、ここから離れましょうか」

「あ、え?う、うん…」

まだこの人は困惑してるけど、そこから離れていった。そして商店

街を抜けた先の川沿いでベンチがあったから二人は腰をかけた。

「その…た、助けてくれてありがとうございます！あのございます！あの、さっきのは一体どうやったのですか？」

驚くのも無理はないよね、突然男二人が寝てしまったからな。だけど本当の事言う訳にもいかんのよ。

「催眠術の一種、としか言えませんな。あとこちらも質問よろしいですか？」

「催眠術なのこれは!?…えっと、何かな？」

全然納得いつてない顔だったけど、こちらの質問にもちゃんと答えてくれそうだ。

「どうして俺の後を付けてたのですか？」

「うっ！……どうしても、言わなきゃ駄目なのかな？」

「そりゃまあ、ストーカーされてれば誰でも気にはなりますでしょう。なのにナンパにあっついていまして笑えますがね」

「本当に、言わなきゃ…ダメ？」

「面倒事になった原因なんですがね？」

「ううう…」

俯かれた。何でだ？

「やっと見つけたよブッキー！彩ちゃん！」

「日菜（ちゃん）！」

ショートで青緑の髪をした人、氷川日菜がいた。

「もおー二人とも商店街で何をしてたの？道端で寝てる二人組がいるし、ブツキーは買い物袋を置いてきてるしさ」

「あつーわ、忘れてた…ありがとう日菜！マジで助かったよ」

笛吹くの両手使ったから袋を一度置いたんだよなア。その後慌ててたから忘れてたよ。

「どういたしまして。で、ブツキーは彩ちゃんと何してたの？」

「人の後を付けてたから向かったらチャラそうな男二人にナンパされてたので、ちょっと気に障る事言われたから眠らせてやりました」

「ふくんそうだったんだ。…で、二人はさっき初めて会ったから名前も知らないんだよね？」

「そーいやそうでしたな」

「あはは…」

この後俺とピンクの人、お互いに自己紹介をした。丸山彩さんか。日菜と同じバンドPastel\*Paletteのボーカルとアイドルもやっているとのこと。ほんと知り合いにバンドやってんの多いな！ついでに舞衣の先輩。

どうして自己紹介の時にポーズとるんだ？

それと後を付けてた理由は、前にファーストフード店で日菜を泣かせたのを見ていたから。そこでバイトしてたから一部始終見ていたと。

「あー見られてたのね、だったら…」

「内容まではわからなかったからね？紗夜ちゃんに教えたらすごい怒って向かって行ったし」

この人のせいで紗夜さんは早とちりしたんじゃないかって疑ってしまうよ、もう過ぎた事だけど。



「ブツキーあの時はごめんね。あたしとおねーちゃんの相談に乗ってくれて本当にありがとね」

「別に、俺も少しスツキリしたんで。それじゃ丸山さんの気が済んだでしょうから俺は帰りますね。」

日菜、買いた物袋ありがとうございます」

「あーそうだブツキー、今月末にパスパレのライブあるからさ近々チケット出るから学校であげるね。だから絶対に見に来てねー」

「日菜ちゃん!？」

日菜と丸山さんのライブかあ、そういえば蘭たちAfterglowはライブやんないのかな?後で聞いてみるか。



「日菜ちゃん、神子くんと仲よさそうだけど?」

「そーだよ!先輩後輩関係なく接してくれるから、るんっ!つてきちやうよー!」

「へ、へえ…そうなんだ。でも変わってるよね彼、笛であんな事出来るし」

そう、彼の笛での戦慄で男二人を眠らせるとかトリックじゃないよねあれ?きつと笛に何か仕掛けがあるのではないかと私は思うんだよ。

「うーくん?だったらブツキーの笛で一度やってみよっかな?前にも吹かせて貰ったし」

「え!?!日菜ちゃん神子くんの笛を吹いたの?」

「そうだよ?」

「か、間接キス…」

「あっ…」

気付いてなかったんだ。日菜ちゃんがその時の出来事を思い出したように顔が赤くなってきた。こんな日菜ちゃんは初めて見たよ。

「うう…あたし、なんて事したんだろ…。とても恥ずかしいよ／＼／」

(ほほーう日菜ちゃん、とても乙女だ)

「うくん…千聖ちゃんに相談してみる?」

「ヤダ、絶対に嫌。彩ちゃん、この事は黙っててね?もしもバラしたら…」

日菜ちゃん、そんな目で私を見ないでよお!怖いから!

「喋らないから!今日見た事は忘れるから!」

そもそもこれって日菜ちゃんの無自覚から始まったじゃなかったっけ?うう…とんだとばっちりだよ。

—————

家に帰ると玄関に違和感を覚えた、どうしてだろう?

その答えはすぐにわかった。

「おう、しーくんおかえり〜」

「ただいまモカ、もう夕方だけどまた休憩か？」

リビングに入るとモカがソファでくつろいでいた。休憩中だろうか？

「うんにや、練習は今日は終わりだよ〜でもね…」

「えつとね、巴ちゃんと蘭ちゃんが喧嘩しちゃったの。巴ちゃんは帰っちゃったし、ひまりちゃんも一緒にいつちやって…」

つぐみの声が聞こえてるけどとても弱々しく、そして部屋の隅に座っているつぐみがいた。

「そ、そうだったのか…一体何が原因なんだ？」

「蘭がちよつとのミスで厳しく指摘するのをとちんが反論してね〜」

「うん、最後には八つ当たりにしが見えなかったよ…やっぱり蘭ちゃん朝に何かあったのかな？」

「本人に聞いてみないとわからんな。…で、蘭も帰っちゃった？」

「地下室に一人でいるよ〜」

「そっか、じゃあちよいと蘭の様子みてくるわ」

「お願い…」

俺は買い物袋をキッチンに置き地下室に向かった。

地下室の扉を開けると蘭の姿はなかった。

「蘭、いないのか〜？」

部屋の中央から見渡しても人影が全くない。機材はないし、一体どこに…？

「志吹、なの？」

蘭の声ができるけど姿がない。

「蘭！どこにいるんだ!？」

「ここにいますよ」

声のした方を向いてみると確かにいた。部屋が暗めなせいもあるが蘭の服装も肩出し黒だったからわからなかった。

「どうしたんだよこんな壁と一体化する位に暗い表情してさ。いつもの蘭らしくないぞ」

「……………」

「何があつたか知らないが、つぐみとモカが心配してたからもう上がろうな？」

「うん…」

なんか珍しく塩らしい蘭だな。俺と蘭は地下室から出てリビングに戻った。

けど蘭もモカもつぐみもそこから一言も喋らないまま気まずい雰囲気になり、俺は夕食を作る事にしたが…

「しいくん、あたし帰るゝ夕食はいらさないからごめんなのだゝ」

「私も帰るよ、志吹くんごめんね」

「えっ、マジかよ!?!……………わかった。つぐみ、モカ…またな」

「お邪魔しました(ゝ)(ゝ)」

モカとつぐみが帰り、残ったのは俺と蘭。

「ら、蘭はどうする？もし夕食いらさないなら…」  
「食べる。それと舞衣はまだ帰ってこないの？」  
「舞衣はGW終わりまで実家に帰ってるってさ」  
「そ、そうなんだ…だったら」  
「だったら？」

蘭は少し恥ずかしそうに、決意をした顔をして。

「と…泊めてくれないかな？今日だけでもいいから」  
「は…：い、？」  
「お願い志吹！今あの家に帰りたくないから…」  
「いやいや蘭さんよ、俺は男だよ？泊まりにいくならモカとかつぐみとかのほうがいいんじゃないのか？」

舞衣ならいざ知らず、蘭はまだ知り合って一月ちよいだぞ？

「ちよつと今は…頼れるのは志吹だけだから！」

どうする？いや…困ってる人を見過ぐす事は出来んよな、やっぱ。

「わかったよ…」  
「ーっ！あ、ありがとう志吹！」  
「でもどうして家に帰りたくないんだ？何か理由があるんだろ？話してくれないか？」  
「うん…わかった」

蘭は事情を話してくれた。どうやら蘭の親父さんが蘭に華道の道を歩ませようとしている。美竹家は由緒ある華道の家元であるから

バンドをやめるように言われたと。それを蘭は反発して親父さんと喧嘩した。で、バンド練習で半ば八つ当たりのようにひまりに叱咤して巴がそれに怒って喧嘩に発展したというのが事の顛末だそうだ。

「……事情はよくわかった。巴のほうはお互い頭が冷えるまで待とう。で、蘭はバンドと華道どうしたいんだ？」

「あたしは……どっちもやめるつもりはない。父さんにバンドやるのを認めさせてもらいたいし、華道も続ける」

「ふむ」

「朝にそう言ったのに、全然納得してくれなくて。昼にも電話してきた」

「俺が出掛けた後か」

確かにそこまでは問題はなかったんだ。

「なあ蘭、ライブの経験はあるのか？見るほうじゃないぞ、やる方だよ？」

「わかってるよ。んと、二回かな？CIRCLEで」

二回か、てかいつの間にならやっていたんだろ？まあいいや、経験あるなら問題ないな。

「それで、今月の終わり頃に『ガールズバンドジャム』つまてのにあたし達は出るんだ。まりなさんから打診が来ててね。だから練習も少しハードにしようと思ったんだけど、朝の出来事でピリピリしてて、昼に更にイラついたからひまりに八つ当たりもしちゃった…」

蘭め、相当落ち込んでるな…ここは俺がアレやるか。

俺は笛を取り出して…

♪♪♪♪♪♪♪♪

「!?」

おっ、蘭も効果あったか。

「落ち着いたか? さっきも言ったが巴たち皆の事は取りあえず明日話し合いしような? あと親父さんにバンドを認めさせればいいんだろ? だったらそのガールズバンドジャムだっけ? それに親父さんも呼んで認めさせればいいんじゃないかな?」

「……」

「蘭がいかに本気がって伝えたいなら音楽が一番だからな!」

「そうだね、志吹の言う通りだよ。うん…: わかった! あたしの本気を父さんに見せるよ」

「まあ問題は親父さんが頑固者で石頭だったらどうにもならんが」

世の中人の話も全く聞かない人がいるからな、例え実の子供でもな。

「そこもわかんない、けど説得してみるよ」

「だな、問題は山積みだなあ」

「だけど何とかしてみせるよ。後は巴に何て言って謝ろう…?」

「そこはお前達幼馴染しか出来んな、俺は口出しは一切しないからな?」

「わかってるよ」

蘭の表情が随分と明るくなったな。やっぱり笑顔が一番だよな。

「ありがとう志吹、色々と相談に乗って貰って楽になった」

「どういたしまして、んでこの後本当に泊まるのか?」

「あつ…: わ、わ、忘れてた!…: 志吹、部屋って空いてる?」

「一部屋空いてるけど何もないから舞衣の部屋使えよ、ベッドもあるだろうし」

「う、うん…そうしとく」

蘭の奴、俺の家に泊まるのをやっと意識し始めたか。今まで忘れてたのかよ。

「じゃ、夕食作るか。六人分から二人分に減っちまったから余る…予定を変えて炒飯ハンバーグにしとくか」

「また炒飯なの？まあ悪くないけど」

「にやる、グリーンピース入れっぞ？」

「……」

「わかったわかった冗談だからそんなに睨むなよ？」

「ふんっ！志吹の馬鹿」

馬鹿呼ばわりされる筋合いないんだがな、こっさり入れたるか？

「まだ時間かかるから風呂にでも入ってきたらどうだ？タオル貸してやるから」

「……」

「ああ、風呂場はリビングを出て左に行ってトイレの隣だよ」

「……」

蘭は黙ったままだ。しかも若干…いやかなり顔を赤くしてる。

「……覗かない？もし覗いたら通報するから」

蘭が顔真っ赤にしながら俺に訴えてきた。

「調理中にそんな余裕あるか！それと誰が覗くか！」

「わかった、信じるからね？」



「ああ、はよ行け」

蘭はリビングから出ていった、出る時にガンを飛ばしやがったがな。

その後、炒飯ハンバーグは完成した時に蘭は風呂から出てきた。なんか不満そうな顔してたけど一体なんだったんだ？

夕食の後俺も風呂に入り、蘭は舞衣の部屋に入ったから俺も自分の部屋に入り、曲作りをして日付が変わった時に地下室でいつもの演奏をして眠りに入った。

風呂に入った時に疲れがどつときたのは内緒だ。今日二回も呪いの演奏をしたからな……。

笛吹き少年は仲直りを羨ましがった

GW三日目 朝7時

朝特有のやわらかい日差しがカーテン越しに部屋を照りつけている。まだ五月だからか少し肌寒いが俺はこのくらいが一番好きだ。

まだ昨日の疲れがあんまり取れてないが、今日はちよつとやる事が多いんだよな。取りあえず起きるとするかな？

俺はベッドから出ようとすると。

むにっ

「んっ…」

何だこの柔らかい感触は？そして声までしたゾ？

俺は声のしたほうを向いてみると…

「ら、蘭っ!？」

蘭が俺のベッドで寝ていた。

なんで蘭が俺のベッドにいる!?!ここは俺の部屋だよな??

俺は部屋を見渡したが壁に紋がある。うん、俺の部屋だ。ちよつと昨日の事を思い返してみよう。

—————

風呂を出て寝間着を着ていた蘭がリビングで俺を待っていた。

「志吹って長湯なんだね。ちよつと意外」

「そうだな、と言いたいが今日は色々あって疲れていたからな」

今日二回も呪いの演奏をやったからな。蘭には言えないな、どうせ信じてもらえないだろうし。

「で、どうして蘭は寝間着なんて持ってきているんだ？」

「う……」

「最初から泊まりに来る予定だったんだろ？」

「そうだよ。最初はモカの家にお邪魔するつもりだったから。でもあ  
たしが……」

「ああ、そうだよな」

練習中に皆と気まづくなつたからモカにも頼めなくなつて訳で、事情も知らない俺しかいなかったんだな。例えそれが男であっても。

「志吹、あたしはもう寝るね。舞衣の部屋はどこなの？」

「階段上がってすぐ手前の部屋だよ。ベッドの手入れとかは自分でやってくれないか？舞衣は俺を頑なに入らせようとしないから。俺のキャンだけど、あの部屋にはセンサーか何かあると思う」

「怖いからやめてそういうのは！」

「声を荒げるなよ。だから蘭だけ入れば多分大丈夫だと思う」

「はあ…何かあったら怒るからね？おやすみ、志吹」

「ああ、おやすみ」

かなり蘭は納得いかなそうな顔をして階段を上がっていった。

「さて、俺は音楽作りとりみにL I O Eだな」

しばらく音楽作り、L I O E通話でりみと会話をしていた。

――

「それでね、舞衣ちゃん沙綾ちゃんと喧嘩になるところだったんだよ。だけど誤解だったからそれで打ち解けてクラスみんなともう仲良くなっちゃった、凄いな舞衣ちゃんは」

「まあな、あいつは友達作るのはうまいんだよ。性格が問題あるのになあ…不思議だよ」

ほんとそれな！

「そんなことないと、思うかな？志吹君が知らない舞衣ちゃんだってある、でしょ？」

「そりやまあな。幼馴染といっても舞衣の事を全部把握してる訳でもないしな」

しばらく舞衣の話になったが俺はりみがバンドやつてることを聞いてみた。

「そういやりみはいつから音楽やってたんだ？」

「え？えつとね、お姉ちゃんの影響で中学入った辺りからかな？」

「へえ、ゆりさんからか。それでりみはどのくらい上手いんだ？」

「そんなに上手くないよ、だって…」

「だって？」

「うちね、こっちに来てから一度やめてしもうたんよ。でも香澄ちゃんがバンドやるってゆうて、いつの間にか一緒にやろうってなったんだよ。それでまた再開したん」

「でも香澄は初心者なんだろう？大丈夫なのか？あと関西弁になってるからな」

「あっ……くく／＼／＼／＼」

「ははは、りみはまだまだやな」

りみとLINEは終了した。



「うう…恥ずかしい」

「随分長電話だったけど誰から？」

「あ、お姉ちゃん。中学の時同級生だった志吹君だよ」

「やっぱり神子君だったのね！りみが楽しそうに話してたから。彼、こっちに来てるの？」

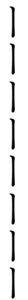
「うん！でも学校は違うけどね」

羽丘は今年共学になったんだよね。花咲川も共学になったら来たのかな？

「そう…りみ、頑張りなさいよ」

「頑張るってどういう意味？」

「何でもないわ、変な事聞いてごめんね」



りみとLINE通話も終わり、NEOの「アマツ」曲も完成形が見えてきた。期限は今月末だったから余裕で大丈夫だな。

「まだ日付が変わるまで時間あるな…」

あと一時間、何すつかな？

「志吹」

「うわあ！」

後ろから声が出た。

「驚きすぎ」

「そりゃ寝たはずの蘭が起きて、俺の後ろに立って声かけられたら驚くわー！」

足音も立ててないしな！

「で、どうしたんだよ蘭？」

「……………舞衣のベッド、固くて眠れない」

「は？」

「だから！ベッドが固くて寝れないの！」

「あー、そーゆー事ね。じゃあ俺の部屋で寝たらどうだ？」

俺のベッドなら大丈夫だと思うが、そんなに舞衣のベッドって固いのか？

「いいの？志吹はどうするの？」

「俺はソファアで寝るよ。いくらなんでも一緒に一つのベッドで寝る訳にはいかんだろ？」

今日は我慢すつか、蘭にはちゃんと寝てほしいしな。

「……………いいよ」

「ん？今なんて言った？」

「一緒に寝てもいいよ…し、志吹だって疲れてるからちゃんとした寝床で寝ないと駄目なんだから！」

「ま、まあな…だけど蘭、わかってるのか？俺と蘭は男と女、つまりだな…」

「あたしは志吹の事を信じてるから！だから一緒に寝ても大丈夫だよ  
／／／

蘭は真つ赤な顔で言ってきた。相当恥ずかしいだろうな、全く…仕方ねーな。

「わかったよ、じゃあ一緒に寝るか」

「う、うん……！」

俺はパソコンの電源を落として自分の部屋に向かった。いつも日付変わった時にやる笛での演奏は朝やれば問題ないしな、本当はどの時間まで大丈夫なのか知らないが、この演奏を怠ると俺は呪いによって激しい痛みに襲われるからな。ちゃんと忘れないようにしないと。

「ここが、志吹の部屋…なに、これ？」

「気にしたら負けだ、それよりさっさと寝ようか」

「……うん」

俺と蘭は一緒にベッドで寝たんだが、やっぱり二人だとキツイな。幅は余裕があまりないし、突然蘭が俺の左手を掴んできていた。

「蘭？」

「少しだけこのままでいさせて、少ししたら離れるから」

「あ、ああ……」

「ありがとう」

震えてる？やっぱり不安が多いのかな、俺とか巴とか親父さんの事もあるしな。

「大丈夫だよ蘭、明日一緒に付いて行ってやるから安心しなよ」

「うん…本当に今日はありがとう志吹。あたし、志吹がいなかったらどうなってたかわからないよ」

「大げさだな、俺のちっぽけな存在など大した事じゃないだろう？」

「違うよ。あたしにとって志吹は…何でもない」

「そっか、何でもないよな」

やばいな、少しだけ蘭の事が可愛く思ってしまった。こんなこと本人にはとても言えないな。ちなみに左壁際にベッドがあつて俺が手前で蘭が奥だ。

疲れていたのかすぐに俺の意識は途切れた。蘭と俺の手は握ったままで。

—————

回想終了

そうか、思い出したよ。蘭と手を繋いだまま寝ていて…そしてその左手はそのまま右手が蘭の胸を…

「ん〜志吹？、おはよ……」

「お、おはよう蘭」

蘭はまだ寝ぼけている。なら早く右手を離さないと…

「な、な、な…!？」



あ、遅かった。

「くくく!!、志吹のスケベ!変態!」  
「誤解なんだがなあー!」

蘭が左手で平手打ちをしてきた、避けようとしたが俺の左手を掴まれたまま動けずにモロに蘭の攻撃を食らってしまった。

「信じられない!寝てるあたしの、む:胸を触るだなんて!!」  
「元々は蘭が手を握るからだろう!俺はそれを忘れてて起きようとしたら、そうなたただけなんだよ!」

憤慨してる蘭をほつといて、俺はさっさと部屋を出て地下室で笛の演奏をし始めた。

「つたく蘭め:」

まだ頬が痛い。いつもの演奏を終わった後、まだ怒ってた蘭と朝食を食べていたが。

「ねえ志吹、地下室でなんで笛を吹いていたの?」  
「笛の練習だよ」

「嘘、本当の事を教えてくれる?時々志吹の行動には変に思ってたから」

なんだよ蘭のやつ、俺が変な時あったかな:?

.....

あつたわ色々。

それでも答える訳にはいかない、これは俺の呪いの事だから無関係な蘭に教えたら蘭に危害が及ぶんだ。舞衣は関係者だから知ってるが。

「悪い蘭、これは俺自身の問題だからな。理由は絶対に言えないんだ」

「そ……」

「……………」

うん、お互い沈黙が続く朝食になっちゃったな。

ピンポーン

ん？こんな朝早くから誰だろう？新聞の勧誘かな？

「はい、どなたです……か？」

玄関の扉を開けた先にいたのは……

「おはよう志吹、朝早いし連絡もなく訪ねて悪いな」

「と、巴!？」

そこには俺と同じくらいの身長タツバで腰まである赤い髪をした宇田川巴がいた。

「お、おはよう巴……こんな朝早くからどうしたんだよ？」

「そこに蘭いるんだろ？」

「ああ、いるけど」

俺が最後まで言い終わる前に巴は家にながっていった。

「お、おい巴……そんなに慌ててどうしたんだよ？」

俺は巴の後をついていった。

「巴…」

「馬鹿!!親父さんが心配してたんだぞ!!どうして連絡しなかったんだよ!!!」

巴が蘭に怒鳴り散らしている。おおう、こんな巴初めてみた。てか怒ってるのすら初めてか。

「父さんが…?」

「ああ、朝に蘭の親父さんから連絡きてな。昨日から帰ってないからって」

「……………」

「アタシがみんなに連絡したけど、モカもひまりもつぐの家にも泊まってるからさ、まさかとは思って志吹にも伝えようとしたらそこで充電切れちゃったんだ」

「だからって普通訪ねるか?誰かの借りればよかったんじゃ?」

「志吹の家近いしそのまま来ちゃったよ、少し恥ずかしいなこの格好は」

巴の格好は、まあなんとというか…パジャマだな、赤色の。

「ごめん心配かけて。だけど昨日は帰る気はなかったから」

「だったら連絡くらいしろよ!…………ん?おい、蘭」

「なに?」

「今更だけどき、昨日は志吹の家にと、泊まったのか?」

「うん、そうだけど?」

「マジかよ…ってそれより早く親父さんに連絡しろよ、心配してっから」

「あんまり気が進まないけど、心配してくれてたのが本当かどうか聞

「いてみるよ」

そう言って蘭はリビングから出ていった。そして巴は仰向けに倒れた。

「はぁー、どっと疲れたよ」

「お疲れ巴、いらん心配かけちまって」

「なあ志吹、蘭と親父さんって何かあったんだろ？昨日蘭と揉めたって言ってたからさ」

「理由は聞いてるし大体の事情も知ってる。多分この後蘭から言うとは思うが」

「だったらみんな集まって話そうぜ」

「だな」

その後モカ、ひまり、つぐみに連絡をしてすぐに来てくれた。

そしてみんな集まってリビングにいる。

「みんな昨日はごめん！あたしが父さんの事でイライラしてて、ひまりにも八つ当たりするようにしちやって！」

「蘭……」

「父さんはバンドなんてお遊びはやめて華道に専念しろって言われて頭にきて、それで昨日は帰るつもりはなかった」

「それでしーくんの家にお泊まりとか蘭、だいたーん」

「お、お泊まり!?志吹くんと!?!」

「それは置いといてくれるかな？二人とも」

メチャクチャ恥ずかしいんだけどな、何でつぐみが慌ててるんだ？

「ん、それであたしは華道もバンドも辞めるつもりはないから！今月末にあるガルジヤムで結果を出してお父さんに認めさせてあげよう

と考えてる…みんなはどう？」

「すごくいいと思うよ蘭！私は賛成、ライブも出来るし蘭の問題も解決して一石二鳥じゃん！」

や、まだ解決とか以前にまず認めるかわからんだろ。

「そうだな、ひまりの言う通りアタシも賛成だ」

「意義なくし」

「やろうよみんな！わ、私も頑張るし蘭ちゃんのお父さんにも認めさせていこっ！」

「ったく、昨日言ってくればこんな事にはならなかったんじゃないか？」

「あたしの問題でみんなを巻き込みたくなかった…だから」

「もー蘭は一人で背負いすぎなんだよーモカちゃん達を少しは頼りたまへ〜」

「モカ…そうだね」

「よかったあ、昨日はどうなる事かと思っただから…」

「つぐみも心配かけてごめん」

「ううん！蘭ちゃんがそんな事になってるのに、気が付かなかった私達こそごめんね」

「よーし、じゃあ月末のガルジヤム向けてがんばろー！えいえいおー！」

「「「……………」」」」

「そこは乗ってよね!!？」

「あっははは!!ひまりはそーじゃなきゃな！」

「巴ひどーいー！」

みんなの笑い声が聞こえてきている中、俺は…

また、泣いていた。

はあ

どうしてあいつらを見てると

喧嘩別れ(一方的)した詩音の事を思い出す。

「俺も前を向いて進まなきゃな、つまらん意地張らずにな」

だけど羨ましいよ

喧嘩しても、すぐに仲直り

こっちはどうなるかわからないのにな。

## 笛吹き少年は青薔薇の棘に刺さった

Afterglowの仲直りは簡単に終わり、巴はパジャマ姿だったのですが家に帰っていった。

そして涙目になっていた俺はみんなに気付かれないように涙を拭いてそっと部屋を離れた。

「それで蘭く昨日はお楽しみでしたかのー？」

「わ、わ、わ…私もそれ気になってたの！そ、それで志吹くんとはどうしたの蘭ちゃん？」

「……!!、言えない!!絶対にこれだけは言えないから!!」

「蘭く顔真つ赤だく」

「やっぱり何かあったんだ…」

「けどおかしくないよ？舞衣ちゃんが居るんじゃないの？」

「舞衣はいないよ。明日帰ってくるって志吹が言ってた」

「えっ…!!?そそそそそれって昨日二人つきりで過ごしたことだよね!?!」

「つぐ動揺しすぎだよ…」

「いや〜これは由々しき事態ですな。さあーて蘭く、昨日しーくんと何があったか洗いざらい話して貰いましょうぞ〜」

「ちよ、やめ…」

モカが蘭に近づいてきていて、つぐみも少し照れながらもただモカに続いている。

「モカにつぐみ、二人とも何やってんのさ？」

「しーくんだく」「志吹くん！」

俺が目の赤みを消した後リビングに戻ったら、何かモカとつぐみが蘭に迫ってるから何事かと？

「ひまり、説明してくれるか？」

近くにいたひまりに聞いてみたが。

「わたしも志吹くんに聞きたいな、昨日蘭と何があったのかをね？」

「昨日？んー、特にないが？」

「本当に？」

「ああ、蘭は夕飯食って風呂入って、すぐに舞衣の部屋にいったしな」  
「……………」

蘭のやつは何も言ってこないが、その後の事は伏せた方が懸命だな。大方この三人はそーゆーの聞きたいんだろうし。

「本当に何もなかったんだあ」

「……………」

モカとつぐみは何も言わないが、こりや信じてないな。

「それよりもさ話ついたらんなら、これから蘭は帰って親父さんを説得するのかが？」

「そのつもり」

「だったら巴はまた来るんだろう？その時に行かないとな」

「うん…」

数分後、私服に着替えていた巴が帰ってきて、みんなで蘭の家に向かった。

――

蘭は親父さんを説得する為、一人で行った。俺たちは玄関前で待機



してるのだが。

「うう…緊張する……」

「いやなんでひまりが緊張するんだよ」

「だって、蘭一人で行かせちゃったから心配なんだ、よ」

いつも明るいいひまりが緊張のせいでもとても暗い表情だ。

「私もひまりちゃんと同じだよ。す、凄く緊張してるよ……」

つぐみもさつきからお祈りするようなポーズをとっている。

「……」

「巴は平然としてるな」

「いや志吹、アタシも緊張してるよ」

「マジか」

巴までとはな。

「すーぴー」

え？・モカさんよ、何しとるん？

「おいモカ……！人の家の玄関前で寝るなよ！」

寝てるし、しかも立ったまま。

「モカは…朝早かったから眠いんだな」

「うみゆ、そくだよ…どっかの誰かさんが起こすからモカちゃんはおねむなのです」

「悪いなモカ、でも普通そうするだろ？」

そりやそうだ。

「今更だけどき、俺までついてきてよかったのか？」

なんせ俺は幼馴染でもなんでもないしな。

「いや、蘭を泊めたからもう十分当事者だろ」

「そっか、ありがとな巴」

「何言ってるんだよ、礼を言いたいのはこっちなんだぜ志吹」

「そうだよ！蘭の事で色々とありがとうだよ志吹くん！」

「そ、そうか？」

「しいくん？蘭は人に頼ることなんて滅多にないんだよ？きつと蘭はしいくんの事信用してるんだよ。つまり〜」

「俺の事、仲間みたいに思ってるって事、なのか？」

「まーそんな感じだね〜」

「ああ、志吹はアタシ達 After glowの一員みたいなもんだな  
！」

「うんうん」

「そうだよ、私はもうずっと前から思ってたよ」

「モカ、巴、ひまり、つぐみ…ありがとな」

なんか嬉しいな、こんなのは初めてだよ。なんだろうな、この感情は？なんだか暖かくてふわふわしている気分だから、後で笛を吹きに神社に行こつと。

「そろそろ30分経つね」

「そんな経つのか!？」

「だ、大丈夫だよね…?」

「ひまりちゃん…大丈夫だよ!」

つぐみよ、俺は知ってるぞ。足が震えてるのをな？

「あ、蘭が来たよ!」

「みんな…ずっと待ってたの?」

30分くらいな。てか蘭、その目は…?

「ど、どうだった蘭?」

「……………」

「ら、蘭ちゃん…?」

「…ガルジャムに来てくれるって」

「ほんとか蘭!？」

「うん、説得するのに凄く時間かかっちゃって皆には心配かけちゃったね」

「よかったあ…」

つぐみはその場に座り込んでしまったよ。

「つぐ大丈夫!?! って…実はわたしも緊張しちゃって」

ひまりまでもか…

「蘭く少し目と顔が赤いのはどーしてー?」

「少し、熱くなっちゃったから。それと…」

「それと?」

「それについては私が話そう」

「父さん、いつの間?!」

玄関口に蘭の親父さんが立っていた。眼鏡をして黒い和服がよく似合っていて随分若く見える顔立ちだなあ。そして何故か俺を見ていて。

「君が神子くんだね？君にちよつと話があるのだけど、いいかい？」

「え？あ、はい…なんででしょうか？」

「君が蘭を泊めたのだね？」

「はい、そうですか？」

「…ちよつと君と二人きりで話がしたい。付いてきてくれ」

「わかりました。じゃ行ってくる」

「…(頑張って!)」

俺は蘭の親父さんに付いて行って家の中に入っていった。といっても家の玄関の中だけだな。

「まず君にお礼を言わせていただきたい、昨日蘭を泊めていただいてありがとうございます」

「い、いえ！昨日の蘭…さんはちよつと落ち込んでましたといいますか、平気そうではなかったのです」

本当は蘭からだったんだが、ややこしくなりそうだから改変してこう。

「そうか、やはり蘭は…」

「？」

「すまない、あの四人とは昔なじみなのは知っているが、男の友達は聞いているからな。君は蘭とは知り合ってどれくらい経つのだ？」

「一ヶ月、ちよつとですが…あの、それが何の関係が？」

「いや、何でもないよ。蘭の話で君が出たから気になっただけだよ」

「はあ…？」

「ありがとう神子くん、これからも蘭とは仲良くしてやってくれるかね？」

「ええ、それは勿論です」

「話は終わりだよ。神子くん、月末にまた会うのを楽しみにしてるよ」  
「…それはなりよりです」

蘭の親父さんか…、厳格そうに見えて優しくそうな人、なのか？

「志吹、父さんは何て言ってたの？」

外に出ると蘭が待ち構えていた。後ろにみんないたけど。

「昨日の事でのお礼とまた会うのを楽しみにしてるぐらいだよ」

「そう…」

その後みんなで俺の家で昨日の夕飯だったのを昼飯にしている、その後昨日の練習を再開した蘭達。そして俺は…

—————

ライブハウスCIRCLE受付の前に俺はいた。

「いらっしやい…って神子君だよ？随分と久しぶりだねえ」

受付の人、月島まりなさんがそう言うが本当に久しぶりだな。 15  
話振りだろうか？

「友希那ちゃんから話は聞いてるよ、そこの3番スタジオだからね」  
「ありがとうございます、まりなさん」

「蘭ちゃんの次は友希那ちゃんかー、やるねえ神子くうん」

まりなさんが何か言ってたが無視してスタジオへと向かった。

「それにしても友希那は突然『志吹、急で悪いけど昼1時にCIRCL Eに来れるかしら。私達Roseliaの演奏を聞かせてあげるわ』と来たからな」

蘭達は地下室で練習しているし、俺は神社で笛吹こうと思っていたんだが、通り道だし友希那達の演奏を聴いてからその後でもいいかって承諾してしまったよ。

「ここが3番スタジオか、まずは…」

ノックしてリサっぽい声が返事してくれたので入った。

「やつほー志吹」

「志吹、遅いわよ」

「えっ…神子、さん？」

友希那とりサのの真逆な挨拶は無視して奥に目をやったら、見知った人物がいた…てか全員。

「紗夜さん？それにあこちゃんにりんりんさん？」

「あー！神子さんだー！」

「ど…どうも…です」

「あら、紗夜もあこも隣子も志吹と知り合いだったの？」

「まあ、知り合いというか、ねえ…」

あこちゃんとりんりんさんは知り合いと言えるのか？友希那とりサと紗夜さんに大雑把にだけど説明した。

「ふうん、志吹って太鼓も出来るんだ。ドラムの経験もあるの？」

「全くございません」

「無駄話はいいわ、それより始めましょう」

友希那はそう言って、ステージのほうへ行った。

「待つてよ友希那ー、まずアタシ達のパートの説明からしよーよ☆」

「そうね、忘れてたわ」

「助かるよりサ」

俺はRoseliaも知らないからな、リサの配慮は助かる。

「Roseliaのボーカル、湊友希那よ」

「同じくRoseliaのベース、今井リサでーす☆」

リサはベースか、しかもめっさ赤い。

「ギターの氷川紗夜です」

紗夜さんは青いギターか。

「ふっふっふ…我が名は深淵よりも深き闇から誕生した墮天使……ドラムの宇田川あこです」

「……キ、キーボードの白金、燐子……です」

一通り自己紹介とパートの説明を終えて、とりあえずあこちゃんが何言ってるかわかんないし、りんりんさんもかなりキョドってるし大丈夫なんかな？

「それじゃ、始めるわよ」

え、もう？俺の自己紹介は…いらんか。

「いくわよ、『BLACK SHOUT』」

あこちゃんのカウントで演奏が始まった。

………

そして、終了した。

「ふう、どうかしら志吹？」

「………ひとつ、質問いいですか？」

「構わないわ」

「Roseliaって、結成してからどれ位なの？」

「半年も経ってない、かな？」

「ちなみに友希那とリサ、あこちゃんとりんりんさんは昔から知り合  
いでよろしいのですか？」

「は、はい…」

「そうだけど、言ってなかったっけ？」

聞いてないわ！それよりもこれは、なんというか…

「それで志吹、感想を聞きたいのだけど？」

「………」



友希那は急かしてきてるけど、紗夜さんの表情が暗い。やっぱりわかってるんだな、Roseliaの問題を。

「先に言っておきますけど、俺はバンドに関しては素人ですよ?」

「ええ、わかってるわ」

「じゃあまず友希那は、歌については凄いの一言しかありませんかな。正直これだけで売れるんじゃないかと」

マジで圧巻だわ、蘭より数段上手い。てかプロの歌手顔負けじゃない?」

「ありがとう」

「次にベースのリサだけど…バンドの用語がよく知らないからちよつと間違ってるかもしれないけど、最初のパート?での演奏と歌にズレがあったような気がしましてね」

「えっ?」

「その曲は初めて聞いたので、わからないけど…俺には違和感しかなかったから」

「その通りよりサ」

「あちやく、またやっちゃったか」

友希那にも言われてしまって、落ち込んでるリサ。

「で、次に紗夜さんですが」

「は、はい!」

「紗夜さんは特にはないですね。ミスもなく淀みもなく、理想の形ではないでしょうか?」

「ありがとうございます」

本当に無駄がなく、面白味はないけどね。

「それでお次はドラムのあこちゃんは」

「ふっふっふ：私の演奏に一寸の狂いもなし」

「ありまくり、てか姉妹揃ってドラムだけ走り気味よ」

「うう：む、無念じゃ」

「あ、あこちゃん：しっかり！」

項うなだ垂れたあこちゃんをりんりんさんが支えている。

「えっと、最後にりんりんさん、いいですか？」

「……は、はい……」

なんかめっちゃ怯えてるんですけど!?!言いづらいな。

「その、キーボード特有なのか知らないですけど、音ですかね。何かに怯えていませんか？遠慮といいますが、なんていいますか分からないんですけど」

「……!?!」

「すみません、俺も何言ってますかわからないですけど」

「い、いえ……」

感覚なんだよなあ、これって。そういえばつぐみの時は何て言っただっけ？

「それで、全体を見ますと凄く上手く感じますよ。ですけど……音が合っているようで合っていないと、俺は思うんです」

「!?!」

やっぱり紗夜さんはわかってたか。

「友希那とりサ、あこちゃんとりりんりんさん、それぞれ音は合ってますよ。ですけど全体としてはそう聞こえないんです」

「志吹、貴方どれだけ耳がいいのかしら？」

「一応、和楽器とはいえ音楽に関わって長いですからね。嫌でも耳はよくなりますよ」

「神子さんは絶対音感を持っているのですね」

「多分、そうだと思いますよ。以前にA f t e r g l o wのを聴いていても聴き分けられましたし」

バンドの楽器を生で聞いたのもそれが初めてだったしな。

「紗夜、どうして私が志吹に演奏を聴かせたか、これでわかったでしょう？」

「そうですね、私も神子さんでしたらいいと思います」

「あこも賛成です！是非神子さんにあこ達の」

「それは私から言うわ、志吹…貴方、私達R o s e l i aのメンバーになる気はないかしら？」

「……はい？」

えっと、何言ってるのかな、この人。

「友希那、ガールズバンドの意味わかってますか？」

「問題ないわ、女装すればいいじゃない女顔だから問題ないわよ」

「……馬鹿にしてるんですか？」

「馬鹿にしないわ、私は本気よ？」

「女装はともかく、神子さんの感想のおかげで私達に何が問題かわかった気がします。私としても神子さんがメンバーにいてくれますと助かります」

紗夜さん、貴女もですか。

「わ…私も…神子さんに…入って貰いたいです…」

「あこも神子さんに入って貰いたいですけど、お姉ちゃんのバンドに

もう入っちゃってます?」

「いや、入ってはないけど…みんなには悪いけどこの話は無かった事  
にしてくれますかな」

「どうしてかしら?理由があるのでしよう?」

本当の事はとても言えないからアバウトに説明するか。

「友希那達Roseliaに何か目標があるのでしよう?さっきの曲  
の歌詞で何となく想像つきますが、それにその歌詞は俺にも同じこと  
が言えます。つまり俺は目的を果たすまではバンドとかには入るつ  
もりはありません。それは蘭達Afterglowにも同じ事を言  
うつもりです」

最近何もしてないのは内緒。だって奥州の神職サミットで羽丘神  
社の関係者いないんだもの。

「どうしても駄目なの?」

「駄目です」

「わかったわよ。美竹さんにも入らないならしようがないわね」

「わかってくれて何よりです」

「だけど、また私達の演奏を聴いてくれるかしら?」

「…たまに、でしたら構いませんよ」

「いいわ、それで構わないわ」

「友希那…」

「湊さん…」

頻度はわからないが、たまに聴く位だったら問題ないよな?

青薔薇のRoselia、夕焼けのAfterglowか。似てる  
ようで全く違うバンドとはね。CIRCLEを後にした俺はそのま

ま羽丘神社に向かっていった。

「さて、夕方は笛吹きまくるぞ……！」

気合いを入れるのであった。

笛吹き少年は修羅場とは無縁ではなかった

「それじゃ、俺はこれで失礼しますね。あと生意気な事言つてすみませんでした」

「にやはは！アタシも他のみんなも生意気なんて思つてないよ、ありがとね志吹くまたアタシ達の演奏を聴きに来てね☆」

「その、まあ暇でしたら…では」

彼がスタジオから出ていくと

「……………っ！」

「友希那、どうしたの？」

リサが友希那を心配そうに声をかける。

「悔しいわね。私たち Roselia をあそこまで言われて、今になってショックを感じてしまうなんてね」

「湊さん…」

「それに、私達の音が合っているようで合っていないとはどういう事かしら？あこと燐子、私とリサは合っていると聞いたけど、私には何の事かわからないわ」

「あこもそこはわかりませんでした。りんりんだけだつて言われなくても…？ねえ、りんりんはわかる？」

「ごめんねあこちゃん、私もよく…わからなかったから」

「だよー」

「……………」

「紗夜？」

「紗夜だけがアタシ達みたいに合つてるとは言われなかったよねー。もしかして紗夜は何かわかつてるの？」

「……………確証はないのですが、きつとこの事だと思います」

紗夜は思っていたのをみんなに説明をした。

「……………技術だけではなく、協調性と音楽を楽しむ?」

「はい。神子さんは抽選的にしか言いませんでしたが」

「音楽を楽しむ余裕なんて私にはないわ、仮にそれが私達に足りないとしても何だというのかしら」

「……………」

「(志吹、私は貴方が必要よ。だから絶対に諦めないわ)」

――

「ふう、少し休憩つと」

俺は羽丘神社の境内で笛を吹いていた。バイトらしき神社の関係者から顔を覚えられて自由にやっていいよと言われた。

「遥さん大丈夫なのかな?あの人、学生じゃなさそうだけど、もうどれくらい戻ってないんだ?」

疑問に思いながらも答えはわからない、それに。

「友希那、あいつは俺の言った意味を理解しないだろう。それにあのままだと確実にメンバーと問題起こすのは目に見えている。それに対して蘭達は違う、かもな?」

RoseliaとAfterglow、似てるようで真逆だ。

「休憩終わり、だけど帰るか」

俺は羽丘神社を後にした。

神社の建物から黒い服を着た人が数人居たのを俺は気が付かなかった。

「こちらA、対象の観察完了した」

「了解、こころ様に報告だ」

「――」

「おかえり志吹くん！」

「つぐみただいま…って何だ、もう練習終わりか？」

俺が家に帰るとAfterglowのみんながリビングにいた。

「モカがな…」

「モカがどうしたんだ？」

巴が奥のほうに指を指すと…

「ぐうぐう」

ソファーの上でモカが横になって寝ていた。

「練習の途中でモカが船漕ぎ始めていき、途中で切り上げらこの有り様だったんだよね」

「あはは…モカちゃん朝早く起きてたから眠かったんだよ」

「あー…」



蘭の事でモカは早起きしてたしな。そして遂にガス欠したわけか。

「起こすのもなんだし、このままにしておいていいか？」

俺はそう提案すると蘭は

「モカの事よろしくね志吹。あたし達はもう帰るから」

そう言つて蘭はリビングから出ていくと

「志吹、モカに変な事すんなよ？」

「するかっ！」

「まあまあ巴、志吹くんを信じてあげようよ」

ひまりが俺のフォローしてくれている。

「……………」

「つぐみ？」

「志吹くん、私は残るね。ちよつと話したい事があるから」

「…ん？」

つぐみが俺に話？…なんだろう。

「おつ、つぐがツグってますかな？」

「(バカひまり！志吹に聞こえるだろ)」

どつちも聞こえてるわい！俺の耳は凄く遠くまで聞こえるからヒソヒソ話も余裕で聞き取れるんだよなあ。

「じゃ、じゃあ志吹またなー」

「お邪魔しましたー」

ひまりも巴も出ていくと、ここにいるのは俺とつぐみ…そして寝てるモカだけになった。

「それでつぐみ、話って何だ?」

俺はつぐみに聞こうとすると奥から…

「おはよろしくん、つぐ」

モカが起きてきた。

「モカちゃん、絶対狸寝入りしてたでしょ? 起きるタイミングが良すぎるよ」

「……なんのことがモカちゃんにはわかりませーん?」

いや、昨日もやってただろ?

「でもモカちゃんも志吹くんに話、あるよね?」

つぐみが少し怒ったようにモカに聞いたです。

「あるといえはあるね、でもつぐと同じ内容っぽいけどね?」

「私と同じ…?じゃあ同時に言わない?」

「いいよ」

何なんだよ。

「じゃあモカちゃん、言うよ…せーの」

「昨日蘭(ちゃん)と一緒に寝たでしょ!?!」

二人同時にハモって同じ台詞を言いおった。だけどマズイ、ここは誤魔化さないと…

「あ、あのな？朝も言ったが蘭は舞衣の部屋で寝ていたって……」

「嘘」

「えっ……つぐみ？」

つぐみがなんか変だ、いつものつぐみじゃない。

「さっきしーくんの部屋を物色…もとい入ったらベッドにこんなのを発見したんだよね？」

そうやってモカは俺にそのブツを見せてきた。

「赤い、髪の毛…これが蘭の赤メツシユだと言いたいのか？」

あの大馬鹿クソ赤メツシユが!! 決定的な証拠残してるんじゃないーよ!!

これはもう観念するか。

「……はあ、そうだよ。昨日舞衣のベッドは固くて寝れなかったから俺のベッド使ったんだよ」

「…それで志吹くんはどこで寝たの？」

「蘭が一緒になって…しまった!!」

「やっぱり!!」

やっぱり探る為の尋問かよ!

「もう全部話すよ、昨日蘭がベッドで俺はソファで寝ようとしたら

蘭から一緒に寝ようって言ってきたんだよ。だけと何もなかったからな?。」

もう全部話しちやおう。蘭も悪いんだからな?

「本当に?何もなかったんだあ…。」

「つまらないー」

良かった、信じてくれたみたいだ。

「信じて貰えて嬉しいが、ひとつこっちからも聞きたい事があるけど、いいか?。」

二人とも頷くと

「人の許可なく俺の部屋に入るとはどういう見だ?んー?。」

「あつ…!?!」

「モカちゃんは糸の切れたパンのように飛んでいったのでく行き着く先がしーくんの部屋だったのだく」

モカは凧かよ!全く…

「それでしーくん、あの壁に描かれたのはババンボ様く?。」

「違う、てか何だよババンボ様って…。」

とにかく蘭と一緒に寝たのがバレたが、モカとつぐみが俺の許可なしに部屋に入ったのでお互い様って事で決着がついた。…のか?」

「そんじや、しーくんまたねく」

「明日私はお店の手伝いだから、もしよかったら来てね?…またね、

志吹くん」

「ああ、二人とも気を付けて帰れよー」

二人を帰して、俺は一人になる。

「……………なんか久しぶりに一人だな、さてと……夕飯の準備に取りかかるかな」

こうして、長い一日が終了した。

—————

『ん……………な……………い！』

ん……………？

何か聞こえる……だけどまた何も見えないし体も動かさない。

また夢を見ているんだな、この声は誰だろう？

『ごめ…なさい！』

ごめんなさい？ どういうことだ？

『謝る必要はないよ、君は何も悪くない。それに元々これは私達が受ける筈だったからね』

父さんの声だ!? だとしたら少女みたいな声は誰なんだ？

『そうよ貴女は悪くないわ。だからここで起こったことは他言無用よ？ スタッフさん達にもキツク言っておくわね』

母さんまで…!!

『悪いのは私ですのに!! どうして…どうしてそんなにも…うつ、ぐすっ！』

少女の声が涙声になり、段々声にならなくなってきている。

『人を助ける為に自分の体も張る！それが私の…だからね』

そうだよな、俺も父さんの……を非常に尊敬しているんだよ。

『さあ、もう出るよ…白鷺千聖ちゃん』

白鷺、千聖？

姿が一瞬だけ見えた、ブロンドヘアーだけだったが。

どこかで見たような気がする。しかもつい最近？

「ん…」

GW最終日 朝八時

自分の部屋のベッドで俺は目が覚めると、さつき見た夢を思い出していた。

「父さん、母さん…どういう事だろう？」

俺は呪いの事は代々一族が受ける事になる風習があるとは聞いた。しかしそれは俺の一族とは聞いていない、確証がないし、詳しく聞くにも向こうは箝口令かんこうれいを敷いてるから聞けなかった。

だから関東の神職さんに情報を得ようとしたのも理由の一つだ。だがここは奥州サミットでないしな。それに…

「白鷺、千聖さんか…」

一度会ってみたいけど、どうやって見つけるんだ？ 有名人だったら

容易いけどなあ？

「悩んでないで、まずは朝飯にするか」

俺はベッドから出てリビング兼キッチンがある部屋へ向かった。

――

朝飯も終えて俺は一人考えていた。

「……………う〜くん？」

契約していた会社、NFOの新マップ『アマツ』の曲を作り終えたが、これでいいのか最終チェックをしているのだが…

「大丈夫、だよな？これでいいかわからないが送信するか」

こういうのは初めてで不安だ。でも出来は俺の中では満足してる。

送信してから数分、音楽担当者から返事がきた。

「なになに…一度改めてお会いしたい？」

そういえば担当者には会ってないよな、俺は今から会社に向かいますと返信して家を出た。

「そーいや今日舞衣が帰ってくるんだよな、まあ合鍵あるし大丈夫だろ」



――東京某区内の建物――

「お待ちしておりました神子様」

20代くらいの若そうな人が出迎えてくれて、そのまま会議室に案内された。

「急なお願いでございいただき、ありがとうございます。まず私は音楽担当者の藤村と申します」

そう言って年配そうな人、藤村さんは名刺を出してきた。こちらも挨拶を返した。

「それで神子さん本題に入ります。送られてきました音楽データですが一度開発者の皆様にも聞かせますのですが、宜しいでしょうか？」

「構いませんよ。あの、一つ聞きたいのですが送った曲は不満、でしたか？」

やっぱり駄目だったのか？だから一度呼んで駄目だしするつもりだったんだ。

だけどその考えは違った。

「いえ、その逆です。私が聞いた限りではその凄くいいと思ってます。正流石としか言いようがなくてですね……」

べた褒めだった。

「今までのNFOでの作曲担当はマップ毎に違う人でやっておりましたが、私が一瞬で良いと思いましたがこれが初めてなんです。ですからこれを開発者全員にすぐにでも聴かせてあげたいと思ひまして…そして皆様に神子さんを知って貰いたいです!」

作曲をここまで評価してくれるのは本当に初めてだ。そしてこの人は本当に…

「実を申しますと私は以前から神子さんのファンでした。コンタクト取れました人には感謝しかありません」

「自分のファン!? えっと…あ、ありがとうございます!」

俺はお礼を言うしか出来なかった、相当テンパってるかもな。

その後は開発者さん達が集まってきて、その度名刺を貰いまくった。

そしてプレゼン的な感じになったけど、開発者さん全員に称賛の声だった。

その後社長にも会い、NFO以外も依頼すると頼まれてしまった。勿論承諾したけど大変になりそうだなあ。

――

会社を後にして俺はもう昼前になりそうだしつぐみの店に行くことにした。

(カランコロン！)

「らっしやい！何握りましようか？」

「はい？」

店に入るとイヴがそんな掛け声をしていた。店間違えたかな？

「イ、イヴちゃん!?それはお寿司屋さんだよ！」

すぐにつぐみがフォローに入った。よかった…店間違ってた。よかった。

「あつ、志吹くん来てくれたんだ！」

「昨日来てくれと頼まれたしな、それにここは落ち着くしな」

「そ、そうなんだ…いつもありがとね志吹くん！」

つぐみは片付けの途中だったのか、お盆を持ってて厨房に行ってしまった。案内はイヴがしてくれた、いつもの厨房前のカウンター席だ。昼時なお客さんはあまりいない、大丈夫なのかここ？

「まあいいか、何を食うとするかの…？」

メニューと睨めっこしていたら、またお客さんが来たようでイヴが向かっていった。

「イラッシャイマセ！チサトさん、カノンさん！」

ん、チサトさん？…まさか、ね？

俺は入り口のほうに目をやった。

「……なんだ、前の時にいたあの二人、かな？確か花咲川の制服着ていて…」

そう、以前つぐみの店に来たときにいた二人、水色の髪をした人とブロンドヘアの人達だ。

「あらイヴちゃん、今日もバイトなのね」

「ハイ！夕方の練習前には上がりですから問題ないです」

「ふふつ、イヴちゃん大変だけど頑張つてね」

「ち、千聖ちゃん早く座ろうよ」

水色の髪をした人が催促している、そして俺と目が合う。

「あつ」

その人は俺に一礼してくれたので俺も返す。

「花音、知り合い？」

「ううん、違うよ。目が合っちゃったから。それに綺麗な人だなあつて」

「どんな人？気になるわね」

ブロンドヘアの人も俺を見ると…

「……んー？花音、あの人は男の人よ？」

また間違えられてたの俺! 今日俺の格好は普通にジーンズとメンズパーカーなんだけど？

「ふええ!! そうなの!？」

その人は大慌てで俺にお辞儀をしてきた。俺は苦笑いするしかなかった。だけど…

「千聖さん、花音さん志吹くんと知り合いなんですか？」

つぐみがやってきた。

「いえ、初めてよ。花音がちよつと失礼しただけよ」

「うう…」

「あはは、彼はよく間違えられますから…そうだ！」

つぐみが何かを思い付いたようだった。そして俺の元へ来て…

「志吹くん、みんなと一緒に食事しない？私も昼休憩で大丈夫だから」  
「えっ？でも向こうはいいのか？」

俺はつぐみにそう返すと。

「あら、私は構わないわ」

「わ、私もへ、平気です、うう…」

そんな訳で一緒のテーブル席に座ることになった。

「まずは自己紹介からいくわね。私は白鷺千聖、花咲川の二年生よ」  
「お、同じく二年生の松原花音です。さ、さつきは間違えてごめんなさ  
い…」

松原さんは大変申し訳なさそうに頭を下げた。

「だ、大丈夫ですよ…松原先輩。あ、俺は羽丘学園の一年生で神子志吹  
です」

俺が神子志吹って言うのと白鷺先輩がビクつと反応した。

「え…?」

そして青ざめてきていた…全身を震わせて。

「千聖ちゃん?ど、どうしたの…?」

「千聖さん…?」

つぐみと松原先輩が声をかけても反応がない。

「っ!!」

白鷺先輩は勢いよく席を立ってそのまま店を出て行ってしまった。

「千聖ちゃん!?!ええええっ!!」

「怯えていた…?」

つぐみの言う通り、怯えていた。

間違いない、あの人だ。

父さんと母さんに何をしたんだ…?

笛吹き少年は罪を償わせた

「っ!!」

私は何をしているのだろう

花音を置いていった事じゃない。ずっと探していた人物に会えたのだけど、予測もしてないタイミングでご対面してしまうなんて。

心の準備もなく、私がつた行動は最低だ…

その場から逃げ出してしまっうなんてね。

だって私は…

――

三年前、まだ中学生の私は一生拭い切れない罪を犯してしまった

女優の仕事でその時は関西で撮影があったのだけどスタッフさんの一人が心霊スポットを発見したとかでどこかに行ってしまった。

休憩中だった私はどういう訳か監督さんもその心霊スポットに行く気があったそうで、私も誘われた。

そこで断っていたら彼はきつと普通の生活をしていただろう。それを私は…

――

そこは神社の奥にある山だった。洞窟を発見したスタッフさんがカメラを持っていてそこに入ると監督は工具を背負って入っていた。

「ダメ元で言ったみたけどさ…千聖ちゃんはよかったの？」

監督が聞いてきたけど

「大丈夫ですよ、と言いたいですけど…ここって立ち入り禁止ではないのですか？」

照明カメラを持ったスタッフさんを先頭に私と監督は会話をしていた。

「書いてなかったし大丈夫じゃないの？」

「そ、そうですか…」

少し奥に進むと階段があった。明かりがカメラのライトと監督と私の懐中電灯しかないからかなり暗い。

「千聖ちゃん、暗いし滑りやすいから気を付けてね」

先頭に行くスタッフさんが注意を促してくれたけど私より監督のほうが…

「うわっ！」

ほら、やっぱり滑ってしまった。

「いてて…君、俺には何もないのか？全く…」



ぶつくさ言いながら先へ進む監督、それに続くスタッフさん。

階段を降りた先には明かりがあつた、なんで？

「ええ…？」

カメラさんがな怪訝けげんな声を上げると…

「大広間だな、何だよここは？」

監督まで不可思議な物を見た顔してる、確かにここはドラマでも見た事はない。

「私…怖いわ」

もう帰りたいかつた。

「いや、奥に何かありそうだから俺たちは行くけど

千聖ちゃんは帰ったほうがいいかな？」

「そうしますね」

私は帰ろうとして後ろを振り返ると

「きゃっ！」

「そこで何をしている!!」

階段前に誰か来ていた!? 私は驚いてそこから逃げて監督の所まで走っていった。

「ちよちよちよ! もう見つかったのかよ! いくらなんでも早すぎだろ

!？」

「ひよつとして監督、センサーか何かあったんじゃないすか？」

「知らねえよそんなもん！とにかく逃げるぞ！」

私達は奥の方へ逃げていったけど、大きな広間でも先は行き止まりだ。

「ちっ…広いだけで何もねえじゃねえか！何が心霊スポットだよ」

「そうですね、とんだガセネタを掴まされましたよ」

監督とスタッフさんは帰っていききました。声のした人はこの神社の関係者だったので怒られてましたけどね。

この時、私に何かを取り憑かれたような感触に見舞われた。そう…これが悲劇の始まりだった。

「きゃっ！何か寒気が…」

そして体が動かなくなった。

「…?!いけない、このままじゃ…！」

そして笛の音色が聞こえてきたけど、私はそこで意識を失ってしまった。

……………

「まだ早かったな…これは」

「でも、そうしなければあの子は…」

話し声が聞こえている、まだ少し意識は朦朧もろろとしてるけど会話は聞こえる。

「あの子が立っていた所がまさに先祖代々封じられていた呪いの祭壇だったとはね…親父には何も聞かされてなかったから知らなかったよ」

呪い…？

「そもそもこの存在はあまりよく知らないしな

神子神社の神主やってるのになあ、勉強不足だよ」

「そんな呑気な事を言ってるので、気絶してるあの子の事はどう説明する気なの？」

「そうだな…」

「どういう、こと…ですか？」

「!?!」

神職衣装を着ていた夫婦は驚いた。

「や、やあ起きたんだね。えつと…」

「白鷺、千聖です。あ、あの！私はどうしてここで…」

「私はこの神社の神主をしている神子雅之かみこまさゆきだ」

「同じく巫女をやってる妻の幸さいちです。貴女はさつき境内で撮影していた女優さんかしら？」

髪を長く結った神主さんと、お揃いの髪型をした巫女さん、この二人は夫婦だ。

「は、はい……そうです」

思わず答えちゃったけど、そんなのはどうでもよかった。だからそ

の人は表情を強張らせていた

「君には残酷な話になるけどね」

「はい…」

この話を聞かなかったら私はきつと…

「君が立ってた場所はね、祭壇なんだ。そして私の先祖代々がその場所を管理していたね」

「……」

私は黙って話を聞くことにした。

「それでここからが大事なんだ、その祭壇から悪霊…といったほうがわかりやすいかな。それが出てきてしまったんだ」

「!?」

じゃああの寒気はまさか…!

「でも大丈夫だよ、君には何も影響ないからね」

「それって、どういう事…ですか？」

私の質問に神主さんは、とても言いづらそうに答えた。

「君に振りかかる呪いは私達に移っただけだから安心してくれていいんだよ」

「え…?」

それって、身代わりになったって事?でもどうやって…?

「その疑問は笛にあるんだ、我が家系に代々伝わる旋律で君の身代わりになったと言う訳さ」

「そんな…」

私のせいで…こんな事って……

「うっ…、ごめんなさい…!!」

私は泣いてしまった。

「謝る必要はないよ、君は何も悪くない。それにこれは元々私達が受ける筈だったからね」

「そうよ貴女は悪くはないわ。だからここで起こったことは他言無用よ？スタッフさん達にもキツク言っておくわね」

「悪いのは私ですのに!!どうして…どうしてそんなにも…うっ、ぐすっ…」

駄目だ、もう声にならない。

「人を助ける為に自分の体も張る！それが私の信条だからね」

「はあ…あなた、カッコつけすぎよ？」

「むう」

何て呑気な会話なんだろうか？

「さあ、もう出るよ…白鷺千聖ちゃん」

「はい…っ…」

その日の撮影などとても出来るわけもなく、監督やスタッフさんは撮影中止して打ち切ろうとしたらしいけど、私の強い要望でなんとか全て終える事が出来た。

それから暇をみては関西へ、神子さん夫婦に会いに行った。

勿論呪いの事は聞かなかったし言わなかった。

志吹という息子がいる事、私の一つ下だつて。会つてみたかったけど本人は神事があるので一度も会えなかった。

…  
そして高校入学前に神子さん夫婦に会おうとまた訪ねて行ったら

…  
そう、呪いがついに神子さん夫婦の体を蝕んでしまったのだった。

呪いの正体、それは取り憑いた相手を数年かけて痛みと苦しみに苛まれ、最終的には死に至らしめるという。

しかも対象が亡くなると、それに近い血縁のに乗り移るといふ。

ある人物から教えて貰ったけど、あの人は何者なんだろうか？でもそんな事はどうでもいい。

私は彼の両親を殺めたのも同じだ。だから彼に会おうと何度も足を運んだけど彼について居場所も存在も親族関係者は誰も教えてくれなかった。

ある人は、まるで…ゴミを見るような目でこう言われた。

『もう私達の問題に部外者が関わるな！』

諦めるしかなく、私は帰っていった。だからこんな形で会えるとは思つてもいなかった…

「どう、したらいいのかしらね…私は」

羽沢さんの店から出て随分と走った訳ではないのに、商店街を抜けて、私の住むマンションまで来ていた。

「どうしたらいいとは、やっぱり白鷺先輩は…

俺の両親を知ってるのですね？」

「っ!？」

声をした方を向くと、どことなく雅之さんの面影と幸さんとも面影が似ている人物、神子…志吹くんがそこにいた。

「教えてくれますか、両親の事を」

彼の質問にどう答えればいいのかのさう、私のせいで彼の両親がああなあってしまったと言ったら…彼は

きつと私を許さない。

「……ここでは人目につくから、マンションの中で話しましょう。

私、そこに住んでるから」

「……わかりました」

――

俺はあの後白鷺先輩を追った、松原先輩はずっと狼狽えていたけどつぐみがすぐに追ったほうがいいと言ってくれてたから。

つぐみは先輩の事を知ってるのかな？

そんな疑問はさておき、店を出て先輩の姿がまだ見えたので走って追っただけ…あの人は一体何をしたのだろうか？

そして商店街を抜けてマンション前でようやく白鷺先輩は走るのをやめた。息を整えてから俺は話し掛けに向かった。

そしてそのマンションに住んでるから、そこで話すと言った。そ

して今、白鷺先輩の自宅にいる。

「……………」

「……………」

そして、やたら広いリビングでテーブルを挟んで俺と白鷺先輩が向かい合っているが…

「あの、白鷺先輩？」

俺がそう訪ねると白鷺先輩は先程からの怯え顔から更に怯えてしまった。

「っ……………ごめんなさい……………ごめんなさい！」

泣き出してしまった、やっぱりこの人は…

「私は……………とても許されないのよ、貴方の、両親を……………」

かなりの涙声で、しかも吃りながらだけどなんとか答えて三年前の事件の全貌を話してくれた。

「これが、全て……………よ……………ひつ、ぐすつ……………」

「……………」

正直、なんとも言えない感情だ

俺の両親は、白鷺先輩の身代わりとなって呪いを受けたとは言ったが…確かにそうだ。あそこで身代わりとならなければ白鷺先輩はもう生きてはいないだろう。

だから父さん、母さんは…それにいつかその呪いは受けてしまうの



だから少しばかり早くなっただけだと思う。  
だったら俺の取る言葉はひとつしかないよな。

「白鷺先輩」

「……っ、」

テーブルに顔を伏している先輩に声をかけた。

「俺は、許すも許さないもありませんよ。父さんも言ってたのでしよう？」

『人を助ける為に自分の体も張る！それが私の信条だからね』

「俺は父さんの信条を尊敬してるし、俺もそうしたいのですよ。仮に俺がその場に居たらきつと同じ事をしてると思いますし、気に病む必要もないのですよ」

「それに悪いのはそのスタッフさんでしょう？ですから先輩は被害者なんですから……」

「……………そ」

「そんな訳にはいかないでしょ!!私は、私は……!」

机にうつ伏してた先輩が突然起き上がって俺に向かってきた。

「私は……貴方の両親を間接的とはいえ殺めてしまったのよ?なのにな……どうして、どうしてそんな事を言えるのよ!!」

白鷺先輩が俺の胸ぐらを掴んでそう言ってきた。

「自己犠牲なんて……馬鹿な真似したせいで……!」

白鷺先輩はそのまま泣き崩れてしまった、俺の胸に顔を埋めてい

る。でもそこに笛があるんだよなあ。

「……………あつ…」

気づかれたか

「笛、なの？」

「ええ、俺も宮司ですから笛は常備は基本です。そして父さんが先輩にやった旋律も…俺は出来ます」

俺は父さんが白鷺先輩にやった旋律を説明した。といっても身代わりの旋律だけだね。

ただし、呪いの移りは深刻な影響を与えたらしく父さん母さんの死期がかなり早くなった事は言わないでおこう。

「まあ今さら説明しなくても察してましたよね。不思議な事ですけど、これは秘匿にしてくれますと助かります」

まあもつとも、神職関係者は周知の通りだろうけど。

「……………笛、何か演奏できるの？」

白鷺先輩は弱々しくだけど、俺に訪ねてきた。

「ええ」

「だったら、今やってくれる？」

突然そう言ってきたけど近所迷惑じゃないかな？

「心配する必要はないわ、この部屋周辺は誰も借りてないから……………お願い」

先輩はまだ涙目だけど

「…わかりました、では」

俺は立って白鷺先輩から少し離れて部屋の壁で演奏を始めた。

(そういえばさっきまでお互い近くにいたの意識してるのかな?)

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~

心安らかになる”野風”を演奏した。野の春とは違うよ?

「落ち着きましたか?」

程なくして演奏を終えて、俺は先輩に問いかけた。

「ええ…もう大丈夫よ。私の、三年間の…罪はまだ償えるわよね?」

「ですから、それは…」

「いえ、償わせて頂戴。じゃないと私は…きっと罪の意識に苛まれるの」

そこまでして…この人は。

「でしたら、夏に…俺と一緒に墓参りしましょう。場所は知らないで

しょう?」

「!!、是非お願い。それと、私の事は名前で呼んでくれるかしら。私も志吹って呼ぶから」

「ありがとうございます、千聖さん」

「お礼を言うのはこっちよ…志吹」

俺と千聖さんは固い握手をした。それは誓いともとれるかはわからないが。そして俺のスマホから着信がきていた、つぐみからだ。

「あー、つぐみが心配してくれていますね。戻りましょうか」

「ふふっ、そうね。花音も心配させちゃったし。お昼まだだったからお腹空かせてるかもね」

俺と千聖さんはつぐみの店に戻った。つぐみからは色々聞かれたし千聖さんも松原先輩から色々聞かれたらしい。

俺の両親と千聖さんが知り合いという説明をしてなんとかなったが、一つ問題が起こった。

「何で志吹くんは千聖さんって呼んでるの?千聖さんも志吹って呼んでるし」

「あっ…」

なんとか誤魔化すのには成功したけど、かなり怪しんでるなこりゃ。

そして何故か松原先輩まで名前で呼んでほしいと言われるし、今日会ったばかりなのに何でだ?

「それじゃ俺はこれで失礼しますね、千聖さん、花音さん」

あと連絡先も交換した、まあ千聖さんは後で必須だけど。

「つぐみ、また明日学校でな」

「う、うん…また明日ね。志吹くん…」

俺はつぐみの店を出て自宅に帰っていった。



「ねえ千聖ちゃん、これって…」

「何かしら彩ちゃん？」

練習の休憩中に、彩ちゃんがまたお得意のエゴサーチして何かを発見したのか、それを私に画面を見せてきた。

「なっ…！」

そこに写っていたのは私と志吹と二人で歩いている所だった。

「いつの間に…でも、問題ないじゃないの」

「ほんとだ、あの白鷺千聖と並んでる女性は一体誰なんだろう？とか書かれてるね」

彼の容姿が女性っぽくて助かったわね。でも本当に花音が見間違えるのも頷ける程に綺麗に見えるから。

「千聖ちゃん、神子くんと知り合いだったの？」

「ええそうよ」

「ふーん…」

「あ、ブッキーだ。千聖ちゃん、ブッキーと知り合いだったんだね」

もうエンドレスになりそうだから、休憩を終わりにして無理矢理再開させた。

――

自宅に帰ると鍵かけ忘れてのか開いていた。

「なんだ舞衣か」

「なんだじゃないでしょ？どこに行ってたのよ」

玄関先で舞衣が立っていた、随分久し振りに会った気がするよ。

「つぐみの店でお昼食べて、その後色々喋っていたからな、少し遅くなったんだよ。てかそれより舞衣こそ帰ってくるなら連絡くれよ」

全く、人の事言えた義理じゃねえな。

「わたしの事はどうでもいいのよ！それよりも話があるからちよつと来てくれる？」

舞衣はそのままリビングに向かっていった、俺も靴を脱いで舞衣の後を付いていった。

「三つ報告があるわ、近々わたしはここを出ていくから。でも花咲はそのまま通うけどね。単に部屋を探してくれるだけだからね？」

「ああ…それで次は？」

「……詩音がこちらの学校に転校して来るわ。いつになるかはわからないけど」

以前の俺は絶望しただろう、だけど紗夜さんのおかげでなんとか前向きに考えるようになったから今は、少しましに捉えている。

「……マジか、俺の事…何て言ってた?」

「待ってて、と一言だけ」

「そうか…」

……会いたくないんだけど。俺がどんだけ嫌ってるのかあいつは知らない訳じゃないんだがな。なのにどうして…?

「で、三つ目は?」

「ごめん、やっぱり二つでいいかしら?これって志吹にはあまり関係ない事だしね」

突然二つにされた、だけどな…

「いいよ、関係なくても教えてくれよ」

「はあ…志吹、覚えてるかしら。珠手ちゆの事」

珠手^{たまで}ちゆ?

「ああ…中学三年の時に全国模試で詩音と満点とつたヤツだろ?」

確かそんなだったな、俺は三位だったし。

「ええそうよ、その人が詩音と話していたのよ。そして口論になって…怒ってどっかいつちやっみたいなの」

「ふーん…」

「ふーん、って…まあわたしが報告する事はこれで全部よ」

本当に最後のはどうでもよかったな。

「それより志吹、わたし居ない間に部屋に入ったでしょ？」

「俺じゃなく蘭だけだな」

やっぱり何か仕掛けていたのか！

「蘭が？まあいいわ、あの部屋に志吹が入ってきたら警報が鳴るよう
にしてあるもの。でもそうか…蘭だったのね」

「……」

舞衣の意図不明な仕掛けをされて呆れている俺だった。

千聖さんが呪いの事を何でそこまで知ってるのか、後で聞いてみよ
う。

今日でGWも終わりだし、明日から学校だ！

笛吹き少年は説得をした

GW過ぎてからあわただしくなった。

まず舞衣がこの家を出ていった。近くに引越すから花咲川は通うのは辞めないとは言ってたが、それよりもこつちに来た理由を暴露してくれた事には驚きだ。

まあ最初から知ってたけどね、監視だって…

でも少し顔を赤らめていたのは何なのかわからなかったがな。

「それよりも今俺がやるべき事は…」

わからん！今は待つしかないな。遙さんもあれから何も音沙汰ないし心配だけど…

五月中旬

放課後、蘭達はまたCIRCLEでバンド練習に行ったみたいだ。月末のガルジヤムに向けて猛練習だそうだな、蘭の親父さんに認められる為とはいえ、無理だけはしないでくれよ？

俺はまた屋上で笛を吹く事にした、何だか習慣になってきたなこれ。

そしてまた待ち人に出会うのみな。

「……あら、志吹じゃない」

ほらね？今回は友希那だよ、廊下でだけど。

「帰る」

回れ右した

「あつ、待ちなさい！」

友希那が追いかけてきたので俺は逃げる！走って逃げる！
ダアーシューッシュー！！

「えっ？」

「わっ!？」

ウ○インボルト並みの速さで廊下を走ったのはいいが、廊下の曲がり角で出会い頭に人とぶつかってしまった。

お互い少しよろけただけで済んだけど、これは明らかに俺の不注意だ。

「いてて…あ、あの大丈夫ですか？」

「ああ、問題ないよ」

凜々しい声をあげたその人はそう言った、あつ…この人は。

「瀬田…先輩ですよね？」

紫色の髪に俺とほぼ変わらない身長の人、そして二年生の中で一番有名な先輩、瀬田薫。

演劇部に所属していて、その演技は誰もが引き込まれるとかでファンが沢山いるそうだし、その先輩に俺は何て事を……！

「そうだが、そういう君は神子志吹君だね？」

何でこの人が俺の名前を知ってるのだろうか？

「あの、どうして俺の名前を…?」

「ああ、それはだね…つと悪いが子猫ちゃん達が待ってるからこれで失礼させて貰うよ」

そう言つて瀬田先輩は行つてしまった。鼻が少し痛いけど帰るとする…あつ。

「やつ…と、追いついたわ…足、速いのね…志吹は」

友希那に捕まった、もう諦めるか。

体力無さすぎだろ友希那よ?

「全く、俺に何か用ですか」

正直今の友希那にはあまり会いたくない、どうせあの事だろうから。

「聞きたい話があるの、前に貴方が言った事についてだけど」

ほらな?

「私とりサ、燐子とあこは音が合ってるのは何となく分かる気がするのだけど」

一度間を置いて友希那は

「紗夜にだけは何も言わないのはどうして?」

…どこまでわかつてるのかなあ…この人は。だけど真意を教え

る訳にはいかない、それは自分の為にもならないし紗夜さんにも。

「あの時俺は紗夜さんにはこう言いましたよね？」

特になく、ミスもないと

本当に型通りすぎて逆に面白くない！自分の音ってのが全くないからね。真逆な日菜の音も聞いてみたいな、どれだけ違うのかを。

「それよ、私は紗夜の技術は凄いと思ってるのよ。でも最近は…志吹に聴かせる前からどうもおかしいのよ」

「おかしい？」

「ええ…紗夜らしさが無いの、音がどうも感じられないとも言おうかしら」

紗夜さんらしさが無い？という事だろう。

「志吹は紗夜の音には気づいてたのでしょうか？どうして何も言わなかったの？」

「俺は紗夜さん…いや、Roseliaの演奏を聴くのは初めてですから分かるわけがないでしょう、ただ型通りすぎるだけで…あっ」

しまった！つい言ってしまった…

「やっぱり…どうしてあの時言わないのよ！紗夜はあの日からずっと調子を悪くしてバンド練習を休んでいるのよ？…志吹、今から会いにいつてきなさい。これは先輩命令よ？」

はっ…

「はっ…」

「早く行きなさい？じゃないとこの事は美竹さんに報告するわよ？」

「な、何を報告するつもりですか…?」
「そうね、私に酷い事したとか…アドバイスのせいでメンバーが一人スランプになったとか」

最初のは嘘じゃねーか!でも俺のせいなのか?

「はあ…わかりましたよ。今から行ってきますよ、全く何で俺がこんな事を…横暴だ」

俺は友希那と別れて学校を出ていった。だけど…

紗夜さんどこにいるんだよ!?



「友希那!、志吹と何話してたの!」

志吹と別れてすぐにリサがやってきた。

「紗夜の事よ、今から会いに行つてきなさいって言っておいたわ」

「ゆ、友希那!?それって前に志吹が言ってたのが紗夜のスランプの原因とかじゃ、ないよね?」

「そうよ、だから命令して行かせたのよ」
「あちゃー」

リサは驚いていた、どうして?

「紗夜がどこにいるのか知ってるのかな？それに志吹は紗夜との連絡先もだけど」

私は何も告げてなかったわね。

「アタシから志吹に教えてあげとくよ、紗夜の連絡先」

「ありがとうリサ、助かるわ」

リサは志吹のＬＩＯＥに紗夜の連絡先を送ったけど

「すぐに返信きたよ。あつ…志吹、知ってたって」

取り越し苦労だったみたいね。

「でもさ、何で友希那は志吹にそこまで気に掛けているの？音感だけじゃないよね？」

「それは、わからないわ…私にも」

そう、わからない。何なのかしらね？

▽▽▽▽▽▽▽▽▽

リサからＬＩＯＥで紗夜さんの連絡先を教えてくださいましたけど、俺はもう既に紗夜さんの連絡先を知ってるって返した。

そして紗夜さんにＬＩＯＥで今どこにいますか？と送ったら今はファーストフード店にいるとの事だった。

紗夜さん学校帰りじゃないの？完全に買い食いだよね!!?

前もそうだったっけ。

微妙に苦笑いして紗夜さんのいるファーストフード店に着いた。

「紗夜さん…」

あまり食べる気は無かったけど、て〇たまセットを頼んで紗夜さんのいる席へ座った。以前日菜と一緒に座った場所と同じだ。

「!?神子さん、どうして…」

友希那に脅されてきたから、なんて言えたらなあ。

「まあ、食べながら話しますよ。色々ありますので」

「食べながら喋るのは行儀が悪いですよ」

いやアンタ何言ってるねん！その山盛りのポテト見てどの口が？

と、言えたら良かったが、そんなツツコミしてる場合じゃないんだよ。

「まずここに来ましたのは、前に俺がRoseliaの曲を聴いた日より前から紗夜さんは…調子を落としてるのですよね？」

「っ…！どうしてそれを!?!」

あ、紗夜さんのポテト食う手が止まった。

「友希那から聞きました、ですが俺は…」

「待ってください！神子さんはあの時言っていましたよね？私の演奏にはミスがない理想の形と」

「ええ、確かに言いましたよ」

「だったら！どうして？」

言うしかないのか、やっぱり。

「紗夜さん、少し…いえ、かなり残酷な言い方になりますけどよろしいですか？」

「ええ、構いません」

即答かよ！だったら言ってやるよ。

「紗夜さんの音、と言いますか…人には一人一人独自の音が出ているのですよ。友希那にせよ、リサもあこちゃんにせよ…りんりんさんもちゃんと出ていました」

「ですが、紗夜さんにはそれが全く無かったのです。まるで教科書通り、型通りのようにね」

紗夜さんは俺の話の黙って聞いていた、ポテトすら手をつけずに。

「ハッキリと言いますよ、Roseliaで音の調和がなってないのは紗夜さんが原因なんです」

「あの時紗夜さんは分かかってると思っただけですが、違ったようでしたね。紗夜さん…まさかとは思いますが日菜とはまだ…？」

「……………はい、まだ…日菜とは」

ヤバイ紗夜さん涙目になってるよ、あわわわわ…！

「紗夜さん、俺から言えますのは一つだけです」

て○たまバーガーを頬張って答えた。

「日菜は紗夜さんのをどう真似したって、それは日菜でしかない。紗夜さん自身のは紗夜さんしか絶対に出ない」

……我ながらブーメラン発言だどつくづく思うよ。

「……本当に、そうなんでしょうか？」

説得力ないから否定されるか。

「……少なくとも、俺はこれからはそうします。以前ここで話しましたよね？詩音の事です」

「覚えています、確か日菜と同類…いえ、同じでしたね」

言い直さなくても同じなんだけどね。

「そうです、その詩音が近いうちにこちらの学校に転校してくると思います。理由は…多分俺の事でしょう」

何でか知らないけど、俺と同じ学校じゃないと嫌だつて中学の時は駄々こねてたっけ。

「神子さんの？それは一体どういう事なんでしょうか？」

「分かりません」

本当に分からないからそう答えるしかない、紗夜さんはさつきまでの暗い表情から少しだけでも明るくなっていた。

ポテト食うの相変わらず早いよなあこの人、一体どれだけ好きやねん？

「少し話が逸れましたね、つまりは日菜は日菜、紗夜さんは紗夜さんなんですよ？それを絶対に忘れないでください。そして日菜とはちやんと…つとそれは俺もでしたね」

「神子さん…ふふっ、そうですね」

紗夜さんが笑うところを見るとは、堅物な人だと思ってたけど違うんだな。

――

紗夜さんと別れた後もう六時になるかという時間だった。ちなみに丸山さんとすれ違ったのは内緒、向こうは気づいてないし、紗夜さんはまだ店にいるからまた面倒な事になりそうだから声はかけなかった。

「……つぐみの店にいくか」

ハンバーガー食ったから胃が少し重い、口直しついでに珈琲でも飲もう。

羽沢珈琲店についたのはいいが…

「お帰りナサイマセ旦那様」

店に入るとイヴがまたふざけた挨拶をしてきた。

「オヤ、シブキサンではありませんか！ツグミさんはまだ帰ってきてませんよ？」

「普通にコーヒーを飲みに来ただけ…つぐみはバンド練習だよ」

何で説明いるのさ。

「それは失礼シマシタ！」

では、いつもの席へドーズ！」

俺のお気に入りに入りカウンター席に座るとリサから通知が来ていた。

『紗夜から連絡来たよ、なんか吹っ切れたってさ。志吹はどうやって紗夜を立ち直らせたの?』

と、きていた。簡単…じゃないがお互いに似たような立場だったからそれを説明しただけだよ、と返した。

今度は友希那からだ。

『その、紗夜の事でありがとう。私では出来なかったから…志吹、このお礼はいつか返すわね』

友希那…横暴だったけどな!もう少し頼み方ってのがあると思うぞ、と返した。

「さ、コーヒーとサンドイッチをたの…ん?」

俺は違和感に気づいた…鞆を見ると何か引つ掛かってる。これは…手帳?

鞆の紐の部分と手帳の紐が絡まってたみたいだ、でもいつこんなのが?舞衣がやったのか!?

俺は紐をほどいて手帳の中を見てみた。

「こ、これは…!?シェイクスピア?演劇の事と…ハロー、ハッピーワールド??」

何の事かさっぱりわからん。だけどその後のページをめくると、と

てもマズイような気がするが…

「好奇心には勝てんな、どれどれ…私は本当はザツハトルテより雑煮のほうが好きなんだよ、それによくシェイクスピアを理解してないのだ」

何だこれ？日記みたいだな。最後のほうに名前が書かれていた…

瀬田薫

と

ぶつかった時に引っ掛かってたのか。

「……………見なかった事にして、明日さりげなく落とし物箱にでも入れとこう」

そう決めたのであった。

笛吹き少年は昔話をした

『志吹、この旋律を完璧に演奏を出来るように頑張ってくれ。そうすれば私は安心してお前に託す事が出来る』

父さんの声？でも真つ暗で何も見えない動かせない。また夢か？しかし託すとは何だ？

『これはな…神子家代々伝わるものでな、音色も完璧にしなければ駄目なんだ。あとは』

『助けたいと思った人に迷わずやる勇気と優しさ。それも大事だが、己の心構えが足りないとまず成功しない。まずは献身を知る事だ』

献身？

『そうだ。…まずお前には大切な人を見つける事から先だな』

大切な人？俺にはそんな人はいない。

『忘れるんじゃないぞ？じゃないとお前には早く…呪いが…』

朝六時

「……………」

「父さん…忘れていたよ。でも大切な人か、俺にはそんな人はいないよ」

まだいないし見つける気もない。

「さて、朝食の準備と弁当を作らないとな」

俺はいつものように二人分の朝飯を作り始めた。

舞衣が毎朝こっちにやってきて朝食を食べに来ている。家出る意味あったのか疑わしいが、どうせ叔父が何か言ったんだろう。全く、どこまで嫌がらせすれば気がすむんだよ。

「そうになると舞衣はいい迷惑なんだな。無理矢理監視役にされてどう思ってるのだろうか？聞いてみるか」

程なくして舞衣がやってきたので聞いてみた。

「勘違いしないで貰えるかな？わたしから志願したから、監視」

「何だつて？」

「寧ろ詩音だけが反対してたわよ。あの子が監視役として行きたがつてけどね」

「やめてくれよ…でも結局来るじゃん。あいつは確か京都の名門校に進学してなかったっけ？」

倍率凄く高くて狭き門と聞いていたが。

「だからまずそこで結果を出してから来るみたいよ、早くて一年つて所じゃないかしら？」

いいよ来なくても、俺にとつては。でも昨日紗夜さんに言った事はちゃんとしないとな。

「そっか、一年か…」

夏に千聖さんと一緒に墓参りに行く約束したし、一度戻ってみるかな。

「まあ夏休みに一度両親の墓に行くからその時に詩音に会いに行こうかな」

「……やめたほうがいいかもしれないよ？詩音のお父さんは志吹の事は大嫌いだから」

「知ってる、でもついだよ。墓参りに行くのは俺一人じゃないしな」

「一人じゃない？…まさか志吹、Afterglowだっけ？その子達と一緒に行くつもりなの？」

舞衣が真剣な表情で返してきた。

「違う違う、千聖さんとだよ。どうせ舞衣は知ってるんだろ？俺と千聖さんとの接点を」

監視だから知ってるよな？

「千聖？…ってあの白鷺千聖なの!？」

「ああ」

何慌てるんだ舞衣のやつ？

「まあ問題ないかな、だってこんな写真が出回ってるのに何も問題になってないからね」

舞衣はスマホを操作して俺と千聖さんが一緒に歩いている画像を見せてきた。

「いつ撮られたんだよこれ…」

無音シャッターカメラか…これからは気配も気に配らないといけないな。

「下の方にスクロールしてみたらどう?」

舞衣のスマホを操作して下にスクロールすると

「……………」

またかよ、また女扱いされてるとか何だよ!

「一度女装してみたなら?絶対バレないと思うから」

「…………絶対にするか!!」

不愉快の朝食を終わらせ、舞衣も俺も学校へ向かった。手帳はちやんと鞆の中に入れたしな!

—————

「おはよ志吹」

「おはよう蘭…………眠そうだな」

教室で蘭が眠そうに挨拶してきた。

「いよいよ来週だから…ガルジヤムで結果を出す為に猛練習してたから」

「だからか…でもな蘭、あまり練習のやり過ぎは体壊すからそこを忘れるなよっ!」

「わかってる。父さんに認めさせる演奏をしなきゃいけないから。納得するまで十分に練習しないと」

「そうか…でも絶対に無理だけはするなよ?」

「うん…」

蘭のやつ欠伸をしながら言ってもなあ。

「授業中は寝てたほうがいいな、ノートとっておいてやるから」
「助かる」

そう言って蘭はそのまま睡眠に入った。

「ああ言ったし俺は要点だけをノートに書いておくか」

ノートにまとめている間、蘭は昼までずっと寝ていた。教師は何も言っていないのが不思議だ。

「午前中の授業全部寝たのかよ蘭は!?!」

屋上で昼飯の時に巴が呆れたように言ってきた。

「なんかモカみたい」

「それは俺も思った。てかモカも寝てたんじやないのか?」

「……すぴー」

寝たフリって事は凶星か。

「自主練してたから…夜遅くまで」

「もうするなよ、体調崩されて出れなかったら本末転倒だからな?」

「わかってるよ」

「あはは…」

つぐみも何か元気ないな。まさかな…？

放課後、俺はまたいつものように屋上に向かう…わけじゃなく生徒会室へ向かった。

理由は簡単だ、落とし物箱へあの手帳を届ける為だ！

「失礼しまーす」

俺は生徒会室に入っていった。

「志吹くん？どうして生徒会室に？」

つぐみが奥の机で書類作業をしていた。

「つぐみ一人なのか？ええっと…落とし物を届けに来ただけど」
「落とし物？それならこの書…」

そこでつぐみの言葉が途切れた。何故なら…

「つぐみっ!？」

地面に倒れそうになったつぐみだったけど
ギリギリのところまで受け止める事に成功した。

「つぐみ……つぐみ!!」

「……………」

つぐみから返事がこない。それに顔が凄く熱い…

「つぐみ、ちょっと失礼するよ」

俺はゆつくりとつぐみを床に下ろすと、首筋に手を当てた。

トン……………トントン……………トントン……………

「……………この鼓動はやっぱりそうだ、間違いない」

過労だ。

蘭だけじゃなくつぐみまで無理しやがって…!

全く、少し昔の俺と同じことをこいつらは……………

俺はつぐみを抱えて保健室まで運んだ。先生はいなかったの
でベッドにつぐみを寝かせていた。

「……………倒れるまでどんだけ疲れてるとか、笑えないよな」

俺は笛を取りだして演奏を始めた。

疲れをとるヒーリング音楽をな、でもこれは代償があるんだ。

「呪われし音楽集、其の参”うつしみひろう写身疲労”」

あの呪いを受けた時に習得した旋律だ、体に染み込ませるように覚えてしまったんだよなこれ。
ちなみに猫笛は其の十だ。

♪♪♪

演奏すること数分後、つぐみの顔色はすっかり良くなっていた。

「ふう、こんなもんかな」

俺は演奏を終えると笛を元の位置に戻して、部活で学校に残ってるひまりと巴にメッセージを送っていた。

「ん……あれ？私、どうしてここに？」

つぐみが目を覚ましたようだ。

「起きたかつぐみ。突然倒れたから心配したぞ」

「志吹くん!? あっ……そっか……私、生徒会室で」

「思い出したか？俺に落とし物用紙を渡そうとしてつぐみは倒れたんだよ」

そしてその後保健室まで運んだのもな。つぐみは恥ずかしそうに顔を布団に被せていた。

「うう……めんね志吹くん、迷惑かけちゃって。やっぱり駄目だなあ

私って…」

顔を赤くしたと思ったら今度は急に

「私ね、蘭ちゃんやモカちゃんみたいに上手くなくて、一杯練習しなきゃって思ってた…ここずっとね夜遅くまで練習してたの」
「……………」

やっぱりな、蘭といいつぐみといい……

「でも、全然駄目で努力しても上手くならなくて」

つぐみの目から涙が出てきていた。

「努力って何だろうって思うんだ、私は……努力しても何も」
「つぐみ、そこまでだ」
「えっ」

俺はつぐみの言葉を遮った。

「努力が実を結ばないって思っているのかつぐみは？」
「だって……！」

やっぱりな、つぐみは…少し前の俺なんだよな。

「ある人の話をしよう。これは実在した話なんだが」

俺は話し始めた。正直言っただ自虐に近いなこれは…

「関西のとあるところに、男の子と女の子がいました。その二人は従兄弟同士で大変仲が良かったです」

「二人は小さい時からよく遊んだりして、親同士も仲は良好でした。しかし二人の関係は中学に上がる前の年に変化が訪れます」

あの忌まわしき事件がな。それにしてもつぐみは俺の話を聞いてくれてるけど、何か変だ。

「どうしたつぐみ？」

「ううん……続けてくれる、かな」

「あ、ああ……」

よくわからんが話を続けた。

「男の子は両親が代々行っている式典や奉納の勉強をさせられました。元々勉強が好きな彼は嫌ではありませんし、両親の事を誇りに思っていました」

「しかし、彼は実技のほうは不得手でした。そこで女の子のほうは彼の実技を真似てみました。するとどうでしょうか！瞬く間に彼を追い抜き、大人顔負けになるほどになっていきました」

「……っ！」

つぐみはやはりそこに反応するか、そうだよなあ。

「そこからでした、男の子は女の子に向ける感情が変わってきましたのは。好きな勉強の方も実技同様に抜かれてしまい、大人達は彼女の方を囃し立てるようにしていきました」

「それでも男の子は挫けずに頑張り、頑張り……寝る間も惜しんで勉強と実技を練習していききました。その頑張りが大人達に認められましたのか分かりませんが、表舞台にようやく立たせてくれました」

「女の子の方は既に表舞台に立ち、大人と混じっていました。男の子は更に頑張りを続けています、寝食すら忘れて……」

「そして事件は起こります、男の子は中学二年生の時、祭典本番前に倒れてしまいました。過労と心労でした」

「……………」

ここから少し変えないといけないなこれは、まだ両親の事を話すわけにはいかないからな。千聖さんだけだな知ってるのは。

「当然親族からは軽蔑と失望されてしまい、両親もその後亡くなってしまう。しばらく疎遠だった女の子は慰めに来てくれましたのかは今は分かりませんが、ですが男の子はもう女の子の事を仲良くする気はなく、突き放してしまいます。そして男の子はついに言っていない言葉を言ってしまう」

『努力するだけ無駄だった！お前には何一つ敵わないし大人もみんな…俺の両親は…きつと！…………もう俺には一切構うな！絶交だ！』

「と、言い男の子は女の子とは別の事に取り組みました。料理、遊戯、作曲など幅広く」

今に繋がるとは思わないが、これもまた一つなんだよなあ…それと結局呪いのせいで笛だけはやらないといけないし。

「男の子にとってそこから中学卒業までとても辛く、キツイ日々でした。しかしある人物は彼にこう語りました」

『逃げずに立ち向かえ、努力が実を結ぶのもそれは本人の心次第だ。だから挫けそうになったら思い出せ』

あの熊野にいた爺さん、名前も知らないけどあの人のお陰で俺は今がある気がするんだよ。

「つぐみ、自分に才能がないとか努力しても無駄とは今は結果が出ていないだけなんだよ」

「……………そ」

「ん？」

「その男の子って、志吹くんの事だよね？」

「……………そうだよ」

やっぱりわかるよな。

「志吹くんの過去にそんな事があつたんだ。うん…それに比べたら私の努力なんて…ちつぽけ、なんだよね」

「つぐみがそう思ってるならそうなんだろう」

「……………」

俺はハッキリと言った、だがな…

「だけど俺はそうは思っていない」

「志吹くん…？」

俺は知っている、つぐみの頑張りを。

「一度みんなにも聞いてみたほうがいいな。あと一ついいか？俺の笛を聴いてどう思っていた？」

正直怖い、向こうでは詩音と散々比べられてたからな。

「凄く上手かったよ！私は志吹くんの音、とても透き通ってて優しくて、その…あの…一杯練習して、努力したからだよね？」

笑顔一杯でつぐみが答えてくれた。

「練習もしたし沢山努力もしたよ。でもな、それはつぐみも同じ事が言えるんだよ？案外自分の事となると分かんないんだよな」

本当にな、こっちに来て俺はよかったと今は思うよ。

「だからさ、自分の努力を否定するなよ？……俺もだけどな。今のつぐみは昔の俺とそっくりだから」

もう二度と俺と同じ過ちは繰り返させない

「志吹くん、私…頑張ったのは無駄じゃなかったんだね……」

「ああ…つぐみの頑張りは無駄じゃないよ。みんなもそう思ってるよ」

「そっかあ……うん、ありがとう志吹くん！私、もう自分の努力を否定しないよー！」

つぐみの表情がとても明るくなった。夕日が差し込む保健室に、つぐみの姿がとても綺麗に見えた。

「あはは…色々と話したら体調もよくなっちゃったよ。私、どうして倒れたのか分かんなくなっちゃった」

「そうだな、今は何ともないんだよな？」

「うん！大丈夫だよ！」

「そっか」

ちやんと効果はあったんだな、そうかそうか。

これから俺はどんな代償を取られるか分からないがつぐみが元気になるなら構わない。

「そういえば志吹くん、話の中に出てきた女の子って舞衣ちゃんの事なの？」

「違う、あいつは全然そんなんじゃない。ふっーだよ」

どうしてつぐみがそんな事を聞くのか俺は理解出来てなかった。
そしてすぐさま巴とひまりがやってきた。先生は帰ったそうだったし、これから今後の事で蘭達と話し合おうという事になった。

巴からは少しからかわれたが感謝されたし、ひまりは…ニヤニヤしていた。別に変な事はしてないだろうに。

つぐみに気をつけろよと言い、俺は帰っていった。

…落とし物、返すの忘れていたよ。

笛吹き少年はライブ成功を祝った

「……………もうすぐ日付が変わるか」

俺はつぐみが倒れて保健室であの旋律を演奏した。

つぐみの疲労は完全に取れた、しかしそれは一時的にこの笛に…いや、俺の体に今あるのだ。

つぐみには夜にL I O Eで、俺の昔話の事は秘密にしといてくれと頼んだ。つぐみはそう喋らないと思うが、単に俺が凄く恥ずかしいだけなんだから。

それと寝ている時に俺が演奏したのは気づいてはいないが、何となく聴こえたと言っていた。

「別にバレたって問題にはならないか、でもな…」

呪いまでは言う気はない、みんなを巻き込みたくないしな。

「……………時間だ」

日付が変わった瞬間、俺の体に激しい痛みと重みが走った！

「ぐううっ……………!!」

体全身が痛い！痛い！重い！

これが代償、なのか!?俺は、つぐみの…を…して、悔いは…ない…んだ！

「ぐっ、ゴホッ！ゲホッ！」

血まで吐いてしまった。

「はあ…はあ…」

苦しい…！息をするのがとても苦しい！

「うう…!!がはあっ！」

俺はうつ伏せになって必死に耐え続けてた。

5分くらい経ってようやく苦しみから解放された。だけどこの胸についている痣あざは消えない。俺の部屋にあつたのと同じ模様だ。

これは呪いが俺に憑いた時にできた痣だ。俺の体を少しずつ蝕むしばんでいつてきている。

俺の体はどこまで持つのかは分からない、少なくとも成人する前には持たないと思う。両親はその事は言っていなかったしな。それに…

「床、血が付いちやつたから拭かないとな。身体中痛いし重いが…な」

自分の部屋の床掃除をして、眠りについた。

その日、俺は学校を休んだ。

舞衣からは理由を問われ、呆れていたけど看病はしてくれてくれた。（と言ってもレトルトの食品を出しただけだったが。しかも手順間違ってるし）

それでも翌日には全快し、学校で蘭やつぐみにとても心配された。

モカは怪訝な顔していたが：

巴とひまりは遠く見守っていた、何でだ？

—————

〜ガルジヤムライブ会場〜

「ここか」

それから一週間が経ち、ついに蘭達が出るガルジヤムの日となった。

つぐみが倒れた翌日から休養がかなり増えたらしい、ひまりと巴の提案だけ。

それと俺にチケットを渡してきた、これで会場に入れるから是非来てくれと。

後でわかったのだが、Afterglowのリーダーってひまりだって聞いて驚いた。てつきり蘭だと思ってたからな、ひまりにぶーぶー言ってたのは無視した。

受付でチケットを見せて通して貰うと、会場の中へと入っていく。

オオオオオオ！！

奥からは歓声が聞こえてきていた。といっても会場入る前から聞こえてたがな。

蘭達Afterglowはまだ先らしいので俺はある人物を探す事にした。

蘭の親父さんだ。

以前、蘭と親父さんが喧嘩した時にバンドは遊びじゃないと言った蘭。そして本気を見せる為にライブイベント『ガルジャム』でわからせてみせると蘭は言い、親父さんもそれに同意した。

「来てくれてるよな…?」

俺は会場内を探していた。

「ここにいたんですね」

すぐに見つかった、ライブ会場の出入口付近にいたから。しかしその格好は違和感があるような、ないような?

和服姿は。

「君か、月初めにまた会うと言って以来かな?」

そうだよ、GWの時以来だ。

「お久しぶりです。あの、ここで見るつもりですか?ここからだとステージから一番遠いですけど」

会場内はそれなりに広い。俺は目はそれなりにいいけど蘭の親父さんは眼鏡をかけてるし…それに暗いぞ?

まあステージはカラフルになるけどな。

「私はここでいいよ、蘭に見つかるの色々と面倒だからね」

「そうですか、でしたら俺もここで見ますね」

「そうか」

俺と蘭の親父さんはそのまま会話もなくAfterglowの出版が来るのを待っていた。

そしていよいよやってきた！

会場全体から歓声があがると蘭達五人がやってきた。

五人ともいつもと違う服装（ステージ衣装だっけ？）に着替えていた。

「今この瞬間から、会場の熱気はあたし達のものにする…それでは、聴いてください！」

そう言つて演奏が始まった。

「……………っ！」

この曲は……あの時に聴いた…

そう、俺が思わず泣いてしまったあの曲だ。

しかもその時よりも熱く、俺の心も胸も高まらせて…

畜生、また…かよ……！

俺の目からまた涙が出てきていた。

駄目だなあ、やっぱりこの感じになると俺は涙腺が脆くなるな……。

「ん……」

ちらりと親父さんのほうを見ると眼鏡を外してハンカチで目を拭いていた。まさか俺と同じように泣いて…？

「神子くん」

「は、はい！」

突然声をかけてきたからビックリしてしまった。

「蘭は…頑張ってるのだな。それにみんなも」

「そうですね！とても頑張っていますよ」

「これがバンド、なんだな。そうか…」

どうやら親父さんは俺が蘭達のバンドの演奏を聴いた時のように感動しているようだ。表情がとてもさわやかだ。これならもう大丈夫だろう。

「バンドって凄いですよね、上手くは言えませんが、こう…」

あかん、どう言えがいいんだよ…！考えていたら演奏が終了したらしい。

「「ウオオオオオー！！！！」」

「ぐうう…！」

会場内は凄い歓声だ！これは頭に響く…！！俺の耳が良すぎるのはかえっていい迷惑だな！

耳塞いどけばよかったよ。

しかしバンドか…

俺もやってみようかな……ドラムで。

俺はそう考えながら会場を後にした。親父さんは楽屋に向かつていったが俺は一緒には行かなかった。蘭やみんなにはここで見ていたとL I O Eに送っていった。

だって今の俺の顔酷いからな、涙出て目が赤いし。



「ふうっ、みんなお疲れさん」

あたしは出番が終わって楽屋にいた、志吹や父さんは居たのかは確認出来なかった。だけど携帯を見て大丈夫だった、奥にいたから見つからなかっただけで。でも何でそこで？

「ぶふあー！あー緊張したぜー！」

「わたしもミスしそうで、ずっとハラハラしたよ…」

「でもひまりちゃんも巴ちゃんもミスはなかったし、歓声も凄かったから大丈夫だよ！」

「お腹すいた〜」

巴もひまりもつぐみも相当緊張しながら演奏してたみたいだね。でも、悪くなかったよ。モカは何考えてるかわからないけど。

「蘭、どうしたんだ？」

ペットボトルをあたしに渡しながら聞いてきた。

「楽屋に父さんが来るって、志吹から」

「……蘭」

父さんが来ると聞いてみんな表情が強張った、あのモカでさえ。

「大丈夫だよ、アタシらの熱い思いはきつと伝わったさー！」

巴の言う通りだ、あたしは……これまでになく熱く、それを歌にもした。そして志吹もいてくれた。

だから大丈夫。

「……失礼するよ、蘭」

父さんがやってきた。

「父さん……あたしは遊びでバンドはやってないって証明したよ？これで納得してくれたよね？」

あたしは父さんに言った。

「ああ……確かに伝わったよ。蘭……いや、みんなが真剣にバンドをやっているよね。私はよくわかったよ」

「父さん……！」

「……やったあ!!」

やった……！バンドの事を認めて貰えた！

これも志吹のおかげだよ……!!

「いい仲間を持ったな……蘭」

「うん…!」

あたしにとって最高の幼馴染だよ!

「ところで、神子くんは帰ったそうだが…泣いていたのか私も少しだね。父さんは照れながら言ってきた、そっか…また志吹は泣いてたんだね。」

「ひーちゃんも泣いてる〜」

「モカあ…」

後ろでモカとひまりが何か言ってる。

「蘭、神子くんとはどこまでいってるのだ?もう付き合ってるのだから?」

ここで父さんの爆弾発言をするとは思ってもみなかった。

「はあっ!?何言ってるの父さん!!ど、どどどどうしてあた、しがし、志吹と!?っ、付き合ってもないしあたしは志吹の事はなんとも…!」

何言ってるのあたしは…!!どうして志吹の事をなんともなんて、だけれど…志吹はきつとそうは思っていない。

でも…あたしは、きつと志吹のことを

「……………」

つぐみとモカの目付きが悪くなっていたのをあたしは気づいていた。ひまりと巴はニヤニヤしてるし。

▽▽▽▽▽▽▽▽

俺はまた羽沢珈琲店に行くことにした。この高鳴る気分をコーヒーで済ませるには変かもしれないが、お昼は過ぎるしついでに昼食もそこにしようと考えていた。

「バンドやるのも考えないとなー！ドラムやるにしてもまず基礎から調べないといけないし」

昼飯食つてるときに考えようとしたけど、つぐみの店に着くなりマスターから頼まれてしまった。

「つぐみ達がここでライブの打ち上げをするのだけど、神子くんはみんなに料理を振る舞った事があるのだよね？だったら厨房を使っていいから神子くんが調理してくれないかい？」

元々何らかしらで祝うつもりだったから、俺は即答で了承した。でもどうして俺がみんなに振る舞った事を知ってるんだ？

「あ、ああ…つぐみから聞いたんだよ。とつても楽しそうに話していたからね。それよりも…」

「何作るかは、注文してみないとわからないからね。レシピはここにあるから覚えておいてくれるかな？」

そうやってマスターはレシピを見せてきたが

うん？大半が簡単だぞ…それでいいのかこの店？

「お任せください。…あつ、でも店はつぐみ達以外のお客さんにも出

すのですか?」

他の客に出すのは流石にマズイだろう。

「その点は心配ないよ、これから貸し切りにするから。この時間帯はお客さんはあまり来ないからね」

納得。

「では…あ、一つ俺特製メニューを作ってもいいですか?」

「構わないよ、材料は好きに使うといい」

「ありがとうございます!今から下準備しますね!」

俺は下準備のために厨房に入った。勿論作るのはアレだ!

—————

「みんなお疲れ!ライブも大成功したし、蘭のお父さんも認めて貰えて今日は最高の日だよ!」

ひまりがリーダーなので音頭をとってるらしい。でも意外とリーダーらしく見えなくもないな。

そんな中、俺は注文してきたのを必死に調理してる。

……でも冷凍のものもあるから、正直いつて楽過ぎて退屈なんだがな?

「しょうがねえ…アレ作るとするか」

そう言っつて俺は生米を大きめのプレートに入れた。

「ん？神子くん、それが特製メニューなのかい？」
「ええ…これがそうですよ！俺特製スペシャルです」

マスターが少し怪訝な表情で聞いてきた。

「ふむ…あとで作り方を教えてくれるかい？」

「え…？」

「いや、つぐみやみんなが好評だったらメニューに加えるとかそういう事はしないよ？…多分」

「……………」

いや絶対するだろ。でも俺の考案したのがつぐみの店にメニューとして加えてくれるのは嬉しい事なんだよな？

「わかりました、と言いましてもこれは普通のを少し手を加えただけですから、そんなには難しくはないですよ？」

俺は調理しながらマスターに作り方を教えていた。

「それにしても志吹のやつ、泣いた顔を見られたくないからって帰ることはねーよなー」

「そうそう！わたしたちのライブの感想とか聞きたかったのにね！」

「巴ちゃんもひまりちゃんもひどいよ…きつと志吹くんにも何か用事があつたんだよ」

悪いつぐみ、巴の言う通り顔を見られたくないんだわ。

「しいくと蘭のお父さんはどうして入り口の所に居たのかな？」

「さあ？蘭はわかる？」

「わかんない。でもさ、志吹も父さんもライブハウスって初めてだからどうやっていいかわからなかったんじゃないの?」

「あはは…初めてだったら仕方ないよ」

蘭の父さんはそうだろうな。つーか俺も入り口付近で正解だったわ!あの音は頭に響くからな。

「……つと、もうすぐ完成だ」

俺は最後の仕上げの前にアレを入れた。蘭がどんな反応するか楽しみだよ。

「それでねモカちゃんが……つてお父さん、それは?」

「みんなお疲れ様、これは今回の料理人特製メニューだよ」

「」「特製メニュー?」「」

五人揃って声をあげた。マスターはその料理をみんなの前に置いた。

「これって……」

「パエリア、だね」

「だな」

「…まさか、これを作ったのって!？」

「うん…そうだね蘭ちゃん」

つぐみと蘭はテーブルから立ち上がり厨房へやってきた。

「やっぱり志吹だったんだ」

「バレたか」

「だって、わかるよ。前に炒飯作ったのと一緒の感じだったから」

パエリアと炒飯は全然違うんだけどな？

「まあ…その、マスターからここで打ち上げやるから料理作ってくれないかと頼まれてな。まあ…その、俺もライブ成功を祝ってると思っ
てくれ」

言ってるてなんか恥ずかしくなってきた。

「うん…ありがとう志吹、だったらあたし達と一緒に食べようよ。ま
だ作るのがあるの？」

「いや、今ので最後だけど…いいのか？俺、関係ないのに」

俺はAfterglowでもないし、ましてや…

「関係なくないよ！志吹くんにはいつも助けて貰ってるよ！」

「つぐみ…？」

「この前私が倒れた時も志吹くんはずっと側にいてくれてたし…蘭
ちゃんの時だって…！」

一体どうしたんだつぐみ？そんなに必死に…

「つぐみの言う通りだよ志吹、あたしも…その、父さんの事で本当に
色々とあり…がと」

「大丈夫だったのはひまりから聞いていたが、ってどうした蘭？顔赤
くっつやあ…」

「~~~~／／！！」

蘭は厨房から出ていった。

「あつ、蘭ちゃん…もう！」

つぐみが呆れたように言った後、俺に振り返って

「一緒に食べよ、志吹くん」

俺は断る理由もなかったな。

その後、照れている蘭を横目に色々聞かされた。

どうして遠くにいたのかのと、俺が泣いてたのを蘭の父さんがフェードアウトしたりもあつたりも…

なんか今日は色々あつたな、蘭の親父さんとも丸く収まったし、俺がバンドやりたくなつたりもな…。

近くに楽器店あるか後で調べてみよう。

それと日菜達のライブも翌日にあつたけど、それはまた別の話でな？

笛吹き少年はドラムを始めようとした

「しばらくここで勉強させてほしいの」

朝食中に舞衣が口を開いた、てかご飯粒を飛ばすな！行儀悪すぎだぞ。

六月になり少し暑さが出てきた。向こうは山も多かったからそれなりに涼しかったけど、東京はどうなんだろうな？

そして舞衣からお願ひされた。確か舞衣は中学時代それなりに成績は良かった筈だけど？

「今住んでるところでやれないのか？それに舞衣、お前は中学の全国模試は上位だったよな？」

「そうだけど…今いるところはとてもじゃないけど落ち着いて勉強なんて出来ないのよ！それに…色々あって」

箸を握りしめながら訴えるように舞衣は言った、が。

「色々？」

なんだろう？

「志吹には関係ない事だから気にしないで！」

ピシヤリと言ひ切られた。気になるけど追求はしなかった、どうせ話してはくれないだろうし。

「まあ勉強くらいは向こうも大目に見てくれるだろ？」

「そうね…こればかりは仕方ないものね」

お互い納得すれば問題なし、か…

「それより昨日のあれは知ってるわよね？アイドルバンドのライブ：いえ、あれは」

「言うな、俺はその場にいたからな」

そう、昨日のあれはなんとも言えなかった。

蘭達の出たガルジヤムの翌日の日曜日に、俺は日菜の初ライブ：もといPastel*Palettesの初ライブを見に行く（行かされたとも言おう）事になったのだが。

「千聖さんやイヴまでいる…ん？あれは、丸山さん：なのか？」

ライブ会場の規模はそれなりだけど丸山さんの格好がいつもと違いすぎる、ステージ衣装も髪型までも前に見た時よりも想像つかないくらいにな。

「女子って衣装と髪型変えるだけでもこんなに違うんだな」

そしてドラムには知らない人だな。つぐみみたいに茶色のショートヘアーは誰だろうな？

スベった話？MCってのが終わると演奏が始まったが：

「……………」

誰も演奏をしてない。いや、音は出てるけどそれは彼女達からではないの是一目瞭然だ。回りの人達は気づいてなさそうだが、俺にはわかる。

丸山さんは、なんか辛そうだな。ボーカルはフリでとてもキツいだろう。

「バレたら大問題だよなこれ？ドッキリであればまだ笑える話ではあるが…」

そう思っていたら突然音が止まった。彼女達も止まった。会場の人達は動揺している、音が出てないだの何だので…

そりや気づくか、千聖さんが機材トラブルと言ってはいるが観客はそうは思っていないだろうな。これはヤバいぞ？

「てな事があったからな、何したかったのか俺にはわからん」

SNSでPastel*PalettesのHPは大炎上だったらしい。日菜達は大丈夫なんかな？

「正直わたしはガツカリした…かな。先輩達がエアバンドだなんてね」

珍しいな、舞衣がしよげているなんてな。

「何だ舞衣、パスペレのファンだったのか？」

「そうではないけど…どこことなくわたしと似てるなど勝手に共感したから。本当にどこことなく、ね」

どこに舞衣との共感があるのやら？俺にはわからん。

「この話はもうおしまい、というか志吹は早く食べないと遅刻するよ？」

「やべ」

俺はまだ一口も朝食に手をつけてなかった、一気に食うかな。

――――

昼休み

日菜からLIEで『天文部の部室に来て』とメッセージを送られてきたから、そこに向かっていただけ…

「何か視線を感じるな」

俺が何かしたんかな？ まあいいか。

「ここか」

ドアの上のプレートに天文部と書かれていたから、ここで間違いないだろう。

「失礼しますー」

一応ノックしてから入った。部屋の中は机があるだけの狭い一部屋だった、天文部だから機材とかあると思ったけど何にもない。

「あ、ブッキー来てくれたんだね…」

「日菜が呼んだからね、来ないと何言われるのやら」
「てへっ♪」

奥の机に座っている日菜、舌を出して誤魔化していた。弁当があるから昼飯中だったのかな？

俺はもう屋上で済ませたけどな、蘭達と。

「それで、用件はなんでしょうか…いや、それは野暮でしたね」

「あはは…うん。ブツキーの思ってる通り、かな」

間違いなく昨日の事だろう。だから日菜はいつもみたいに元気がない。

「昨日はごめんねブツキー。騙すみたいな事になっちゃって」

「……」

「実はね、まだあたし達はライブなんかとても出来る状態じゃなかったんだ。でも事務所の意向でさ、あたしと麻弥ちゃんは演奏に関しては問題なかったけど彩ちゃんとイヴちゃんに千聖ちゃんは

まだ、ね。るんっ、つてこなかったし」

「……」

やっぱり理由はあったんだな、後で舞衣に言わないとな…要は練習不足なのね。てか麻弥ちゃんって誰？あのドラムの人かな？

「あ、麻弥ちゃんは知ってる？」

「いや…でもドラムの人でしょう」

だってそれしか残ってないし。

「そそ、ここの学校にいるよ。あたしとは違うクラスだけどね」

「……」

「その、ブツキー…もしかして怒ってる？」

日菜はちよつと声のトーンを落として俺に聞いてきた。

「別に怒ってはいませんよ。ただ、どうして練習不足なのにライブやろうとしたのか気になったのですね」

「うーん、そこはあたしもよくは知らないんだよね。でも本当にごめんねブツキー…」

手を合わせて謝る日菜はなんか痛々しかった。

「理由がありましたから俺は何も、いや最初から何も思ってはなかったけど。他の人はどう思うのでしょうか?」

「そこなんだよねー、ブツキーは話さないといけないけど、他の友達にはちよつとねえ。みんなブツキーみたいに理解があると良いけど」

「るんっ!とこないから話したくはないよ」

「はあ」

だからるんっ、って何だよ?

日菜が俺を買ってくれてる?のは何か嬉しいな。やっぱりあいつとは違うよな、日菜と詩音は。

そして……

「その人はいつまでそうしてますのですか?」

そしていつまでもドアに張り付いている人に向かってこう言った。

「っ!」

俺がそう言ったらドアが開いた。

そこにはつぐみと同じショートで眼鏡をかけている人がいた。まさにその人はPastel*Palettesのドラム担当の大和麻弥さんだった。今は眼鏡をかけてるけどな。

「貴女は、大和麻弥先輩…ですよね？」

「……………そうツスよ」

「麻弥ちゃん？どうしたの？」

「その、日菜さんと一年生の知り合いがどうこう言っていましたので…あの、ジブンは気になったツス」

「俺の事、ですか？」

「まあ噂の一年生ですとは思いましたが、やっぱりそうだったツスね」

だったらもう自己紹介はいらないかな？

「えっと、神子さんはジブンの事はご存知でしたか？」

「ええ、日菜と同じ事務所でドラムの大和麻弥先輩ですよ。あの時は眼鏡はしていませんでしたが…普段はしてるのですか？」

「それはですね…」

説明すると元々スタジオミュージシャンのつもりで事務所に入つて来たらしいのこと、でも千聖さんが眼鏡を外したら相当美人だったからそのままパスペレに入れたのこと。ドラムもいなかった事もあり、すんなりと決まったらしい。

そして上から読んでも下から読んでも同じ名前になるから、それがキヤッチフレーズ(?)にしたとかないとか。

ともかく先輩とか後輩とか関係なしで読んで頂いてもいいからと懇願された。仕方なく麻弥さんと呼ぶ事に。あと変な笑い方してたのはなんだ？

俺って先輩方になんて思われてるのやら、でも普通に男とは思ってはいいたみたい。花音さんやりんりんさんとは大違いだ。男物の制服着てても男装って言われるしな。



ブツキーが部屋を出た後あたしと麻弥ちゃんの二人だけになった。
あーあ…もつとブツキーに言う事あったのにな

「で、神子さんとはどういう関係なので?」

今度のテスト勉強一緒にやらないとか言つて、ブツキーの家に行つてみたかったのに。

「日菜さん日菜さん、聞いてますか?」

もつとブツキーの事知りたし

あとおねーちゃんとは、まだうまく話せてないから相談にも乗ってほしいし。

「ひーなーさーん?」

「あ…ごめん麻弥ちゃん!そ、それで何かな?」

ブツキーの事で考えてたら麻弥ちゃんがずっとあたしを呼んでたのに全然聞こえてなかったよ。

「はあ…もう一度言いますツスね。その、神子さんとはどういう関係なんすか?」

「えっ」

ブツキーとの関係?何だろ…るんってくる後輩、じゃなくて!あたしにとってブツキーは…

「日菜さん?顔が赤いつすよ。ま、まさか!」

「え、え、え…う？」

わわわわわ…！あたし、一体どうしちゃったの？ブツキーの事考えたら、何これ？

「麻弥ちゃん…この事はみんなには秘密にしてくれるかな？」

「りよ、了解ツス！」

この気持ちは何なのかよく知らないけど、あたしは不思議と嫌じゃなかった。おねーちゃんとは全然違う何かが。

――

放課後になり、俺はちと商店街のほうへ足を運んだ。理由は簡単だ。

「俺もドラムやろうと思って、まずは実物を見てからかな」

巴には聞かなかった、驚かせたいし。

「ん？商店街から少し外れるのね」

目的の場所を地図アプリを使いながら歩いていく。これがあれば迷う事は多分…ない。

「ん、ここだ」

国道沿いにあるその店の名前は『EDOGAWA GAKKI』と

書かれていた。さっそく入ってみた。

「狭…一人か二人が通れる通路の壁にギターが沢山掲げていたり、ベースまで分けているんだな。あと左利き用まであるとは」

それだけじゃない、よくは知らないがパーツみたいなのもある。あ、キーボードもドラムセットもあった。

「俺の目的はドラムだからちよつと見ていこう」

そのドラムを見てみると色々種類があつてマジ初心者には困る。

「なにになに…シンバル、太鼓みたいのと、何種類あるんだこれ？」

よくもまあ巴やあこちゃんはこれを苦もなくやるなあ…太鼓とは全然違うわな。

「だからこそ面白いか…本当にそうだな！」

やべえ燃えてきた…！今日は見るだけの予定だったけど、こりやもう買ったほうがいいな。値段はどれどれ…？

トレーニングドラムセットか本格的なので随分差が出てるな、これはちよつとわからん。

「ドラムに興味がおありかい？」

などと考えていたら後ろから声をかけられた。

「ふむ、その制服は羽丘だね。そして一年生で音楽は初心者とみた！どうだ、合ってるかね？」

やたら的確に言い当ててくるその人は、どうやらこの店員のようだ。花咲の制服に緑色のエプロンをしていて胸の名札は『鵜沢リイ』と書かれていた。

左手に変なぬいぐるみ？を持っていたがな。

「ええ、そうですよ。ドラムをやってみようと思ひまして」

「ほほう、それはどうしてかね？最近ではドラムの人口が減ってきていてね。初心者でドラムをやる人は珍しいのよ」

マジか。

「そんでチミは決めたのかんよ？」

「まだどれかは決めかねています、一番値段が高いドラムセットも買える資金はありますが」

一番高いので十万ちよいする、色彩がちよつと気に入らないから買わないが。

だけど店員さんは少し考え混むと、これを勧めてきた。値段も高いのと安いのと中間での商品だ。全身に緑色で俺の一番好きな配色だ、だから俺はそれを一目で気に入った！

「店員さん、これ買いますー！」

「わお」

俺は即決した事に驚いたのか、非常にビックリしたそうさ。

「店員さんじゃないよ、リイと呼んでくれるかな」

「わかりました…リイさん」

この人見た目は俺より年下に見えそうだけど、威厳と凄みがあつてとてもそう思わなかった。

「まいどありー、それじゃあデペコを触らせてあげよう」

そう言ってあの変なぬいぐるみを出してきた、デペコって名前なのかそれ。

「いや、結構です…」

「残念ー」

そんなリイさんとのやり取りが終わるとドラムセットはそのままお持ち帰りは無理なので配送して貰うことにした。

「神子志吹君って言うんだ、私の二つ下とはね」

「さつき一年生とか言ってますでしたっけ？」

「そだったねえ、で明日には届けておくね。時間はどうするの？」

「この時間なら…」

「おっけー」

これで全て完了したので、ちよつと店内を見てみる事にした。リイさんはハウツー本もあるからとは言ってたけど。

「じー…」

リイさんと配送手続きしてる時からずっといた人が俺を見ているのだけど？

「ドラム、やるなら…入らない？」

「へっ？」

じっと見ていたその人は突然俺に話し掛けてきた。

「私たちのバンド、入らない？」

唐突にバンドに入らないかと言ったその人は、黒髪のロングで花咲の制服を着ていた。

「え…あの、俺はまだドラムも触れてない初心者なんですけど？それに貴女は誰なのですか？」

俺はその人に初心者って事を伝えた。あと初対面の人にいきなりバンドに入るとか無理だろ。

「そうだったね…私は花園たえ。おたえって呼んでいいよ」

「俺は神子志吹です。羽丘の一年生です」

「同じ年なんだね。だったら話は早いね」

いや話が早いとか意味わからん。

「おたえーどうしたの？」

「香澄。この人バンドに誘ってた」

「ええっ!?! って志吹くんだ！」

花園たえの後ろから、どこかで聞いたような声はりみの友達の戸山香澄だった。

「香澄、志吹と知り合いなの？」

「香澄、花園と知り合いなのか？」

俺と花園たえは同じような台詞を言った

「おたえ、だよ志吹」

「……わかったよ、おたえ…でいいのか？」

「うん、よろしい」

香澄はポカーンとしてたけど、話を続けてくれた。

「え〜つと…：そうだよ、先月に有咲の蔵で会ったんだ。あれから練習して上達したよ」

「へえ、一度聴いてみたいな」

一ヶ月でどれだけなつたか気になるな。

「だったら今から行かない？志吹にもメンバー紹介しなくちやいけな
いし」

「俺が入る前提で進めないでくれますかね？」

「そうだよおたえ！志吹くんもまだ…：え？バンド、やってたの？」

「ああ、明日からな。一ヶ月前の香澄と一緒だ」

「そうなんだよね。なんだか似てるね、香澄と志吹って」

「そうか？」

「そうかな？」

今度は香澄と俺で。

「香澄ちゃん、おたえちゃん…：お目当てのはあった…：の？」

香澄の後ろから声がした。

「りみもいたのね」

「志吹君っ!?!どうしてここに…?」

「それはだな…」

俺はりみにもドラムをやり始めた事を伝えた。流石にりみも驚いていたけど、まるで自分の事のように喜んでくれた。

「で、俺は何でここにいるんだろーな」
「知らねー」

俺の隣にいる人こと金髪ツインテールは、ここの蔵の主？質屋のお婆さんの孫娘の市ヶ谷有咲と言って、香澄達のバンドに入ってるそう
だ。あと名前はお互いに知っていた。

「まさか全国模試の4位と3位がここにいるなんてな、誰が思ったんだろうな」

「全くだな」

こうして俺は蔵の地下に連れてこられて市ヶ谷有咲にも会わせられて、香澄達のバンドメンバーがいるときさ。

「香澄とおたえがギター、りみがベース、市ヶ谷がキーボード…だからドラムで俺を勧誘したって事ね」

「そゆこと、志吹はなんかピンとききたから」

なんじゃそりや。

「あー、そいつの言うことはあまりアテにしないほうがいいぞ。本能で言ってるのか、わかんねーし」

「そうだな、市ヶ谷。おたえは正直言ってあれだな、電波か何かだよな」

「そーゆーこった」

それな。

「志吹君、本当にいいの？私達のバンドに入るっておたえちゃんから聞いたから」

「入るとは一言も言っていないがな」

「そうだっけ？」

「……………」

俺とりみと市ヶ谷は揃っておたえを見た。

「三人ともじっと見て私の事が好きなの？」

「……………」

俺たちは諦めてように項垂れた。

「志吹くんが入るか入らないは、ともかく！私達の曲を聴いて欲しいかな？」

香澄が言ってきた。ドラムいなくても大丈夫なんかな？

「そうだね香澄ちゃん」

「香澄、グッドアイディア」

どうやら俺に演奏を聴かせてくれる事になったらしい。

「お、おい……まだ私はやるって言ってるぞー！」

市ヶ谷は反発した、あれ？まだ入ってなかったの？

「いいじゃん、やろうよ？お客さんが来てくれてんだし」

「連れられたとも言うがな」

「マジか」

呆れる市ヶ谷をよそに香澄とりみとおたえは演奏の準備をし始めた。

「つたく、しょうがねえなあ…やるよ、やればいいんだろ」

諦めた口調で市ヶ谷も部屋の奥に移動してキーボードの前に立った。

「どれだけ上手くなったか楽しみだな」

正直俺は興奮していたかもしれない、だってこれはAfterglowの時と同じだから。

「それでは志吹くんをキラキラドキドキさせる演奏をいきます！」

香澄がそう言うのと演奏を始めようとした。ところでキラキラドキドキってなんだよ？

「二度目のクライブになりますけど、今度はお客さんは一人しかいませんー」

「そりやそーだろ、突然香澄とおたえが連れてきたからだろ…」

「ううん、香澄ちゃんとおたえちゃんだけじゃなくて私も誘ったよ有咲ちゃん」

「有咲が変な事言ってる」

「おめーにだけは言われたくねー！」

「……………」

おいおい、MCだっけ？それだけでこんなカオスな空気になるよな。本物のライブだったらどうなってるんだよこれ。あ、収まったみたいだ。

「コホン、では聴いてください！『私の心はチョココロネ』」

香澄の合図で演奏が始まった。って何だよその曲名は!!

俺は思わず笑いそうになってしまったよ。

笛吹き少年は明るくなりたかった（前編）

「聴いてください！『私の心はチョココロネ』！」

香澄の合図で演奏が始まる。こんな狭い蔵の中で音がメチャ響きそうだな、俺大丈夫だろうか？

だけど、そんなのは杞憂だった。

りみの歌声と歌詞はとてりみのチョココロネ愛が伝わるよ。流石チョココロネ同盟の結成者だ。

香澄のギターはまだぎこちない所が目立つけど、一ヶ月でそこまで弾けるのだから十分だと思うよ。
てかおたえが凄く上手い。

………市ヶ谷は、険しい顔してるし音もちよっとズレてる。言っただ方がいいのかな？やっぱやめとこう。

なんだろう

なんか暖かいな、これは

蘭達の After glowとはまた違う感じで俺は…

うん。やっぱりバンド…いや、音楽はこの気持ちを持つ事が大切なんだってのがより一層わかったよ。

…俺もドラムを、頑張らないとな！

「ありがとう香澄、りみ、おたえ、市ヶ谷」

俺は感謝の意を込めてそう言ったよ、演奏中だから聞こえないだろうけど。

「ふう、どうだった志吹くん？」

演奏が終了して香澄が俺に聞いてきた、りみもおたえも市ヶ谷も俺を見ていた。

「凄くよかったよ。これは香澄達で作ったのか？いや、りみだなこれは」

いかにもりみっぽい所が出てるし、歌詞も曲名も。

「ううん、私とお姉ちゃんと一緒に作ったの。と、言っても大半はお姉ちゃんだったけど…」

「ゆりさんとの合作か、なるほどなるほど」

りみの二つ上のお姉さん、牛込ゆりさん。同じ中学だったから知ってるし、結構話したりもしたから仲は良かった。

俺の尊敬する人物の一人だ。

「合体歌詞、だよ」

意味不明な事を言っているおたえは放つといて。

「市ヶ谷はキーボード経験はあるみたいなのに、なんかやり辛そうにしているのはどうしてなんだ？」

そうだ、まるで悪い癖が抜けてない感じだ。

「あーそれはな…実は私はさ昔ピアノやってたんだよ。だからかな…：それにしてもよくわかったな」

「ピアノの音とかキーボードの音とかの違いが分かるからな。やっぱり市ヶ谷は経験者だったんだな、その癖がまだ残ってるんだよ」

「だな、まだ練習量が足りねーのに香澄が急にやるからさ…」
「確かにな」

俺と市ヶ谷は香澄を見て頷いた。当の本人はキョトンとしていたけどこれ絶対わかってないな？

「それで志吹はどう？このバンドに入らない？」

おたえが言ってきた。

「お、おい…！」

「おたえちゃん…でも、私は…いいかも」

「うん！志吹くんなら歓迎するよ！有咲もいいよね？」

「うっ、私は…ま、まあいいけどさ」

懲りずにおたえが勧誘してきたし皆も賛成してる。でも俺の答えはひとつなんだよ。

「おたえ、悪いがそれは無理な話だ。そもそもガールズバンド協定つてのがあるよな？」

前にも友希那に言ったけど、ガールズバンド協定とは女子だけでバンドやる事だ。男は混じってはいけないんだよ。

「女装すればオツケー？志吹は女っぽいし大丈夫」
「……………」

おたえも友希那と同じ事を言うかー！！

「じよ、女装…!!し、志吹君が、女の子に!」

「りみりん、どうしたの？」

「はわわわわ…うっとり〜」

「ほえ？」

「駄目だこいつら」

どういう訳か知らんがりみが両手を頬に当てているし、香澄は目を丸くしている。市ヶ谷は呆れていた。

「ともかく悪いが別のドラムを探してくれさ。俺はそもそも初心者なんだし」

「残念無念」

おたえは表情ひとつ変えないでいた。こいつ、冗談だったのかわか

んないよ。

俺は蔵を後にして香澄達と別れた。市ヶ谷が皆名前で呼んでるのに自分だけ名字呼びは嫌だから名前で呼んでくれとお願いされた。

なので俺も有咲に名前で呼んでくれと頼んだ。少し照れくさそうに志吹って呼んでたのは可愛かったな。

「あの曲聴いてたらチョココロネ食いたくなってきたから久々にあそこ寄るか」

俺はやまぶきベーカリーへ向かっていった。

――

「いらっしや…おー神子君じゃん久し振りだねー」

やまぶきベーカリーに着くなり店番をしていた沙綾が言ってきた。

「確かにな、あのチョココロネ同盟結成以来だよな」

「だねー、あれからうちに来てくれなくてももうパン飽きちやったのかと思ったよ。りみりんとモカはほぼ毎日来てくれるのにな」

「マジか」

あいつらそんなに通ってるのかよ…よっぽどパンが好きなんだな。

「で、神子君はどうしてこんな時間に来たのさ？もうすぐ閉店時間になるのに」

「ああ、それはな…」

俺はさつき香澄達のバンドメンバーと会ってきて有咲の蔵に招待（連行とも言うがな）されて、そこで一曲聴いてきたという訳だよ。ついでにバンドメンバーにもならないかとね。

「ふうん、神子君もかあ…ってバンドやってたの？」

「いや、今日江戸川楽器店でドラム見て買ってたらおたえに誘われたのが始まりだったんだよ。つまり俺は絶賛初心者だ」

威張れねーなこれ。

「ドラムセット…だよね。それって高かったんじゃない？」

「高かったけどな…ま、現金キャッシュで払ったさ」

「うわあ…凄いね」

沙綾は感心していた。お金を払えた事なのか、ドラムをやるって決めて買えた事なのかわからなかったが。

「実はさ、前に有咲の蔵でおたえの勧誘するのに一曲やったんだよね。私も誘われて来たんだ。何でもおたえをドキドキさせる為とかで、結局おたえも一緒に演奏したから一応成功したらしいけど」

「だからあの時、今回って言ったのか」

「神子君入ればよかったのに。女装すれば規定法も誤魔化せるんじゃないの？」

「……………」

沙綾もかよ。

「…………ともかく、香澄のバンドにドラムが欲しいと思ったよ。やっぱりドラムが居てこそバンドらしいからな。香澄も言ってたし」

「そうだったんだ…ドラム、欲しかったんだよねやっぱり…でも……」

沙綾が何かブツブツと言ってる、一体どうしたんだろうか?…まさか!?

「沙綾もバンドをやってたのか?しかもドラムで」
「っ!!」

その反応は当たりか。でもなんだろうか…沙綾の表情がとても辛そうにしている気がした。

「……どうして、わかるの?」

「いや、何となくなんだが…でもこれ以上は聞かないよ。沙綾がとても辛そうだから」

俺は沙綾のいるレジ前から離れて、さっさとチョココロネを三つとって会計を済ませた。

「ごめん」

会計を終えた後に沙綾が謝ってきていた。

「いや、むしろ謝るのは俺じゃないかと思うんだが」

俺の推測だけど沙綾は過去に何かあったんだな。でもそれを追及する気はない。誰にだって辛い過去はあるのだからな…俺も、沙綾も。

「それでも…ごめん」

「あ、ああ…じゃあ俺、帰るな。また来るよ」

「あ…うん、また来てね」

別れ際に手を振っていた沙綾の顔は泣きそうになっていた。

「……………やっちゃった。これじゃ俺はまた…」

やめよう、他人の問題に首を突っ込むのは。要らぬ迷惑を被^{こら}つて
しまう可能性があるから……

あの時も、その前もそうだったしな。はは、は…

誰にだって辛い過去があるんだ。俺がいらん詮索するとそれを思
い出してしまうから。俺も…沙綾も。

だから俺は向こうから助けを求めない限りは手を差し伸べる事は
しないと誓ったんだ。

蘭も日菜も紗夜さんもそうだったし、あれでよかったんだ。

俺は、あの日から本当の笑顔は失くなってしまったのだから。

その後に食べたチョココロネは味なんかしなかった。

—————

『アナタの笛、音色が凄くいいわ!』

また、だ！

俺はまた夢を見ているのか？

しかし…これはなんだろう、ここは見覚えのある境内だった。そこに俺と女の子が立っていた。奥には祭典式が行われている。

覚えがあるのだけど、よく思い出せない

『ねえ、あたしと一緒に……しよ！』

全体に黄色でロングな髪型、黄色い瞳なその女の子。そしてこれは昔の俺だろうか？

これって俺が初めて表舞台上がった時か。という事は中学になったばかりだな。だとしたら俺の出番は終わった後かな？

『でも…まだまだなんだよ。だから出来ないよ』

『そんな、どうしてなの!?!』

だけどこれに覚えがあるような…ないような。この少女は誰なのか全く思い出せない。

『ごめん…俺は、人を笑顔にするなんて無理なんだよ。そんなに笛は上手くはないし、俺より上手い人はいるから』

そう言っつて昔の俺は、詩音が演奏している方向へ指を向けていた。

『んー……でもアナタのほうがずっといい音よ！少なくともあたしは
そう思うわ！』

ありがてえなあ……そんな言葉を聞けるなんてな。
でも当時の俺はそうは聞こえなかったか……

『……………嘘ばかり』

『本当よ！それを証明してあげるから、あたしと……よ！』

『にわかには信じられないよ。君とはさつき会ったばかりだから。
でも、それが本当なら……』

『ごめん、しばらく考えさせてくれるかな？今はまだ決心がつかない
から』

全然記憶にない。こんなのあったかな……？

『そうなのね。わかったわ！あたしはずっと待ってるから約束よ!!
………そういえばアナタの名前は何て言うのかしら？』

『ああ……俺の名前は神子志吹。中学一年だよ』

『志吹ね、覚えてたわ！同じ年なのね。あたしは弦巻……』

—————

「……………」

夢から覚めた俺はなんとも言えない気分になっていた。

「忘れていた記憶なんかな、夢って……」

弦巻：以前舞衣が言ってたけど、まさかとは思うが聞いてみるか。名前は聞こえなかったんだよな。

「……悪いけど答える訳にはいかないわ」

朝食を食いに来た舞衣に弦巻って誰なのか聞いたが、舞衣は答えてはくれなかった。一体何なんだよ？

「それより明日からテストだから今日まで勉強させてね」

「ああ…そこは花咲川も羽丘も一緒なんだな。俺はそんなに頑張るつもりはないから勉強はあまりしてないが」

それに、今日ドラムセットが届くからな。

「余裕ね、全国中学模試三位だからって」

「別に余裕ではないが、勉強はもういいかなと思ってな。それに中学と高校じゃ違うだろうよ」

ぶっちゃけそんなでもないんだよな、授業とかは聞いてなくてもわかるし。

俺と舞衣は朝食を済ませて、それぞれの学校へ向かっていった。

「志吹、勉強教えて」
「つぐーお願い！」

昼休みの屋上でひまりと蘭が俺とつぐみに泣きついてきた。

「おいおい…テストは明日なんだぞ？一夜漬けでどうにかなる訳ない
だろ二人とも」

「そうだよ！巴ちゃんの言う通りだよ？」

巴もつぐみも二人の味方はしないのか、珍しいな。

「もふもふ」

モカはパン食べてて話に加わらないし。

「巴、つぐみ…まさかとは思いが中学の時もそうだったりはしないよ
な？」

「…そのまさかだよ」

中学時代は大半はひまりがつぐみに泣きついてきたらしい。蘭は
まあ、今回は色々あったからだとか。

「はあ…今日は無理なんだよな。だから明日の現国と数学に世界史で
テストに出そうな所をノートにまとめといてやるから、それでいいか
？あとそれが的外れでも文句は言うなよ？」

「お願いします！」

蘭もひまりも俺に平伏してるし、そんなにか!?

「志吹くんはテスト大丈夫なの?」

「授業は余裕でついてこれてるし、テスト範囲も大体はわかってるからなんとかなるよ。それに俺は伊達に中学の全国模試三位だからな」

「凄いね志吹」

「モカちゃんもびっくりなのだ」

蘭もモカも、何だよ。

「すごいな志吹」

「うんうん!」

巴もひまりも

「……………」

「しぐ?」

つぐみだけ何も言ってこなかったが…あれか、きっと詩音の事だろうな。

「とにかく、蘭もひまりも赤点だけは取るなよな?」

「取ったらどうなっちゃうの?」

「補習授業があるそうだが、放課後に。色々と支障が出ちゃうんじゃないのか?」

バンド練習とか。

「それは困るからあたしは志吹を頼りにするよ」

「わたしも、お願い志吹くん」

頼られたらやるしかないんだよ。これなら大丈夫…大丈夫だ。

――

放課後、蘭とひまりにノートを渡して、俺はまっすぐ家に帰っていった。何故なら…

「ドラムセットが届くからだ！みんなには内緒にしないといけないからな！」

明日テストなのにドラムセット頼んで何やってんだろうな俺は。

それから30分後に江戸川楽器店からドラムセットが届いた。かなり重かったし、一つ一つ地下室に持って行っていくのは大変だった。しかも舞衣が途中から来て余計にややこしくなったしな。

「どうしてドラムセットを買ったの？」

夕食時、舞衣は聞いてきた。

「答えは簡単だ。蘭達がやってるのを見て俺もやりたくなっただけだよ。バンドに笛は関係ないしな」

和楽器は大丈夫ってのもあるが笛は流石に無理があるだろ？

「和楽器バンドに尺八の人もいるから大丈夫な筈よ。というか何でもいいはずだけど？まあちよつとシニール極まりないかもだけどね」

「マジリアリー？」

「マジリアリー」

あるんかい!!知らなかったぜ。

「ま、俺は好きで笛吹いてる訳じゃないしな」

「そう、ね…」

表情を少し暗くした舞衣だったが、すぐに戻った。

「まだ何も知らないから勉強からかな」

「テスト勉強しなさいよ！わたしはその為に今日来たのに、その余裕はむかつくわね…」

「こつちの事情も知らない鈍感男の志吹」

ブツブツと小声で言ってるけど聞こえてるからな？誰が鈍感男だって？

事情なんか知るか！どうせ監視役かなんかだろ？

その後、舞衣はリビングで勉強していて、俺はパソコンでドラムの動画をずっと視ていた。

夜10時になったら、舞衣はいなくなっていた。書き置きを残してな。

『久しぶりに落ち着いて勉強が出来たから一応礼は言っておくわ…』

あ、ありがとう』

「……あいつ、悪い物でも食ったのか？」

舞衣が礼を言うなんて初めてだゾ？

不気味な感じがして俺は日付が変わった時にいつもの笛の演奏をやって就寝した。

—————

「じゃ、お互いにテスト頑張ろうな」

「そうね、頑張りましょう」

今日は羽丘も花咲川も中間テストが三日間行われる。不正の無いようにお互いの学校は同じ科目でやるらしいと昨日りみと舞衣が言っていたな。

「おはよう蘭」

「おはよ…志吹」

教室に着くなり蘭がいたが…

「蘭、ちょっと顔見せろ」

俺は蘭の顔に近づいた。

「くくく／＼／＼!!」

「やっぱり目がかかなり赤い、さては全然寝てないな? ってどうしたんだよ、顔を赤くして」

「ち、近い! 顔が近い!!」

「あっ…」

俺は蘭との距離が近い事に全く気づいてなかった。お互いの吐息がかかってくるくらいに近かった。

「や、わ…悪かったよ蘭。でもあまり寝てないんだよな?」

「う、うん…お父さんにも注意されたよ」

注意で済むのかよ、あれから甘くなったなあ蘭の親父さんは。

「テスト中に寝たら本末転倒だから絶対に寝るなよ? 寝たら起こしてやらんからな」

「わかってる」

蘭は自分の頬を叩いていた、そしてテストが始まった。

「で、どうだった?」

机にうつ伏せになってる蘭を見て俺は駄目だと思っていたが。

「完璧、志吹のノートに纏めてくれた通り全部出てた。あたし、こんなにスラスラ書けたの初めてかも」
「そりやどうも」

まだ数学と世界史が残ってるがな、油断するなよ？ちなみに俺は余裕で全部解けた。

――――

「蘭ちゃん、ひまりちゃん！テストどうだったの？」

商店街近くのファミレスで昼飯となったが（ひまりの提案で）つぐみが心配なさそうに二人にテストの成果を聞いてきた。テスト期間中は半ドンで終わるからいいな。

「つぐ、バツチリすぎてわたし怖い」
「あたしも」

どうやら二人とも俺のノートのおかげでバツチリだったそうだ。

「志吹くんのおかげだよ！何であんなに的確に範囲がわかったの？」

「それあたしも気になってた、どうして？」

「それはな……って授業で先生が言ってただろうが」

全く、てか巴とモカとつぐみはどうだったのだろうか？

「アタシは問題ないぜ」

「お腹すいたー」

「モカちゃん：答えになっていよ。でも私もモカちゃんも大丈夫だったよ」

みんな問題なかったか。

「俺もほぼ完璧だしひとまず一日目はクリアか」

なんせまだあと二日もあるのだ。

「また泣きつかれても困るから、これから勉強会だな」

「うええ……」

ひまりが女の子がしてはいけない声を出していた。

その後俺の家で勉強会をして、残り二日間のテストも全員手応えはあったそうだった。後は答案が帰ってくるのを待つだけとなった。

そして六月に入り、ジメジメした天気が続いてくる季節となった。

六月始めの土曜日の朝に、舞衣がまた朝食をねだりに来たのか知らないがやってきた。

「志吹ちよつと来てくれる?」

玄関外に舞衣が立ってて、家の外に一台、黒塗りの車が停まっていた。

「なんだよ藪から棒に、それにあの車はなんだ?」

「その車に乗ってほしいの…お願い」

明らかに舞衣の様子がおかしい。俺は舞衣に理由を問いただそうとしたら。

「神子様ですね。私どもの車に乗っていただけますでしょうか?」

「うおっ!?!」

声のした人物は舞衣の後ろではなく、横に立っていた。黒いスーツみたいのを着ていた女性三人、サングラスまでかけていた。

「誰なんですか貴女達は?舞衣、知ってるんだろ?答えてくれよ」

「……………」

だんまりだった。

「………様です」

「………様?」

誰だろうか？……前に舞衣が言ってたな、弦巻こころって。

「弦巻、こころ……？」

駄目だ、夢の時は名前が聞き取れる前に目が覚めたからわからん。それに記憶も全然ない。

「思い出されましたか、こころ様が会いたがっておりますので迎えに参りました」

思い出せてないけどな。でも会ってみよう。

「わかりました、会います」

「ありがとうございます」

俺は停めてある車に乗った、舞衣も隣に座った。

連れてこられたのは、駅から離れたビル街の少し先だった。

「すげ…」

車から降りると、大きな屋敷が目の前にあった。まるでこれは…

「豪邸とはこのことを言うんだな」

敷地内の範囲が何百メートルあるのか見当がつかない。てか何で舞衣も一緒に来てるのだろうか？

「……………」

「お、おい……………！舞衣、どこに行くんだよっ！」

舞衣は逃げるように屋敷へ入っていった。何なんだよあいつは……………？

「神子様、こちらです」

黒服さんに屋敷へと案内された。正面玄関みたいのを入つていくと大広間に着き、そこから通路、通路へと進んでいった。

「広すぎ、どこまで続くんだよこれ」

「もうすぐです」

「あつ、はい」

聞こえてしまった。

「こちらです」

黒服さんが止まってこのドアの先に弦巻こころがいるらしい。

「失礼します……………」

ノックをして俺はその部屋へと入っていった。

「あつ……………！」

部屋へ入ると、奥に赤白の横縞模様のTシャツにオーバーオールタイプのデニムを着ていた女の子がいた。

その容姿は夢と同じ黄色のロングヘアーに黄色い瞳。

「久しぶりね志吹っ!!」

俺の記憶にないその女の子は俺の名前を呼んでいた。

笛吹き少年は明るくなりたかった（後編）

「久し振りね志吹!!」

「こころと呼ばれた女の子がそう言ってきたが。

「……………」

全然覚えてない、どこで会ったかは夢でわかったが俺は全く記憶にない。

「えっと、俺達ってどこかで会ったっけ？」

俺はおずおずとその少女に聞いてみた。すると

「何を言ってるのよ！あたしと志吹は三年前に関西で会ってあたしと約束をしたのよ？」

約束？

「ごめん…俺、その時の記憶が全くないんだよ。だから君に会ったというのも全然覚えてはいない」

そう言うと笑顔いっぱい明るい女の子はそのまま変わることなく、俺に言ってきた。

「こころよ。君じゃなく、こころって呼んで頂戴」

俺がさっき言った言葉は半分聞いてないのか？

「こころ、俺はこころに会った記憶がないし、約束ってのも覚えてない

んだ」

さつきも言ったよなこれ？

「どうして覚えてないのかしら？あたしは覚えてるのに」

「ごめん」

「いいわ！あたしは来年にも会うって約束したから来年も志吹と会った神社に寄ったのに、誰も志吹の事を知らないって言ってたのよ。どうして皆同じ事を言ったのかしらね？」

ああ…これはタイミングが悪かったな。一年後に両親が呪いで亡くなったから、俺はそこから叔父に預けられてたからって、しかも俺の事を誰も知らないとかって箱口令かんこうれいを敷いてたらしいからなり嫌がらせはここから始まってたんだ！

「ごころ、そこにいた人達は俺の親族が」

俺が言おうとしたら、後ろのドアが開いた。

「それはわたしが説明するわ」

「舞衣？」

舞衣が入ってきた。でもその格好は、なんというか…

「……………似合わねーなそれ」

「うっさい」

だってさつきまでガロンスウェットとデニムハーフパンツだったのが、今のその格好は。

黒服さん達と同じ格好だもんな。髪型もツインテールからポニー

テールにしてサングラスもしてるし。

端からみたら誰かわかんねーなこれ。俺は声でわかったが。

「舞衣、説明してくれるのね！お願いするわ」

「ええ、それではまずこころ様が会った人達についてですが…」

「そんな堅くしなくてもいいのに。あたしは初めて会った時の舞衣の喋りのほうがずっといいわ」

「確かにな、喋り方まで違うと別人に見えるわな」

本当にな。てかどうして舞衣がここでやってるのか聞きたいけどそれは後でいいか。

「コホン…じゃあ志吹、両親の事も話すけどいいよね？」

「あ、ああ…頼む」

俺も聞きたいな、あの頃の俺は色々荒んでたから親族が何やってるか気にもしなかつたしな。

「まずこころ様…ではなくこころが来た時にはあの神社はもう志吹の両親は亡くなってて神子家の遠縁の人が引き継いでいたのだけど」
「……………」

俺は黙る事にした。こころも舞衣の話を知っている。

「それで志吹の事は一切話さないっていうのが決まりだったみたいなの。わたしも詳しく知ってる訳じゃないけどね、どうしてなのかは…わたしはそもそも親族でも何でもないし」

そうだったな、舞衣とはただの幼馴染なだけでな。でもどうしてそこまでしてくれるんだ？監視役にしてはちょっとおかしいぞ？

「それで志吹がこころの事を覚えてない理由もだけど
「ん？」

突然舞衣がああの時の俺を説明してくれた。

「志吹、あの舞台の後に詩音に何か言ってたでしょう？」
「……そうだった？」

全然覚えてない、こころの会う前後の記憶が抜けてるのかな？

「まあいいわ、その時大人達に取り押さえられたのも覚えてないのね
？」

「……………知らん」

そんな事あったのか。俺の回りの大人達はもしかしてそれが原因
で冷たくしたのか？詩音と比較したからじゃない？

「わたしはその場に居たわけじゃないし、お父さんが話してたけど誰
かが思いっきり頭を叩いて気絶させたって」
「……………」

なるほどなあ、よくわかったわ。

「それでこころと会った記憶も飛んだのかもしいわね。わたしの
話はこれで全部よ」

都合よくこころの事も忘れていたのか俺は。だけど詩音に俺は何
て言ったんだらうな……？

「……………ごめんな。信じられる話じゃないだろうに」

俺は黙々と聞いていたところに向けて謝罪した。

「志吹、両親が亡くなっていたのね。……あたしはそんな事も知らないで訪ねてしまつて」

「……?…ぶっ!?!」

ところが俺に向かつて抱きついてきた。予想もしない行動で俺はこころに押し倒されて地面に叩きつけられた。

「なっ…!?!」

舞衣も大慌てだ。

「え、え…?…」

俺も多分舞衣と同じだろう、けどなんだろうなこの気持ちは。

人の温もりつてこんなにもよかつたっけ?

「ちよつと離れなさいよこころ!」

「いやよ!志吹が泣いてるのだから」

何言つてるんだこころは。俺が泣いてるって…?

「本当だ」

何だよ舞衣まで、俺にどこが泣く要素があつたんだよ。

俺はこころに抱きつかれて仰向けで倒れているし、こころとくっついてるから動かしにくかったけど、なんとか手を俺の目元までやると

「……」

一粒の涙があった。

またか。これってこころが俺を押し倒していた衝撃で…なわけないか。きつとこころの温もりが俺を…

「なっ…志吹まで!?!」

俺もこころを抱き締めた。

「うれしいわ志吹」

俺とこころは抱き締め合っていた。舞衣がすぐに引き剥がされたけど。

「しーぶーきー?」

「何だよ舞衣、そんなに怖い顔して」

「ふんっ!この事は蘭やつぐみに伝えておくからね」

何でそこで蘭やつぐみが出てくるのかサツパリわからんし、何を伝えるつもりなんだよ?

「もうすっかり明るくなったわね志吹、さつきとは大違いよ」

「こころがそう言った。俺はこころに抱き締められてなんかな……何だろう？」

「そうだな、ありがとうこころ。俺はまたこころに助けられたんだな」
「また？」

舞衣が不思議そうに言ったし、俺もどうしてそんな事言ったんだ？

「志吹、思い出したの？」

「俺はあの時、そうだ！こころに会った。そして俺の笛でみんなを笑顔にしないかって聞かれて……そして詩音よりもずつといい音出すつて言つて」

「そうよ！あたしはあの時そう言つたわ！」

「こころは俺と一緒に来ないかと言つてたよな……でも俺は急な話だから考えさせてともな。あの時の俺はまだ不安しかなかったから……今もそうか」

たはは……今も昔もあんまり変わつてねえや。

「そうね、でもあたしはずつと待つてたわ志吹！だからあたしと一緒に世界を笑顔にしに行きましょう！」

「断る」

「どうして!?!」

悪いこころ、それは無理だ。俺はもう長くない命だから……だから断ることしか出来ないんだ。

「悪いがそれは言えない、わかってくれこころ」

「わからないわ！今の志吹から笑顔がまた消えているのと何か関係が

あるのかしら？」

あるよ、呪いがな。でもこころを巻き込む訳にはいかないんだ！これは絶対に俺個人の問題でこころにまで危害が及ぶのは避けられないから。

「……………」

舞衣もだんまりだ。

「ごめんこころ。それは絶対に言えないんだ」

言ったら俺の生死にもこころが関わってしまう。それはこころにも生きるか死ぬかという事にもなるんだ……それだけは絶対に嫌だ！俺のせいで他の人まで迷惑……いや、犠牲になるのは俺自身が許せなくなる。

だから誰にも言えない、蘭にも友希那にも言えないんだ！これは俺一人で何とかしなくちゃいけないから。

「……………」

こころは何も言わなくなってしまった。でも笑顔のまま俺をずっと見ている。

「わたしはもう仕事に戻るけど、志吹はこころをなんとかしなさいよ。それと蘭とつぐみにはさっきの事伝えておくから覚悟してね？」
「はあ？」

だから俺が何をしたってんだよ？

「それじゃあ志吹、またね」

舞衣は部屋から出ていった。仕事ってここの、だよな？ 一体舞衣は何の仕事してるんだよ…

「ねえ志吹、笑顔が消えてるわ。あたしと一緒に行くのが嫌だったのかしら？」

心なしかこころにも表情が曇っていた。

「違うんだこころ。俺は…」

どう説明すればいいんだよ。遠回しに言っても駄目だろうしそれこころを上手く巻き込まないようにするには一体…

そう思っていたら視界が暗くなっていた。

「ふぐっ…」

顔になんか柔らかい感触ができていた。まさか…

「ぎゅー」

座っている俺にまた抱きついてきていた。しかも俺の顔を埋めるように、つまりこの感触はこころの…胸!?

「くるしー…こころ離れて、くれ…」

俺が言ったからかこころは離れてくれた、少しだけな。こころは俺の頭に手を回したままだ。

そして今、俺とこころはかなり近い距離で見つめ合っている。

「こころ…もう少し離れて」

「嫌よ、志吹とこうしているとあたしはポカポカして気持ちいいのよ！」

なんじゃそりや？てか頭に手を回されるとなんというか…俺はドキドキする。

「顔が赤いわ志吹、どうしたのかしら？」

「そりやこれだけこころと、ち…近いとそうなるわな」

女の子とこうして抱きつかれながら至近距離でお互いに見合わせたら誰だってそうなるだろ！こころには無いのか？

「あ、あたしも何だかドキドキしてきたわ！」

こころもやっと意識したのか気づいたのか赤面して俺から離れていった。

「と、とにかくあたしはまだ諦めないから！志吹と一緒にあたし達のメンバーに入って貰うまで待っているわね」

「メンバー？」

「そうよ、あたしバンドやってるの！」

またバンドかよ！

「ふうん」

そう返事するしかなかった。それにしてもどうして俺の回りはバンドやってる奴が多いんだよ。

これで舞衣もやってたらほぼ全員だな。

「あたしのバンドで世界中のみんなを笑顔にするのが目標よ！メンバーもあたしを含めて六人いるし、この後来るのよ。志吹にも紹介してあげるわね」

「あ、ああ…」

呆気にとられている俺であった。

――

数十分後、こころのバンドメンバーがやってきた。何名か知ってる人がいたし。

「紹介するわ！これがあたし達のバンド、『ハロー、ハッピーワールド』よ！」

「こころ、バンド名だけじゃわからないよ」

黒のセミロングで帽子を被っているその人は言った。

「あー、私は奥沢美咲。こころには無理矢理このバンドに…」

「無理矢理じゃないわよ！」

「いや、どうみても無理矢理じゃん」

「むっ」

「こころと奥沢がじゃれあっているのを横に。」

「一昨日振りだねしぶりん。はぐみはベースやってるよ」

北沢はぐみ、オレンジのショートヘアで俺とは結構前から知り合
いだ。

商店街の北沢精肉店の娘で俺もたまに買っている。こここのコロツ
ケはかなり絶品で、秘訣を教えて欲しいと訪ねたのがはぐみとの親交
が始まりだったな。

結局教えてくれなかったけど。それに変なあだ名つけるな、それだ
と某アイドルに聞こえる。

「はぐみがバンドやってるなんて聞いてなかったよ。それにコロツケ
の秘訣も教えてくれないし」

「駄目だよしぶりん、教えちゃったら商売上がったんだよ？」

「そんなものかあ？」

「だってしぶりん真似するでしょー？」

「そりあ自分でも作りたいしな。揚げ物は不得手だし」

油を使った料理はちよつと苦手だ。特に揚げ物は。

「はぐみちゃんまで知り合いなんだね、志吹くん」

俺の横に座ってるのは松原花音さん。前に千聖さんをつぐみの店
で会って以来か。

「そうですね。てか花音さんまでバンドやってたなんて千聖さんは教
えてくれなかったですよ」

「えつとね、私はドラムやってるんだ。経験あったから」

「へえ…」

花音さんドラム経験者かあ。だったらあとで指導して貰おうかな？

「君とは縁があるようだね、神子君」

カツコよく芝居がかかったその口調は

「まさか瀬田先輩までとは…」

この人部活で演劇もやってたよな？

「こころに誘われてね、ギターやってたから私もやりたいと思っただのさ…ああ、なんて偉いんだ」

「……………」

偉いってそんな意味だっけ？あ、手帳返すの忘れてた！まだ鞆の中だったわ。

「瀬田先輩、手帳は…」

「!?」

瀬田先輩から笑みが消えてテーブルを挟んで向かいにいる瀬田先輩が凄い勢いで俺に迫ってきた。

「やっぱり君が拾っていたんだね。あの後に学校中をくまなく探しても見つからないし、落とし物にもなかったから誰かが悪用しているのかと思ったりもしたよ」

「私は思った、君ではないのかとね。でも私は子猫ちゃん達がいっぱいいる中で君に会うのはちよっとはばかられてね」

「はあ」

瀬田先輩は自分の髪をなびかせて話を続けた。

「そんな訳で君を訪ねる機会がなかったんだ」

そんなに気になるものか……ってそうか、上級生はみんな女子だったの忘れていたわ。

「それで、手帳の中は見たのかい？」

「ちよつとだけ……」

すいません嘘です。全部見ました。正直言えないような内容はなけれど、結構センチメンタルなの書いてあったし……言わないけどね。

「まあいいさ、それよりも早く返してくれるかい？」

「あ、いや……家にある鞆に入ったままで……」

「……………ふっ」

瀬田先輩は半ば絶望したかのような顔をして、決めポーズをとっていった。正直ミスメイクじゃね？

「明後日、月曜日に返しますよ」

「お願いするよ……」

「薰くん、大丈夫？」

はぐみが瀬田先輩を慰め（？）にいった。

「ああ……大丈夫だよはぐみ」

見られたくない中身だったからか瀬田先輩は凄く落ち込んでいた。

「で、六人って言ってたけどあと一人は？」

メンバーがあと一人足りないのに気づいた。

「あら、ミツシエルはまだなの？」

「こころが言ってきた、奥沢とのじゃれあい終わったのか

「みんなー遅れてごめんー」

さつき聞いたような声で部屋に入ってきたのはなんと：

「ぬいぐるみ？」

ピンクのクマのぬいぐるみがやってきていた。

「違うよしぶりん、ミツシエルだよ」

「ミツシエル…？」

なんだそれは、ぬいぐるみの名前？

「紹介するわ志吹、ミツシエルよ！」

ぬいぐるみに向かって「こころは言った。

「ミツシエルだよーよろしくねー」

「……………」

俺は部屋の中央のテーブルから入り口にいるぬいぐるみに近づいていった。

「何やってんの奥沢？」

「うえっ!？」

ぬいぐるみは後ろに跳び跳ねるくらい驚いていた。

「(何でわかるの!?)」

ぬいぐるみこと奥沢は俺にだけ聞こえるように喋ってきた。

「いや、だって声でわかるし。あと奥沢がいなくなってるしな」

「これ、変声機能あるんだけどなあ…」

「まあ俺は耳がいいから」

奥沢は少し間をおいて…

「ふーん…あんたとは上手くやっていけそうだよ。よろしく神子」

「おう」

俺と奥沢は拳を突き合わせた。

「志吹くん、ミッシェルが美咲ちゃんってわかるんだね」

「へっ?それはどういう意味で」

「あー……」

奥沢が説明してくれた。何でも奥沢とミッシェルは同一人生つてのを花音さんと黒服さん以外理解していないとの事だ。何度も何度も説明しても駄目で今は諦めてるらしい。

「大変だな、一人二役なんてな」

「そりやもう…」

俺と奥沢（ミツシエル）が話し込んでいた。

「ふふっ、志吹はもうみんなと仲良くなったのね。あたしは嬉しいわ」
なんかこころが言ってたが、気にしないでおう。

—————

これからハロハピの作戦会議とやらがあつて、俺は邪魔になりそうだから帰る事にした。

こころも再会出来て嬉しいと言ってたし、また会おうと連絡先も交換された。てか全員分だけど。

こころの屋敷を出て知らない土地とはいえ、地図アプリがあるから道に迷う事はないから適当に歩いていと駅についた。

「反対側だったのね、こころの屋敷は」

そう思うとなんか太鼓叩きたくなってきたので、近くのゲーセンに寄ろうとしたら。

「あれ？志吹じゃないか」

後ろから活発な声が聞こえてきた。

「巴か、それにあこちゃんも」

そこにいたのは巴とその妹のあこちゃんだ。

「煩わしい太陽め我が魔王が…えっと、神子さん、おはようございませす」

「あ、ああ…おはよう二人とも」

何で途中で止めるんだ？

「あこ…普通にわかんないなら言ったらどうなんだ？」
「うっ」

あこちゃんは

「巴もお姉ちゃんしてるんだな」

「どういう意味だよそれ」

「ははっ、そのまんまの意味だよ」

「そうだな」

俺と巴は二人で笑っていた。

「むー！二人して笑い合ってる！」

一人むくれているあこちゃんであった。

ありがとう巴、お前達と出会って俺は今、明るくなってるんだ。

こころと再会した時には笑顔が消えていた時もあったけど

あれは自分の置かれた運命を思い出しただけで、笑顔は消えてはいないんだ。

例えば俺の余命があと1・2年しか持たなくても

呪いが解ける術がなくても

きっと俺は笑って最後の時を迎えるだろう

熊野のおじさんには申し訳ないけど

俺はこいつらの為なら…いや、やめとこう

まだそれは早計だからな、だけどそれでもいいような気がするんだ

まだ、ね

「志吹？」

「神子さん、どうしたの？」

どうやら俺はぼーっとしていたらしい。

「あ、ああ……ごめんごめん。少しぼーっとしていた」

「おいおい……モカじゃあるまいし」

モカと同類とは嫌だな。

「さっきの話聞いてなかったんだな。もう一度言うけど志吹も一緒に行かないか？」

「お姉ちゃんが太鼓叩きたいから、駅前のゲームセンターに行く所だったんです。あこはりんりんと待ち合わせまでまだ時間あるから付き添いで」

「あこ、アタシの付き添いじゃなくてついでみたいだな」
「にひひ」

全くそう聞こえるからしやあないな。てか巴は俺と同じ理由じゃねーか！

「奇遇だな巴、俺も丁度太鼓叩きたい気分だったんだよ」

「ほんとか!? だったら前に勝負の約束したの覚えてるか？」

「覚えてるぜ、やろうぜ勝負！」

「おうっ！」

「お姉ちゃんと神子さんが燃えてる！これが漆黒の炎……」

スマホの時計を見たら10時になってたから開店してるはずだし、俺と巴とあこちゃんはゲーセンへ向かっていった。



志吹と別れた時にあたしの胸の辺りが少し痛んだ。何かしらこの痛みは？

「それでごころ、今日はどこ行くの？」

美咲があたしに聞いてきたけど、どうしたらいいのかしらね？

「ごころ？」

「……………」

「ごころちゃん？」

「ごころ、大丈夫かい？」

「ごころん……」

美咲だけじゃなく、花音や薫にはぐみまであたしを見てる。

「何か変なのあたし、こう……胸の辺りがちよつとズキズキするの」

「えっ、マジで？」

「……………ふええ！」

「……………う……」

薫とはぐみは首をかしげているみたいだけど、美咲と花音はあたしを見て驚いてるから何か知ってるのね？

「ごころ様、それはきつと……」

黒服がやってきてあたしに耳打ちしてきた。

「恋、だと思いません。きつと」

「恋……？」

「何かしらそれって？」

「……………」

「鯉？」

美咲と花音は驚き、薫とはぐみは壮絶な勘違いをしていると黒服は思った。

「……………」

美咲があたしに何かを言おうとしたみたいだけど、あたしには何なのかわからないわ。病気なのかしら、コイツって病気は？

「暫くすれば治まりますので、大丈夫ですよ……………」

そう黒服は言うけど、あたしは舞衣にも聞いてみる事にした。

舞衣はあたしの家で住み込みでこの黒服見習いをやってるのよね。学校で会った時はとても暗かったのは印象に残ってるから覚えやすいわ。

それで、先月辺りから……………」

それに、志吹の事何か知ってそうだったからあたしが……………」

舞衣から志吹の事、知ってるの話して貰うわね！

……………」

笛吹き少年はドラムを披露した

「よっ…と」

午前11時 ゲーセン内のベンチにて巴とあこちゃんが座っていて、俺も巴の隣に座っていた。

「アタシが太鼓の勝負で負けるなんてな、信じられないぜ」

いつもの勝ち気な巴じゃなく、なんとというか塩らしかった。

「お、お姉ちゃん大丈夫?」

「悪いあこ、こんな姿見せちゃつてさ…」

「お姉ちゃん……」

先ほどまで俺と巴は太鼓の○人でどちらがハイスコアとれるか勝負していた。

結果は俺の勝ち、しかも全曲。お互いに満点も数回あったからドローもあるか。巴も相当自信あったのかベンチに座つてうなだれているのであった。

「と、巴…俺はな初めてなんだよ?ここまで俺についていけるなんてな。久々に本気でやれて満足してるんだよ」

「志吹…?」

「向こうで有名になりすぎたのか、誰も挑戦してこなくなったし…いや、たまにいたけど直ぐに諦めていったからな。その点、巴は最後まで…しかもお互いにノーミスもあつて同点もあつて俺は正直嬉しいよ。ある曲なんて難しいフレーズを難なく出来てるし」

「すげえよ巴はさ、でもこれは言わないけど……」

ソイヤって叫び声は何だよ!?

そこだけは誉めたくない。

「アタシの事を誉めてるのか、志吹の自慢なのかどっちなんだよ？」

「一応誉めてるつもりだが、そう聞こえたか？」

「そ、そっか…：そういや難しいフレーズってあの曲か？」

「こそ、あれは結構動きがな…：」

俺と巴はあのフレーズはピッタリと同じ動きしていたからなあ、
やっぱり巴とは太鼓で語り合えるな！

「お姉ちゃんと神子さん…：二人は付き合ってたりするの？」

「は？」

何言ってるんだあこちゃん？

「なーに言ってるんだよあこ、アタシと志吹はそんな関係じゃないから
な？」

そうだぞ、巴の言う通りだ。

「だって神子さんとお姉ちゃん、太鼓叩いてる時の息ピッタリだった
し！それにそれに…：お姉ちゃんも今嬉しそうなもの！」

「そうなのか巴？」

「っ！」

俺は巴の顔を覗き込むと…

「みみみ見るなよ志吹！今のアタシは変なんだから見るなあー！ー！ー！

!!

巴はベンチから飛び出してゲーセンを出ていった。

「お姉ちゃん……」

「あこちゃんが変な事言うからだよ、俺と巴がどうお似合いなんだ？」

「お似合いまでとは言っていないですけど」

「巴を追うのも面倒だし俺はもうここを出るよ、あこちゃんはどうするの？」

「りんりんが来るまでここで待ってます！それにしてもりんりん遅いなあ？」

「そういえば元々付き添いで巴と来たって言うけど、もう一時間は経つよな？」

「あ、りんりんから連絡ありました…一時間前に」

「……………」

—————

あこちゃんも帰るそうだったので、あこちゃんを家まで送った。結局りんりんさんは用事があつて来れないらしい。

俺は商店街へ向かう事にした。腹減ったし、初日に来た時に食べたラーメン屋にも行こうとしたら。

「あつ」

巴とばったり遭遇した。

「さつき振りだな巴……」

「あ……ああ、そ、そうだったな志吹」

まださつきのを意識してるのか巴は恥ずかしそうにしている。

「さつきのあちゃん発言は気にするなよな？」

俺はなんとも思っていないからってのは言わないほうがよさそうだ。

「その、さ……アタシは嬉しかったんだよ。志吹がそこまで太鼓を叩くのが上手いのがさ、年代にはそういうのいなかったから」

「巴？」

「シヨックだったのは確かだけどな！だから次はドラムマ○アで勝負してくれよ」

「おいドラマー！勝てる訳ねえだろ、俺はドラムなんて……」

一応練習しまくって、動画も見てた成果でそれなりには出来るとは思うのだが。譜面も元から読めるし、だけど人前で見せるにはまだ早いかもしれない。

今度花音さんにも見て貰おうかな？

「そうだったな悪い志吹、それよりもラーメン食べにきたのか？」

「そうだよ、ここはちよつと思入れがあるしな」

「なんだよそれ……それより行くぞ志吹」

俺と巴はラーメン屋に入っていた、もうすっかりいつもの巴に戻っていった。

昼の時間だし、土曜だからか以前と変わらずほぼ満席に近くて丁度テーブル席が空いたので俺と巴はそこに座った。相変わらず食券販売機はないが。

巴は豚骨、俺は醤油を頼んだ。前に豚骨食った時にはちよつと味付けがアレだったからな。

「それで志吹、ここに何の思い入れがあるんだ？」

注文待ちの間、巴が聞いてきた。

「それはな、初めてここに来た時にこのラーメン屋に寄ってな…カウンター席でやたら旨そうに食べてたから。まさかとは思うが巴だったりしないよな？」

「……」

「巴？」

「志吹が初めてここに来たのっていつの日なんだ？」

「んー、三月の…だったな」

俺がここに初めて来たのは三月下旬、もうあれから二ヶ月か……。意外とそんなに経ってないのに巴達とは随分長い付き合いと思ったりするよ。

そんな事考えてたら巴は……

「それ多分、アタシだ……マジかよ」

巴に詳しく聞いたが、向かいの羽沢珈琲店から出て行って、すぐにここに来たとの事。時刻もピッタリらしく確定だった。

「やっぱ巴だったのか、これでようやく納得したよ」
「何がだよ…」

また照れ始めていた巴は

「ラーメン好きだろ巴は？」

「そりゃ大好きだよ、特に豚骨はな！」

別に豚骨までは言っていないが、まあいい。

「一度巴は関西のラーメンを食べてみた方がいいな、いや…俺が作るか！」

すげえ手間かかるけど、一度やってみたかったんだよね。

「本当か志吹!？」

「ああ、味までは保障出来んが任せろ」

「楽しみにしてるぜ！」

うわ、巴の目がキラキラしてる…本当に好きなんだなラーメンが。

その後は俺のつぐみの出会いを話したりしていた、巴は少し笑っていたが。

「それがなければ巴とこうしてラーメン食べる事もなかったしな、本当につぐみには感謝してるよ」

「そうだよな、つぐにちゃんとお礼は言ったのか？」

「……………やべっ」

「おい志吹?……………ははっー！」

巴は呆れ笑いをされた、ラーメンも来たし食べるかな。

――

ラーメン食い終わった後、巴とはそこで別れて俺はやまぶきベーカリーへ向かった。

「以前、沙綾を困らせちゃったからあまり会いたくはないけどあのパインないとおやつに困る」

そう、このあとまた神社で笛の練習しに行くからその為にな。だから沙綾が店番してない事を祈るしかない。

カランコロリン

いつものドアベルの音が出て店に入ると。

「いらっしやいませー……あ、神子君」

「沙綾、また来たよ」

「う、うん……ありがとね！」

まあ無理だったか、祈りなんて届く訳ねえ！

沙綾は前の事を気にしていたのか少しきごちない感じだ。だから嫌だったんだけど、これはどうしようもないな……

「おやおやこれはこれは、しーくんではありませんか？」

そのゆっくり口調で聞き覚えのある声は…

「モカか」

「モカちゃんですよ」

青葉モカがレジ横でパンを食べていた、沙綾と話でもしていたのであろうか？

「神子君も…モカみたいにお昼はパンだったりするの？」

「いや、おやつにするつもりで。さつき巴とラーメン食ってきたしな」

流石に食えん、でもすぐに腹減るしな。

「ともちんとラーメンだったんだね〜？じゃあ次はモカちゃんとパンなんだね〜」

「人の話聞いてたか？おやつだったのによ」

全く、モカはいつも俺の話を聞かないからな。

「おやつって、ああ…これから練習？」

「そうだよ」

沙綾はドラムと思ってるのかな？残念だが笛なんだ。

「と、言う訳でほいこれ会計よろしく」

俺はさっさとチョココロネ五つをトレイに乗せてレジの前に来た。

「神子君もなんだか、りみりんと同じ買い方してるね…流石チョコロネ同盟は伊達じゃないね」

「まあね」

話ながらも、沙綾は手慣れた手つきでチョココロネ五つを袋に入れてくれた。

「はい、どうぞ」

「ん…ありがとう」

俺は買い物を終えたし、沙綾はモカとの話の再開するのかわからず。

「しいくん」

「ん？」

店を出ようとしたらモカに呼び止められた。

「これから神社に行くの？」

「ああ」

俺は笛の練習をしに羽丘神社に行くつもりだ。モカもわかってる筈だったが

「えっ、神子君はドラムを神社まで運んで…るの？」

沙綾は驚いた感じで俺に聞いてきた。

ってヤバい、秘密にするの言っただけでなかったし沙綾は俺の笛は知らないだった！俺は猛ダッシュでレジにいる沙綾まで駆け寄っていったが…

「じーくん、ドラムやってるの?」

モカが怪しげな目で俺をみている。

「……………」

俺は沙綾に目をやると

「あれ?これって言っちゃ駄目、だった?」

ああ、秘密にしたかったよ!

「いや、いいさ。どうせいつか言うつもりだったから」

俺はもう諦めたように沙綾に言った。

「前の事も今の事も気にしてないから大丈夫だよ沙綾、だから…そのぎこちないのはもうやめにしような?」

「うん!そうだね!……でも笛って何?」

「それは後で説明するよ」

俺はまだ過去の事を引きずってたりするが、それはまだいい。今はモカをどうするかだが…

「じ〜〜〜〜〜」

さつきから俺に向かってガンを飛ばしているみたいに睨み付けていたモカだが、さてどう言い訳するか。

「そうだよモカ、俺はドラムをやってるよ」

観念した、俺はモカに告げた。

「いつからやってたの？GWの時は興味ないくって言ってたから」

「あの狸寝入りの時か、よく覚えているな。テスト前日かな？そこから結構練習したが」

「一週間くらいなんだね…ねえ、しーくん」

「何だよモカ」

「しーくんがドラム叩く所を、見てもいい？」

「えっ!？」

まだ人様に見せられる程じゃないから、断るつもりだったけど……

「……………私も見てみたいな」

「沙綾？」

意外だった、沙綾までとは。

「わかったよ、って沙綾は店いいの？」

「あ、ちよつと待っててね」

店の奥に入っていった沙綾、そしてすぐに戻ってきた。エプロンを外しただけかな？

「お待たせ、お店は大丈夫って父さんが」

「そっか」

沙綾の父さんは存命してるんだな、いやこれが普通なんだよな。

「それじゃ、しーくんの家へレッツゴ」

「全く、人の予定を狂わせやがって…!」

「あはは…神子君も大変だね」

沙綾は苦笑いしていた。そして何故かモカを先頭でその後ろを俺と沙綾が歩いている。

そう言えば何で来てくれるのだろうか？

…過去に何があったのか知らないし、知りたくもないがきつとドラム…いや、考えるのはよそう。

「か、神子君…そんなに私の顔をじっと見てると恥ずかしい、かな／＼」

「あつ…悪い沙綾」

「大丈夫…だけど考え事してたの？」

「そんなところだ」

「そっか…うん、やっぱり私が見たいって言ったからだよね？」

まあそうなるよな。合ってるしどう答えようか？

あと前を歩いていたモカがちらりとこちらを向いたけどすぐにそっぽむいた。

「うーん…まだ人前でやるのはまだ早いってのはあるし、沙綾まで見たいって言うからさ、一体どうしてなんだ？」

俺は隠すのはやめた、どうせ後で言うと思うし。

「神子君さ、前に香澄のバンドに誘われたって言ってたじゃん」

「ああ、正確にはおたえ…花園たえって人だけだな」

沙綾も確か花咲川で同じクラスって以前りみから聞いてたけど、一応フルネームで言うておく。

「あ、花園さんからなんだっけ？でもどつちでもいいけどあの子はね、人を見る目はあると思うんだよ。何て言えばいいのかな…上手く言えないけど神子君がバンドやりたいって感じを見抜いていたんじゃないかな？」

「……………」

「りみりんもそうだったし」

りみの事は兎も角、俺はそうなのかな？俺は長くは生きられないかもしれないからただただ単純に青春を謳歌したくてバンドやりたかっただけなんだけどな。まあ蘭達の影響も強いが。またモカがこちらをチラリと向いた。

それに…な、バンドなら詩音も手は出さないだろう。

「そうかもしれないな」

「あれっ？あつさりと認めちゃうんだ」

「まあ元々音楽はやってたしな、昔」

「ふーん…」

昔つてのを付け加えたからか、沙綾はそれ以上聞かなかつた。俺たちより前にいたモカは迷うことなく俺の家の前へと到着した。

「とうちやくくく」

「ここが神子君の家なんだね、ふーん」

俺は玄関の鍵を開けようとしたけど、そういや朝に黒服さんから連れていかれて鍵閉め忘れてたわ。

まあ泥棒とか入る意味もないし大丈夫だろ。

「ほらモカも沙綾も入って入って」

「お邪魔しまーす」

二人は俺の家へと入っていった。



「ただいま…」

「あつ、お姉ちゃんお帰りー！」

アタシが家に帰ると玄関の先にあこがいた。あこの用事も終わったのかな？

「ただいまあこ、早かったな」

「えへへ…実はりんりん用事があつて来れなかったって連絡があつたの気がつかなくて。神子さんとお姉ちゃんの太鼓に夢中で」

「そ、そうか」

ヤバい、志吹の名前が出てきたら何かアタシ変だ。

「お姉ちゃん？」

「あこ…話があるけどいいか？」

「うんいいよー」

「ここじゃ話にくいからアタシの部屋でな」

アタシは玄関で靴を脱いで、あこと一緒に部屋へ向かった。

あこなら、大丈夫だよな？

「それで話って何？」

アタシとあこは一緒の部屋じゃないから、あこは座布団の上に座っていた。

「あのさ、あこはアタシと…し、志吹がお似合いだと思うのか？」

ああ、恥ずかしい…！…こんなひまりにも言えないな。

「お似合いとは言っていないけど…ほら、たまに神子さんとシンクロしたみたいに左右対称で動いてる時が何度かあったりしたから、あれであこはピーンと来たの！これは二人は前世では絶対に夫婦だったって。それで、付き合ってるって思ったの」

「…………あの動きはああしないと出来ないんだよな、打ち方が確立されててな、バチがもう一つ持てれば違ってくる…………んだよ」

前世は無視だ無視、あこの意味不明なのは置いといて。

「話が逸れちゃったけどアタシは、志吹と…その、さ」

何で上手く言えないんだよアタシの馬鹿！あこでもこうなっちゃったなら、四人にはどうやって言うんだよ…！

いや待てよ？別に言わなくてもいいんじゃない…

「お姉ちゃん、やっぱり神子さんの事が…………？」

「……………」

アタシは何も言えなかった、でもこれだけはハッキリとわかる。

志吹と太鼓を叩いてる時、ラーメンと一緒に食べてる時も……いいなって思ったから。

これが好きって感情なのかはアタシはわからない

蘭もつぐもこんな気持ちだったのかな？もう志吹にちよつかいも出来ないかも。

「お姉ちゃん、あこは応援するよ！」

「あこ？」

「だってだって！あこ、神子さんは凄くこう……ババーン！つてしてカッコいいしお姉ちゃんもカッコいいよ！だから二人が一緒だったら……もつとカッコいいよ！」

「あこ、ありがとな」

「えへへ」

アタシはあこの頭を撫でてやった。あこは応援してくれるか、そつかそつか……嬉しいよ。

「しかしなー」

明後日から志吹とどうやって向き合おうか、これから考える事にした巴だった。

—————

「うわあ…何っこ、有咲の家の蔵みたい」

地下室に案内した沙綾（とモカ）だけど、第一声がそれかい！だけ
ど言われてみればそうだな。

「確かにそうだな、あの時既視感があったのはそれか」

「ギターまで置いてあるし、まさかギターも神子君はやってたの？」

「ギター？いや、そんなのはやってないが…」

部屋の角にギターが置いてあった、黒と白で分けられていた縞模様
だった。これはモカでも蘭でもないな、一体誰が？

「ん…これはまーちゃんかな？」

「舞衣？何であいつが…？」

「さあ？それより早くしーくんのドラム見せてよ」

「ああ…そう急かすなよ」

部屋の中央に置いてあるドラムセットに俺は立っていた。

「そーいや何を演奏するか考えてないけど、俺のオリジナル曲でいい
か？」

「おーオリジナルなんてあるんだね」

「それでやって」

「わかった、じゃあ行くぞ！ドウカティ・ブルース！」

俺はスティックを持って、左右のシンバルへ打ち付けた！ちなみに
曲の題名は某ゲームから拝借した。

.....

「ふう」

演奏が終了した、正直どんな感じなのかわからん。だから二人の感想を待っていたが。

「.....」

二人共無言のまま俺をじっと見ていた、やっぱり下手だったんだなこれ。

だからまだ人に見せるのは早いつて言ったんだが。

「神子君、本当にドラムを始めてまだ一週間だよね？」

「ああ、そうだよ」

「しーくん.....」

「ほらな、やっぱり人様に見せるにはまだ早..」

俺は少し恥ずかしながらもそう答えたが二人からは意外な答えが返ってきた。

「いや十分上手いよそれ..」

「凄いよしーくん..」

普通に上手いと評価してくれた。

「そ、そうなのか……？」

「普通に淀みなく叩けてるし、私から見たら」

「そくだよ」

プロのドラマーの動画とか熱心に見てたし、それに近い動きの練習もしたし俺のオリジナル曲もドラム中心だったからだけど。

「二人にそう言っつて貰って俺は少し嬉しい、かな……はは」

「……………」

「どうした沙綾？」

「ん、ちよつと私も向き合おうと思っただけ」

「？」

向き合うか、そっぴや沙綾はドラムで……何かあったんだっけ。

「そっか」

「うん……」

俺と沙綾はそれ以上何も言わなかった。

「モカちゃんはこのギター借りてしーくんと一緒に演奏しまーす」

「モカ？」

人のギター使うのかよ。

「しーくんの演奏聴いて、あたしもギター引きたくなっちゃったので
〜いきま〜す」

「わかったよ沙綾はどうす……」

置いてきぼりにされそうだった沙綾は、少し思い詰めた表情をして

いたが。

「神子君のドラムも見れたし、今やりたい事が出来たから私は帰るよ」

「だろうな、多分香澄との事だろう。」

「ありがとね神子君、またウチのパンを買って行ってね」

「おう」

「またね」

沙綾は部屋を出て階段を登る音がした。

「さて、モカはギターの調整は大丈夫なのか？」

俺はモカの方を見てみると。

「むー！やっぱり自分のにするからちよつと待ってて〜」

モカまで部屋を出ていった。他人のチューニングはいじったら流石にマズイよな？

単に面倒だった可能性もあるが。

「……………しかし寂しい」

俺一人取り残された…

数十分後にモカは自分のギターを持ってきて帰ってきた。

「お〜ま〜た〜せ〜……………って、しーくん？」

「やつふおふいたか」

俺はモカを待つてる間、チョココロネを食べながらAfterglowの曲をいくつかみていた。

「ずるい、モカちゃんも食べる〜」

そう言いながら、俺の買ったチョココロネ入りの袋にモカが手を入れようとしたが。

「おっと」

袋に触れる寸前で俺が奥へと引っ込めた。モカからは取れないようにな。

「む〜!」

「俺が買ってきたんだし、さつき演奏して少し腹減ったんだよ」

むくれているモカだった。

「わかったわかった、後でやるからまずは合わせようぜ」

「……絶対だよ?」

まるで獲物を狙う猛獣の目付きで俺をみていた。こええよ!

一時間後

「……ほっ！」

「おくともちんみたいだ〜」

ドラムパートや曲によるけど、最後のここはいつも両手のステイツクで叩いてしまうんだよな。太鼓の癖かな？それにモカとのセッションは楽しいよ、これがバンドってやつなんだな！

「やっぱり巴もこうやるのか」

「やるよく、締めつけて感じだっけって言ってた〜」

「だよな、わかるわ〜」

太鼓やる同士、やっぱりそこは一緒か。

「しいくん」

モカが床に座ると、手を出してきた。

「ああ、ほらよ」

俺はチョココロネの入ったやまぶきベーカリーの袋をモカに渡した。

「ほむっ、もぐもぐ」

躊躇せず、ひとつつ食いやがった。遠慮もないのかよ。

「全部食うなよ？ひとつは俺のだからな」

「ほーい」

モカはそのまま黙々と食べていた。休憩するとは言っていないけど

いいか。

「なあモカ」

「ん〜？」

「俺がドラムやってるって事はみんなにはまだ秘密にして欲しいんだけど」

「何で〜？トモちゃんなんか絶対喜ぶと思うよ〜」

「今の俺ではまだ巴とは対等ではないからな、今度ドラムで勝負する為にも」

そう、太鼓では勝てた。だけどドラムでは絶対に勝てないだろう。だから今は練習して腕を磨くんだよ。

「そもそも何でしーくんはドラムを始めようと思った訳〜？」

「そこはモカも説明はいるわな、実はな…」

俺はドラムを始めようとした切っ掛けはお前達なんだと、そしてバンドやりたいという気持ちもな。今はメンバーなんていないけど、いつかはやってみたい。

俺の命が持てばの話だな！

「……そっか、しーくんはモカちゃん達のおかげなんだね〜」

「そうだよ、だからありがとなモカ」

俺はモカに近づいて頭を撫でてやった。フードの上からだけど。

そーいやモカはいつもパーカー着てるな、暑くないのか？

「つ〜！」

あれ、モカが何も言ってこないな。

「モカ？どうしたんだ？」

「……………」

モカは手を頭の上に置いたまま固まってしまった。パーカーのフードは取っているが、やっぱり撫でたのがいけなかったのか？

昔、詩音や舞衣はこれやると大人しくなるんだよな…何でか知らんけど。

「おーい、モカさんやー？」

「しーくんのたらし」

たらし？…何のことやら……

「っておい、俺の分のチョココロネは？」

袋を見たら空になってた、モカが黙ってる間も黙々と食ってたからな。

「ごめくん、チョココロネ美味しくて全部食べちゃった」

「このやろ…！」

俺はモカの頭の上にゲンコツを喰らわせてやった。男女平等ゲンコツだ！手加減はしてるけど。

「しーくん痛い」

「俺の分も取つとかないからだ、パンの恨みは恐ろしいんだゾ？」

「わかる」

「わかるならやるな」

もう一発喰らわせたろうかと思ったが、モカがいつもの感じに戻っ

ていたから許してやるか。

「ほんじゃ、再開すつぞ。大分合ってきたしな」
「お〜」

夕方までモカと練習をしていった。

夜になる前にモカは帰っていった、なんだかえらく上機嫌だったな。何だったんだ？

後で舞衣に聞いたが、あのギターは舞衣のだった。以前自宅に帰った時に持ってきたらしい。

ギターやつてるなんて聞いてねえよ！

ドタバタした一日だったな。

笛吹き少年は双子との仲を取り持った

「なあ舞衣」

「何よ？」

ドタバタした土曜が終わって、日曜の朝。

「ギターはいつからやってたんだ？」

昨日地下室でギターを見つけて誰のかと思ってたが、どう考えても舞衣しかないからな。

「けど向こうにいる時は一言もギターやってるなんて言わなかったよな？」

「一年前くらいかな、友達に影響してわたしもやってみたくなったのよ。ギターはヴィンテージ品だけど安かったわ」

「ほう」

「ほう…じゃないわよ？志吹も知ってるからね？」

「ほう？」

誰だろう？

「……………朝日六花、会った事あるでしょう？」

「んー？」

誰だっけ？

「覚えてない、いつ会ったんだ？」

「……………はあくまはそこからね。去年の夏に岐阜に神職の集まりで行ったのは覚えてる？」

「……………一応な」

覚えてるが、あんまりいい気分ではなかったよ。もう俺はつま弾き者にされかけてたからな。

「あ……」

舞衣は何かを察したみたいに話すのをやめてしまった。あの時の俺を思い出したか？

「ごめん」

やっぱそうか、悪い全然記憶にない……訳じゃないが。

「あの時の俺は色々とやさぐれてた時期だったから殆ど覚えてないんだ。でもなんか訛りが強く眼鏡をしてた女子と話したとしかなくてな」

岐阜の街中の公園で舞衣と二人で会ったっけ。

「その子が朝日六花よ知ってるじゃない。わたしは何度か会いに行つてギターやってたから教えてもらったのよ」

「へえ、何でまた？」

舞衣が日本舞踊以外に興味があるとは思わなかったな。

「志吹がドラムやったのと同じ動機よ。わたしもあんなつまらないのはもう嫌なのよね」

「そうか……ってそれは薙刀もか？」

「そうよあれは元々護身の為だったらしいし、今はもう必要ないわ。それに……詩音がいるお陰でわたしは頂点に立てそうにないから」

「舞衣……」

お前もそうなんだよな、俺も舞衣も詩音には敵わないんだよな。
てか舞衣は嫌々やってたのか？

「で、ギターの腕はどうなんだ？」

どれほどか見てみたい。

「ん……じゃあ食べ終わったら一緒にやる？」

「おう」

朝食食べ終わった後、俺と舞衣は地下室でお互いに演奏して、音も
合わせてみた。

「すげえなこれは」

「うん、凄い」

お互い語彙力がない言い方だったが、それほどまでにピッタリと
合っていた。ドラムとギターなのに。

「キーボードとか、ベースとか欲しいな」

「そうね」

「したらバンドできるな」

「うん……」

どうしたんだ舞衣のやつ、返事に覇気がない。

「舞衣……どうした？」

「なんでもない、わたしこれから用があるから」

唐突に逃げられた、何だっつてんだ？

「とりあえず片付けして昼飯はつぐみのとこでいいか」

なんか昼は作る気が起こらないんだよなあ、何でだろう？

――

「新作メニュー？」

つぐみの店に着くなりいつもの席で注文しようとしたけど、マスターが何か奥の机でノートやらノートパソコンで調べものをするようだった。

「うん。お父さん今新作料理の研究してるみたいだから、以前に志吹くんのが教えてくれたパエリヤはお客さんには不評だったみたい」
「だろうな」

あれはここには合わないだろうと思ってたよ。

「今回も何も考え付かないかな。いつもそうだし」

「いつもって…てかここは珈琲店。食事じゃなく珈琲がメインだからその線でいいんじゃないのか？」

食事方面に偏るとそれは最早珈琲店じゃないよな。

「私もそう言ってるんだけどね…売り上げも特に悪くはなってないのに」

「パエリヤを教えたのは完全に失敗だったな…」

「志吹くんは悪くないよ。お父さんいつも美味しそうな料理見るとす

ぐ真似しようとするから…だから気にしないで」

「たははっ、そりや料理を作る者としてはわからなくはないんだがな」

マスターには悪いが料理の腕はそんなになんだな。コーヒーだけやってきたって感じか。

今思ったんだがこの時間は営業中だよな？何でマスターは…いや、それは野暮だったな。

「つぐみ…あれは大体どれくらいで終わ」

俺が最後まで言う前にマスターはノーパソを閉じて溜め息をしていた。

「もう終わるよ志吹くん、今回も成果ないみたい」

「……………」

マスターはしょんぼりした顔で厨房に戻っていった。俺がいることにも全く気づく事なく。

「しばらくすれば立ち直るから、それまで待っててね志吹くん」

「そうするかな、昼飯時までまだあるしな」

マスターが立ち直るまでつぐみと談笑していた。

― 羽丘神社 ―

午後一時

つぐみの店で昼食をとった後は当初の目的の場所へと来ていた。相変わらず東北へ出張している神主さんと遥さん、依然として連絡がないから心配になっていらい、俺も心配だよ。

いつものように許可を貰い最近やってない笛の練習をする事にした。毎日やるアレは欠かさずにやってるが。

「と、いってもどうせ途中で何か起こるんだよなあ」

そう言いつつ俺は笛の練習を始めた…がすぐに止めた。何故なら雨が降ってきたからだ。

「ちっ、空めっちゃ暗いじゃねえかよ…帰るか」

俺は羽丘神社を後にした。傘もないからな。

階段降りた辺りで雨が強くなってきていた。これは家に着くまでにずぶ濡れになりそうだ。

「笛も濡れるなこれは、全く…ついてないぜ」

ブツブツとぼやきながら帰途についた。

――

ピンポーン

家のインターホンが鳴ったので出てみたら

「ブツキー…来ちゃった」

日菜だった。雨が凄く強くなってきたからなのか全身ずぶ濡れでいて目が赤かった…目が赤い？

そんな事を考えているより先に日菜にタオルを貸してあげる方が先だった。

「ちよつと待つててください日菜、今タオルを持って来るので」

「うん、ありがとう」

いつもの陽気な日菜ではなく、まるで今朝の舞衣と同じ感じだ。一体何なんだ？

数分後

リビングにて髪を下ろした日菜と俺。

「お風呂ありがとねブツキー。服まで借りちやっつて」

「六月とはいえ濡れた服のままでは風邪引きますからね、あとその服は俺のじゃないですが」

全身ずぶ濡れになっていた日菜にタオルで拭いた後、風呂に入らせて着替えも用意した。

舞衣のだらうけど乾燥機の外に置いてたままだったから日菜に着せてあげた。サイズもほぼ同じくらいだから丁度よかつたな、てかなんでまだ俺の家に舞衣の着替えが置いてあるんだよ!?

「ブツキーが女装用として使うんだと思ってた」

「……………」

誰が女装するか!それにそれはレディースダウンだから俺が着たら一発でわかるだろうが!

「同居人の忘れ物ですよそれは」

「女の人だったんだね…うん何でもない!」

「…?」

俯く日菜、何なんだ?そして俺は今座っているソファの後ろに一瞬だけ目をやってすぐに日菜の方に向きなおしな。

「ココアもありがと」

漫画や小説とかでもこういう状況の時はココアを差し出すのが定番らしい、俺もそれに倣って日菜に出したがインスタントでよかつたのだろうか?まあそれよりも…

「日菜の服が乾くまでまだ時間がかかりますし色々と聞きたい事があります。最初に俺の家はどうやって知ったのですか?」

俺は日菜に家の場所は言っていないはずだ。それなのに何で知ってるんだ?

「リサちゃんから教えて貰った」

「さいですか、それでここに来た理由は…」

リサはどうしてこう人の……ん？待てよ何で日菜は俺の家の住所なんかを聞く必要があったんだ？

「ブツキー……あたし、またやっちゃったんだ」

また紗夜さんと揉めたのね、わかってたけど聞かないといけないから。俺は少し胸が痛んだ。

「おねーちゃんとギターについて話をしたんだけど、何か途中からこじれちゃって」

「……………」

「あたしはおねーちゃんと楽しく話したいだけだったのに、どうしてこうなっちゃったのかなあ…」

どう答えればいいのか言葉に出来なかった。詩音も同じ台詞を言っていたのを思い出したから。

そして俺はまた後ろを向いていた。

「どんな内容か教えて貰えますか？」

「えつとね…」

日菜は紗夜さんとの会話の内容を俺に言ったが…

「紗夜さんの音が変わった？」

「うん、るんっ！ってするくらいいい音になったって言ったの。何かあったのか聞いてみたらそこからおねーちゃんはあたしにこう

言ってきたの」

『私は私、日菜は日菜の音があるというのをある人から教えて貰ったのよ』

「っっておねーちゃんは言ってる」

俺の事だよなそれ、でもそれだけじゃ拗れる理由にはないからまだ続きがあるのだろう。

「その後にあたしはそれってブツキーの事って言ったらおねーちゃんが…」

日菜は話を続けようとしたが

「やめてー!」

紗夜さんが俺の後ろにあるソファーから出てきた。

「おねーちゃん…」

「日菜…」

何で紗夜さんがいたのか回想に入ろうか。

—————

時は少し遡って

「雨が強くなってきたな、はよ帰ろう」

雨が降り始めたから俺は笛の練習を諦め、神社の階段から降りてきた時にはもう雨は本降りになってきていた。

「笛は懐へ入れて…よし、走るか」

走り始めて数分、自宅が見えてきた。

「……………ん？」

何かおかしい。俺の目の錯覚だろうか？俺の玄関前に人がいる。しかもその人は…

「紗夜さん？」

「っ、ー！」

やっぱり紗夜さんだ。しかし傘がないからか全身濡れている…六月とはいえ長袖でいるが寒いだろう。

「どうしたのですか紗夜さん、俺の家の前でなに…を？」

そもそも紗夜さんは俺の家の住所は教えつけ？色々聞きたい事があるけどまずは家に入れて服を乾かしたりタオルも用意しないと
な。

俺は紗夜さんを家の中に入れた。

……………

リビングにて待っていると風呂場から紗夜さんが出てきた。

「タオルありがとうございます神子さん」

「どういたしまして、でもタオルだけでいいのですか？」

乾燥機とかあるから服を乾かそうと提案したけど、動揺した紗夜さんに断られてしまった。

「大丈夫です、神子さんにそこまで迷惑をお掛けする訳にはいきませんので」

風邪引くといけないからなのにな…よくわからん。

「それに、ギターケースを上にしてましたので」

紗夜さんは背負っていたギターケースを俺の前に出してきた。

「そですか…それで紗夜さん」

「は、はいー」

ビクツとしていた、色々聞きたい事があるからな。

「その前に座りませんか？立ったままではお互いツライですから」
「はい……」

俺と紗夜さんはテーブルの椅子に座った、お互いに向かいだ。さて、と

「どうして俺の家を知ったのですか？確か教えてはいなかった筈ですが」

まず第一の疑問だ。

「先週今井さんから教えて貰いました。Roselia全員にですけど」

「……リサめ、明日文句言ってやる」

つまりはあこちゃんやりりんさんも知ってしまったのね。まあ来る理由はないだろうが。

「では次に、俺に用があったのですか？ギターを持ってきましたという事はまさかとは思いますが……」

「ええ、神子さんに私の音を聴いて貰いたかったのです」

なるほど、訪ねる理由としては十分かな。

「以前とは違う音を出せるようになったのですね？」

俺は確かに紗夜さんだけ音の指摘……いや、合っていないと言った。その理由も紗夜さんから聞いた。つまり紗夜さんは日菜と？

「日菜と仲直りを出来ましたのですね」

あれだけ日菜に劣等感を抱いていた紗夜さんはもう乗り越えたのか。

やっぱり俺とは違うよ紗夜さん、貴女は強い人だ。

「いえ、その……違うのです以前よりは日菜とは話せるようにはなりませんが……」

「??？」

なんか紗夜さんが変だな、何というか…恥ずかしがっている？

「紗夜さん？」

「すいません…その…先程まで日菜と家で話していましたのです」
「ええ」

日菜と話しているのに話の内容が言えない事なのかな？

「最初はギターの話だったのです。音が変わってそっちのほうが日菜は好きって言ってまして…」

やっぱり音は変わったんだな、どんな音になったのか聴きたいな。

「その理由が…か、神子さんと話したらと言ったら日菜は」

「日菜は何て言ったのです？」

俺と話ただけで音が変わるのはちよつと眉唾ものだけど、余計な事は言わないでおこう。

「その…」

紗夜さんは物凄く恥ずかしそうにしていた。日菜が俺の事を言うのは気にはなるけど、無理には聞き出そうとはしない。

ピンポーン

「玄関のチャイム、ですね。ちよつと出てきます」

と、いう訳さ。ちなみに紗夜さんにはソファアの裏に隠れていて俺と日菜の話をずっと聞いていたんだ。

「おねーちゃん…やつぱり居たんだね」

「やつぱり?」

俺と紗夜さんは同時に驚いていた。

「うん、洗面所におねーちゃんの髪の毛が落ちてたから。それに臭いもしたし」

「……………」

恐ろしい、臭いだけでわかるとは双子ってすげーな。いや、日菜が凄いのか？

「日菜…神子さんに余計な事は言わないで」

「でもー!」

「お願い…だからっ!」

「おねーちゃん…」

紗夜さんが涙ぐんで日菜に訴えてる、日菜も紗夜さんの気迫に押し返されて何も言わなくなっちゃった。

「ごめんなさい日菜、今はまだ…私の心の整理がついてないから」

「ううん、ごめんねおねーちゃん…ブツキーもごめんね」

「神子さん…ごめんなさい」

日菜と紗夜さんが俺に向かって謝ってきた。

「えっと…」

正直何の事かわかんないんだけど？

「二人が俺の何が原因なのかさっぱりわからないのですが…？もしかして俺が何か余計な事を言ったのでしょうか？」

さっきの話的には俺の事で揉めたのかどうかわからない…なんの理由でそうなるのか全然わかんない。

「……………」

「えっ？何でそこで呆れたような顔をするんですか？」

日菜だけではなくて紗夜さんまで!?

「ねえ日菜」

「そうだね、おねーちゃん…」

二人して頷き合っていた。だから何なんだよ…

というか先程までの険悪ムードはどこいった？

「神子さん、私達はこれからCIRCLEでギターの練習をしに行くのですが」

「ブツキーも一緒に行こうよ、雨も止んでるし」

外を見たら確かに雨は降ってはいない。そういえば日菜もギター持ってきていたな、今は玄関に置いてあるが。

「それはいいのですが紗夜さん」

きつき紗夜さんは俺にギターを聴かせたいって言ってなかったっけ？

「すみません、先程の神子さんののは嘘でした。本当は日菜に聴かせるつもりでした」

「でしようね」

「ブツキーも聴いたほうがいいよ！何かこう…るんっ！ってするし！」

「日菜、一緒に弾くって言ったのはどうしたのよ」

「あはは…嬉しくて忘れてたよ」

何だよこのやり取りは…普通に話せてるって事はさ、もう大丈夫なんだよな？

きつきのは一体何だったんだ??

「紗夜さん、日菜、CIRCLEってもう予約入れました？」

「いえ、まだですが」

「でしたら、ここでやりませんか？」

「どこで？」

二人でハモらないでよ。

「リビングの隅に地下室がありましたね、そこなら騒音も大丈夫なので丁度いいのかなど」

「地下室なんてあるのですか」

「いいねっ！るんってしそう」

紗夜さんも日菜も了承してくれた。俺は二人を地下室へ案内する

とまあ予想通りの反応というか…驚きをみせてくれた。

「これって…」

紗夜さんが地下室の隅にあるドラムを見るなり

「神子さんはドラムをやってるのですか？」

「えっ、ブツキードラムやってるの!？」

だから二人同時に言うなつての！息ピッタリすぎだろこの双子は。

「そうですよ…もつとも始めて一週間とちよつとしかやってませんが」

昨日沙綾とモカは普通に上手いと言ってくれたが、俺にはまだ自信が持てん。

「神子さん、私達と一緒にやりませんか？」

「さつき言いましたよね!?一週間しかやってないペーパー以下つて」

「そこまでは言つてないよねブツキー」

それはそうだが何で出たんだろう？

「初心者でも私は神子さんの音も聴いてみたいですが…嫌、ですか？」

「うっ…嫌ではないですがまだ人に聴かせる自信もないので」

「ブツキーなら大丈夫だよ、あたしにはわかるもん！」

「どこにそんな根拠が？」

グイグイと俺を引っ張っていく日菜。紗夜さんもギターを取り出しているし止める気は全くないようだ。

「とにかくやってみようよ！ねっ？」

「……わかりましたよ。下手でも笑わないでくださいよっ。」

「笑うわけありませんよ」

俺はドラムセットを二人の間に入るように移動させて、色々試し打ちしていた。

「で、何の曲をやるつもりで？」

「これなんですけど神子さんは楽譜の読みはわかりますか？」

「それは大丈夫です、前に曲作りとかしてましたので」

「それでしたら問題なさそうですね。って今何て言いました!？」

紗夜さんは不思議そうな表情で俺に聞いてきた。

「ですから曲作りの経験はありますって。某音楽サイトで投稿もしてましたから、今はもうやってませんが」

今は某会社にスカウトされているからそのサイトのアカウントはもう消しちやっただけだな。今でも依頼来るし、ちゃんと作ってるよ。

「ふうん……」

日菜は鼻で笑っていた。

「紗夜さん、もう覚えましたので大丈夫ですよ。テンポとかはちよつと自信ありませんが」

覚えたも何もこれって俺が作ったやつじゃん！

確かに双子をテーマにしたけどさ、何で紗夜さんがそれ知ってるの!?

「早いですね、神子さんはこの曲は知ってたのですか？」
「まあ」

「……………」

二人して黙ってしまった、さつきといい何だよもう。

「もう始めてもいいですか？紗夜さん、日菜」

「ええ、神子さんの号令でお願いします」

「ブツキーお願いっ」

俺は二人がギターを構えるのを見てから持っていたスティックを
カウントに合わせて下ろした。

ちなみに曲名は「ツインズナイト」

「ふう、流石ですね二人のギターは」

曲が終わると、俺は

朝やった時の舞衣とは違う感じだ。何というか…

「おねーちゃん…」

「日菜……………」

二人はお互いを見つめ合っている。

「あたしは……おねーちゃんと一緒にギターやっててよかったよ！」

「日菜っ!？」

日菜は紗夜さんに抱きついていていた。

「おねーちゃん！おねーちゃん！」

「日菜…!!」

紗夜さんも日菜に抱きついた。あれ…？何か前にもあった気がするよ。

数分後

「落ち着きましたか？日菜、紗夜さん」

「はい…」

「えっへへ…」

二人とも泣きながら抱き合ってたから俺は落ち着くまで空気のように演じた。大変だったなこれ。

それにしても二人のギターの音は日菜は太陽だとすると紗夜さんは月だな。対極であり同調している、不思議だ。

「二人のギターはとて面白い音でした、日菜のは初めて聴きますが紗夜さんののは以前とは比べ物にならない程に良くなってますと言いま

すか、その…」

言葉に詰まった。

「るんつとするよねブツキー！」

だから知らんて。

「るーんつてのは置いときましてこの音でしたら友希那…いえRoseliaの音は合うと思いますよ」

紗夜さんだけじゃないけどそれは気にしないでおこう。だけど聴いてみたいな。

「ふふっ、ありがとうございます」

初めてみる紗夜さんの笑顔、日菜も嬉しそうにしているのでつい俺も口元が緩みそうになる。

「ねえブツキーってドラム始めて本当に一週間なの？あたしからみたら麻弥ちゃんとは違うけどるーん？ってするなあ」

だからるーんだか、るんだか俺に分かるように説明してくれ……

「私も神子さんのドラムは経験者そのものの音を出してましてとても素人には見えないのです」

「まあ太鼓はやってましたし、プロのドラマーの動画も視まくってましたからね…」

テスト前にも見たしな。

「和楽器の経験多いんだねブッキーは。あたしと初めて会った時も笛吹いてたし」

「あの時ですか…」

日菜との屋上での出来事は忘れる事がないくらい衝撃だったからなあ：演奏中にどつかれるわいきなり笛吹かれるわで。ほんと詩音を思い出させるよ。

「神子さんは笛も…だとしましたらまさか!？」

紗夜さんは何か閃いたようにスマホを取り出して動画アプリを開いていた。

「神子さん、さっきの曲をもう一度やってくれませんか？今度は笛でやってほしいのです！」

「えっ?」

あの曲…ツイーンズナイトは笛がメインの和製曲なんだけど、二つの音を出してるんだ。

一つは音楽ツールからの笛、もう一つが俺の持つてる笛なんだ…この音は他にはでない低い音色なんだけど決して真似出来ないんだ。だから紗夜さんはそれを気づいたのか？

いや、大丈夫だろう。俺が曲とか作ってるとか言わない限り…

あ

言ってたわさつき…やべ。

「………わかりました」

もうバレそうだけどいつか……

俺は首に掛けてる笛を取り出して演奏した。

「ふう、どうですか……って！」

一通り演奏終わると日菜と紗夜さんは泣いていた。

「すいません……その」

「ブツキーがいけないんだよ、あたしとおねーちゃんにピッタリの曲を作るから……」

「やっぱり神子さんが作ったのですね、その笛で」

バレてたか。

「結構な自信作ですからね、この音色を取り込むのは骨が折れましたよ。ですが双子をも意識して作りましたが今の二人には本当にピッタリかもしれませぬね」

ツインズナイト……双子の夜って意味でやったしな。

「ありがとねブツキー……あたしとおねーちゃんを救ってくれて……相談にも乗ってくれて」

「今こうして日菜とのわだかまりをなくしてくれましたのは神子さん

のおかげです」

涙を拭きながらだけど。

「……二人はもう大丈夫なんですね、紗夜さんが日菜を日菜が紗夜さんを大切に思っていますのでしたら」

もう大丈夫だろうよ……全く、俺とは大違いだ。

「でも何でこの曲を俺が作ったって分かったのですか？」

まさかバレるとは思ってもよらなかった、そんなに特徴ある曲調でもないんだが：笛メインだけど。

「それはねーおねーちゃんがこの曲を聴いてた時に、音色がブツキーみたいだなくってあたしは思ってたんだ」

「私は神子さんが先程曲作りの経験ありますって答えた時と笛をやっているとってほぼ確信に変わりました」

洞察力すげえなこの二人……そんな所も似すぎるなよな。

「あれ？でも今は聴けない筈ですけど？俺のアカウントは停止していませんから聴けないのに」

「別の方がアップしていたみたいですね、神子さんの曲ほぼ全て。私は同一人物だと思ってましたが」

「マジですか……まあいいですわ」

削除依頼出すのも面倒だし。

日菜の服も乾いた時間なので、着替えてから二人は家に帰っていた。紗夜さんも日菜も笑顔でいたのでもう大丈夫だろうと……

はあ…俺はどうするかな。

俺のスマホからL I O Eで詩音のブロックを解除した。ついでにSNSも。

「俺も、前に進まないとな」

空はすっかり晴れていて昼に雨降っていたのが嘘のようだ。

「ぶえつくしよん！」

忘れてたけど、俺も少し濡れてたのに何もやってねえわ、少し体が冷えるな。

「さて、また神社に行くかな」

その日の夜に詩音からの通知はなかった。



氷川宅 紗夜の部屋

「もういいよね、おねーちゃん」

「…………ええ」

紗夜の部屋で二人、神妙な表情でいる。

「ブックリーの事おねーちゃんはどう思ってるの?」

「……………っ、それは…………!」

凄く動揺してる、やっぱりおねーちゃんは

「好き、なんでしょ?」

「……………」

俯いちゃった、もうバレバレだよ?

「あたしは好きだよ。ブックリーの事」

「…………」

「でもブックリーは鈍感っぽいし、そういうのは全く関心なさそうだからねえ」

さっきのおねーちゃんとのやりとりも全くわかってなかったし。

「日菜は」

「ん?なあに」

小さい声で言ってくる、あたしじやなきや聞き逃しちやうね。

「神子さんの、どこが…………好きになったの?」

「んー……あたしとおねーちゃんのように似てるからかなあ？それに優しいし」

相談にも乗ってくれて、今はこうしておねーちゃんとちゃんと話せてる。あたしは感謝してもしきれないよ。

「私も…似てると思ってたから、そこから私も神子さんに」

結局あたしやおねーちゃんとブツキーって似た者同士だったんかな？

前に言ってたあたしと似た人にあたしは会ってみたいな。

笛吹き少年は勉強を見てやった

月曜日を嫌いだという人間は大半は俺と同じ気持ちなのかもしれない。

学生なら学校へ行くのがダルくてもっと休みたいと、そして社会人なら仕事へ行きたくないと。

即ち、日曜日という休日が終わってしまったという事だからだ。

だから俺も嫌いだ。

「はあ…」

「朝からため息なんてしないでよね、志吹はあたしと一緒に登校するのがそんなに嫌だった？」

俺の隣にいる赤メツシユこと美竹蘭は皮肉なのか俺に突っかかってきていた。

「いや蘭と一緒になのは嬉しいんだけどさ、ほらわかるだろ？休日が終わった次の日は憂鬱になるってもんよ」

そーいや何で俺と蘭が一緒にいるのは蘭が俺の家に来たからだ。一緒に行こうってさ、確か蘭の家と俺の家はそれなりに離れていたよ
うな…？

どっちかかっていうと巴の家の方が近い。

ま、誘ってくれたんだし断る理由もないわな。今日は蘭と一緒に登校することになった。

「~~~~う、嬉しいんだ…／／／」

蘭は顔を赤くしてて、その後は黙ってしまった。

「(あの二人って付き合ってるのかな?)」

「(日菜先輩とじゃなかったっけ?)」

「(やっぱり…?)」

学校近くになって同じ制服の生徒が見えるが、その度にひそひそ話が聞こえる。俺は耳がいいから余裕で聞こえるけど蘭は…?

「……………」

聞こえていないっぽいな、しゃあない。

「し、志吹!」

蘭は凄く狼狽えている、俺がすぐ隣に来ているだけなのに。でも嫌がってはなさそうだ。

「ごめん蘭、恥ずかしいだろうけど校門までこうさせて」

あらぬ誤解を招きたくないからな、日菜とはそういう関係でもないしぎ…

「だ、大丈夫!」

「ありがとな蘭」

俺と蘭はお互いの手が触れそうな位に近づいて歩いていった。多分端からみれば手でも繋いでいる恋人同士に見えるだろう。もっとも俺と蘭はそういう関係ではないが。

教室につくなり蘭は机にうつ伏した、まさか教師が来るまで寝てるのかな?

さて、俺は……おや？

『蘭ちゃんと手を繋いで登校してたって本当!?!』

『しいくん明日はモカちゃんと繋ぐ』

『大胆だねえ』

『不純異性交遊だぞ志吹! あ、明日はアタシが…』

ひまり達四人が俺に対してLIEを送られてきていた。巴のはすぐにメッセージが取り消されたがしつかりと見てしまったよ。

「適当に返すのも面倒だから直接来てくれよな…」

ってつい口に出してしまった。

そして先生が来て授業と思ってたらテストの返却だった。俺は一問だけ無回答やったから満点ではないがほぼ近い点数で返ってきていた。

勉強してないでドラムやってたのにな!

蘭のほうを見たら大丈夫だったらしく口元が緩んでいたのを俺は見逃さなかったよ。

「あ…」

俺と目が合って蘭はテスト用紙で顔を隠したけどもう遅いよ。

今日はテスト返却日らしいから半日で終わるんだったな。昼からどうすつかな?

赤点出した人は追試があるとは言ってたがひまりは大丈夫なんだよな?

……大丈夫だよな？

休み時間に瀬田先輩から手帳を返してくれとメッセージが来たので生徒会室で先輩と会って返したが

「ふっ…：一昨日の事を忘れていなくて助かるよ神子君、本当に中身はちよつとしか見ていないんだね？」

「……はい」

言えない…：全部見たなんて！しかも色々と赤裸々な事を書いてたし。

「そうか、よかったよ」

安心した顔をしてるけどすいません瀬田先輩、嘘なんですよ全部見ました！もしかしてあれが素の瀬田先輩なのかな？今は芝居をしているみたいにカッコよく決めているが。

「では俺はこれで」

顔に出そうだからさっさと退散することにした。

「待ってくれ！…ところがまた君に会いたがっているようだよ」

「へっ？」

「どうもこころは君の事が気に入ったのか一昨日も神子君がいなくなっただけから色々と話すんだよ」

「そうですかな？…一体こころは俺のどこを気に入りましたのやら？」

「それは私にもわからないさ、あの子は独特の感性を持っているから

ね
「ですね」

予鈴が鳴りそうなので俺は生徒会室を後にした。

「上原被告人、何か申し上げる事はないかね？」

「……………ありません、全てわたしが悪いんです」

どうして俺はひまりに説教してるんだよ！

羽沢珈琲店でみんなと昼飯はよかったんだが、テスト結果発表したら案の定というかひまりは赤点出しやがった！俺の教えを忘れていたらしい。

「まあひまりもわざとじゃないから、それくらいで許してやれよな。アタシも実は一教科だけ危なかったし」
「ともえ〜！」

ひまりは泣きながら巴に抱きつこうとしていたが

「だけどなこの点数はなんだよひまり！アタシもそこまで酷くはないぞ」

「うゝえー！」

巴はテスト用紙をひまりの顔に叩きつけた、ひでえ

「こればっかりはひまりを庇えないね」

「ひ、ひまりちゃん…」

蘭もつぐみもひまりを庇う気がないらしい。

「……すうーぷうー」

モカは俺の隣で昼寝してるし、起きろ

「うみゆ〜しーくんのパンもつと食いた〜いよー」

いや俺のにわか仕込みのパンよりも専門である沙綾のパン屋のほうがいいだろうよ。

「俺のよりやまぶきベーカリーのほうが旨いだろ、ほら起きろ」

「みゆ〜……………」

背中揺すつても全然起きねえ、こうなったら

「後で俺がモカにパンを作ってやるから起きような？」

モカの耳元でそれを口にした、本当に寝てるなら起きる訳ないがな。

「は〜い、モカちゃん起きましたー」

「……………」

はい狸寝入り確定、怒りのゲンコツ食らわせてやる！

「おりゃ」

と拳を振り下ろしたらつぐみに止められた。

「駄目だよお志吹くん！モカちゃんはまだパンが食べたかっただけで…その、私も食べたいし」

「いや、な？俺の素人に毛が生えた程度のパンよりも本職のほうが美味しいだろう？」

つぐみもモカも何で俺のパンを欲しがるんだ？訳わからん

「志吹はわかってないね、志吹が作ったから二人は食べたいんだよ？…あ、あたしも欲しいけど」

「お前もかよ」

何でだ、俺のパンに何か魔法でもかかっているのか？そんな訳ないか。

「アタシ…もラーメンと一緒に食いたい」

ズテーーーーン!!

俺は椅子をひっくり返す程にずっこけた。

「巴よ…実は馬鹿だったのか？」

俺の中で巴の評価が下がった。それにしても今日の巴は何か変だ、

俺に対して少しよそよそしく感じるんだが俺は巴に何かしたんかな？全く記憶にない。

こうして後日にみんなにパンを作る事を約束していたけど話が逸れすぎて本題のひまりが追試対策をあとで俺が見てやる事になった、めんどくせえ。

「つまりだ追試でも赤点やると補習授業がある訳か」

「それだけじゃないみたいだよ？今月末の臨海学校も勉強漬けになるって聞いたよ」

「マジかよ」

それはツライなこのままだとひまりだけ仲間外れになるってか。

「だからそうならない為に志吹の協力が不可欠なの、去年もひまりは…」

「うっ」

蘭が思い出したかのように話はじめた、何でも去年の修学旅行でひまりは補習授業を受けたとのことらしい。

「もうあんな思いは嫌でしょひまり？だからちゃんと勉強して追試を乗り越えよう？」

「うん…私だけ楽しめないのはもうやだよ」

「ひまり…」

ひまりが今にも泣きそうな顔になってる、すかさず巴がひまりの隣で慰めているよ。しかし蘭がひまりを苛めてるみたいに見えなくもないが、蘭も俺のがなかったらやばかったんじゃないのか？

言ったら否定されそうだから言わないでおこう。

「追試の内容って今回のテスト範囲内だよな？ だったらもつと絞ってまとめておくよ、ちよつと待ってなひまり」

俺がそう言っつてひまりのテスト用紙をみた。

「ふむ、ここが出来てここが間違っつて…」

ひまりの答えを見て合つてる所は省いておこう、それと何が苦手か少しはわかるだろうし。

「ちよつとごめんね、志吹くんのテスト用紙も見せて貰つてもいい？」
「構わんよ」

俺のテスト用紙をつぐみが手に取つた。

「うわ…」

「ねえ志吹、この答案は何？」

「どういふこと？」

つぐみと一緒に蘭やモカも見てたのか、俺の答案にいちやもんでもつけにきたのか？

「五教科全部にひとつだけ空欄があるだけで、他は全問正解してるとか何の真似？」

「バレたか」

そうなんだよ、満点取りたくないからわざと一問だけ書かなかつたんだがこれはかえつて目立っちゃったかもな。

「バレたか、じゃないよ」

「モカちゃんも後半寝てるから空欄多いよ？」

「でも化学のはなんか減点されてるね、落書きがあるよ」

「げっ…つぐみそれを返してくれ！」

「あっ！」

俺はつぐみが持ってた化学のテスト用紙を強引に奪いとった。これはマズイ、新曲のコードを暗号みたいに書いてたけどこいつらにはわかってしまうだろう。

バンドやってればな。

「ちよつと志吹！乱暴じゃない!？」

隣にいた蘭が俺の行為に抗議してきた。だってコード書いてあるんだもん、恥ずかしいじゃん。

「いや、落書き消すの忘れててさ恥ずかしいからさ。でも乱暴だったのはごめんよつぐみ、蘭」

「う、うん大丈夫！でも何で落書きなんてしてたの？」

「お茶目なしーくんだ」

「いや他にも突っ込む所あるでしょ」

蘭だけは他に何か言いたそうだった。

「イヤミに聞こえるだろうけど、普通にやっても満点になるからわざと一問だけ何も書かなかつたんだよ。化学のは…曲のコード書いてたら減点されてた」

「……………!？」

ひまりも巴も驚いていたよ、やり過ぎたかな？

「志吹はさ何でそんなに頭いいんだ？」

が 巴は不思議そうな表情で俺に聞いてきている。ひまりも頷いてる

「努力したからって言っても納得は出来ないよな？」
「ああ」

さーてどう説明するか…いやもう隠すのはいいか。

「ざつくりと説明するけど俺のいどこにあたる女の子がいてな、その子と俺が比べられたのよ。そいつは何でも器用にこなせるだけじゃない、尋常じゃなかった。だから俺は勉強は好きだったからそれに特化しようとして追いつけても追い付く事は出来なかったんだ。結局一度も勝てなかったな」

詩音の名前は伏せておくか。

「っ！」

あ、つぐみには話していたな。だから表情が暗いのか。

「俺は全国3位までが限界だったんだ。その年は歴代トップの成績だったらしく、そいつは1位だよ2位は帰国子女っぽい人だったな」

そういや4位は有咲だったな、どんな気持ちだったか後で聞いてみるか。あーあ嫌な事を思い出しちまったよ。

「マジかよ、どんな奴だよそいつはよ」

「しーくんの上をいくなんてただ者じゃないね」

「私じゃどう足掻いても無理だよ」

「うんあたしも絶対無理」

みんな各々の感想を言ってくれてるが巴やモカの言う通り人間じゃないのもわかるぜ。

はあ〜……

「志吹くん」

隣にいたつぐみが俺の手を握ってくれていた。

「つぐみ…ありがとな」

俺もつぐみへの手を握った。

「『……………』」

四人の視線が痛いけど嬉しいな、俺をこんなに構ってくれてさ。心がこんなにも暖かくなるのは初めてなのかもな。口に出したら恥ずかしいからやめておくけど。

その後つぐみは顔を真っ赤にしてその場を去って行ってしまったし、モカも俺の手を握ってきていた。何故か蘭も巴も恥ずかしそうに俺の手を握っていた。

ひまりはドン引きしていたが

――

夕方になりひまりには明日追試対策のノートを貸してやる事にして解散となった。

「さて、帰るとする…ん？」

スマホを覗いたら一件の通知が来ていた。

「有咲からだ、一体何だろうか？」

俺はLINEを開いて内容を見た、そして有咲の家へと向かっていった。

—————

「おう来たな志吹」

「来たよ有咲」

有咲に返信して数分で蔵に着いたのはいいが何だこれは？

「こっちでもテストの用紙を広げていて何やってんだか」

デジャヴ感がすごいんだが。

「うう…」

「〜♪」

テーブルに座ってる三人はそれぞれ：

香澄とおたえはギターで何かを演奏している

りみは真面目に勉強してるけど手が止まっている

「私一人じゃ手に負えねーんだよこの三人をよ」

「そりやそうだな」

「つかさつきのと比べるとなあ、ひまりが三人に増えてる気がするんだが…」

「まずはりみからいくわ、有咲は二人を頼むわ…って沙綾はいないのか?」

香澄達と一緒にいるかと思ってたらいなし。

「山吹さんは店の手伝いだってさ、ちなみにテスト結果ってどうだった?」

「一問空欄作った以外は全問正解」

「どうして空欄なんか作るんだよ…満点にする気はないのか?」

「ないね。目立ちたくないから」

「変な奴だな志吹って」

よく言われるよ。

「兎に角りみは俺が見ておくよ」

「助かる」

俺は階段手前にいたからか三人には気付かれてなかったのか、近づいたらりみにひどく驚かれた。

「し、志吹君!」

りみは動揺し過ぎて後ろに飛びのいてしまった、その際にスカートの中が見えてしまったが何も見なかった事にしよう。

「どっ、どどどどどうして志吹君がここに!？」

「有咲に呼ばれてな、しかし驚き過ぎだろうよりみ」

何でこんなに動揺するんだよ？

「あー志吹くんいつ来たの？」

「いらっしやい志吹」

二人は全く慌ててる様子はない。

「うう…恥ずかしいよ」

壁際で顔を真っ赤にしているりみ。俺はテーブルにあるテスト用紙に目をやると。

「これはりみのテスト結果か…どれどれ？」

現国と歴史が赤点ギリギリか、てかこのテスト問題は羽丘と全部同じじゃねーか!?

姉妹校だからって普通同じにするかよ！

「えーつと牛込りみ君、ちよつと近くに來なさい?」

「……は、はい!」

あ、ひまりと同じ感じだこれ。

「ぶつちやけ二教科だけ問題があるけど追試やる点数じゃないよな、何で勉強しているんだ?」

「だって……」

りみは隣を見た

「おい香澄、おたえーちゃんと真面目に勉強しろよな！」

有咲は二人の面倒を見ているがこれはひまり以上に骨が折れそうな感じだ。

「あの二人があんなだからバンド練習出来ないから自分も勉強するってか？」

「それもあるけど私も危なかったから有咲ちゃんに教えて貰おうと思ったの、だけど香澄ちゃんとおたえちゃんが赤点取っちゃって…」

「なーるほどね、だから有咲は俺を呼んだのね」

「そっちは任せたぞ志吹ー」

「りようかーい」

有咲は二人で手一杯なのか憤怒の表情で二人の勉強を見ていた。でもすっごく手こずりそうだな。

「よし…じゃあ俺とやるかりみ」

「よ、よろしくお願いします…」

こうして俺はりみの勉強をみてやる事になった。

「なんだか中学の頃を思い出すな」

まだそんなに話してはない時期の頃に俺はりみの勉強を手伝っていたっけな。

「うん、あの時も今もありがとう志吹君」

「気にするなよ。前のはまだそんなに話していなかったけどなんで俺はりみの勉強を見てたんだっけな？」

そういえば思い出せんな？

「えっとね、私が歴史で〇〇点取っちゃったから隣の席にいた志吹君が話しかけてくれたのが始まりだったよ？」

「そだっけ？」

「うんそれから度々見てくれたよね。あと色々と話もして…」

うーん？あんまり記憶ねえ。

「あの頃の志吹君も優しくしてお姉ちゃんみたいに頼れて私の憧れだよ今でも」

「…りみ」

それは買いかぶり過ぎだよ、本当の俺はちっぽけで器も小さいんだから。当時の俺はまだそんなに深刻な状況じゃなかったんだよ。中学三年の時の俺を見たら絶対に幻滅するからな…

「うつとりとした目になってる」

「りみりん…」

「こら二人ともよそ見すんな！」

有咲の怒号が蔵に響いた。

「追試も駄目だったら臨海学校がなくなるぞー？とか言っつて脅せばいいんじゃないか有咲」

「おっそれはいい手だな、って何で知ってるんだ？」

「いや羽丘はそうだから…月末に」

「私たち花咲川もそうだよ！もしかして合同かな？」

香澄が生き生きとして答えてくれた。

「やっぱりここも一緒なのかよ、テスト内容といい臨海学校といいどこまでなんだよ」

手抜き過ぎじゃねーの？

「臨海学校ってどこなんだかまだ知らないけどなー、香澄は手を止めんな！」

「うう…」

すぐに勉強に戻る香澄、有咲は鬼教官だな。

「でも合同かぁ一緒になれるといいね志吹君！」

「そうだな」

月末が楽しみになってきたな。

りみ達の勉強会はなんとかあったのか後日に香澄とおたえは追試でなんとかあったのは後でりみが教えてくれる事になったとき…

笛吹き少年は頼み事をした

中間テストの追試もなんとか無事だったひまりや香澄達だが、それは一年生だけではなかった事を俺は思い知らされた。

「志吹……これで答えてくれる気になったかしら？」

六月の中旬、羽丘学園の屋上で友希那と二人でいるのだが……

「……………」

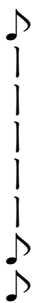
俺は無言を貫くしかなかった。今この状況はとてもマズイ、人気のない屋上で今俺は友希那に押し倒されているからだ。

何故こうなったかというと

授業が終わると隣の席にいた蘭はバンド練習があるからそのままCIRCLEへと向かったらしい。俺は久々に屋上で笛でも吹こうと思ったのだが……

「屋上は日菜も友希那もいないな？よし、やるか！」

俺は笛を取り出して今度某ゲーム会社に俺が作ったのを送る曲を演奏する事にした。



ちよつとテンポが早くなりがちなこれはまだ自分がやるには厳しいかな？しかもこれは歌詞付きのほうがいいかもしれないけど俺にはその才はないから無理なんだよな。

「ふう、ボーカルかあ…」

蘭にでも頼んでみるか？いや、こんな事で迷惑をかける訳にもいかんか。

「ボーカルがどうしたの？」

俺の後ろで低い声が聞こえた、思わず振り替えてしまったがそこにいたのは。

「友希那か」

まあ予想通りの人物。

「屋上にまで来て俺に何か用でもあったのですかい？」

若干の皮肉を込めて言った。

「そうね、あるといえればあるのだけど今はそれよりも貴方がさつき咳いたボーカルという単語が気になるわ」

「あ…：ただ言っただけで」

「嘘ね」

「嘘じゃありませんよ」

本当の事を言える訳ない、友希那に頼む気はサラサラないから。見返りに猫を集めるとか言ってくるだろうし。

「……志吹」

「え、うわっ!？」

友希那が一直線に俺に向かってきていた。ほぼゼロ距離まで近づいてきていて俺は思わず尻餅をついてしまった。

「本当の事を教えなさい!」

その上に友希那が乗っかってきていた。やばい、これ端からみたら俺が襲われてるみたいに見えるてしまう。

いや、現に襲われているのかこれは。友希那は俺の両腕をガツチリと押さえ込まれてしまった! まずい、俺は力がそんなに強くないから振りほどけない。

「くっ」

友希那は全く気にせず俺の顔に友希那の顔が近づけてくる……!

その黄色い瞳からは全く感情を読み取れずにいる俺。友希那には俺が異性だと思っていないのか!？」

「ち、近い近い! 離れてくれ友希那っ!」

「嫌よ! 志吹の目は嘘をついている目だから私の質問に答えなさい!」

マジかよ! …こいつは詩音でもわからなかったのにどうして友希那には……。

「友希那ーっやっと思つた。あれ、しぶ……きっ!」

リサがやってきた、いいタイミングなのか悪いのかわからんが。
今の状況をみてどう判断してくれるかな？倒れている俺の上に四つん這いで俺の両腕を掴んでいる友希那、今はリサのほうを向いているから顔と顔との距離は近くないがさつきまではお互いの吐息が聞こえる位近かった。
頼むよりサ、まっとうな対応を

「なに…して、るの二人と、も……？」

俺と友希那を見下ろしているリサ。しかしとてもじゃないが俺が期待した反応とは全くの逆だったようだ。

明らかに動揺してるし声も震えている

「志吹にお願いしているだけよりサ」
「!!？」

それに対して友希那は平然と誤解を招く言い方をしていた。それじゃ説明不足だろーが！

「そ、そんな……！う、嘘でしょ友希那？ねえ、志吹？」

あーありサも信じちやってるな…

「嘘じゃないわ、早くしなさい志吹」

「聞いてくれリサ。友希那の言ってる事は全てデタラメで……」

「……………っ!!!」

俺がデタラメと言う前にリサはもうそこにはいなかった。やばい、完全に誤解したままだ。

「……………？どうしたのかしらリサは」

「ぬうつ！」

「!？」

リサが急に居なくなつて不思議に思ったのか、俺への押さえ付けていた腕の力が緩んだのを俺はその隙を逃さずに友希那からの拘束から抜け出す事に成功した。そしてリサを追いかけにいった。

「待ちなさい志吹！まだ私の話が…」

「誰のせいでこうなつたと……！」

捨て台詞に近いのを吐きながら俺は屋上から出ていった。



「……………」

私は志吹が走り去つていったのを見てから座り込んでいた。

「本当は志吹にお礼を言いたかったのよ、紗夜の事で色々助けて貰ったから。でもどうしていいかわからないの」

それで志吹が屋上で笛を吹いていたから私の足は自然と屋上へ向かつていったわ、相変わらずいい音色をされていて私はその笛の音がとても気に入っていた。

だから私も志吹のように…いえ、それ以上に頑張らないと私の目的は果たせない。その為に志吹を R o s e l i a に入れたかったけれ

ど断られてしまった。でも私はまだ諦めないからこれから勧誘しようと思うの、リサも紗夜や燐子にあこも歓迎してそうだから。

屋上に着くなり志吹が独り言でボーカルって言ってる、もしかして私の歌が必要になったのかしら？

だけどいくら問い詰めても志吹は答えてくれない、つい志吹を押し倒してしまったわ。案外志吹って力が弱いよね。そしてじつくりと志吹の瞳を見たけどあれはどこかに似ている……

あれは父さんと同じ何かに諦めていた目。寂しい感情や悲しい感情……志吹の瞳の奥はどんなのかは私は知らない。だからもつと志吹の事を知りたい、なんて言ったらどう思うのかしらね……？

「それにしてもリサはどうしてあんなに驚いていたのかしら？」

一人で色々と悩んだって仕方ないわ、志吹やリサを追いかけないと。

「待つてなさいよ志吹」

わずかな笑みをみせて友希那も屋上を後にした

――

「リサっ待つてくれ！」

俺はリサを追いかけて廊下を走っていた、リサは遙か先にいるが視界に捉えている。このままだと追い付くのは時間の問題だがまだ学校に残っている生徒はいるから少し邪魔で避けるのに手こずってしまい中々差が詰まらない。

「くそっ、見失った」

回りを見てもリサの姿もないし、走る音もない。

しかも先輩方のヒソヒソ声が聞こえているのが気になってしまう。そりゃそうだ、走って逃げているリサを追いかけてたし名前まで呼んでたからな。

「どこかに避難しよう」

ちょうど天文部の部室が少し先にあつたのでお邪魔させて貰おうとしよう。日菜がいたらまた面倒な事になりそうだけど今回ばかりはしようがない。

「失礼しますよ〜」

「ふえっ!? つて、ブツキー!?!」

ノックして天文部へと入っていったら日菜がいたよ。何故かドアの先にいて俺との距離が近い。

「どどどしたのブツキー、あたしに会いにきてくれたの?」

俺の顔を見るなり満面の笑みでそうやってきた。残念だけどちよつと違うからな?

「……まあそんなところですよ」

「ふえっ!? そ、そうなんだ!」

そう切り返してくるとは思ってたのかわ、日菜は珍しく狼狽していた。嘘ではないが本当の事でもないんだよなあ。

なんか露骨に部屋の奥に怪しいのがあるんだが……

「ちよつと失礼しますね」

俺は日菜の脇を通り、部屋の奥にある段ボール箱に目をやるとそこへ向かっていった。人間一人くらいなら余裕で入りそうな大きさだったし隠れるにはうってうけだからな。

「ちよ、ちよつと待ってよブツキー！」

「……………」

この日菜の慌てようは確定かな？

「失礼しますよ、つと……………」

俺は段ボール箱の表面を開いた

「あ……………」

「あちや〜」

俺の予想通りリサが入っていたのだけど、いかんせんタイミングと
うか間が悪いというか……………リサはダンゴムシみたいに丸くなって
いる体制だったのでスカートがめくり上がっていてパンツが丸見え
の状態になっていた。

俺は超速で後ろを向いた。

数分後

「……………もう落ち着きましたか？」

「……………」

リサはまだ涙目だ。日菜はズーっと俺を睨んでるし。理不尽だ！
仕方ない、アレをやるか。俺は笛を取り出して心が落ち着かせる”
野の春”を吹く事にした。

「♪」

「!!?」

日菜は初めてだっけな、リサは二度目だけどころも驚かれると
シヨックなんどけどな？

「ブツキー…あたし幻覚でも見たのかな？」

まあ日菜が驚くのも無理はないか、一瞬だけどいきなり景色が花畑
一杯になるからな。

「幻覚じゃありませんよ、花畑が見えましたでしょう？」

「う、うん…！」

「この笛の音色で一瞬ですが花畑が見えるようになりますので、不思
議と落ち着きますでしょう？」

「……………」

リサは黙ったままだけど落ち着きは取り戻してるみたいだ、効果な
いかと思っただぜ。

やった価値はあったな、少し疲れるけど。

「凄いやブツキー！あたしにも出来るか試したいから笛貸してくれる
？」

「はっ？」

いきなり何言ってるんだこの先輩は？てか絶対に触らせんし以前も俺の笛をやった時にか、間接キスの事意識してないんじゃないか？

「嫌です」

「どうして？・ねえあたしにも吹かせてよー！」

日菜は俺の笛を掴もうとしてきたから思わず笛を上にあげたのだが、それは間違いの元だった。

「むくくく！・えいつー！」

笛に向かって日菜が飛び付いてくるとは予想もしてなかったからだ。そしてそれは俺に向かってくる訳で……

「うわっー！」「ひゃっー！」

俺と日菜が重なり倒れてしまっってしまった。俺が下になりまた押し倒される形になるのだった、今度は日菜だけだ。

「~~~~!!？」

柔らかい感触が俺の体に被さっていくが……

日菜はすぐに離れてくれたけど、リサがいるからまたあらぬ誤解を招く事になるがそれは違う人物だったようだ。

「……何してるのしら志吹、日菜」

いつの間にか部室にいた友希那だった。なんか怒ってるみたいだったようだ。

「リサさんよ…今の友希那がさっきのリサだった。つまりこういう事だったんだよ？」

瀬田先輩みたいな感じになってしまった！俺も説明が下手だな…人の事言えねーや。

「アタシの勘違い、だったんだ…」

でもリサの誤解はなんとか解けたみたいだ。しかし色々と問題になりそうだから順を追って説明する事にした。部室の真ん中に四人集まって。

まず事の発端は俺がボーカル発言から始まったそうだが、友希那は問い詰めたら答えてくれなくて俺に嘘を付いてると見抜きあんな形になってしまったとの事。

つか友希那って強引すぎないか？

それで友希那のほうはどうやらテストの追試勉強から逃げて来たらしい。

「リサが教えようとしたら友希那は逃げて俺の笛に誘われて屋上へ来たという訳だったんだね？」

「………プイッ」

友希那は俺から目を反らした、凶星か。

「……………」

日菜はさつきから一言も喋ってない、いつもなら変に茶々入れるのにな。

「志吹、ボーカルってどういうこと？」

「それは…あくどう説明すれば」

この際白状するか？いや…

「…ブツキーは曲を作ってたんだよ」

「えっ!？」

日菜の言葉に友希那とリサは驚く

「リサちー、友希那ちゃん。これがブツキーが作った曲だよ」

日菜は自分のスマホから某音楽サイトで俺の作った曲を流し始めた。

最初の曲は”ラノワールの森”だった。俺的のセトリではまず最初に選ぶヤツだ…よくわかってんじゃん。

「だからボーカルなのね。確かにこれなら…ねえ志吹」

数曲聴いたところで友希那が俺に聞いてきた。

「私に志吹の作った曲を歌わせてくれるかしら？いえ、やらせて貰うわ」

「友希那!？」

「この曲もだけど志吹が作ったのがよくわかるわ、志吹の笛も同じ感じの独特のリズムなもの」

マジで友希那はわかるのかよ、そういえばあの人も俺だって特定されて依頼してきたのだったな……だからか。

「でも友希那……」

「何？嫌だと言っても私は勝手にやるわよ！」

「いや違……違わないけどまずリサのほうを解決させないか？」

「……それを解決したらいいのね？」

「まあ構いませんよ別に」

俺は勝手に使っていていいと書いてたし、その音楽サイトの説明文に。

「わかったわ。リサ、早く終わらせるわよ」

「志吹においしいところを取られた気がするけど友希那がやる気になつたからいいかな？」

「じゃあ志吹、追試終わったらやるわ。作詞も私がやるから」

「はいはいまずは追試対策しましよ☆」

友希那とリサは勉強しに帰っていった。

「俺も帰りますね……日菜？」

「……………」

日菜の様子が変だ。さつき一言喋ってた後はずっと黙っている。

「日菜？」

「うん……何かなブツキー？」

全然元気がない、いつも明るい日菜だったがどうしたのだろうか？

「さつきから元気がないようですし、どうしたのかなと」
「あのね……ブツキー」

日菜が重苦しく口を開く。

「友希那ちゃんの事どう思ってるの?」
「……………はい?」

何でそこで友希那の名前が?

「答えて!じゃないとあたしは…」

そこで日菜は口ごもった。

「友希那はただの先輩後輩なだけですよ。変な命令してくる人でもありませんけどね」

「それだけ?他にはないの?」

「……………もうないですよ。Roseliaにも入れと勧誘されましたが断りましたし日菜のバンドにも入るの断ったでしょう?」

「本当に?」

「本当ですよ」

「そっか、よかったあ…………」

何かよかったかサツパリわからないが日菜の表情に明るみが戻ったみたいだ。

「話はそれだけですわね、それじゃ俺は帰りますよ」
「うん!またねブツキー」

日菜は手を思いつき振り振ってバイバイした。

「何か忘れてる気がするけどいいか」

俺はそのまま家へと帰っていった。



ブツキーの姿が見えなくなるのを確認してあたしはその場で座り込んじゃった。

「まだ、ドキドキしてる……」

さつきブツキーと一緒に倒れちゃった時にあたしの心臓の鼓動が凄く早くなった。

わかってる…あたしはブツキーの事が好きだったのが。だからブツキーと接触しただけでこうなっちゃうんだ……

これじやるんっ！とは来ないよ。ドキドキしかこないよ

「おねーちゃん、ライバル増えそうだよ。きつと友希那ちゃんもブツキーの事が……」

リサチーはないかな？

「でもブツキーにもあたしの気持ちはバレないでよかった。あの時にはどうなるかと思ったよ」

次からブツキーと会う時は軽はずみな事はしないと誓ったのであった。

「というかブツキー細すぎだよ」

まるで女の子みたいに



「リサきっきの事だけど」

「ん？どうしたの友希那」

私の部屋で友希那の追試対策の勉強中に数分も経たずに友希那がアタシに聞いてきた。

「志吹と日葉はどうして……いえ、何でもないわ」

途中で言うのをやめて勉強を再開した。珍しいかな、友希那がハッキリと言わないなんて

アタシには友希那が何を言いたいのか多分わかってる。でも言わないでおこう、だって友希那は志吹の事を……

あの友希那がそこまでにするなんて志吹は何者なんだろうって思うよ。猫を呼んだり変な幻覚を見せたりと常識では考えられないのを志吹はやってくれている。

秘密があるのは友希那も気づいてる、だけどアタシはそれを知ってはいけないと思うんだよね。

志吹は間違はなく他人に壁を作っている。まるで自分の事を知られたくないように

「友希那その問題は間違ってるかな、あとそこもこれも」
「……………っ、早く終わらせたいわ」

これは友希那だけの問題だけじゃない。モカはカンがいいから気づいてそうだけだね。今度バイトが一緒の時に聞いてみようかな？

友希那をそこまでさせる志吹って一体何者なのかはまだアタシには知るよしもなかったのであった。

そういえば志吹にパンツ見られたよ…友希那にも見せた事ないのに！

—————

数日後の六月下旬

「こうして皆が集まるのは初めてだよな」

臨海学校の班決めについて今年は色々議論となった。まず共学だから男女混合になると思ったら1クラスに男子が三人いないし二人の状況だ。

ちなみに二人は中退してしまっている。何があつたんだろうな？

つまり俺を入れて八人になっちゃったよ。だから男子は全員同じ班になることになった。

まあ俺も蘭達以外の女子とはあまり話してないからまだこっちのほうがいいか。あいつらは全員同じ班になったらいいし。

「場所って鴨川なんだけどさ、どういう所なんだ？」

俺は関東の生まれではないから鴨川といつても京都のほうしか出てこない。だから他の男子に聞いてみたのだが。

「海が見える場所かな？あと水族館が有名だけど僕達の行く場所は山の中みたいだっさ」

眼鏡をかけてる男子の岩田がそう答えた。

「そこでオリエンテーリングするとかだつて。ほら、しおりにそう書いてあるよ」

優しい印象がある中肉中背の男子の安藤が言った。

「ふむふむ…」

男子連中について少し整理しよう。

まずはあいいうえお順に 赤木 安藤 岩田 内田 神子 小牧
柴山 戸崎 の順だ。

先程喋っていた二人、安藤と岩田はモカ達と同じクラスみたいで結構話すみたいだとさね。

ちなみに俺と内田と戸崎は同じクラス。話した事は殆どないし女子達も冴えないとかで話していないらしい。大丈夫だろうか？

赤木、小牧、柴山は別のクラスなのでよくは知らないが苦労はしているらしい。特に小牧は一人ぼっちになったとかで。

まあそんな苦労やら愚痴やらをここで聞いてみたくはあるがまずは臨海学校について話し合わなければな。

「神子班長。僕は昔ここに来たことがあるから説明するね」

岩田が自信満々に説明を始めたが

「そーいや班長にされてるけど、俺でいいのか？」

俺は構わないがリーダーシップみたいのは憧れているんだよな。

「意義なーし！」

安藤と岩田は賛成してくれたし、他の連中も同意したようだ。

「話の腰を折っちゃったな。岩田、話を続けて」
「りよっかいっ」

なんかノリいいなこいつ、眼鏡のガリ勉タイプそうなのに。

一通りの説明を岩田が言ってくれた。

「つまり、二泊三日で学年の親睦を深めようというのが主旨なんだな？」

「うんうん」

安藤も岩田も頷いている。二日目は定番の水族館は行った事ないから楽しみでもある

「ねえ、みんな」

「ん？」

眼鏡の陽キャラ(勝手に命名)の岩田が皆に何か言いたそうだった。

「僕達同じ一年男子として皆友達になろうよ。今から」

「！！！！」

全く喋ってない五人も反応した。そしておずおずとこれからも宜しくと答えてくれていたよ、やっぱり人見知りだったからこういう陽キャラは苦手だと思ってたが岩田のお陰で克服しそうな気がするよ。

ちなみに安藤と岩田は中学から親友の間柄であること。俺は二人との連絡先も交換したが後の五人はまだみたいだ……頑張れ岩田。

来週の臨海学校が楽しみだよ。

笛吹き少年は臨海学校へ行つた（一日目）

六月末　いよいよ臨海学校の日がやってきた。

もう暦の上では夏だから朝からとても暑い。その辺は関東も関西も変わらないか。

「舞衣は大丈夫なのか？」

いつもの朝食、舞衣と二人で食べてるのだが俺は気になった事がいくつもあつたので聞いてみた。

「何がよ？」

花咲川の制服姿ではなく体のラインがくつきりとわかるワイルドファッションの舞衣なんだが、随分とぶつきらぼうな返事をしてきた。

「班や部屋割とかさ」

「……………こころの班に入れて貰つたから」

「そっか」

「そーいや舞衣はこころ達と一緒にいる事が多いんだっけな？ 一体何やってんのやら…………」

「朝飯食べ終わつたら出発する準備しないとな。なんせ二泊三日もだから」

普通に日帰りか一泊なのかと思つたけど何故か二泊だ。

俺の体について色々問題あるけど、それについては教師もわかつてくれていたらしい。

多分理事長の雅さんが説明してくれたのだろうから助かるよ。

「そんじや舞衣、また後でな」
「……うん」

素っ気ない返事で舞衣は家から出ていった。何なんだろう？

—————

羽丘学園からバスで向かうからとはいえ、いつも通りの制服……ではなく私服でいいとの事だ。

「まあ普段と変わらんでもいいよな。舞衣は変わりすぎだがな……あの格好で行くつもりなのか？」

などと考えていたらインターホンが鳴った。

「お……おはよう志吹」

赤メツシユの蘭が来ていた。黒と赤のシャツにチョッキみたいのを羽織っていたが何て言うんだろう？

「あ、ああ……おはよう。って蘭一人か？」

別に集合場所を俺の家とか決めてる訳じゃないけどな

「あたしただだよ。志吹と……た、たまに一緒に登校するって前に言ってたよね？」

「そうだったけな？」

悪い全く覚えがないんだが……

「とっ、とにかく早く準備しないと遅刻するよ！」

「わーっただよ」

とはいえもう終わってるんだが、色々戸締まりとかしないとな。

「お待たせ。じゃあ行こうか」

数分経って戸締まりも終わらせて、玄関で待っててくれた蘭。

「みんなもう待ってるって」

「マジか。少し走っていくかな」

玄関の鍵も閉めて蘭と一緒に羽丘まで走っていった。ちなみに鍵は財布の中にある。

「おっ！蘭と志吹が来たぞ」

校門前で巴の姿が見えるとその後ろにモカとひまりも出て来た。

「らくん、しーくん、遅いよ」

「どいってもまだ時間余裕あるけどね」

ひまりの発言で俺は蘭に目をやると

「……時間に余裕持って行動しないと」

俺からそっぽ向いて学校のグラウンドへ向かっていった。ってまだそんなに集まってねーじゃんか。

「蘭のヤツめ……まあいいや。巴にモカ、ひまり、おはよう」

「「おはよう（〜）」」

三人揃って元気よく朝の挨拶してくれた。

ひまりは舞衣のような派手さはないけど、相変わらず体のラインがわかりやすいのを着ていた。ワンピースタイプというのか？

モカは流石に暑いのがごく普通のTシャツだ。下は知らんし見えんから答える必要はないな。

巴はタンクトップにジーンズ……先生に止められそうだけど大丈夫なんかな？

「つぐみはどこにいるんだ？」

そーいやつぐみだけいなかったな、どうしたんだろう？

「あーつぐは……」

「委員長だからあそこで先生と話してるよ」

ひまりがグラウンドへ指を差すと奥のほうにつぐみらしき後ろ姿が見えた。

「なるほどね」

俺は納得してしまった。

「蘭一人で先行っちゃったしアタシ達も行くこうぜ」

巴を先頭にモカとひまりも続いてグラウンドへと向かっていった。

俺は一応特別な事情があるから先生達に確認したかった事がいくつかあるから、つぐみのほうへ向かっていった。

「おはようつぐみ、先生方もおはようございます」

つぐみの近くまでいくと俺は朝の挨拶をしていた。

「おはよう志吹くん」

私服なのかワイシャツ姿のつぐみはこちらに振り返っておはようと言ってきた。朝の挨拶とはいえつぐみの表情はさわやかで天使みたいに見えた……なんて本人には言えないな。

「神子君おはようございます」

つぐみと話していた先生にも挨拶を交わし、俺はつぐみと先生との話の邪魔になりそうなので俺のクラスの先生と話をしにいった。

「ああ神子君、理事長から話は聞いていますよ」
「色々ご迷惑をおかけします。本来は臨海学校は行ってはいけないとは思いましたが」

そうなんだよ俺はこの体のせいで正直行きたくはなかったんだけど、俺だけ行かないとなるのは不自然という理事長こと雅さんが無理矢理にな。

まあおかげで融通が効きそうで助かってるが、笛の事とか。

「……………君の体については私だけしか知らないの、だから何かあった時は遠慮せずに私に言ってね？他の先生方は何も知らないわ」
「わかりました……………」

大っぴらにはいえないよな。担任の先生だけでも味方はかなり助かる。

「とりあえず部屋割りと入浴は神子君だけ別にしてあるから安心して」

「ありがとうございます」

よかった…ひとまず安心だ。

「もうすぐバスの出発時間だから集合ね。それとこちらの方で何かあったらすぐに伝えるから」

「はいー」

俺は気合いの入った返事をして蘭がいるグラウンドまで向かっていった。

「(……………何もないと良いわね)」

担任の先生は少し不安そうな表情をしていった。

—————

「……………で、あるからして」

グラウンドに一年生全員集めてから先生方がこれから先の説明やらをしている。まずバスで移動だが花咲川に向かいそこで花咲川の生徒と合流、バスも一緒になるそうだ。

……いい加減だなあ。

「なあ蘭」

「何？」

俺は先生の説明を聞きながら隣にいる蘭に話しかけた。ちなみにモカ達はクラスが違うので近くにいないしバスも別だ。

「バスの席って窓際がいい？」

バスの席は前日のHRで決められていた。といつても席順みたいになっていて俺と蘭は一緒の席だったので今どっちが窓際にするか決めようとしていた。バス酔いしやすい人は窓際って相場が決まってるからな。

「うん」

まあ蘭は酔いやすい体質なのか即答だった。

「わかった、俺は酔い止め飲んではいくけど蘭はどうする？」

結構強力なんだが凄く眠くなるという。

「いらない。志吹はバス酔いしやすいの？」

「そこまでじゃないが結構長距離だからな、念のためだよ」

何事も慎重にな、何が起こるかわかんないし。

「そっか…」

微妙にしおらしい蘭だったが気にせず先生の説明も終わり、これからバスに乗るが…

「しいくん」

「ん？」

モカがすぐ側まで来ていた。

「蘭の事頼むね〜」

「あ、ああ…わかった？」

何が言いたかったのかわからん。

バスが出発するなり蘭は寝やがった！そういうことかよ！

数分後、花咲川の生徒もバスに乗って来ていた
見知った顔は…

「あーっ！しぶりんだー！」

「お前かよはぐみ」

やたら元気な声で某アイドルなあだ名で呼ぶその声は商店街の精肉店の娘。

「シブキサンもこのバスでしたか！」

その後ろにはつぐみの店でバイトしている若宮イヴ、こやつもはぐみ並みにテンション高すぎ。

「志吹くん？」

「ほんとだ志吹がいる」

更にその後ろには香澄とおたえ

「神子君もここだったんだね」

「あわわっ！志吹君と一緒に……！」

まあ予想は出来た、沙綾とりみ

って有咲は？

「有咲は私達と違うクラスだから別のバスだった」

「俺の心を読むなおたえ」

「それほどでも」

「誉めてねえ」

なんやかんやで俺の回りの席が騒がしくなっていた。ちなみに席替えは自由だったので色々と席が変わっていた。

あと同じクラスの男子二人の戸崎と内田はいつの間にか前の座席にいた。どうしたんだろうな？

それと蘭も流石に寝られなかったのか観念して香澄と話していた。

てか知り合いだったみたいだな。

「……」

「早い再会だな」

んでちやつかりと舞衣もいる訳だ。そういや同じクラスだっけ。

「騒がしくなりそうね」

「そうだな。酔い止め飲んだけどこれ眠気吹っ飛ぶな」

「わたしも飲むから頂戴」

「ほいよ」

俺はリュックのサイドパックから酔い止めを取りだして舞衣に渡した。

「ありがとう」

そのまま一錠をひと飲みした。

バスは出発してしばらく経つが蘭と香澄はまだ話している。意外と蘭も楽しそうな顔をしてるからバンド関連なんだろうな。

「……くあ」

「凄いあくびだね。眠いの?」

もう席がごちゃごちゃに入れ替わって俺は何故か元いた場所から反対側の席に移動してた。そして隣にはおたえがいるという訳だ。

「酔い止め飲んだからな。あれって効き目はいいけど凄く眠くなるんだ」

「ふーん…じゃあ寝たほうがいいかも？」

「そうするわ。お休み」

「ん…」

俺は目をつぶり睡魔の世界へと旅立っていった。何か俺の肩に重みがあった気がするが確認する術もなかった。

……………

「あれー志吹くん寝てる？」

「タエさんも寝てマスネ」

「……………なっ!？」

「志吹君…おたえちゃん…」

「お互い肩が当たって寄り添ってる。あはは…」

「あとでこころんに伝えよつと」

どうやら俺とおたえはお互いにくつついて寝ていたと後から香澄から聞いた。蘭とりみは不機嫌になっていたのを俺は知るよしもなかった……………

舞衣も寝ているけど存在はスルーされた。

「とーちやーく！」

目的地の鴨川…もとい宿泊施設に着き、いの一にはぐみが降りてきての一言。

「元気だなあいつは…こっちは寝起きでまだブーツとしてるっつーのによ」

「ホントにそう思うわね。わたしにもその元気を分けて貰いたいくらい…うぶ」

「どうやら酔い止めの効果なかったようだな」

「……………」

とてもツラそうだな。

「しかしあれだな…こっつて」

よくある寮施設という感じだ。あとその裏に山がありそこでキャンプなど出来そうだな。

「今日の夕食はあの山で調理実習かな？」

沙綾の予想通り夕食はあの山にあるスペースによく見るキャンプ施設がある場所へ向かっていった。だとすると定番のアレかな？

ちなみに荷物等は既に部屋へ置いていったが一つ問題があった。

「えっ？部屋が空いてないのですか？」

「ええ…花咲川の生徒もいるからか今年はいつもより部屋が多く使っているせいで足りなくなっただけなのよ」

担任の先生の計らいでみんなとは別の部屋にもらったのだが……ちなみに男子連中は二部屋使っている。

「申し訳ないけど神子君、テントで泊まって貰えるかな？設置とかやっておくから」

「……………わかりました。色々とワガママを言ってるのはこちらですから」

「でもある意味そのほうがよかったかも知れないね。だって一人の方が都合いいでしょ？」

「まあ確かに」

先生の言う通り、誰もいない山奥で笛吹くのは都合がいいけど。

「なんにせよトラブルのない臨海学校にしましょうね。君の身に何もないように」

「もう既にトラブル起こってますがね」

先生はてへっ☆な笑いをしていた。あのね……

男子班スペースにて

「で、この中に料理経験のある人は手を挙げてくださーい」

「……………」

しかし誰も手を挙げなかった

夕食は山のキャンプ場でやることになったのは予想出来た。作るやつもカレーと想像に容易かった。

しかし誤算はあったようだ。料理出来る生徒があまりにも少なかったようだったみたいで班ごとに調理するのは無謀ともいえた。

「安藤も岩田も無理となると俺一人で指示だしするしかなさそうだな……」

「悪いね神子君」

「こればかりは、ね」

「今の男子は料理も出来るのは多いと思ってたがな」

最近男飯つてのもあるぐらいだし

「それは固定概念だよ班長」

「その班長つてのはやめい」

全くこいつらは場を和ませるのは上手いが案外他はポンコツなのもしれん。

「しょーがない、指示するからそれでいいかな？カレーだから簡単だしや」

「宜しくお願いします!!」

元気のいい返事だなほんと……

—————

「内田と戸崎は飯盒はんじょうで米を頼むよ。やり方はさつき教えた通り米をま
ず水で研いで白いのが出なくなったら……で」

「……（コクリ）」

「で岩田はニンジンを……安藤は玉ねぎを……」

こうして俺の指示を出してみんな従ってくれて動いてくれた。俺
は肉とじゃがいもを切る作業とカレーのルー調整だ。さつきみんな
に聞いたが辛さの好みが見事にバラバラでどうしようかど悩む。

どこかのスポ根料理漫画で誰もが美味しく食えるカレーを作ると
か言ってたが、いったいどうやって出来たんだろうか？

「とりあえず中辛と辛口を取ったがアレしかないか……あまり好きじゃ
ないんだがなあ……」

俺はカレールー選び終わり、調理を開始した。

「いいか？ いっせーので開けるぞ？」

完成したカレー、ご飯は既に皿にのせていてあとはカレーを入れる
だけなんだがどうやら皆緊張しているようだ。

俺の腕を信用してないのか自分達が自信ないのかは知らんがな。

「いっせーのーでっー！」

俺はカレーが入った蓋を開けた。

「「「「「………?!」」」」」」

うむ、ちゃんとカレーになっっているな。こいつらは大してやってない気がするがまあいいや。

「よしっじゃあカレーよそるから各自の皿よろしく」

各自カレーが行き渡ったところで…

「」「」「いただきます!!」「」「」「」

元気のいい声が三人程聞こえた。

「あれ旨っ!?!」「旨いー!」

岩田と安藤はいいリアクションで答えてくれた。他は表情でわかった。

どうやら上手くいったようだ。辛いのが好みの戸崎と内田はカレーをそのままよそったが安藤は少し手を加えた。

ハチミツを少し入れる、それだけだ。

「どうやら皆満足してくれたようだな、よかったよ」

俺も胸を卸した。こういうのは流石に経験はないから緊張はする

もんだよ。

「まさかハチミツで辛さの調整するなんて考えもしなかったよ。本当に料理経験あるんだね神子君は」

「お前らも少しは料理しとけ。岩田もこれから必要になるかもしれないぞっ。」

「考えとく…かな?」

それ無理なやつだ。

「しーーーーぶきーーーー!!」

「どわっ!?!」

突然俺の後ろから大きな声と背中に衝撃が走ってきた。

「ごころ! 危ないからやめなよ!」

どうやらごころが俺の背中に抱きついてきたようだ。しかしカレーの皿が危うく飛び散りそうだったよ。それと奥沢が止めていたが間に合わなかったようだな。

「久しぶりね志吹!」

その黄色い瞳と髪は俺のオアシシ…ではなく花火のようだった。

「バスも違ったから会えなかったなごころ。で奥沢とごころはカレーはもう作ったのか?」

俺は奥沢に視線をやると……

「いや、その…大変言いづらいんだけど」

「？」

何だろう、嫌な予感しかしない。

「神子の作ったカレーを食べたいって聞かないんだよね。こころは」「何だそんな事か。ちよつと待ってろ」

逆に俺がこころ達のカレーを食うのかと思ってたから、すつげえ不安しかなさそうな感じだしな。

「ほれ、二人の分のカレー」

そういや二人の辛さの好みは知らんから少しハチミツを入れた。

「……旨い！」「美味しいわ！」

よかった。二人共いい感じの辛さ調整だったようだ。

「……………」

安藤と岩田がジト目で俺を見ているが気にせずに。

「（神子君って花咲川にも知り合いがいたなんて）」

「（ほんと凄いな。どれだけ女子と知り合えたのか聞きたいよ）」

「（あとで聞いてみよっか）」

お前ら聞こえてるからな？ぜってえ教えねえがな！

そして香澄達や蘭達まできてもう目茶苦茶になった。カレーは香澄達五人でもう無くなってしまいモカやひまりから大変なブーイングを食らった。

理不尽だ。あと奥沢から聞いたが舞衣は体調を崩して部屋で寝ているとの事だ。珍しいなあいつが体調崩すなんてな。

—————

「肝試し?。」

夕食食べ終わってこころ達女子はそれぞれの班の場所へ戻っていった後、皿の洗い物をしてる時に安藤がそうやってきた。

「しおりに書いてあったよ?一日目の夕食後にやるって。希望者はだけど」

「ふーん：俺はあんまり興味ないんだが」

「ちなみに神子君は強制参加だって」

「なんでだよ!。」

俺だけ強制参加なのは気に食わんが、岩田や安藤も行くつもりだったみたいだ。あとの男子は参加しないで部屋に戻っていったが…

「志吹くんも参加するんだね」

「強制参加だ…」

午後七時半、夕食の片付けが終わりその場が集合場所になったのか肝試しの希望者のみがあったが、男子は俺入れて三人他女子二十人といったところか。

それでひまりが俺の隣にいる。

「男子は強制参加？でも人数少なくない？」

「俺だけだよ」

「あれ？そなんだ…志吹くんも大変だね」

ひまりはそう言うが笑いを堪えているのが丸わかりだ。

「そういえば蘭と巴は？」

いつも五人一緒だから肝試しもやるのかと思ってたが

「あの二人は怖いのが苦手だから先に部屋に戻ったよ」

「ふーん？蘭が苦手なのはなんとなく知ってたけど巴もダメなんだな」

意外な巴の一面だ。怖いものなしだとずっと思ってたから。

「モカとつぐみは平気なんだな」

「あの二人はね。特にモカは絶対楽しんでやると思うよ」

「…：…それな」

ひまりと話していたら時間がやってきて二人のペアで行くみたいだ。

ペアはくじ引きで決めるらしく、同じ番号同士で順番とペアが決まる方式だ。

そして俺はくじを引き出した番号は……

「三番……同じ番号は誰だろう?」

俺は辺りを見回すと友達同士で番号を見せ合ってるみたいる生徒達、モカとひまりとつぐみもやっていった。

んで三人とも違うらしく俺の方へ向かってきた。

「志吹くんは何番だったの?」

つぐみが聞いてきて俺は三人に番号を見せた。

「あっ!私とだ」

ひまりが三番と書かれたくじを見せてきた。ひまりと俺がペアになるのか。

「よろしくなひまり」

「うん!肝試し楽しもうね!」

俺の手を握りしめてきた。

「……………」

モカとつぐみが恨めしそうに見てきたが知らんぷりをして、いよいよ肝試しが始まろうとしていた。

「三番同士の生徒はそろそろ出発して下さい」

「おっ呼ばれたな、それじゃ行くかひまり」

「おー!」

出発地点らしき山道の入り口で教師が言ってきた。どうやらこの道からスタートみたいだ。

「はい懐中電灯と地図。迷わないようにね？」

教師からそれを貰うと俺は懐中電灯でひまりは地図を手にした。地図によると、どうやらこのまま一本道の山道を進んで目的地にある物を取って先の道を下っていくとゴールらしい。

「しかし結構暗いな…月明かりも殆ど遮断されてるし」

「だね…蘭と巴は絶対無理だよこれ」

懐中電灯を頼りに道を進むけどマジで暗い。だけどひまりと話をしながらでも進むのは容易いか。

「…志吹くんと二人きりって初めてだね」

暗い山道の中ひまりが言った。

「そうだっけな？」

「そうだよ！」

「うーんと？つぐみとは商店街案内で…蘭とは家で…モカとは地下で…巴はラーメンで…あっ！ひまりだけないな」

「でしょ！というか他のみんなとはもう!?わたしだけ仲間外れだったの!!？」

ひまりは頬を膨らませていた。

「悪い悪い…だってそんな機会もなかったしな」

「じゃあ臨海学校が終わって、その週末にケーキごちそうして！志吹くんの家で」

「……」

こいつめ、ただケーキが食いたいだけだろ!!

「わかったよ。全く…ひまりはafterglowの甘党って回りから認識されるぞ? Roseliaとかに」

「それは大丈夫かな? 友希那さんと蘭はバチバチだし、リサ先輩もあこちゃんも大甘だもの」

自信満々に言うひまり。

「それにつぐだつて甘党だもん! わたしだけじゃないよ!」

「わかったわかった…そう熱弁しなくてもな」

暗い夜道なのにひまりとの会話は止まる事のなく、山道を進んでいく。

「でも志吹くんのお陰でもあるんだよ。蘭の事とか、つぐの事とか…今更言うのもなんだけどね」

「志吹くんがいなかったらわたし達はどうなってたか分からないし、あの時も今もこうして臨海学校に行けるのも志吹くんが助けてくれたから…」

「ひまり…?」

ひまりの声のトーンが落ちていった。

「わたし達を助けてくれて本当にありがとう志吹くん!」

その瞬間は月が出てひまりの表情がくつきりと見えていた。その顔は俺に向かって満面の笑みで言ってくれた。

「……それは俺もだよ、ひまり」

「えっ? どういう…」

俺もひまりに近づいてそう答えた。

「ひまり達がいなかったら俺は…」

どうなっていたか分からないが、音楽をやるうとは絶対に思わなかっただろう。それほどまでに影響されたんだよ。

「ししし志吹くん!!!?」

「あっ」

月が隠れてしまい、俺とひまりの距離が掴めなくなってしまう明かりも忘れていたから…

「わっ…悪い!」

「うううん!大丈夫、大丈夫…」

ほぼゼロ距離まで顔が近づいていたので、ひまりはすぐに離れた。

「……………」

ひまりはそのまま黙ってしまった。沈黙が気まずい…

そうしてる間に目的地と思われる場所に着き、いかにもそれを拾ってそのまま山道を進んでいった。

お互い何も喋らずに進む。

この先は下りのようですぐにゴール地点に到達した。ひまりはまだ黙っていた。

「はい確かに確認したわ。お疲れ様」

教師にそれを渡す。

「志吹くん」

「ん？」

ようやくひまりが口を開いた。

「わたし達がいなかったらって…ううん！何でもない！おやすみっ
!!」

俊敏な動きでひまりは宿泊寮へ戻っていった。

「何だったんだひまりは？まあ俺もテントへ行くか。荷物もあるし」

途中香澄とりみにすれ違って俺が山で寝ると伝えたら凄く驚かれていたが、まあそうだろうな。

俺だけテントだなんて、キャンプみたいだし。



「志吹くん…」

逃げるように志吹くと別れちゃったけど、あのままだとわたしは冷静を保てる自信がなかった。

「ううー！」

聞きたい事もあった。志吹くんもわたし達に影響があったのはどうしてかとか。でも無理だった。

「わたし…もしかして…」

この胸の痛みは間違いないかな…？前に読んだ恋愛漫画とおんなじ気持ちになってるんだもん。

「志吹くんの事、好きになっちゃったんだ…」

これじゃあつぐの事言えないよね、ううん違う。

つぐと同じ気持ちになっちゃったんだ。

だから話そう。つぐにわたしの今の気持ちを…ね。

「つぐみは何だつて？」

「ぎやあああああ!!!」

いつの間にか宿泊施設に戻っていたらしく、蘭が入り口に居たのをわたしは気づかずに悲鳴を上げてしまった。

「つ…！何でそんなに驚くの？びっくりするんだけど」

「らららら蘭!?!いいいい今のきき聞いてたのおお!?!」

「んと、つぐみとか…し、志吹の事とか／＼／」

「ほぼ全部じゃん!!」

「うん……実はさっき部屋で巴と話してたんだけど」

蘭の顔が少し赤くなっていた。多分わたしはもつとだろう。

「モカとつぐみが戻ってきたら話すから待ってて」
「わかったよ…」

このあとわたし達五人はあらためて仲良しだったのが証明出来てよかったのか悪かったのか分からなくなった。

だってみんな志吹くんの事が好きって告白しちゃったから。ライクじゃないよラブだよ？

蘭とつぐはわかってたけど、まさか巴とモカまでもとは思わなかった。

わたし達は志吹くんに救われた。だからなのかな？
それが好きという感情に変わるまでは遅くはなかったのかもしれない。

巴は太鼓での勝負が切っ掛けで
モカは話してはくれなかったけど好きとは言ってくれた。珍しく
狼狽していたし。

わたしは…やっぱり肝試しが決定的かな？内容は話してないけど。

志吹くんはどう思ってるのか…でも以前に舞衣ちゃんに聞いた時は何ともないって言ってたっけ？

あの時と今はまた違うしちょっと聞いてこようかな？

その話はまたのちほど…にね？

「さて…そろそろ11時になるから風呂に入れるかな？」

担任は俺の事情を知ってるから、風呂の時間を融通というか遅くしてくれていた。

まあこの痣ではみんなとは入るのは無理だろうな。

「よし誰もいないな？」

宿泊施設の男子風呂に着くなり回りを確認してから、俺は衣服を脱ぎ出して浴場へと入っていった。

「こういう風呂は久しぶりだ」

露天風呂ってこうなってるんだな、俺はその広い風呂に入ると中央まで進んでいった。

俺は感心というか初めて入る露天風呂に油断していた。物音を聞き逃していた事に。

「俺は……ん？」

思わず後ろを向くと人影が見えてしまった

「えっ？」

そこには一糸纏わぬ姿の舞衣であった。

「うわあああああああ!!!」

お互い叫びに近い声を上げてしまった。

俺と舞衣、同時に反対を向いた。

……そして数秒の沈黙が流れると

「志吹が何でここにいるのよ」

「舞衣こそ何で」

完全な水掛け論になってしまっている。

「俺はこの時間じゃないとまずいんだよ。舞衣だって知ってるだろう？」

痣の事は舞衣だってわかっている筈だ。

「舞衣はどうしてこんな時間に？しかもここは男子風呂だぞ？」

「それは…体調悪くてさっきまで寝てて、起きてからしばらく先生と黒服さんと話してて」

黒服さん来てたんだな…こころか。

「風呂に入った方がいいと言われて、今の時間は男子風呂しか空いてないって先生が」

「それですか、というか俺の存在は忘れていたな？」

まあ舞衣になら俺の裸見られてもあまり困らないか。

「舞衣」

「な、何っ!？」

俺は舞衣のほうを向いて近づいていったが、まあ舞衣も女の子だ。俺と一緒になのは嫌だろうな。

「俺は先に出るよ。舞衣が凄く嫌そうだしな」

俺は風呂から出ていった。

「えっ!?!ちよっ……」

舞衣が何か言いたそうな気がしたようだが、俺はそのまま風呂場を後にした。

「……………」

取り残された舞衣。

「志吹の馬鹿…私は別に嫌じゃないのに!」

くぶしをお湯に叩きつけていた。

「でも、これを見られないでよかった」

お腹にある痣は志吹との同じだ。私はこの為に体調を崩していたし、こころ様に近づいたのもこれが理由だ。

「志吹…私は負けないから！志吹は死なせない!!」

固く決意した舞衣であった…全裸姿で。

—————

「さて、日付変わるまで待つか」

俺はスマホを出すとLONEの通知があった。友希那からである。

『志吹の作った曲に歌を入れ終わったわ。臨海学校が終わったら聴かせるからお願いね』

「ああ、出来たのか。一体どんなんだろうな」

実は少し楽しみである。友希那の歌声は多分詩音でも敵わないだろうから。

少し羨ましいな

そう考えながら日付が変わり、いつもの笛の演奏をしてテントの寝袋で就寝した。